

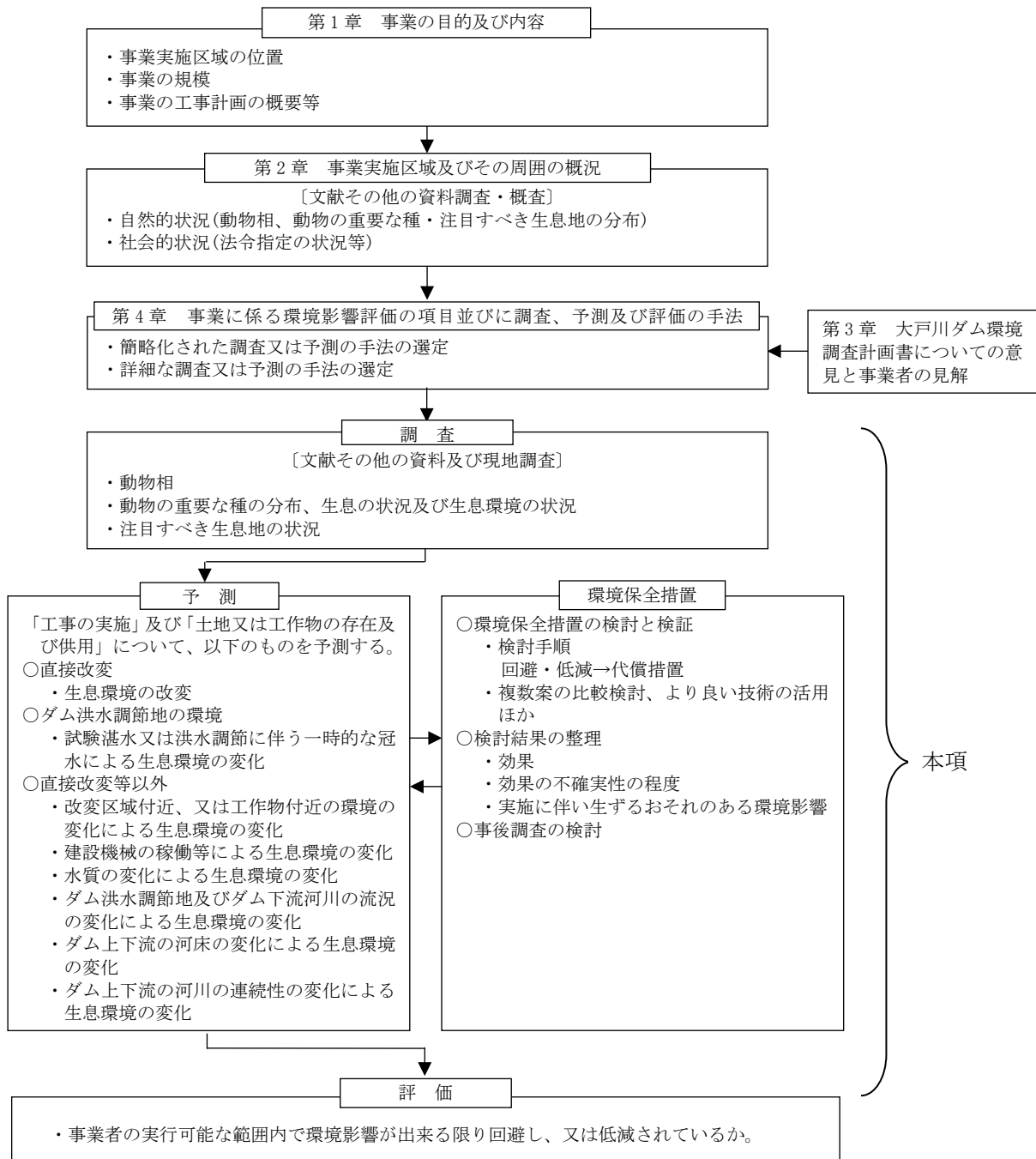
5.1.6 動物(重要な種及び注目すべき生息地)

5.1.6.1 環境影響評価の手順

動物(重要な種及び注目すべき生息地)に係る環境影響評価の手順を図 5.1.6-1 に示す。

動物の環境影響評価にあたっては、「1.4.5 事業の工事計画の概要」等にした事業特性を踏まえて、文献その他の資料等により地域の自然的状況(動物相、動物の重要な種、注目すべき生息地の分布)及び社会的状況(法令指定の状況等)を把握した。これらを整理した内容に基づくとともに、大戸川ダム環境保全委員会指摘等をふまえ、調査、予測及び評価の手法を選定した。

本項においては、予測に必要となる情報(動物相、動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況、注目すべき生息地の状況)を文献その他の資料及び現地調査により収集し、「工事の実施」及び「土地又は工作物の存在及び供用」に伴う生息環境の改変等に関する予測を行った。予測の結果、環境保全措置が必要と判断される場合には、その内容を検討し、環境影響の回避又は、低減の視点から評価を行った。



資料)1. ダム事業における環境影響評価の考え方(河川事業環境影響評価研究会 平成12年3月)共¹⁾ 1
をもとに作成

図 5.1.6-1 動物の環境影響評価の手順

¹ 該当する引用・参考文献の番号を示し、項末に一覧を示す。

5.1.6.2 調査結果の概要

調査は、「(1)脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況」、「(2)動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況」及び「(3)注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況」について実施した。

(1) 脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況

1) 調査の手法

(a) 調査すべき情報

脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況を把握するため、哺乳類(哺乳類相)、鳥類(鳥類相)、爬虫類(爬虫類相)、両生類(両生類相)、魚類(魚類相)、昆虫類(昆虫類相)、底生動物(底生動物相)及び陸産貝類(陸産貝類相)について調査した。

(b) 調査の基本的な手法

調査の基本的な手法は、文献その他の資料及び現地調査による情報の収集並びに当該情報の整理及び解析によった。また、必要に応じて専門家からの聴取を実施し生息種等の情報を補った。

現地調査の手法、内容及び実施状況を表 5.1.6-1～表 5.1.6-8 に示す。

(c) 調査地域・調査地点

調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域(事業実施区域の境界から約 500m の範囲内の区域をいう。以下「5.1.6 動物(重要な種及び注目すべき生息地)」において同じ)もしくは事業実施区域及びその周辺の区域並びに下流の瀬田川合流点付近までの区間とした。調査地点は、動物相の状況を適切かつ効果的に把握できる地点、経路及び範囲とした。

調査地域、調査地点、調査経路及び調査範囲を図 5.1.6-2～図 5.1.6-9 に示す。

(d) 調査期間等

現地調査の調査期間及び時期は表 5.1.6-1～表 5.1.6-8 に示すとおりであり、調査時期は四季の調査を基本とし、動物の生態の特性を踏まえ、生息種の活動盛期や確認の容易さ等を勘案し、動物毎に設定した時期とした。

表 5.1.6-1 哺乳類相の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	哺乳類(哺乳類相)				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 目撃及びフィールドサイン法 ・調査範囲を踏査し、実個体の目視確認および足跡や糞、食痕などの生息の根拠となるフィールドサイン（生活痕）の確認、記録を行った。 ・林道、尾根、沢沿いや農耕地周辺など、哺乳類のフィールドサインが比較的残されやすく、発見の容易な場所を中心に踏査した。 ・獣道等の痕跡が確認された場合には、自動撮影装置等を設置し、獣道等を利用する種の撮影を行った。 2. トラップ法 ・ネズミ類などの小型哺乳類は、目撃やフィールドサインによる確認及び種の判定が困難であるため、シャーマントラップを使用した捕獲調査を行った。 ・餌にピーナッツ等を用いたシャーマントラップを用い、捕獲した小型哺乳類の種名・個体数などを記録した。 ・モグラ類を対象としたモールトラップによる捕獲調査を行う。トラップは、塚が密に分布する場所や新しいモグラ塚が多く分布する場所に設置した。 ・シャーマントラップ、モールトラップは2晩設置した。 3. コウモリ類調査 ・日中、コウモリ類がねぐらとして利用していると考えられる導水路（隧道）、洞窟等に留意して現地を踏査し、実個体の観察や糞の確認を行った。 ・夜間には、調査範囲内におけるコウモリ類の飛翔状況を把握するため、バットディテクター（コウモリが発する超音波を可聴音に変換する装置）を用いた調査を行った。 ・コウモリが通過しそうな空間にハーブトラップを設置するとともに、トラップの側に調査員を配置し、捕獲したコウモリの種名・個体数、捕獲時のコウモリの飛翔状況（群れで飛行していたか）などを記録した。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季	秋季	冬季
	令和5年	4/4 5/8～13 5/15～17	7/3～5 7/10～11 7/12～14 7/24～26 8/2 8/7 8/21	9/11～12 9/20～22 9/27～29 10/2～4	1/24 1/31～2/3 2/5～7

表 5.1.6-2 鳥類相の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容			
調査すべき情報	鳥類(鳥類相)			
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域			
現地調査の内容	1. 直接観察 - 調査範囲内を任意に踏査し、8～10 倍程度の双眼鏡を用いた目視及び鳴き声等によって確認した種を記録した。なお、確認した個体は可能な範囲で写真の撮影に努めた。 2. ラインセンサス法 - 調査地点周辺の河川域に測線を設定し、調査測線上をゆっくりと歩行し、8～10 倍程度の双眼鏡を用いて、50mの幅内に出現した鳥類を姿や鳴き声により確認し、確認位置、種類、個体数、行動を記録した。なお、確認した個体は可能な範囲で写真の撮影に努めた。 3. 定点観察法 - 調査は、定点において日中の 1 時間程度、8～10 倍程度の双眼鏡及び 20～40 倍程度の望遠鏡を用いて周辺を観察し、出現した種類、個体数、確認箇所の環境等を記録した。なお、確認した個体は可能な範囲で写真の撮影に努めた。 4. 無人カメラ撮影 - 代表的な水場に無人撮影カメラを設置し、水場を利用する鳥類の撮影・記録を行った。 5. 夜間調査 - 夜行性鳥類を対象に、日没頃～夜間に調査範囲内を車両や徒歩などで移動しながら観察及び鳴き声の確認を行った。 - 特にフクロウに留意し、2 月～3 月にはコールバック(鳴き返し)調査も併せて実施する。ただし、繁殖への影響を考慮し、実施は必要最小限に留める。なお、フクロウの生息が確認された場合は、春季に確認箇所を中心とした営巣・繁殖状況調査を実施した。			
調査期間・調査時期	調査年	調査時期		
		春季	夏季	秋季
	令和 5 年	5/8～11	6/27～30	9/19～22
	令和 5 年～6 年	2023/1/25～2024/1/10 ^{注)1}		
		冬季		
				1/23～26 2/8～9

注)1. 調査期間・調査時期の下段は無人カメラ撮影による調査期間を示す。無人カメラは調査期間中、継続的に設置した。調査期間の一部(1/1～10)が令和6年に該当する。

表 5.1.6-3 爬虫類相の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	爬虫類(爬虫類相)				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 直接観察 ・調査範囲を任意に踏査し、肉眼や双眼鏡による目視観察を行うほか、ヘビ類については抜け殻等で確認された種を記録した。 ・夏季は、夜間を含むよう調査時間を設定して効率的な調査に努めた。 ・踏査は、池、水田、谷部、樹林や林縁、草地などといった環境を中心に行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季 (早春季含む)	夏季	秋季	冬季
	令和 5年	3/22～24 5/8 5/9～12	7/3～5 7/10～11	9/28～29 10/2～4	—

表 5.1.6-4 両生類相の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	両生類(両生類相)				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 直接観察 ・調査範囲を任意に踏査し、肉眼や双眼鏡による目視観察を行うほか、カエル等については鳴声で確認された種を記録した。 ・カエル類が盛んに鳴く夏季は、夜間を含むよう調査時間を設定して効率的な調査に努めた。 ・踏査は、両生類の生息密度が高いと考えられる池、水田、谷部といった水環境を中心に行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季 (早春季含む)	夏季	秋季	冬季
	令和 5年	3/22～24 5/8 5/9～12	7/3～5 7/10～11	9/28～29 10/2～4	—

表 5.1.6-5 魚類相の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	魚類(魚類相)				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域並びに下流の瀬田川合流点付近までの区間				
現地調査の内容	1. 直接観察及び採集 - 調査対象範囲において、ハビタットごとに投網、タモ網、カゴ網等により魚類を採集した。 - 捕獲した魚類は、原則として現地で種の同定及び魚体計測、写真撮影を行い、終了後は放流した。 - 現地で同定が困難なものについては10%ホルマリンで固定して持ち帰り、同定した。 2. 潜水目視調査 - 調査対象範囲において潜水目視観察を行い、確認された魚類の種名及び概略個体数をハビタットごとに記録した。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季	秋季	冬季
	令和5年	4/16～18 4/20 5/22～24	8/9 8/23～26 8/30～8/31 9/1	10/2～6	—

表 5.1.6-6 昆虫類相の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	昆虫類(昆虫類相)				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 直接観察及び採取 ・調査範囲を広く踏査し、直接観察により採集に努める「見つけ採り法」、捕虫網で樹木や草の葉をすくったり、飛行中の種を採集したりする「スウィーピング法」、樹木の枝葉を叩いて落下する種を採集する「ビーティング法」などにより生息種の把握を行った。 2. ライトトラップ法 ・夜間に光源を置き、光に集まる種を採集することにより生息種の把握を行った。 ・調査はボックス法を用い、光源の下に大型ロート部と昆虫収納用ボックス部から成る捕虫器を夕方に設置し、光源に集まりロート部に落ち込んだ昆虫を翌朝に回収した。捕虫器部分には酢酸エチルを染み込ませた脱脂綿を入れ、落下個体を捕殺できるようにした。 3. ベイトトラップ法 ・誘因餌（ベイト）を入れたプラスチックカップを地面の高さに口がくるように埋め、主に地表徘徊性の昆虫類を落下させて採集することにより生息種の把握を行った。 ・誘引餌は、カルピスにビール、酢および魚肉ハムを加えたもの等を用いた。 4. ホタル類調査 ・日没後、調査地域内を任意に踏査し、目視確認を行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季 (初夏季含む)	秋季	冬季
	令和 5 年	5/8～10 5/11～12 5/15～17 5/18 5/23	6/15 7/12～13 7/14 7/18～21 7/24～26	9/20～21 9/25～29 10/4～5	—

表 5.1.6-7 底生動物相の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	底生動物(底生動物相)				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域並びに下流の瀬田川合流点付近までの区間				
現地調査の内容	1. 定量採集 ・サーバーネット(25cm×25cm、目合い 0.5 mm程度)を用いて定量採集を行った。採集は調査地点の瀬の 2 箇所において実施し、1 箇所あたり 8 回採集を行い、総面積 0.5m ² を対象とした。 ・試料は実験室に持ち帰り、種類別個体数の計数と分類群別湿重量の測定を実施した。 2. 定性採集 ・調査対象範囲においてタモ網を用いて底生動物を採集し、試料とした。 ・採集に際しては、瀬や淵、抽水植物が生育する場所等、様々な環境を網羅するよう留意した。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季	秋季	冬季
	令和 5 年	4/16～20 5/24	8/14 8/25 8/30～31	-	1/23～24 1/26～27 2/17

表 5.1.6-8 陸産貝類相の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	陸産貝類(陸産貝類相)				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 直接観察および採集 ・調査範囲内の樹林、草地、耕作地周辺等の主な環境を任意に踏査し、目視により生息種、生息環境等を確認し記録した。また、地表に堆積したリター(落葉枝)層を採集し、微小な種をソーティングによって採取した。 ・重要種が確認された場合は、写真撮影を行い、確認位置、確認環境、個体数等を記録した。 ・現地で同定できないものは、持ち帰り、室内で同定を行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季 (初夏季含む)	秋季	冬季
	令和 5 年	-	6/26～29	-	1/23～24 2/16～17 2/20～21

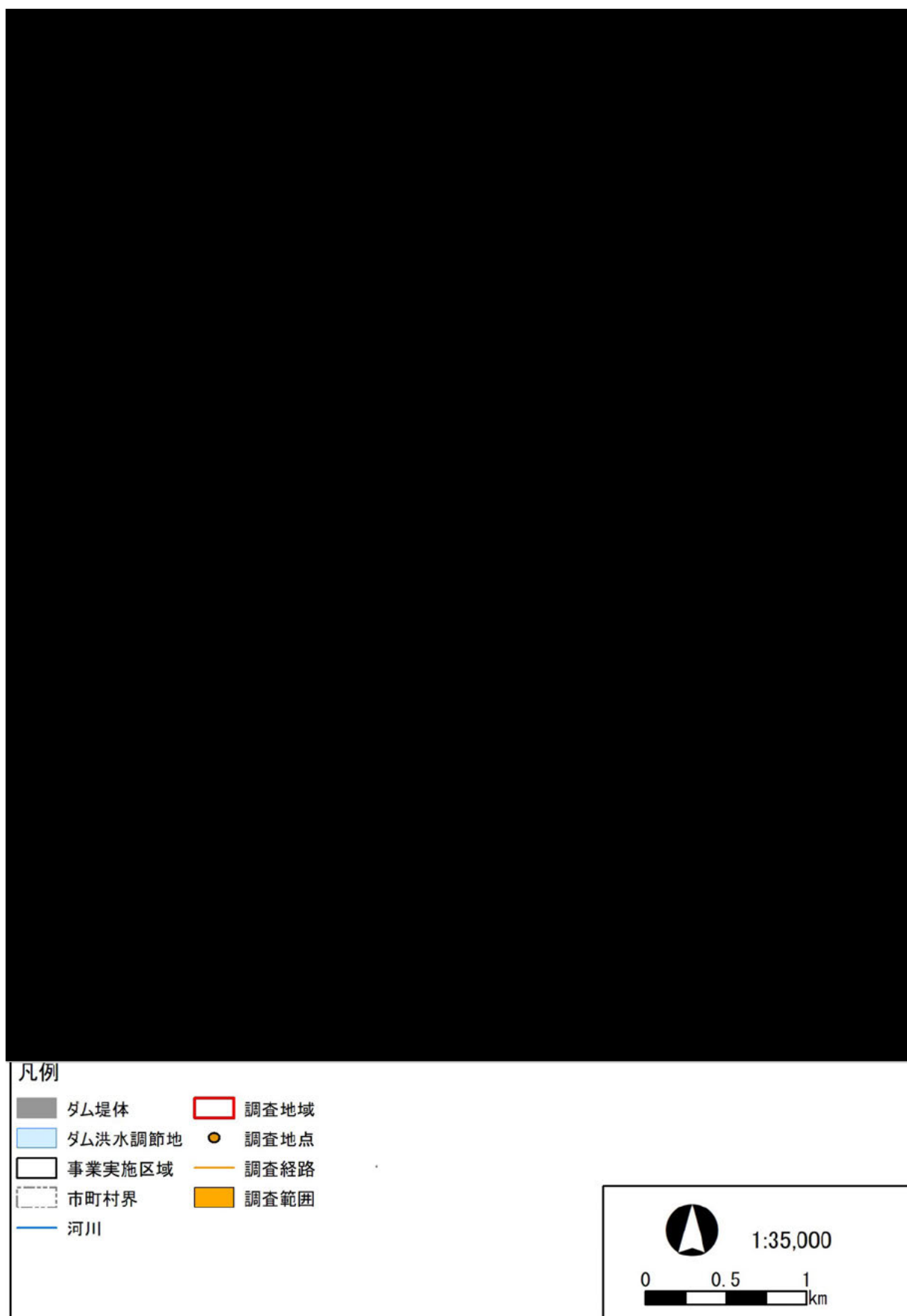


図 5.1.6-2 哺乳類調査地域、調査地点、調査経路及び調査範囲(哺乳類相調査)

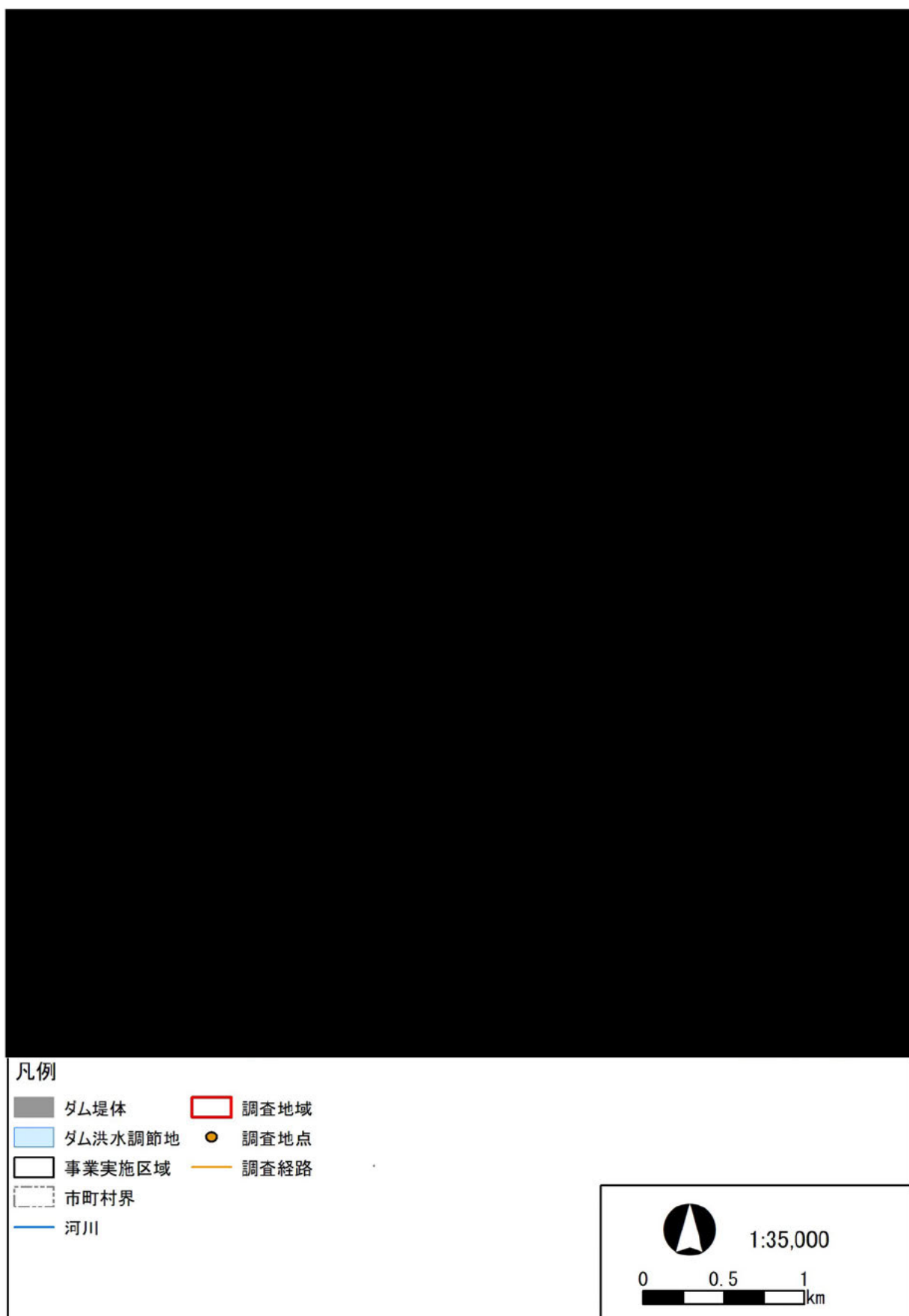


図 5.1.6-3 鳥類調査地域、調査地点及び調査経路(鳥類相調査)

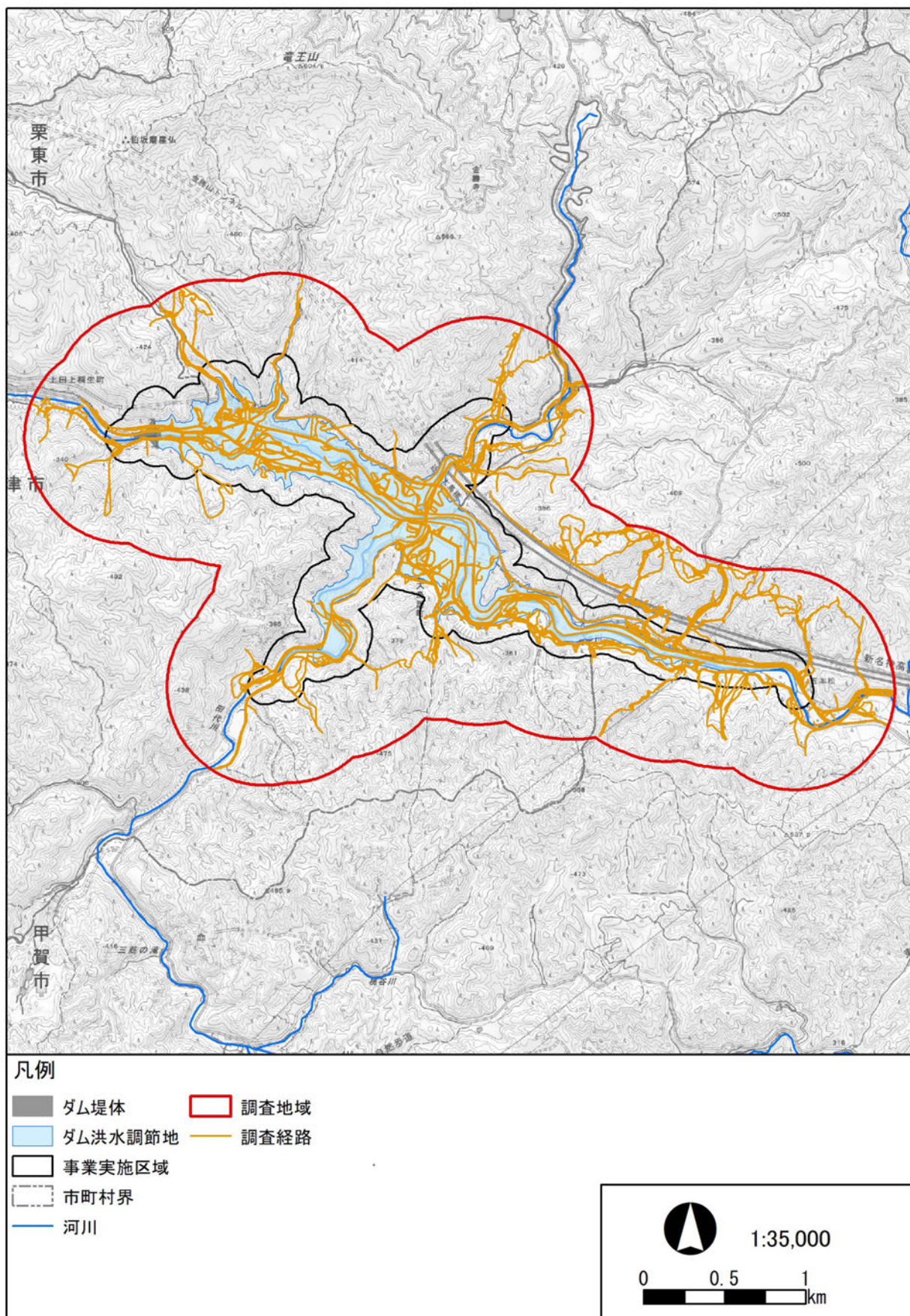


図 5.1.6-4 爬虫類調査地域及び調査経路(爬虫類相調査)

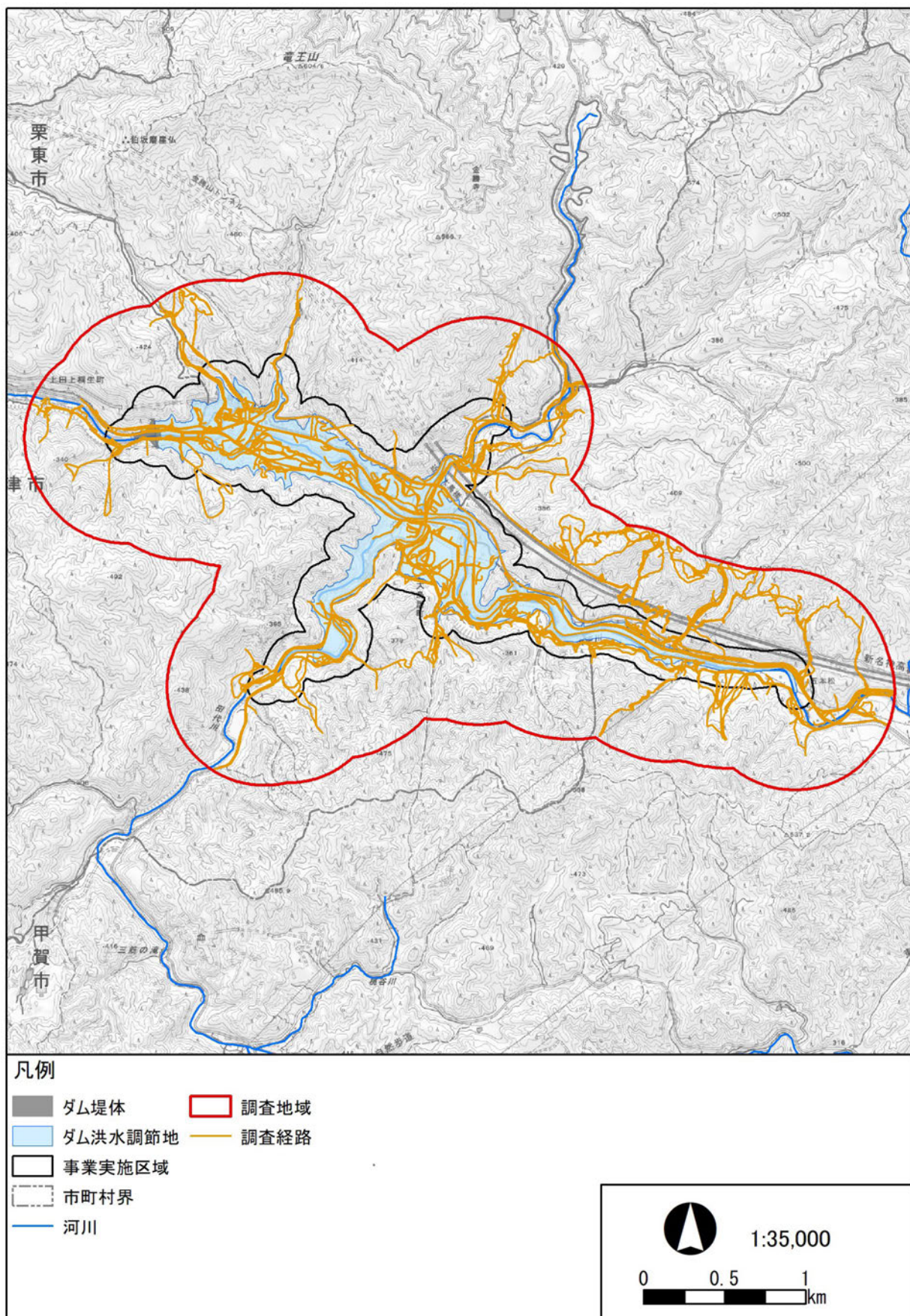


図 5.1.6-5 両生類調査地域及び調査経路(両生類相調査)

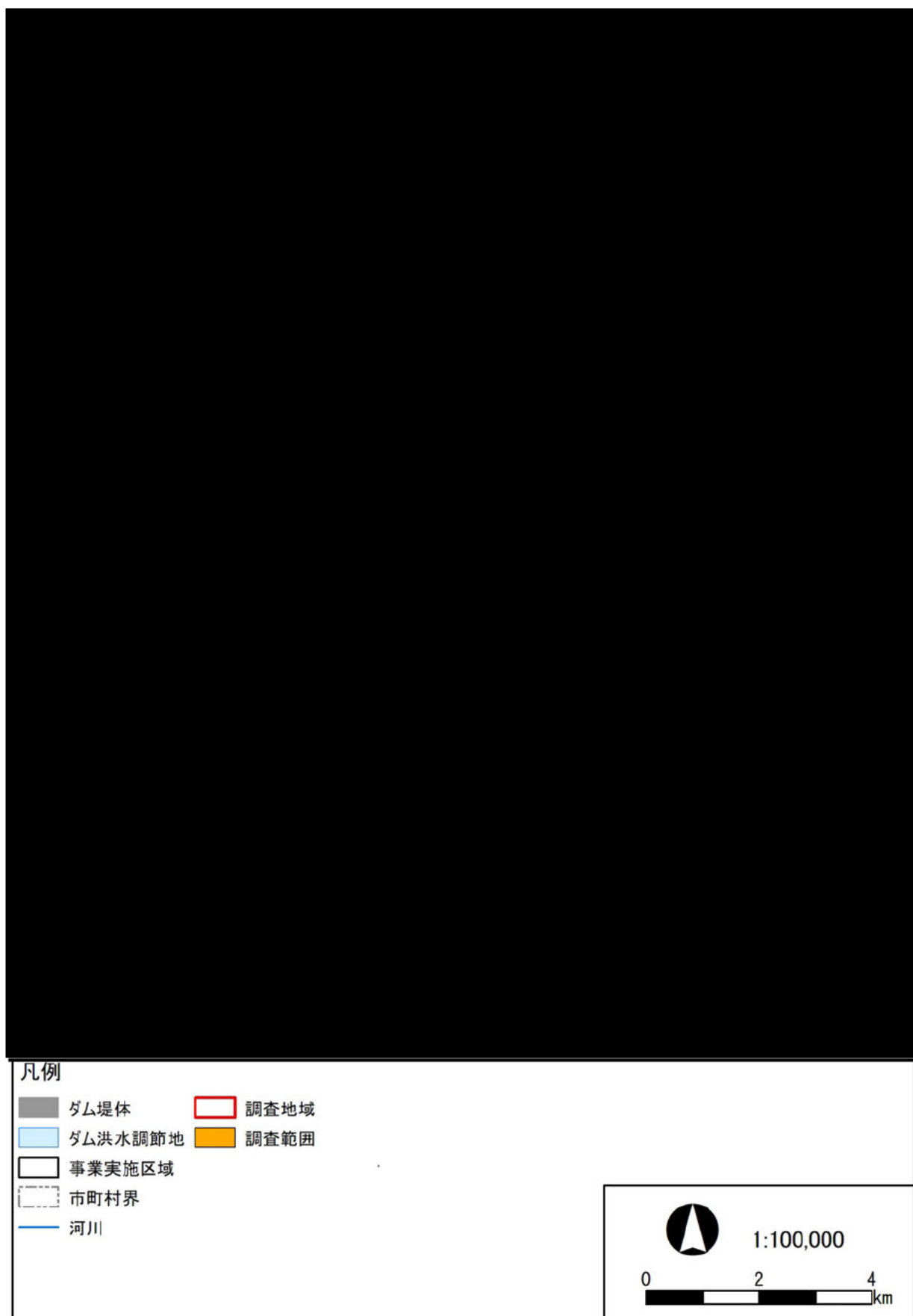


図 5.1.6-6 魚類調査地域及び調査範囲(魚類相調査)



図 5.1.6-7 昆虫類調査地域、調査地点、調査経路及び調査範囲(昆虫類相調査)

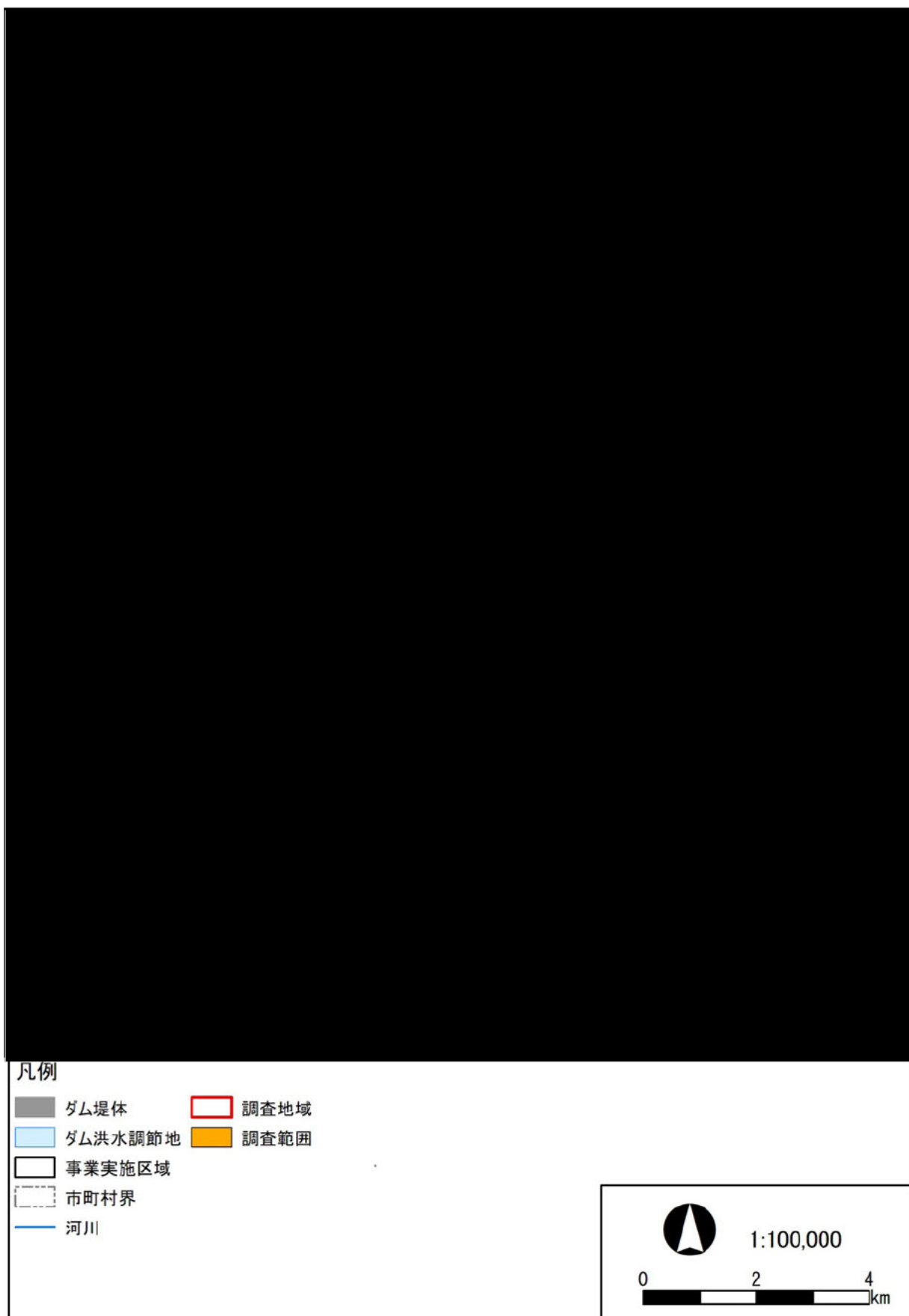


図 5.1.6-8 底生動物調査地域及び調査範囲(底生動物相調査)

2) 調査結果等

現地調査による動物相の確認種数を表 5.1.6-9 に示す。

表 5.1.6-9 動物相の確認種数

項目	確認種数	
哺乳類	15 科	23 種
鳥類	40 科	92 種
爬虫類	9 科	14 種
両生類	6 科	12 種
魚類	12 科	33 種
昆虫類	316 科	1872 種
底生動物	107 科	313 種
陸産貝類	17 科	40 種

(a) 哺乳類

現地調査の結果、15 科 23 種の哺乳類が確認された。

確認された哺乳類は、ノウサギ、タヌキ、イノシシ等の草地や樹林等の様々な環境に生息する種や、ニホンリス、ムササビ、アナグマ等の樹林に生息する種であった。

(b) 鳥類

現地調査の結果、40 科 92 種の鳥類が確認された。

確認された鳥類は、コゲラ、サンショウクイ、ヤマガラ等の樹林に生息する種、キセキレイ、ホオジロ等の開けた場所に生息する種、イカルチドリ、カワセミ、カワガラス等の水辺を生息環境とする種、ハチクマ、ツミ等の猛禽類の種であった。

(c) 爬虫類

現地調査の結果、9 科 14 種の爬虫類が確認された。

確認された爬虫類は、ニホンカナヘビ、シマヘビ、ヤマカガシ等の主に平地から山地にかけて広く生息する種であった。河川域を利用するニホンイシガメ、クサガメ等のカメ類も確認された。

(d) 両生類

現地調査の結果、6 科 12 種の両生類が確認された。

確認された両生類は、タゴガエル、ヒキガエル属、モリアオガエル等の主に樹林に生息する種、アカハライモリ等の樹林内の沢付近や湿地等に生息する種、トノサマガエル、ツチガエル等の水田やその周辺等に生息する種であった。

(e) 魚類

現地調査の結果、12 科 33 種の魚類が確認された。

確認された魚類は、スナヤツメ類、オイカワ、カワムツ、ナガレカマツカ、カワヨシノボリ等であった。また、アユ等の回遊魚も確認された。

(f) 昆虫類

現地調査の結果、316 科 1,872 種の昆虫類が確認された。

確認された昆虫類は、ハグロトンボ、ヤマトシジミ、クロアゲハ、ツマグロオオヨコバイ、シマゲンゴロウ、アメイロアリ等であった。

(g) 底生動物

現地調査の結果、107 科 313 種の底生動物が確認された。

確認された底生動物は、アカマダラカゲロウ、エルモンヒラタガゲロウ等のカゲロウ目、アオサナエ、コヤマトンボ等のトンボ目、コガタシマトビケラ、ウルマーシマトビケラ等のトビケラ目、ヒメゲンゴロウ、ドロムシ類等の昆虫類等であった。

(h) 陸産貝類

現地調査の結果、17 科 40 種の陸産貝類が確認された。

確認された陸産貝類は、ミジンヤマタニシ、ゴマガイ、マメマイマイ、タワラガイ、ヤマタニシ等であった。

(2) 動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況

1) 調査の手法

(a) 調査すべき情報

「2. 事業実施区域及びその周囲の概況」の文献その他の資料による調査結果及び「(1) 脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況」を踏まえ、天然記念物等の法令指定種、レッドデータブック記載種等をもとに学術上又は、希少性の観点から抽出した調査対象とする動物の重要な種を表 5.1.6-10～表 5.1.6-17 に示す。これらの重要な種の生息環境の状況等を把握するため、分布、生息の状況及び生息環境の状況について調査した。

また、影響予測の基礎資料として、重要な種の調査結果及び一般的な生態特性に基づき、それぞれの種について調査地域における主要な生息環境を推定した。なお、調査地域の樹林、低木林、草地等には、谷筋の沢や水溜まりなど小規模な水域も存在しており、重要な両生類や水生昆虫等が確認された。したがって、生息環境の推定に際しては、一般的に水域に生息する種であっても、例えば草地に含まれる小規模な水域において確認された場合は、生息環境に草地を含めることとした。

表 5.1.6-10 調査対象とする哺乳類の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
1	トガリネズミ	シントウトガリネズミ(シントウトガリネズミ)	●					注目			
2		ジネズミ	●	●				注目		注目	●
3		カワネズミ	●					絶危	希少	注目	
4	モグラ	ミズラモグラ	●				NT	絶危	希少	絶危	
5		アズマモグラ	●					希少	希少		
-		モグラ属 ^{※1}		●				希少 ^{※9}	希少 ^{※9}		●
6	キクガシラコウモリ	コキクガシラコウモリ	●					絶危	希少	絶危	
7		キクガシラコウモリ	●	●				絶危	希少	絶増	●
8		カグヤコウモリ	●					絶危	希少		
9	ヒナコウモリ	モモジロコウモリ	●	●				絶危	希少	絶危	●
10		クロホオヒゲコウモリ	●				VU	絶危	希少		
11		モリアブラコウモリ	●				VU	絶危	希少		
12		ヤマコウモリ	●				VU	注目			
13		ヒナコウモリ	●					絶危	指定		
14		ニホンウサギコウモリ	●				LP	注目			
15		ユビナガコウモリ	●					絶危	希少	絶危	
16		コテングコウモリ	●					絶危	希少		
17		テングコウモリ	●	●				絶危	指定	絶危	●
-		ヒナコウモリ科 ^{※2}	●	●			VU ^{※6}	絶危 ^{※10}	希少 ^{※10}	絶危 ^{※16}	●
18	オヒキコウモリ	オヒキコウモリ	●				VU	注目			
-	-	コウモリ目(A) ^{※3}	●				VU ^{※7}	絶危 ^{※11-1} 注目 ^{※11-2}	指定 ^{※14}		
-	-	コウモリ目 ^{※4}		●			VU ^{※8}	絶危 ^{※12}	希少 ^{※15-1} 指定 ^{※15-2}	絶危 ^{※17-1} 絶増 ^{※17-2}	●
19	オナガザル	ニホンザル	●	●				注目			●
20	ウサギ	ノウサギ	●	●						注目	●
21	リス	ニホンリス	●	●						注目	●
22		ニホンモモンガ	●					絶危	希少	絶危	
23		ムササビ	●	●				希少	希少	絶増	●
-		リス科 ^{※5}		●				希少 ^{※13}	希少 ^{※13}	注目 ^{※18-1} 絶増 ^{※18-2}	●
24	ヤマネ	ヤマネ	●		国天			絶増	希少		
25	ネズミ	スミスネズミ	●					他		注目	
26		ハタネズミ	●					希少	希少	注目	
27		ヒメネズミ	●	●						注目	●
28		カヤネズミ	●	●				希少	希少	絶増	●
29	クマ	ツキノワグマ	●			国際		希少	希少	注目	
30	イヌ	オオカミ	●			国際	EX	絶滅		絶滅	
31	イタチ	アナグマ	●	●						注目	●
32		カワウソ	●		特天	国際	EX	絶滅			
33	ウシ	カモシカ	●		特天			絶危	希少	絶危	
14科33種			33種	12種	3種	3種	8種	29種	20種	20種	12種

注1) 種名及び分類は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度生物リスト」(水情報国土データ管理センター、令和5年)に準拠した。

注2) 重要種の選定基準

文化財保護法:「文化財保護法」(昭和25年5月30日法律第214号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

特天:特別天然記念物、国天:天然記念物

種の保存法:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年6月5日法律第75号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

国際:国際希少野生動植物種、国内:国内希少野生動植物種、特一:特定第一種国内希少野生動植物種、特二:特定第二種国内希少野生動植物種、緊急:緊急指定種
環境省RL2020:報道発表資料「環境省レッドリスト2020の公表について」(環境省、令和2年)

EX:絶滅、CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群

滋賀県RDB2020:「滋賀県で大切にすべき野生生物-滋賀県レッドデータブック2020年版-」(滋賀県、令和3年)

絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、希少:希少種、注目:要注目種、分布:分布上重要種、その他:その他重要種、絶滅:絶滅種

滋賀県条例:「ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例」(平成18年3月30日条例第4号、最終改正:平成31年3月22日条例第46号)

希少:希少野生動植物種、指定:希少野生動植物種のうち特にその保護を図る必要があると認めるもの(指定希少野生動植物種)

甲賀市RL2022:「甲賀市レッドリスト2022」(甲賀市、令和4年)

絶滅:絶滅種、絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、注目:要注目種、地域:地域種

注3) 事業者の調査(R5年調査)の確認状況から予測地域外の種は除いている。

- ※1 モグラ属は塚、坑道での確認であり、アズマモグラ、コウベモグラの可能性が考えられる。
- ※2 エコーロケーションコールの確認であり、周波数が40～50kHzのヒナコウモリ科
(音声での捕捉が難しいとされるテングコウモリ、コテングコウモリを除く)のグループと考えられる。
- ※3 周波数20kHz帯の超音波を記録したコウモリで、ヤマコウモリ、クビワコウモリ、ヒナコウモリ、オヒキコウモリ可能性がある。
- ※4 橋梁下での糞の確認であり、橋梁を休息場として利用するグループと考えられる。
- ※5 リス科はマツ球果の食痕での確認であり、ニホンリス、ムササビの可能性が考えられる。
- ※6 クロホオヒゲコウモリ、レンコウモリ、モリアブラコウモリの場合。
- ※7 ヤマコウモリ、クビワコウモリ、オヒキコウモリの場合。
- ※8 レンコウモリの場合。
- ※9 アズマモグラの場合。
- ※10 カグヤコウモリ、モモジロコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、モリアブラコウモリ、ユビナガコウモリの場合。
- ※11-1 ヒナコウモリの場合。
- ※11-2 ヤマコウモリ、オヒキコウモリの場合。
- ※12 コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ、カグヤコウモリ、モモジロコウモリ、ヒナコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリの場合。
- ※13 ムササビの場合。
- ※14 ヒナコウモリの場合。
- ※15-1 コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ、カグヤコウモリ、モモジロコウモリ、ユビナガコウモリの場合。
- ※15-2 ヒナコウモリ、テングコウモリの場合。
- ※16 モモジロコウモリ、ユビナガコウモリの場合。
- ※17-1 コキクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリの場合。
- ※17-2 キクガシラコウモリの場合。
- ※18-1 ニホンリスの場合。
- ※18-2 ムササビの場合。

表 5.1.6-11(1) 調査対象とする鳥類の重要な種

No.	科	種名	確認状況		重要種の選定基準							予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	近畿版 R D B	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
1	キジ	ヤマドリ	●	●					他		絶増	●
2	カモ	ヒシクイ	●		国天		VU ^{*1-1} NT ^{*1-2}	越冬3	絶増	希少		
3		マガン	●		国天		NT	越冬3	絶増	希少		
4		コハクチョウ	●					越冬3	希少	希少		
5		オオハクチョウ	●					越冬2	希少	希少		
6		オンドリ	●				DD	繁殖3	希少	希少	注目	
7		ヨシガモ	●					越冬3	希少	希少		
8		アメリカヒドリ	●					越冬3	希少	希少		
9		マガモ	●					繁殖3				
10		シマアジ	●					通過3	希少	希少		
11		トモエガモ	●				VU	越冬3	希少	希少		
12		ホオジロガモ	●					越冬3	希少	希少		
13		ミコアイサ	●					越冬3	希少	希少		
14		カワアイサ	●					越冬3	希少	希少		
15		ウミアイサ	●					越冬3	希少	希少		
16	カイツブリ	カイツブリ	●						希少	希少	注目	
17		カンムリカイツブリ	●					繁殖3	希少	希少		
18	ハト	アオバト	●	●					希少	希少	注目	●
19	コウノトリ	コウノトリ	●		特天	国内	CR		注目			
20	サギ	サンカノゴイ	●				EN	繁殖1	絶危	指定		
21		ヨシゴイ	●				NT	繁殖2	絶危	指定		
22		ミゾゴイ	●	●			VU	繁殖2	絶増	希少	絶危	●
23		ゴイサギ	●						希少	希少	注目	
24		ササゴイ	●					繁殖3	希少	希少		
25		アマサギ	●						注目		注目	
26		チュウサギ	●				NT	繁殖3	希少	希少	注目	
27		コサギ	●						注目		注目	
28	クイナ	クイナ	●					越冬2	絶増	希少		
29		ヒクイナ	●				NT	繁殖2	絶増	希少	絶増	
30		バン	●						希少	希少	絶増	
31		オオバン	●					繁殖3				
32	カッコウ	ジュウイチ	●					繁殖2	希少	希少	絶危	
33		ホトギス	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
34		ツツドリ	●					繁殖3	希少	希少	絶増	
35		カッコウ	●					繁殖3	希少	希少	絶危	
36	ヨタカ	ヨタカ	●	●			NT	繁殖2	絶増	希少	絶増	●
37	アマツバメ	ハリオアマツバメ	●					繁殖注				
38	チドリ	タゲリ	●					越冬3	希少	希少		
39		ケリ	●				DD				注目	
40		ダイゼン	●					通過2	希少	希少		
41		イカルチドリ	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
42		コチドリ	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
43		シロチドリ	●				VU	繁殖3	希少	希少		
44		メダイチドリ	●		国際			通過3	希少	希少		
45	セイタカシギ	セイタカシギ	●				VU		希少	希少		
46		ヤマシギ	●	●				越冬3	希少	希少		●
47		アオシギ	●					越冬2	希少	希少		
48		オオジシギ	●				NT	通過3	希少	希少		
49		チュウジシギ	●					通過2	希少	希少		
50		タシギ	●					越冬3	希少	希少		

表 5.1.6-11(2) 調査対象とする鳥類の重要な種

No.	科	種名	確認状況		重要種の選定基準							予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	近畿版 R D B	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
51	シギ	オグロシギ	●					通過2	希少	希少		
52		オオソリハシシギ	●				VU	通過3	希少	希少		
53		チュウシャクシギ	●					通過3	希少	希少		
54		ダイシャクシギ	●					通過2	希少	希少		
55		ホウロクシギ	●			国際	VU	通過2	希少	希少		
56		ツルシギ	●				VU	通過3	希少	希少		
57		コアオアシシギ	●					通過2	希少	希少		
58		アオアシシギ	●					通過3	希少	希少		
59		クサシギ	●					越冬3	希少	希少		
60		タカブシギ	●				VU	通過3	希少	希少		
61		キアシシギ	●					通過3	希少	希少		
62		ソリハシシギ	●					通過3	希少	希少		
63		イソシギ	●					繁殖2	希少	希少		
64		キョウジョシギ	●					通過3	希少	希少		
65		オバシギ	●			国際		通過2	希少	希少		
66		トウネン	●					通過3	希少	希少		
67		オジロトウネン	●					通過2	希少	希少		
68		ヒバリシギ	●					通過2	希少	希少		
69		ウズラシギ	●					通過3	希少	希少		
70		エリマキシギ	●					通過2	希少	希少		
71	タマシギ	タマシギ	●				VU	繁殖2	絶増	希少	絶危	
72	ツバメチドリ	ツバメチドリ	●				VU	通過2	希少	希少		
73	カモメ	コアシサシ	●				VU	繁殖2	絶増	希少		
74	ミサゴ	ミサゴ	●	●			NT	繁殖2	希少	希少		●
75	タカ	ハチクマ	●	●			NT	繁殖2	絶増	希少	絶増	●
76		オジロワシ	●		国天	国内	VU	越冬3	絶増	希少		
77		オオワシ	●		国天	国内	VU	越冬3	絶増	希少		
78		チュウヒ	●			国内	EN	繁殖1	絶増	希少		
79		ハイイロチュウヒ	●					越冬2	希少	希少		
80		ツミ	●	●				繁殖3	希少	希少		●
81		ハイタカ	●	●			NT	繁殖注	希少	希少		●
82		オオタカ	●	●			NT	繁殖3	希少	希少	絶増	●
83		サシバ	●	●			VU	繁殖2	希少	希少	絶増	●
84		ノスリ	●	●				越冬3	希少	希少	注目	●
85		イヌワシ	●		国天	国内	EN	繁殖1	絶危	希少	絶危	
86		クマタカ	●	●		国内	EN	繁殖2	絶危	希少	絶増	●
87	フクロウ	オオコノハズク	●	●				繁殖2	絶危	指定	絶危	●
88		コノハズク	●					繁殖2	絶危	指定		
89		フクロウ	●	●				繁殖3	希少	希少	絶増	●
90		アオバズク	●					繁殖3	希少	希少	絶増	
91		トラフズク	●					越冬2	絶増	希少		
92		コミズク	●					越冬2	絶危	指定		
93	カワセミ	アカショウビン	●	●				繁殖2	希少	希少	絶増	●
94		カワセミ	●	●				繁殖3	希少	希少	地域	●
95		ヤマセミ	●	●				繁殖3	絶危	指定	絶危	●
96	ブッポウソウ	ブッポウソウ	●				EN	繁殖1	絶危	指定	絶危	
97	キツツキ	アリスイ	●					越冬3	希少	希少		
98		オオアカゲラ	●	●				繁殖3	希少	希少	絶増	●
99		アカゲラ	●	●				繁殖3			絶増	●
100		アオゲラ	●	●				繁殖3			注目	●

表 5.1.6-11(3) 調査対象とする鳥類の重要な種

No.	科	種名	確認状況		重要種の選定基準							予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	近畿版 R D B	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
101	ハヤブサ	チョウゲンボウ	●					越冬3	希少	希少		
102		コチョウゲンボウ	●					越冬2	希少	希少		
103		ハヤブサ	●	●		国内	VU	繁殖3	希少	希少		●
104	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ	●	●		国内	EN	繁殖1	希少	希少		●
105	サンショウクイ	サンショウクイ	●	●			VU	繁殖3	希少	希少	注目	●
106	カササギヒタキ	サンコウチョウ	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
107	クキイタダキ	クキイタダキ	●					越冬3	希少	希少		
108	ツリスガラ	ツリスガラ	●						希少	希少		
109	ツバメ	コシアカツバメ	●	●					他		注目	●
110	ウグイス	ヤブサメ	●	●					希少	希少	絶増	●
111	ムシクイ	メボソムシクイ上種	●					繁殖3	希少	希少		
112		エゾムシクイ	●	●				繁殖3				●
113		センダイムシクイ	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
114	ヨシキリ	オオヨシキリ	●					繁殖3	希少	希少	注目	
115		コヨシキリ	●					繁殖3	希少	希少		
116	セッカ	セッカ	●						希少	希少	注目	
117	レンジャク	キレンジャク	●						希少	希少		
118		ヒレンジャク	●					越冬注	希少	希少		
119	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	●					繁殖3	希少	希少		
120	キバシリ	キバシリ	●	●				繁殖3	希少	希少		●
121	ミソサザイ	ミソサザイ	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
122	ムクドリ	コムクドリ	●					通過3	希少	希少		
123	カワガラス	カワガラス	●	●				繁殖3	希少	希少	絶増	●
124	ヒタキ	マミジロ	●					繁殖3	希少	希少		
125		トラツグミ	●	●				繁殖2	希少	希少	絶増	●
126		クロツグミ	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
127		コマドリ	●					繁殖3	絶増	希少		
128		コルリ	●	●				繁殖3	絶増	希少	絶危	●
129		ルリビタキ	●	●				繁殖3	希少	希少		●
130		ノビタキ	●					繁殖3				
131		エゾビタキ	●					通過3				
132		コサメビタキ	●	●					希少	希少	注目	●
133		キビタキ	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
134		オオルリ	●	●				繁殖3	希少	希少	注目	●
135		イワヒバリ	●						希少	希少		
136		カヤクグリ	●	●				繁殖3	希少	希少		●
137	スズメ	ニュウナイスズメ	●						希少	希少		
138	セキレイ	ビンズイ	●	●				繁殖注				●
139		タヒバリ	●						希少	希少		
140	アトリ	ハギマシコ	●						希少	希少		
141		ベニマシコ	●	●					希少	希少		●
142		オオマシコ	●						希少	希少		
143		イスカ	●					越冬3	希少	希少		
144		ウソ	●	●					希少	希少		●
145		シメ	●									

表 5. 1. 6-11(4) 調査対象とする鳥類の重要な種

No.	科	種名	確認状況		重要種の選定基準							予測対象種
			文献 確認種	事業者の調査 （R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	近畿版 R D B	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県 条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
146	ホオジロ	ホオアカ	●					繁殖3	希少	希少		
147		ミヤマホオジロ	●					越冬3				
148		ノジコ	●				NT	繁殖3	希少	希少		
149		アオジ	●	●				繁殖3				●
150		クロジ	●					繁殖3	希少	希少		
151		オオジュリン	●						希少	希少		
45科151種			151種	47種	6種	11種	37種	126種	138種	133種	51種	47種

注1) 種名及び分類は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度生物リスト」(水情報国土データ管理センター、令和5年)に準拠した。

注2) 重要種の選定基準

種の保存法:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年6月5日法律第75号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

国際:国際希少野生動植物種、国内:国内希少野生動植物種、特一:特定第一種国内希少野生動植物種、特二:特定第二種国内希少野生動植物種、緊急:緊文化財保護法:「文化財保護法」(昭和25年5月30日法律第214号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

特天:特別天然記念物、国天:天然記念物

環境省RL2020:報道発表資料「環境省レッドリスト2020の公表について」(環境省、令和2年)

EX:絶滅、CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群

滋賀県RDB2020:「滋賀県で大切にすべき野生生物-滋賀県レッドデータブック2020年版-」(滋賀県、令和3年)

絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、希少:希少種、注目:要注目種、分布:分布上重要種、他:その他重要種、絶滅:絶滅種

「近畿地区・鳥類レッドデータブック-絶滅危惧種判定システムの開発(山岸哲監修、江崎保男・和田岳編著、平成14年)」

1:ランク1、2:ランク2、3:ランク3、注:要注目種、繁殖:繁殖個体群、越冬:越冬個体群、夏滞:夏期滞在個体群、通過:通過個体群

滋賀県条例:「ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例」(平成18年3月30日条例第4号、最終改正:平成31年3月22日条例第46号)

希少:希少野生動植物種、指定:希少野生動植物種のうち特にその保護を図る必要があると認めるもの(指定希少野生動植物種)

甲賀市RL2022:「甲賀市レッドリスト2022」(甲賀市、令和4年)

絶滅:絶滅種、絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、注目:要注目種、地域:地域種

注3) 「2023年夏～秋」には、2023年12月～2024年1月までの無人カメラのデータを含む。

注4) 事業者の調査(R5年調査)の確認状況から予測地域外の種を除く。

※1-1 亜種ヒシクイの場合。

※1-2 亜種オオヒシクイの場合。

表 5.1.6-12 調査対象とする爬虫類の重要な種

No.	科	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省RL2020	滋賀県RDB2020	滋賀県条例	甲賀市RL2022	
1	イシガメ	ニホンイシガメ	●	●			NT	希少	希少	絶増	●
2	スッポン	ニホンスッポン	●	●			DD	注目		注目	●
3	トカゲ	ニホントカゲ	●					注目		注目	
4		ヒガシニホントカゲ	●					注目		注目	
-		トカゲ属※1		●				注目※2		注目※2	●
5	タカチホヘビ	タカチホヘビ	●					注目		注目	
6	ナミヘビ	ジムグリ	●	●				注目		注目	●
7		シロマダラ	●					注目		注目	
8		ヒバカリ	●	●				注目		注目	●
9		ヤマカガシ	●	●				注目		注目	●
10	クサリヘビ	ニホンマムシ	●	●				注目		注目	●
6科10種			10種	7種	0種	0種	2種	10種	1種	10種	7種

注1) 種名及び分類は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度生物リスト」(水情報国土データ管理センター、令和5年)に準拠した。

注2) 重要種の選定基準

文化財保護法:「文化財保護法」(昭和25年5月30日法律第214号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

特天:特別天然記念物、国然:天然記念物

種の保存法:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年6月5日法律第75号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

国際:国際希少野生動植物種、国内:国内希少野生動植物種、特一:特定第一種国内希少野生動植物種、特二:特定第二種国内希少野生動植物種、緊急:緊急指定種

環境省RL2020:報道発表資料「環境省レッドリスト2020の公表について」(環境省、令和2年)

EX:絶滅、CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群

滋賀県RDB2020:「滋賀県で大切にすべき野生生物-滋賀県レッドデータブック2020年版-」(滋賀県、令和3年)

絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、希少:希少種、注目:要注目種、分布:分布上重要種、その他:その他重要種、絶滅:絶滅種

滋賀県条例:「ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例」(平成18年3月30日条例第4号、最終改正:平成31年3月22日条例第46号)

希少:希少野生動植物種、指定:希少野生動植物種のうち特にその保護を図る必要があると認めるもの(指定希少野生動植物種)

甲賀市RL2022:「甲賀市レッドリスト2022」(甲賀市、令和4年)

絶滅:絶滅種、絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、注目:要注目種、地域:地域種

注3) 事業者の調査(R5年調査)の確認状況から予測地域外の種を除く。

※1 トカゲ属はニホントカゲ、ヒガシニホントカゲの可能性が考えられる。

※2 ニホントカゲ、ヒガシニホントカゲの場合。

表 5.1.6-13 調査対象とする両生類の重要な種

No.	科	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
1	サンショウウオ	ヒダサンショウウオ	●				NT	希少	希少	注目	
2		ヤマトサンショウウオ	●			特二	VU	希少	希少	絶増	
3		マホロバサンショウウオ	●			特二	VU	希少	希少	絶増	
4		ハコネサンショウウオ	●					希少	希少	注目	
5	オオサンショウウオ	オオサンショウウオ	●		特天	国際	VU	絶危	希少	絶危	
6	イモリ	アカハライモリ	●	●			NT	注目		注目	●
7	ヒキガエル	ニホンヒキガエル	●	●				希少	希少	絶増	●
8		アズマヒキガエル	●					希少	希少	絶増	
9		ナガレヒキガエル	●					希少	希少	注目	
-		ヒキガエル属※1		●				希少※3	希少※3	絶増※3	●
10	アカガエル	タゴガエル	●	●				注目			●
11		ナガレタゴガエル	●					希少	希少	注目	
12		ニホンアカガエル	●					注目		地域	
13		ヤマアカガエル	●	●				希少	希少	絶増	●
-		アカガエル属※2		●				注目※4 希少※5	希少※5	地域※4 絶増※5	●
14		トノサマガエル	●	●			NT	注目		注目	●
15		ナゴヤダルマガエル	●				EN	絶増	指定	絶増	
16		ツチガエル	●	●				注目		注目	●
17	ヌマガエル	ヌマガエル	●					注目		注目	
18	アオガエル	シュレーゲルアオガエル	●	●				注目			●
19		モリアオガエル	●	●				注目		注目	●
20		カジカガエル	●	●				注目		注目	●
	7科20種		20種	9種	1種	3種	7種	20種	11種	18種	9種

注1) 種名及び分類は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度生物リスト」(水情報国土データ管理センター、令和5年)に準拠した。

注2) 重要種の選定基準

文化財保護法:「文化財保護法」(昭和25年5月30日法律第214号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

特天:特別天然記念物、国保:天然記念物

種の保存法:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年6月5日法律第75号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

国際:国際希少野生動植物種、国内:国内希少野生動植物種、特一:特定第一種国内希少野生動植物種、特二:特定第二種国内希少野生動植物種、緊急:緊急指定種

環境省RL2020:報道発表資料「環境省レッドリスト2020の公表について」(環境省、令和2年)

EX:絶滅、CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群

滋賀県RDB2020:「滋賀県で大切にすべき野生生物-滋賀県レッドデータブック2020年版-」(滋賀県、令和3年)

絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、希少:希少種、注目:要注目種、分布:分布上重要種、その他:その他重要種、絶滅:絶滅種

滋賀県条例:「ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例」(平成18年3月30日条例第4号、最終改正:平成31年3月22日条例第46号)

希少:希少野生動植物種、指定:希少野生動植物種のうち特にその保護を図る必要があると認めるもの(指定希少野生動植物種)

甲賀市RL2022:「甲賀市レッドリスト2022」(甲賀市、令和4年)

絶滅:絶滅種、絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、注目:要注目種、地域:地域種

注3) 事業者の調査(R5年調査)の確認状況から予測地域外の種を除く。

※1 ヒキガエル属は卵塊、幼生での確認であり、ニホンヒキガエル、アズマヒキガエルの可能性が考えられる。

※2 アカガエル属は卵塊での確認であり、ニホンアカガエル、ヤマアカガエルの可能性が考えられる。

※3 ニホンヒキガエル、アズマヒキガエルの場合。

※4 ニホンアカガエルの場合。

※5 ヤマアカガエルの場合。

表 5.1.6-14(1) 調査対象とする魚類の重要な種

No.	科	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
1	ヤツメウナギ	スナヤツメ類 ^{※1}	●	●			VU ^{※10}	絶増 ^{※10}	希少 ^{※10}	絶増 ^{※27}	●
2	ウナギ	ニホンウナギ	●				EN	注目			
3	コイ	コイ(野生型)	●				LP ^{※11}	希少	希少		
4		ゲンゴロウブナ	●				EN	希少	希少		
5		ニゴロブナ	●				EN	希少	希少		
6		ギンブナ	●					注目			
-		フナ属	●	●			EN ^{※12}	希少 ^{※17-1} 注目 ^{※17-2}	希少 ^{※12}		●
7		ヤリタナゴ	●				NT	絶増	希少		
8		アブラボテ	●	●			NT	絶増	希少	絶危	●
9		カネヒラ	●					絶増	希少		
10		イチモンジタナゴ	●				CR	絶危	指定		
11		イタセンバラ	●		国天	国内	CR	絶滅			
12		シロヒレタビラ	●				EN	絶危	希少		
-		タナゴ属 ^{※2}	●				EN ^{※13}	絶危 ^{※13}	希少 ^{※13}		
13		ニッポンバラタナゴ	●				CR	絶滅			
14		ワタカ	●				CR	絶危	希少		
15		カワバタモロコ	●			特二	EN	絶危	希少	絶危	
16		ハス	●	●			VU	希少	希少		●
17		ヌマムツ	●	●				分布			●
-		カワムツ属 ^{※3}	●					分布 ^{※18}			
18		アブラハヤ	●					注目		注目	
19		タカハヤ	●	●				注目			●
-		アブラハヤ属 ^{※4}	●					注目 ^{※19}		注目 ^{※28}	
20		ウグイ	●							注目	
21		モツゴ	●	●				希少	希少	絶増	●
22		アブラヒガイ	●				CR	絶危	希少		
23		ビワヒガイ	●	●				希少	希少		●
-		ヒガイ属 ^{※5}	●				NT ^{※14}	希少 ^{※20}	希少 ^{※20}		
24		ムギツク	●	●				希少	希少	絶増	●
25		ホンモロコ	●				CR	絶増	希少		
26		ゼゼラ	●				VU	希少	希少		
27		ヨドゼゼラ	●				EN	注目			
28		ナガレカマツカ	●	●				絶増	希少	絶増	●
-		カマツカ属 ^{※6}	●					絶増 ^{※21}	希少 ^{※21}	絶増 ^{※21}	
29		ズナガニゴイ	●					絶増	希少	絶増	
30		コウライニゴイ	●	●				注目			●
-		ニゴイ類	●	●				注目 ^{※22}			●
31		イトモロコ	●					絶増	希少	絶増	
32		デメモロコ	●				VU	希少	希少		
33		スゴモロコ	●	●			VU	希少	希少		●

表 5.1.6-14(2) 調査対象とする魚類の重要な種

No.	科	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
34	ドジョウ	ドジョウ	●	●			NT	注目			●
35		ニシシマドジョウ		●				注目		注目	●
-		シマドジョウ種群 ^{※7}	●					注目 ^{※23}		注目 ^{※23}	
36		ビワコガタスジシマドジョウ	●				EN	絶危	希少		
37		オオガタスジシマドジョウ	●				EN	絶危	希少		
-		シマドジョウ属	●					注目 ^{※24}		注目 ^{※24}	
38		アジメドジョウ	●				VU	希少	希少	地域	
39	フクドジョウ	ホトケドジョウ	●				EN	絶増	希少	絶増	
40		ナガレホトケドジョウ	●				EN	絶増	希少		
41	アユモドキ	アユモドキ	●		国天	国内	CR	絶危	希少		
42	ギギ	ギギ	●	●				絶危	希少	絶危	●
43	ナマズ	イトコナマズ	●				NT	絶増	希少		
44		ビワコオオナマズ	●					希少	希少		
45		ナマズ	●	●				注目		注目	●
46	アカザ	アカザ	●	●			VU	希少	希少	絶増	●
47	アユ	アユ	●	●				分布		地域 ^{※24}	
48	サケ	ヤマトイワナ	●					絶増	希少	絶危	
49		ニッコウイワナ	●				DD	絶増	希少	絶危	
50		サクラマス(ヤマメ)	●				NT	分布			
51		サツキマス(アマゴ)	●				NT	注目		注目	
52		ビワマス	●				NT	注目		絶危	
53	トゲウオ	ハリヨ	●				CR	絶危	指定		
54	メダカ	ミナミメダカ		●			VU	絶増	希少	絶増	●
-		メダカ類 ^{※8}	●				VU ^{※15}	絶増 ^{※25}	希少 ^{※25}	絶増 ^{※25}	
55	カジカ	カジカ	●				NT ^{※16}	希少 ^{※16}	希少 ^{※16}	絶増 ^{※16}	
56		ウツセミカジカ(琵琶湖型)	●				EN	分布			
57	ドンコ	ドンコ	●	●				他			●
58	ハゼ	カワヨシノボリ	●	●				注目		地域	●
59		ビワヨシノボリ	●				DD	分布			
-		ヨシノボリ属 ^{※9}	●					注目 ^{※26}		地域 ^{※26}	
60		イサザ	●				CR	絶危	希少		
16科60種			60種	21種	2種	3種	39種	59種	39種	25種	20種

注1) 種名及び分類は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度生物リスト」(水情報国土データ管理センター、令和5年)に準拠した。

注2) 重要種の選定基準

文化財保護法:「文化財保護法」(昭和25年5月30日法律第214号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

特天:特別天然記念物、国天:天然記念物

種の保存法:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年6月5日法律第75号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

国際:国際希少野生動植物種、国内:国内希少野生動植物種、特一:特定第一種国内希少野生動植物種、特二:特定第二種国内希少野生動植物種、緊急:緊急指定種

環境省RL2020:報道発表資料「環境省レッドリスト2020の公表について」(環境省、令和2年)

EX:絶滅、CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群

滋賀県RDB2020:「滋賀県で大切にすべき野生生物-滋賀県レッドデータブック2020年版-」(滋賀県、令和3年)

絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、希少:希少種、注目:要注目種、分布:分布上重要種、その他:その他重要種、絶滅:絶滅種

滋賀県条例:「ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例」(平成18年3月30日条例第4号、最終改正:平成31年3月22日条例第46号)

希少:希少野生動植物種、指定:希少野生動植物種のうち特にその保護を図る必要があると認めるもの(指定希少野生動植物種)

甲賀市RL2022:「甲賀市レッドリスト2022」(甲賀市、令和4年)

絶滅:絶滅種、絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、注目:要注目種、地域:地域種

- ※1 現地調査ではスナヤツメ類、滋賀県RDBではスナヤツメ南方種および北方種の記載、甲賀市RLではスナヤツメ南方種の記載があるが、現地調査結果に合わせてスナヤツメ類として整理した。
- ※2 シロヒレタビラと考えられるが、属止めで表記した。
- ※3 スمامツあるいはカラムツであると考えられる。
- ※4 アブラハヤあるいはタカハヤであると考えられる。
- ※5 ビワヒガイあるいはカワヒガイであると考えられる。
- ※6 2019年に従来カマツカとされた種が3種に分けられ、滋賀県では2種(カマツカ、ナガレカマツカ)が知られている。
- ※7 現地調査ではシマドジョウ種群、滋賀県RDBではオオシマドジョウ及びニシシマドジョウ、甲賀市RLではシマドジョウ(オオシマドジョウ、ニシシマドジョウ)と記載されているが、現地調査結果に合わせてシマドジョウ種群として整理した。
- ※8 現地調査ではメダカ類、滋賀県RDBではミナミメダカ、甲賀市RLではミナミメダカとして記載されているが、現地調査結果に合わせてメダカ類として整理した。
- ※9 カワヨシノボリまたはトウヨシノボリ。
- ※10 北方種、南方種ともに同ランク。
- ※11 琵琶湖在来型。
- ※12 ゲンゴロウブナまたはニゴロブナの場合。
- ※13 シロヒレタビラの場合。
- ※14 カワヒガイの場合。
- ※15 キタノメダカ、ミナミメダカの場合。
- ※16 カジカ大卵型の場合。
- ※17-1 ゲンゴロウブナまたはニゴロブナの場合。
- ※17-2 ギンブナの場合。
- ※18 スمامツの場合。
- ※19 アブラハヤまたはタカハヤの場合。
- ※20 ビワヒガイの場合。
- ※21 ナガレカマツカの場合。
- ※22 コウライニゴイの場合。
- ※23 オオシマドジョウ、ニシシマドジョウの場合。
- ※24 放流種を除く。
- ※25 ミナミメダカの場合。
- ※26 カワヨシノボリの場合、要注目種。
- ※27 南方種のみ。
- ※28 アブラハヤの場合。

表 5.1.6-15(1) 調査対象とする昆虫類の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献 確認 種	事業者の 調査 (R5年調査)	文化財保 護法	種の保 存法	環境省 RL2020	滋賀県 RDB2020	滋賀県 条例	甲賀市 RL2022	
1	イボトビムシ	スズカホラズミトビムシ	●					希少	希少		
2		ホラズミトビムシ	●					希少	希少		
3		サメシロイボトビムシ	●					希少	希少		
4	アヤトビムシ	トゲユウレイトビムシ	●					希少	希少		
5	シロイロカゲロウ	アカツキシロカゲロウ	●				NT				
6		ビワコシロカゲロウ	●				NT	分布		注目	
7		オオシロカゲロウ	●							注目	
8	アオイイトンボ	コバネアオイイトンボ	●				EN	絶滅		絶滅	
9		アオイイトンボ	●	●				他		注目	●
10		オツネイトンボ	●	●				注目		絶増	●
11	イトンボ	キイトンボ	●	●						注目	●
12		ベニイトンボ	●				NT	絶危	希少	絶危	
13		モーシイトンボ	●	●			NT	希少	希少	絶増	●
14	モノサシトンボ	オオイトンボ	●					絶増	希少	絶危	
15		モノサシトンボ	●							注目	
16		グンバイトンボ	●				NT	絶危	希少		
17	カワトンボ	アオハダトンボ	●				NT	分布		注目	
18	ヤンマ	ネアカヨシヤンマ	●				NT	絶増	希少		
19		アオヤンマ	●				NT	絶増	希少	絶危	
20		オオルリボシヤンマ	●	●						注目	●
21		ルリボシヤンマ	●					注目		絶増	
22		カトリヤンマ	●					希少	希少	絶増	
23		サラサヤンマ	●							地域	
24	サナエトンボ	ミヤマサナエ	●					他			
25		キイロサナエ	●				NT	他		地域	
26		ヒラサナエ	●					分布			
27		アオサナエ	●	●				他		注目	●注)4
28		ホシサナエ	●					他		注目	
29		ヒメサナエ	●					分布			
30		オオサカサナエ	●				VU	希少	希少		
31		メダネサナエ	●				VU	希少	希少		
32		タベサナエ	●	●			NT	希少	希少	注目	●注)4
33		フタスジサナエ	●				NT	希少	希少	注目	
34		コサナエ	●					他		注目	
35		オグマサナエ	●				NT	希少	希少	注目	
36	エゾトンボ	トラフトンボ	●					注目		注目	
37		キイロヤマトンボ	●				NT	絶増	希少	絶危	
38		ハネビロエゾトンボ	●				VU	絶危	希少	絶危	
39	トンボ	エゾトンボ	●					希少	希少	注目	
40		ベッコウトンボ	●			国内	CR	絶滅			
41		ヨツボシトンボ	●					注目		注目	
42		ハッチョウトンボ	●	●				注目		地域	●
43		コノシメトンボ	●					分布			
44		キトンボ	●					希少	希少	絶増	
45		ナツアカネ	●	●				他		注目	●
46		マユタテアカネ	●	●						注目	●
47		ナニワトンボ	●				VU	絶危	希少	絶危	
48		マイコアカネ	●					希少	希少	絶危	
49		マダラナニワトンボ	●				EN	絶危	希少		
50		ヒメアカネ	●	●				他			●
51	ミヤマアカネ	●					希少	希少	絶増		
52	オオキトンボ	●				EN	絶危				
53	ヒメカマキリ	サツマヒメカマキリ	●					注目			
54	カマキリ	ウスバカマキリ	●				DD	希少	希少		
55	オナシカワゲラ	カワイオナシカワゲラ	●				DD	注目			
56	カワゲラ	コカワゲラ	●				NT	注目			
57		ヒトホシクラカケカワゲラ	●					絶危	希少		
58	アミメカワゲラ	フライソニアミメカワゲラ	●				NT	注目			
59	カマドウマ	スズカクチキウマ	●					分布			
60		Anoplophilus属	●					注目			
61		イセカマドウマ	●					分布			
62	ツユムシ	ヘリグロツユムシ	●					注目			
63	キリギリス	コバネササキリ	●					希少	希少	注目	
64		ハタケノウマオイ	●					注目			
65		スズカササキリモドキ	●					注目		地域	
66		ヒサゴクサキリ	●					注目			
67	マツムシ	クチキコオロギ	●					希少	希少		
68	コオロギ	カヤコオロギ	●	●				分布			●
69		ヒメコオロギ	●					注目			
70		エゾエンマコオロギ本土亜種	●					希少	希少		

表 5.1.6-15(2) 調査対象とする昆虫類の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種の選定基準							予測対象種
			文献 確認種	事業者の 調査（R5年 調査）	文化財保 護法	種の保 存法	環境省 RL2020	滋賀県 RDB2020	滋賀県 条例	甲賀市 RL2022		
71	コオロギ	ナツノツツレサセコオロギ	●					注目				
72	ヒバリモドキ	ハマスズ	●					注目				
73		カワラスズ	●					注目		注目		
74	バッタ	カワラバッタ	●					希少	希少	絶増		
75	イナゴ	ヒメフキバッタ	●							地域		
76	ゲンバユウゼミ	ハウチワウンカ	●				VU	注目		注目		
77	セミ	コエゾゼミ	●					分布				
78		アカエゾゼミ	●					分布				
79		ヒメハルゼミ	●					希少	希少			
80		ハルゼミ	●	●				他		地域	●	
81		エゾハルゼミ	●					分布		注目		
82	ヨコバイ	フクロクヨコバイ	●				NT	注目				
83	キジラミ	エノキカイガラキジラミ	●				NT	分布				
84		クロオビカイガラキジラミ	●					絶増	希少			
85	サシガメ	セアカユミアシサシガメ	●					注目				
86	ゲンバユミシ	マルゲンバイ	●							注目		
87	ツノカメムシ	フトハサミツノカメムシ	●					分布				
88	ツチカメムシ	シロヘリツチカメムシ	●				NT	分布				
89	キンカメムシ	オオキンカメムシ	●					分布		注目		
90	アメンボ	オオアメンボ	●	●						注目	注4	
91		エサキアメンボ	●				NT	希少	希少			
92		ハネナシアメンボ	●							注目		
93	イトアメンボ	イトアメンボ	●				VU	注目				
94	カタビロアメンボ	オヨギカタビロアメンボ	●				NT	希少	希少			
95	ミズギワカメムシ	トゲミズギワカメムシ	●					注目				
96	ミズムシ	ミヅナシミズムシ	●				NT	注目				
97		ホッケミズムシ	●				NT	絶危	希少			
98		ナガミズムシ	●				NT	絶危	希少	絶危		
99		ヒメコミズムシ	●	●				注目			●	
100		ハラグロコミズムシ	●					分布				
101		ミヤケミズムシ	●				NT	希少	希少	絶危		
102	コオイムシ	コオイムシ	●	●			NT			注目	注4	
103		オオコオイムシ	●	●						注目	●	
104		タガメ	●			特二	VU	絶危	希少	絶滅		
105	タイコウチ	タイコウチ	●	●						注目	注4	
106		ミズカマキリ	●	●				希少	希少	絶増	注4	
107		ヒメミズカマキリ	●					希少	希少	絶危		
108	ナベバタムシ	カワムラナベバタムシ	●				CR	絶危	希少			
109	コバンムシ	コバンムシ	●			特二	EN	絶滅				
110	マルミズムシ	ヒメマルミズムシ	●					希少	希少	注目		
111		マルミズムシ	●	●				希少	希少	注目	●	
112	ヘビトンボ	アサヒナクロスジヘビトンボ	●					注目		注目		
113	センブリ	ヤマトセンブリ	●				DD	注目		注目		
114	ツノトンボ	ツノトンボ	●							注目		
115		キバネツノトンボ	●					注目				
116		オオツノトンボ	●					注目		絶増		
117	ウスバカゲロウ	ヒメウスバカゲロウ	●					他				
118		オオウスバカゲロウ	●					絶増	希少			
119	シリアゲムシ	ヒウランシリアゲ	●				DD	分布				
120	シンテイトビケラ	シンテイトビケラ	●					注目				
121		シガイワトビケラ	●					注目		絶増		
122	ナガレトビケラ	オオナガレトビケラ	●				NT	注目				
123	コエグリトビケラ	ビワコエグリトビケラ	●					分布				
124	アシエダトビケラ	クチキトビケラ	●				NT	注目				
125		ビワアシエダトビケラ	●				NT	絶増	希少			
126	カタツムリトビケラ	カタツムリトビケラ	●	●				希少	希少	注目	●	
127	カクツツトビケラ	クマノカクツツトビケラ	●							地域		
128	ヒゲナガトビケラ	クロスジヒゲナガトビケラ	●					注目				
129		ビワセトトビケラ	●					注目				
130		ビワアオヒゲナガトビケラ	●					注目				
131		モリクサツツトビケラ	●					注目				
132		ユウキクサツツトビケラ	●					注目		注目		
133		ギンボシツツトビケラ	●				NT	絶危	希少			
134		ウジヒメセトトビケラ	●				NT	絶危	希少			
135	エグリトビケラ	エグリトビケラ	●							注目		
136		ババホタルトビケラ	●					絶危	希少	絶危		
137	ホソバトビケラ	イトウホソバトビケラ	●							注目		
138	フトヒゲトビケラ	ヒトスジキソトビケラ	●					絶増	希少			
139	トビケラ	ムラサキトビケラ	●	●						注目	注4	
140		アミメトビケラ	●							注目		

表 5.1.6-15(3) 調査対象とする昆虫類の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種の選定基準							予測対象種
			文献 確認種	事業者の調査 (R5年調査)	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県 条例	甲賀市 R L 2 0 2 2		
141	トビケラ	ツマグロトビケラ	●							注目		
142	トリバガ	モウセンゴケトリバ	●					注目				
143	イラガ	アオイイラガ	●					注目				
144	マダラガ	ヤホシホソマダラ	●				NT					
145	セセリチョウ	キバナセセリ	●					希少	希少			
146		アオバナセセリ本土亜種	●								絶増	
147		ミヤマセセリ	●								絶増	
148		ギンイチモンジセセリ	●				NT	絶危	希少	絶危		
149		ミヤマチャバネセセリ	●								絶滅	
150		オオチャバネセセリ	●	●							地域	
151		スジグロチャバネセセリ北海道・本州・九州亜種	●				NT	希少	希少			
152		ヘリグロチャバネセセリ	●					希少	希少			
153	シジミチョウ	オナガシジミ	●					分布				
154		キリシマミドリシジミ本州以南亜種	●								地域	
155		アイノミドリシジミ	●								注目	
156		エンミドリシジミ	●								注目	
157		ウラジロミドリシジミ	●					絶増	希少			
158		ミヤマカラスシジミ	●					希少	希少			
159		カラスシジミ	●					注目				
160		ウラクロシジミ	●								地域	
161		ウラナミアカシジミ	●					絶増	希少			
162		ミドリシジミ	●								注目	
163		クロシジミ	●				EN	絶増	希少	絶危		
164		ムモンアカシジミ	●					分布				
165		キマダラルリツバメ	●				NT	絶増	希少			
166		ゴイシシジミ	●	●							注目	
167		ウラキンシジミ	●								注目	
168		シルビアシジミ	●				EN	絶滅				
169	タテハチョウ	サカハチチョウ	●								絶増	
170		ウラギンスジヒョウモン	●				VU	絶増	希少	絶危		
171		オオウラギンスジヒョウモン	●	●							注目	
172		スミナガシ本土亜種	●								絶増	
173		ウラギンヒョウモン	●								注目	
174		オオウラギンヒョウモン	●				CR	絶滅		絶滅		
175		ツマジロウラジャノメ本州亜種	●					注目				
176		クロヒカゲモドキ	●				EN	絶危	希少			
177		コジャノメ	●								絶増	
178		クモガタヒョウモン	●					希少	希少	絶増		
179		オオミスジ	●					分布				
180		ミスジチョウ	●								注目	
181		オオヒカゲ	●					分布			地域	
182		オオムラサキ	●				NT	絶増	希少	絶増		
183		ウラナミジャノメ本土亜種	●				VU	絶増	希少	絶危		
184	アゲハチョウ	ジャコウアゲハ本土亜種	●	●						注目 ^{※1}	●	
185		ギフチョウ	●				VU	絶危	希少	絶滅		
186	シロチョウ	ツマグロキチョウ	●				EN	絶危	希少	絶危		
187		スジボソヤマキチョウ	●					希少	希少			
188	ツトガ	フチムラサキノメイガ	●					注目				
189		フトシロスジツトガ	●					分布				
190		ヒメギンスジツトガ	●					希少	希少			
191		ミドロミズメイガ	●	●				注目			●	
192		ギンモンミズメイガ	●					注目				
193		キタホシオビホソノメイガ	●					注目				
194		ヒメコミズメイガ	●					絶増	希少			
195	マダガ	マダガ	●	●				注目			●	
196	シャクガ	ホシシャク	●					注目				
197	カレハガ	ヤマダカレハ	●					希少	希少			
198	ヤママユガ	オナガミズアオ本土亜種	●				NT				注目	
199		ウスタビガ本土亜種	●					分布				
200		クロウスタビガ	●					希少	希少			
201		シンジュサン本州以西亜種	●					注目			注目	
202	スズメガ	スキバホウジャク	●				VU	注目				
203		イブキスズメ	●					注目				
204		オオシモフリスズメ	●					注目				
205	ドクガ	スゲドクガ	●				NT	希少	希少			
206	ヤガ	ガマヨトウ	●				VU	絶増	希少			
207		ベニシタバ	●					注目				
208		ムラサキシタバ	●					注目				
209		アミメキシタバ	●					絶増	希少			
210		ウスイロキシタバ	●					絶増	希少			

表 5.1.6-15(4) 調査対象とする昆虫類の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献 確認種	事業者の調査 (R5年調査)	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県 条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
211	ヤガ	ジョナスキシタバ	●					分布			
212		カバフキシタバ	●					絶増	希少		
213		フシキシタバ	●					絶増	希少		
214		アサマキシタバ	●					絶増	希少		
215		カギモンハナオイアツバ	●				NT	注目			
216		キスジウスキヨトウ	●				VU	希少	希少		
217		キシタアツバ	●				NT	注目			
218		ヤマトホソヤガ	●					希少	希少		
219		オオチャバネオトウ	●				VU	絶増	希少		
220	ユスリカ	ビワヒゲユスリカ	●					分布			
221		キミドリユスリカ	●					他			
222		アシマダラユスリカ	●					他			
223	オドリバエ	Rhamphomyia (Calorhamphomyia) pretiosa	●					注目			
224	ハナアブ	ケンランアリノスアブ	●				VU			注目	
225	オサムシ	オオヨツボシゴミムシ	●					注目		注目	
226		クロカタヒロオサムシ	●					注目			
227		アキオサムシ	●					分布			
228		マヤサンオサムシ信楽亜種	●					分布		地域	
229		セアカオサムシ	●				NT	希少	希少		
230		コキベリアオゴミムシ	●					注目			
231		オサムシモドキ	●					注目			
232		イシダメクラチビゴミムシ	●					分布			
233		キベリマルクビゴミムシ	●				EN	絶滅			
234		クロケブカゴミムシ	●					注目			
235		オオヒョウタンゴミムシ	●				NT	絶滅			
236		サメクラチビゴミムシ	●					分布			
237		クビナガヨツボシゴミムシ	●				DD	注目			
238	ハンミョウ	カワラハンミョウ	●				EN	絶危	指定		
239		アイヌハンミョウ	●	●			NT				●
240		ナミハンミョウ	●	●						注目 ^{※2}	●
241	ゲンゴロウ	チャイロマゲンゴロウ	●	●						絶増	●
242		キボシケシゲンゴロウ	●	●			DD	希少	希少	絶危	●
243		カンムリセシゲンゴロウ	●					希少	希少		
244		コセシゲンゴロウ	●				CR	希少	希少		
245		ナチセシゲンゴロウ	●					分布		地域	
246		クロゲンゴロウ	●				NT	希少	希少	絶増	
247		ゲンゴロウ	●			特二	VU	絶滅		絶滅	
248		コガタノゲンゴロウ	●				VU	絶危	希少		
249		シャープゲンゴロウモドキ	●			国内	CR	絶滅			
250		マルガタゲンゴロウ	●			特二	VU	絶危	希少	絶危	
251		シマゲンゴロウ	●	●			NT	他		注目	●
252		オオイチモンジシマゲンゴロウ	●			特二	EN	絶増	希少	絶危	
253		スジゲンゴロウ	●				EX	絶滅			
254		マダラシマゲンゴロウ	●			国内	CR	絶危	希少	絶滅	
255		コマルケシゲンゴロウ	●				NT	希少	希少		
256		オニギリマルケンゲンゴロウ	●	●			NT ^{※3}	希少 ^{※3}	希少 ^{※3}	絶増 ^{※3}	●
257		ケシゲンゴロウ	●				NT	絶増	希少	絶危	
258		キベリクロヒメゲンゴロウ	●				NT	絶増	希少	絶危	
259		コウバツブゲンゴロウ	●				NT	希少	希少		
260		ルイスツブゲンゴロウ	●				VU	絶増	希少	注目	
261		シャープツブゲンゴロウ	●				NT	注目		注目	
262		ニセコウバツブゲンゴロウ	●					希少	希少		
263		マルチビゲンゴロウ	●				NT	希少	希少		
264		ヒメシマチビゲンゴロウ	●					希少	希少		
265		ゴマダラチビゲンゴロウ	●					希少	希少	絶危	
266		キベリマメゲンゴロウ	●				NT	希少	希少		
267		コクロマメゲンゴロウ	●					注目		注目	
268	ミズスマシ	オオミズスマシ	●				NT	希少	希少	絶危	
269		コミズスマシ	●				EN	希少	希少		
270		ヒメミズスマシ	●				EN	希少	希少		
271		ミズスマシ	●	●			VU	希少	希少	絶増	●
272		コオナガミズスマシ	●				VU	希少	希少	注目	
273		オナガミズスマシ	●					注目			
274	コガシラミズムシ	クロホシコガシラミズムシ	●				VU	希少	希少		
275		キイロコガシラミズムシ	●				VU	希少	希少		
276		クビボコガシラミズムシ	●				DD	希少	希少		
277		ヒメコガシラミズムシ	●					希少	希少		
278		マダラコガシラミズムシ	●				VU	希少	希少	絶増	
279	コツブゲンゴロウ	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	●				VU	注目			
280	ヒゲブトオサムシ	エグリゴミムシ	●	●				注目			●

表 5.1.6-15(5) 調査対象とする昆虫類の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献 確認種	事業者の調査 (R5年調査)	文化財 保護法	種の 保存法	環境省 RL2020	滋賀県 RDB2020	滋賀県 条例	甲賀市 RL2022	
281	セスジムシ	ホソセスジムシ	●					注目			
282	ナガヒラタムシ	ナガヒラタムシ	●	●				注目		注目	●
283	ツブミズムシ	クロサワツブミズムシ	●					注目			
284	ダルマガムシ	ミヤタケダルマガムシ	●					注目		注目	
285		ホンシユウセスジダルマガムシ	●					注目		注目	
286		ナカネダルマガムシ	●					注目		注目	
287	ホソガムシ	チュウブホソガムシ	●				VU	希少	希少	注目	
288		ヤマトホソガムシ	●				NT	注目		注目	
289	ガムシ	タマガムシ	●					希少	希少	注目	
290		スジヒラタガムシ	●	●			NT			注目	●
291		コガムシ	●	●			DD				●
292		エソコガムシ	●	●			NT	絶増	希少	絶危	●
293		ガムシ	●	●			NT	希少	希少	絶増	●
294		コガタガムシ	●	●			VU			絶危	●
295		シジミガムシ	●				EN				
296		ミユキシジミガムシ	●	●			NT			注目	●
297		マルチビガムシ	●					希少	希少		
298	タマキノコムシ	オオヒゲブトチビシデムシ	●					注目			
299		ヤマトヒゲブトチビシデムシ	●					注目			
300	マルハナノミ	オオチビマルハナノミ	●					注目		注目	
301	クシヒゲムシ	クチキクシヒゲムシ	●					注目		注目	
302	ムネアカセンチコガネ	ムネアカセンチコガネ	●					分布			
303	センチコガネ	オオセンチコガネ	●	●				分布		地域 ^{※4}	●
304	クワガタムシ	オオクワガタ	●				VU	絶増	希少		
305	アカマダラセンチコガネ	アカマダラセンチコガネ	●					注目			
306	コガネムシ	アカマダラハナムグリ	●				DD	希少	希少	注目	
307		オオフトホシマクソコガネ	●					絶危	希少		
308		マルツヤマグソコガネ	●					分布			
309		クロツブマグソコガネ	●					分布			
310		ニッウコエンマコガネ	●	●				注目			●
311		トゲニセマグソコガネ	●					注目			
312		ダイコクコガネ	●				VU	絶滅			
313		ミヤマダイコクコガネ	●					分布		絶増	
314		コカブトムシ	●							注目	
315		オオダイセマダラコガネ	●					注目		注目	
316		ホソコハナムグリ	●					注目			
317		ツノコガネ	●					分布			
318		コケシマグソコガネ	●					注目			
319		ヤマトエンマコガネ	●				NT	分布		絶増	
320		マルエンマコガネ	●					絶危	希少		
321		チドリムネミゾマグソコガネ	●					分布			
322		ジュウシチホシハナムグリ	●					注目			
323		オオキイロコガネ	●					注目			
324		シラホシハナムグリ	●					注目		注目	
325		キョウトアオハナムグリ	●					注目		注目	
326		ミヤマオオハナムグリ	●					注目			
327		セマルケシマグソコガネ	●					分布			
328		クロカナブン	●					分布			
329		トラハナムグリ	●					注目			
330	コブスジコガネ	ヘリトゲコブスジコガネ	●					注目			
331		チビコブスジコガネ	●					注目			
332		コブナシコブスジコガネ	●					注目			
333		アイヌコブスジコガネ	●					注目			
334	ヒメドロムシ	ヨコミソドロムシ	●				VU	希少	希少	絶増	
335		クロサワドロムシ	●					希少	希少		
336	タマムシ	オオムツボシタマムシ	●					注目			
337		タマムシ	●					分布			
338	コメツキムシ	ムネアカツヤケシコメツキ	●					注目			
339		スナサビキコリ	●					希少	希少		
340		アカアシコハナコメツキ	●					分布			
341	ジョウカイボン	Yukikoa mizunoi	●					希少	希少		
342	ホタル	ヘイケボタル	●	●				注目			●
343		ヒメボタル	●					注目		注目	
344	カッコウムシ	ヤマトヒメメダカカッコウムシ	●					注目			
345	テントウムシ	ハラグロオオテントウ	●					注目		注目	
346		マクガタテントウ	●	●				注目		注目	●
347		ムナグロチャイロテントウ	●					注目			
348	オオキノコムシ	コヒゲチビオオキノコムシ	●					注目			
349		セグロチビオオキノコムシ	●					注目			
350		オオキノコムシ	●					希少	希少		

表 5.1.6-15(6) 調査対象とする昆虫類の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献 確認種	事業者の調査 (R5年調査)	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0 2 0	滋賀県 条例	甲賀市 R L 2 0 2 2 2 2	
351	オオキノコムシ	ムモンシリグロオオキノコムシ	●					注目			
352		トモンチビオオキノコムシ	●					注目			
353	ナガチキムシ	ムネアカナガチキ	●					注目			
354		ミスジナガチキ	●					注目			
355	ツチハンミョウ	ヒラズゲンセイ	●					注目			
356	ハナノミ	ワモンオビハナノミ	●					注目			
357	アカハネムシ	ヘリハネムシ	●					注目			
358	ゴミムシダマシ	キアシアオハムシダマシ	●					分布			
359		キイアオハムシダマシ	●					分布			
360		ヤマトオサムシダマシ	●				NT	注目			
361		マルチビゴミムシダマシ	●					分布			
362		オニツノゴミムシダマシ	●	●						注目	●
363		ヒラタキノゴミムシダマシ	●	●						注目	●
364	キノコムシダマシ	ルリキノコムシダマシ	●					注目			
365	カミキリムシ	マツシタトラカミキリ	●					注目			
366		ケブカマルクビカミキリ	●					注目			
367		タキグチモモフトホソカミキリ	●					注目			
368		ヒラヤマコブハナカミキリ	●					注目			
369		ヨコヤマトラカミキリ	●					注目			
370		ホシベニカミキリ	●					注目		注目	
371		イッシキキモンカミキリ	●							注目	
372		ヤマトキモンハナカミキリ	●					注目			
373		クビアカモフトホソカミキリ	●					注目			
374		クロオオハナカミキリ	●					希少	希少		
375		マヤサシコブヤハズカミキリ	●							注目	
376		クリイロシラホシカミキリ	●					注目			
377		トガリバホソコバネカミキリ	●					分布			
378		ヒゲジロホソコバネカミキリ	●					希少	希少		
379		セダカコブヤハズカミキリ	●							注目	
380		ヤマトヒメハナカミキリ	●	●				希少	希少		●
381		ホンドヒメシラオビカミキリ	●	●				注目※5			●
382		クスベニカミキリ	●					分布		注目	
383		ヘリウスハナカミキリ	●					分布			
384		マルバネコブヒゲカミキリ	●							注目	
385		フタコブルリハナカミキリ	●					注目			
386		ヨツボシカミキリ	●				EN	絶増	希少		
387		コウヤホソハナカミキリ	●	●						注目	●
388		クリチビカミキリ	●					注目			
389		トラフカミキリ	●					絶増	希少		
390		ズマルトラカミキリ	●					注目			
391		ヤトラカミキリ	●					注目			
392	ハムシ	ヤヒロミドリトビハムシ	●					注目			
393		キンイロネクイハムシ	●				NT	注目		絶増	
394		ガガブタネクイハムシ	●							注目	
395		ツヤネクイハムシ	●							注目	
396		キイロネクイハムシ	●				EX	絶滅			
397	ミツギリゾウムシ	ムツモンミツギリゾウムシ	●					注目			
398	ゾウムシ	タカハシトゲゾウムシ	●					注目			
399		ヒサゴアナアキゾウムシ	●					注目			
400		ハバヒロヒゲボソゾウムシ	●					分布			
401	イネゾウムシ	シラホシニセイネゾウムシ	●					希少	希少		
402	コンボウハバチ	ハナセヒラクチハバチ	●					希少	希少		
403	ハバチ	イトウハバチ	●				NT	希少	希少		
404	コマユバチ	ウマノオバチ	●				NT	希少	希少	注目	
405	ヒメバチ	ミズバチ	●	●			DD				●
406	アリ	ケブカツヤオオアリ	●	●			DD				●
407		トゲアリ	●	●			VU				●
408	スズメバチ	ヒメソアシナガバチ	●					希少	希少	注目	
409		ヤマトアシナガバチ	●				DD				
410		モンズズメバチ	●	●			DD				●
411		チャイロスズメバチ	●	●				希少	希少	注目	●
412		ツヤクロスズメバチ	●					分布			
413	クモバチ	スギハラクモバチ	●				DD			注目	
414	ギングチバチ	ハロスギングチ	●					希少	希少		
415	ドロバチモドキ	ニッポンハナダカバチ	●				VU	絶増	希少		
416		キアシハナダカバチモドキ	●				VU	注目			
417	アナバチ	キゴシジガバチ	●					絶増	希少		
418	ミツバチ	ミヤママルハナバチ	●					注目			
419		クロマルハナバチ	●				NT	希少	希少	注目	
420		ナミルリモンハナバチ	●				DD			注目	
421	ハキリバチ	トモンハナバチ	●							注目	
131科421種			418種	57種	0種	8種	135種	353種	142種	170種	50種

- 注1) 種名及び分類は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度生物リスト」(水情報国土データ管理センター、令和5年)に準拠した。
- 注2) 重要種の選定基準
文化財保護法:「文化財保護法」(昭和25年5月30日法律第214号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)
特天:特別天然記念物、国然:天然記念物
種の保存法 :「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年6月5日法律第75号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)
国際:国際希少野生動植物種、国内:国内希少野生動植物種、特一:特定第一種国内希少野生動植物種、特二:特定第二種国内希少野生動植物種、緊急:緊急指定種
環境省RL2020:報道発表資料「環境省レッドリスト2020の公表について」(環境省、令和2年)
EX:絶滅、CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群
滋賀県RDB2020:「滋賀県で大切にすべき野生生物-滋賀県レッドデータブック2020年版-」(滋賀県、令和3年)
絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、希少:希少種、注目:要注目種、分布:分布上重要種、その他:その他重要種、絶滅:絶滅種
滋賀県条例:「ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例」(平成18年3月30日条例第4号、最終改正:平成31年3月22日条例第46号)
希少:希少野生動植物種、指定:希少野生動植物種のうち特にその保護を図る必要があると認めるもの(指定希少野生動植物種)
甲賀市RL2022:「甲賀市レッドリスト2022」(甲賀市、令和4年)
絶滅:絶滅種、絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、注目:要注目種、地域:地域種
- 注3) 情報不足や個体の破損等で種までの同定が困難な同一分類群の複数不明種や、異なる調査時期に採集された同一分類群の不明種は、「○○属(又は科など)」として取り扱った。
また、同一分類群に含まれる複数不明種は1種として計数したため、ここに示した種数は最低種数である。
- 注4) 事業者の調査(R5年調査)の確認状況から予測地域外の種を除く。
- ※1 ジャコウアゲハとして記載。
※2 ハンミョウとして記載。
※3 マルケシゲンゴロウとして記載。
※4 ミドリセンチコガネ(オオセンチコガネの色彩型)として記載。
※5 ヒメシラオビカミキリ本土亜種として記載。

表 5.1.6-16(1) 調査対象とする底生動物の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種選定基準						予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
1	オオウズムシ	ビワオオウズムシ	●				CR+EN	絶増	希少		
2	ヤドリフタツノムシ	エビヤドリツノムシ	●					希少	希少		
3	タニシ	マルタニシ	●				VU	希少	希少	地域	
4		オオタニシ	●				NT	注目		注目	
5		ナガタニシ	●				NT	希少	希少		
6	カワニナ	タテヒダカワニナ	●				NT	分布			
7		イボカワニナ	●				NT	希少	希少		
8		クロカワニナ	●				VU	絶危	希少		
9		ハベカワニナ	●					分布			
10		クロダカワニナ	●				NT	絶増	希少		
11		モリカワニナ	●				NT	希少	希少		
12		ナカセコカワニナ	●				CR+EN	絶増	希少		
13		ヤマトカワニナ	●				NT	分布			
14		オオウラカワニナ	●				DD	絶危	希少		
15		カゴメカワニナ	●				NT	分布			
16		タテジワカワニナ	●				DD	絶危	希少		
17		シライシカワニナ	●				NT	希少	希少		
18		タケシマカワニナ	●				NT	希少	希少		
19	ミズツボ	サガノミジンツボ	●				DD	注目			
20		コバヤシミジンツボ	●				VU	絶増	希少		
21	エゾマメタニシ	マメタニシ	●				CR	注目			
22	ミズシタダミ	ビワミズシタダミ	●				NT	分布			
23		ニホンミズシタダミ	●				VU				
24	モノアラガイ	モノアラガイ	●				NT				
25		オウミガイ	●				VU	分布			
26	ヒラマキガイ	カワネジガイ	●				CR	絶危	希少		
27		ヒダリマキモノアラガイ	●				CR+EN	注目			
28		カワコザラガイ	●				CR			注目	
29		ヒロクチヒラマキガイ	●					注目			
30		カドヒラマキガイ	●				NT	分布			
31		ヒラマキミズマイマイ	●				DD	注目			
32		ヒラマキガイモドキ	●				NT	注目			
33	イシガイ	フネドブガイ	●					注目			
34		タガイ	●							注目 ^{※2}	
35		メンカラスガイ	●				VU	希少	希少		
36		オバエボシガイ	●				VU	絶増	希少		
37		オトコタテボシガイ	●				VU	絶増	希少		
38		ニセマツカサガイ	●				VU	絶危	希少		
39		ササノハガイ	●				VU	分布			
40		イシガイ	●							絶増	
41		タテボシガイ	●	●				分布		絶増 ^{※3}	●
42		カタハガイ	●				VU	絶危	希少		
43		マツカサガイ広域分布種	●					絶増	希少	絶増	
44		マルドブガイ	●				VU	希少	希少		
45		ヌマガイ	●							注目 ^{※2}	
46		オグラヌマガイ	●				EN	絶危	希少		
47		イケチョウガイ	●				CR	絶危	希少		
48	シジミ	マシジミ	●				VU	絶増	希少	注目	
49		セタシジミ	●				VU	絶増	希少		
50	マメシジミ	ミズウミマメシジミ	●					注目			
51		マメシジミ	●					注目			
52		カワムラマメシジミ	●					分布			
53	ドブシジミ	ビワコドブシジミ	●					分布			
54		ドブシジミ	●					注目		注目	
55	ミズミズ	ビワゴレイトミズ	●					希少	希少		
56	ヒラタビル	イカリビル	●				DD	絶危	希少		
57		イボビル	●				DD				
58	ヒメカイエビ	ヒメカイエビ属	●					希少	希少		
59	カマカヨコエビ	ビワカマカ	●					希少	希少		

表 5.1.6-16(2) 調査対象とする底生動物の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種選定基準						予測対象種
			文献 確認種	事業者の調査 (R5年調査)	文化財 保護法	種の 保存法	環境省 RL2020	滋賀県 RDB2020	滋賀県 条例	甲賀市 RL2022	
60	キタヨコエビ	アナンデールヨコエビ	●				NT	希少	希少		
61		ナリタヨコエビ	●				NT	希少	希少		
62	ヌマエビ	ミナミヌマエビ	●					絶危	希少		
-		カワリヌマエビ属		●				絶危※1	希少※1		●
63		ヌマエビ	●					希少	希少		
64	サワガニ	サワガニ	●	●				注目			●
65	モクズガニ	モクズガニ	●					希少	希少		
66	アオイトトンボ	アオイトトンボ	●					他		注目	
67	ヤンマ	ルリボシヤンマ	●					注目		絶増	
68		カトリヤンマ	●					希少	希少	絶増	
69	サナエトンボ	キイロサナエ	●				NT	他		地域	
70		アオサナエ	●	●				他		注目	●
71		ホンサナエ	●	●				他		注目	●
72		タバサナエ		●			NT	希少	希少	注目	●
73		コサナエ	●					他		注目	
74	エゾトンボ	キイロヤマトンボ	●	●			NT	絶増		絶危	●
75		ハネビロエゾトンボ	●				VU	絶危	希少	絶危	
76	トンボ	マイコアカネ	●					希少	希少	絶増	
77	アメンボ	オオアメンボ		●						注目	●
78	コオイムシ	コオイムシ	●	●			NT			注目	●
79		オオコオイムシ	●							注目	
80	タイコウチ	タイコウチ		●						注目	●
81		ミズカマキリ	●	●				希少	希少	絶増	●
82	カタツムリトビケラ	カタツムリトビケラ	●					希少	希少	注目	
83	トビケラ	ムラサキトビケラ		●						注目	●
84		アミトビケラ	●							注目	
85	ゲンゴロウ	キボシケンゲンゴロウ	●				DD	希少	希少	絶危	
86	ミズスマシ	ミズスマシ	●				VU	希少	希少	絶増	
87		コオナガミズスマシ	●				VU	希少	希少	注目	
88	ヒメドロムシ	ヨコミゾドロムシ	●				VU	希少	希少	絶増	
89		ケスジドロムシ		●			VU				●
90	ホタル	ヘイケボタル	●					注目			
91	ヒメテンコケムシ	カンテンコケムシ	●					希少	希少		
92		ヒメテンコケムシ	●					希少	希少		
36科92種			87種	13種	0種	0種	54種	78種	47種	33種	13種

注1) 種名及び分類は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度生物リスト」(水情報国土データ管理センター、令和5年)に準拠した。

注2) 重要種の選定基準

文化財保護法:「文化財保護法」(昭和25年5月30日法律第214号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

特天:特別天然記念物、国然:天然記念物

種の保存法:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年6月5日法律第75号、最終改正:令和4年6月17日法律第68号)

国際:国際希少野生動植物種、国内:国内希少野生動植物種、特一:特定第一種国内希少野生動植物種、特二:特定第二種国内希少野生動植物種、緊急:緊急指定種

環境省RL2020:報道発表資料「環境省レッドリスト2020の公表について」(環境省、令和2年)

EX:絶滅、CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群

滋賀県RDB2020:「滋賀県で大切にすべき野生生物-滋賀県レッドデータブック2020年版-」(滋賀県、令和3年)

絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、希少:希少種、注目:要注目種、分布:分布上重要種、その他:その他重要種、絶滅:絶滅種

滋賀県条例:「ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例」(平成18年3月30日条例第4号、最終改正:平成31年3月22日条例第46号)

希少:希少野生動植物種、指定:希少野生動植物種のうち特にその保護を図る必要があると認めるもの(指定希少野生動植物種)

甲賀市RL2022:「甲賀市レッドリスト2022」(甲賀市、令和4年)

絶滅:絶滅種、絶危:絶滅危惧種、絶増:絶滅危機増大種、注目:要注目種、地域:地域種

注3) 情報不足や個体の破損等で種までの同定が困難な同一分類群の複数不明種や、異なる調査時期に採集された同一分類群の不明種は、「○○属(又は科など)」として取り扱った。

また、同一分類群に含まれる複数不明種は1種として計数したため、ここに示した種数は最低種数である。

※1) ミナミヌマエビの滋賀県個体群の場合。

※2) ドブガイ類として記載。

※3) イシガイとして記載。

表 5.1.6-17 調査対象とする陸産貝類の重要な種

No.	科名	種名	確認状況		重要種の選定基準						予測対象種
			文献確認種	事業者の調査（R5年調査）	文化財保護法	種の保存法	環境省 R L 2 0 2 0	滋賀県 R D B 2 0 2 0	滋賀県条例	甲賀市 R L 2 0 2 2	
1	ヤマタニシ	ヤマタニシ	●	●						注目	●
2	ヤマグルマガイ	ヤマグルマガイ	●	●				分布		注目	●
3	アズキガイ	アズキガイ	●					絶危	希少	絶危	
4	ムシオイガイ	ムシオイガイ類	●					注目			
5	ゴマガイ	イブキゴマガイ		●				注目 ^{※7}			●
6	ケンガイ	ケンガイ類	●					注目			
7	ホソアシヒダナメクジ	イボイボナメクジ	●	●			NT	希少	希少	注目	●
8	キバサナギガイ	クチマガリスナガイ	●				VU	希少	希少	絶危	
9		ナガナタネガイ	●					希少	希少	注目	
10		ナタネキバサナギガイ	●				VU	絶増	希少	注目	
11	キセルガイモドキ	フトキセルガイモドキ	●					希少	希少	絶危	
12		キセルガイモドキ	●					希少	希少	注目	
13	キセルガイ	オオギセル	●	●			NT	希少	希少		●
14		コンボウギセル	●					希少	希少	注目	
15		キョウトギセル	●				VU	絶増	希少		
16		ツムガタギセル	●					希少	希少	注目	
17	オオコウラナメクジ	ヤマコウラナメクジ	●				NT	希少	希少		
18	ベッコウマイマイ	ヒラベッコウガイ	●	●			DD	注目		注目 ^{※13}	●
-		ヒラベッコウ類	●					注目 ^{※8}		注目	
19		ヒゼンキビ		●			NT				●
20		スジキビ	●				NT	希少	希少	注目	
21		カサネシタラガイ	●				NT	希少	希少		
22		ウメムラシタラガイ	●				NT	希少	希少	注目	
23		ヒメカサキビ		●			NT				●
24	ニッポンマイマイ	ケハダビロウドマイマイ	●				NT	注目 ^{※9}		注目	
-		ビロウドマイマイ類 ^{※1}	●				NT ^{※4} DD ^{※5}	注目		注目 ^{※4}	
-		ビロウドマイマイ属		●			NT ^{※4} DD ^{※5}	注目 ^{※9}		注目 ^{※4}	●
25		コシタカコベソマイマイ	●				NT	希少	希少		
26		ニッポンマイマイ		●				注目 ^{※10}			●
-		ニッポンマイマイ類	●					注目			
27		コベソマイマイ	●					分布		注目	
28		ヤマタカマイマイ	●				NT	希少	希少		
29	オナジマイマイ	クチマガリマイマイ	●				NT	絶増	希少	絶危	
30		コウベマイマイ	●					希少	希少		
31		コオオベソマイマイ	●	●						注目	●
32		チャイロオトメマイマイ類 ^{※2}	●				NT ^{※6}	注目			
33		クチベニマイマイ	●	●						地域	●
34		ギョリキマイマイ	●					分布		注目	
35		ツルガマイマイ	●					希少	希少		
36		ナミマイマイ	●							注目	
37		ニシキマイマイ	●					希少	希少		
38		ミヤマヒダリマキマイマイ	●				VU	希少	希少	絶増	
39		クロイワマイマイ	●					注目		注目	
-		マイマイ属 ^{※3}		●				分布 ^{※11}		注目 ^{※11}	●
40		カタマメマイマイ	●				VU	絶増	希少	注目	
41		マメマイマイ類	●	●				注目 ^{※12}			●
42	タワラガイ	タワラガイ	●	●				注目		注目	●
-	15科42種		39種	15種	0種	0種	19種	36種	23種	25種	15種

- 注1) 種名及び分類は「日本産野生生物目録（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁、1998年）に準拠した。
- 注2) 重要種の選定基準
文化財保護法：「文化財保護法」（昭和25年5月30日法律第214号、最終改正：令和4年6月17日法律第68号）
特天：特別天然記念物、国然：天然記念物
種の保存法：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年6月5日法律第75号、最終改正：令和4年6月17日法律第68号）
国際：国際希少野生動植物種、国内：国内希少野生動植物種、特一：特定第一種国内希少野生動植物種、特二：特定第二種国内希少野生動植物種、緊急：緊急指定種
環境省RL2020：報道発表資料「環境省レッドリスト2020の公表について」（環境省、令和2年）
EX：絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
滋賀県RDB2020：「滋賀県で大切にすべき野生生物-滋賀県レッドデータブック2020年版-」（滋賀県、令和3年）
絶危：絶滅危惧種、絶増：絶滅危機増大種、希少：希少種、注目：要注目種、分布：分布上重要種、その他：その他重要種、絶滅：絶滅種
滋賀県条例：「ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例」（平成18年3月30日条例第4号、最終改正：平成31年3月22日条例第46号）
希少：希少野生動植物種、指定：希少野生動植物種のうち特にその保護を図る必要があると認めるもの（指定希少野生動植物種）
甲賀市RL2022：「甲賀市レッドリスト2022」（甲賀市、令和4年）
絶滅：絶滅種、絶危：絶滅危惧種、絶増：絶滅危機増大種、注目：要注目種、地域：地域種
- 注3) 事業者の調査（R5年調査）の確認状況から予測地域外の種を除く。
- ※1 滋賀県RDB2020ではケハダヒロウドマイマイ、ヒロウドマイマイ（トウカイヒロウドマイマイ）、エチゼンヒロウドマイマイを含めてヒロウドマイマイ類として指定。
- ※2 滋賀県RDB2020ではチャイロオトメマイマイ、ヒルゲンドルフマイマイ、亜種オオヒルゲンドルフマイマイ近縁種を含めてチャイロオトメマイマイ類として指定。
- ※3 殻の確認であり、ギュリキマイマイ、イセノナマイマイの可能性が考えられる。
- ※4 ケハダヒロウドマイマイの場合。
- ※5 エチゼンヒロウドマイマイ、ヒロウドマイマイの場合。
- ※6 ヒルゲンドルフマイマイの場合。
- ※7 滋賀県RDB2020ではイブキゴマガイ類として指定。
- ※8 ヒラベッコウの場合。
- ※9 滋賀県RDB2020ではヒロウドマイマイ類として指定。
- ※10 滋賀県RDB2020ではニッポンマイマイ類として指定。
- ※11 ギュリキマイマイ、イセノナマイマイの場合。
- ※12 滋賀県RDB2020ではクロオトメマイマイ、ミヤコオトメマイマイ、エンドウマイマイを含めてマメマイマイ類として指定。
- ※13 甲賀市RL2017ではヒラベッコウ類として指定。

<その他、種和名、学名変更>
イボイボナメジは「日本産野生生物目録（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁、1998年）ではナメジ科であるが現地調査結果に合わせて新しい分類体系である足襪目、ホソアシヒダナメジ科とした。
「オオギセル Megalophaedusa martensi」は滋賀県RDB2020、滋賀県条例では「オオギセルガイ Megalophaedusa (Megalophaedusa) martensii」として指定。
「コンボウギセル」は滋賀県RDB2020、滋賀県条例、甲賀市RL2022では「コンボウギセルガイ」として指定。
「キョウトギセル Mundiphaedusa kyotoensis」は滋賀県RDB2020、滋賀県条例では「キョウトギセルガイ Megalophaedusa (Dimphaedusa) kyotoensis」として指定。
「ツムガタギセル Pinguiphaedusa pinguis platydera」は滋賀県RDB2020、滋賀県条例、甲賀市RL2022では「ツムガタギセルガイ Megalophaedusa (Pinguiphaedusa) pinguis platydera」として指定。
「ヒラベッコウガイ」は滋賀県RDB2020では「ヒラベッコウ」として指定。
「スジキビ」は滋賀県RDB2020、滋賀県条例、甲賀市RL2022では「スジキビガイ」として指定。
「ギュリキマイマイ」は滋賀県RDB2020、甲賀市RL2022では「ギュリキマイマイ(イセノナマイマイ)」として指定。
「ミヤマヒダリマキマイマイ」は滋賀県RDB2020、滋賀県条例、甲賀市RL2022では「ミヤマヒダリマキマイマイ(ヒラヒダリマキマイマイ)」として指定。

(b) 調査の基本的な手法

調査の基本的な手法は、文献その他の資料により生態に関する情報を整理するとともに、現地調査の情報により、分布、生息の状況及び生息環境の状況を整理、解析することにより行った。また、必要に応じて専門家からの聴取を実施し、重要な種の分布等の情報を補った。現地調査の基本的な手法は、「(1) 脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況」の現地調査の手法及び現地調査の内容並びに表 5.1.6-18～表 5.1.6-27 に示す現地調査の手法とした。

(c) 調査地域・調査地点

現地調査の調査地域及び調査地点は「(1) 脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況」に示す調査地域及び調査地点とした。分類ごとの詳細を以下に示す。

a) 哺乳類

哺乳類の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域とした。

調査地点は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況を適切かつ効果的に把握できる地点、経路及び範囲とした。

調査地域、調査地点、調査経路及び調査範囲を図 5.1.6-10 に示す。

b) 鳥類

鳥類の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域とした。また、猛禽類の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域とし、猛禽類の広い行動圏を考慮し、出現状況等に応じて適宜拡張した。

調査地点は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況を適切かつ効果的に把握できる地点及び経路とした。また、猛禽類の重要な種に関する調査地点は生息の状況、地形の状況及び視野範囲を考慮して設定した。

調査地域、調査地点及び調査経路を図 5.1.6-11 及び図 5.1.6-13 に示す。

c) 爬虫類

爬虫類の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域とした。

調査地点は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況を適切かつ効果的に把握できる経路とした。

調査地域及び調査経路を図 5.1.6-14 に示す。

d) 両生類

両生類の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域とした。

調査地点は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況を適切かつ効果的に把握できる経路とした。

調査地域及び調査経路を図 5.1.6-15 に示す。

e) 魚類

魚類の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域並びに下流の瀬田川合流点付近までの区間とした。

調査地点は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況を適切かつ効果的に把握できる範囲とした。

調査地域、調査範囲を図 5.1.6-16 に示す。

f) 昆虫類

昆虫類の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域とした。

調査地点は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況を適切かつ効果的に把握できる地点、経路及び範囲とした。

調査地域、調査地点及び調査経路を図 5.1.6-17 に示す。

g) 底生動物

底生動物の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域並びに下流の瀬田川合流点付近までの区間とした。

調査地点は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況を適切かつ効果的に把握できる範囲とした。

調査地域、調査範囲を図 5.1.6-18 に示す。

h) 陸産貝類

陸産貝類の重要な種に関する調査地域は、事業実施区域及びその周辺の区域とした。

調査地点は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況を適切かつ効果的に把握できる経路とした。

調査地域及び調査経路を図 5.1.6-19 に示す。

(d) 調査期間等

現地調査の時期、期間及び時間帯は、動物の生態の特性を踏まえ、調査対象種の活動盛期や確認の容易さ等を勘案して設定した。

現地調査の実施状況を表 5.1.6-18～表 5.1.6-27 に示す。

表 5.1.6-18 哺乳類の重要な種の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	哺乳類の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 目撃及びフィールドサイン法 ・調査範囲を踏査し、実個体の目視確認および足跡や糞、食痕などの生息の根拠となるフィールドサイン（生活痕）の確認、記録を行った。 ・林道、尾根、沢沿いや農耕地周辺など、哺乳類のフィールドサインが比較的残されやすく、発見の容易な場所を中心に踏査した。 ・獣道等の痕跡が確認された場合には、自動撮影装置等を設置し、獣道等を利用する種の撮影を行った。 2. トラップ法 ・ネズミ類などの小型哺乳類は、目撃やフィールドサインによる確認及び種の判定が困難であるため、シャーマントラップを使用した捕獲調査を行った。 ・餌にピーナッツ等を用いたシャーマントラップを用い、捕獲した小型哺乳類の種名・個体数などを記録した。 ・モグラ類を対象としたモールトラップによる捕獲調査を行う。トラップは、塚が密に分布する場所や新しいモグラ塚が多く分布する場所に設置した。 ・シャーマントラップ、モールトラップは2晩設置した。 3. コウモリ類調査 ・日中、コウモリ類がねぐらとして利用していると考えられる導水路（隧道）、洞窟等に留意して現地を踏査し、実個体の観察や糞の確認を行った。 ・夜間には、調査範囲内におけるコウモリ類の飛翔状況を把握するため、バットデテクター（コウモリが発する超音波を可聴音に変換する装置）を用いた調査を行った。 ・コウモリが通過しそうな空間にハーブトラップを設置するとともに、トラップの側に調査員を配置し、捕獲したコウモリの種名・個体数、捕獲時のコウモリの飛翔状況（群れで飛行していたか）などを記録した。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季	秋季	冬季
	令和5年	4/4 5/8～13 5/15～17	7/3～5 7/10～11 7/12～14 7/24～26 8/2 8/7 8/21	9/11～12 9/20～22 9/27～29 10/2～4	1/24 1/31～2/3 2/5～7

表 5.1.6-19 鳥類の重要な種の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容			
調査すべき情報	鳥類の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況			
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域			
現地調査の内容	1. 直接観察 - 調査範囲内を任意に踏査し、8～10 倍程度の双眼鏡を用いた目視及び鳴き声等によって確認した種を記録した。なお、確認した個体は可能な範囲で写真の撮影に努めた。 2. ラインセンサス法 - 調査地点周辺の河川域に測線を設定し、調査測線上をゆっくりと歩行し、8～10 倍程度の双眼鏡を用いて、50mの幅内に出現した鳥類を姿や鳴き声により確認し、確認位置、種類、個体数、行動を記録した。なお、確認した個体は可能な範囲で写真の撮影に努めた。 3. 定点観察法 - 調査は、定点において日中の 1 時間程度、8～10 倍程度の双眼鏡及び 20～40 倍程度の望遠鏡を用いて周辺を観察し、出現した種類、個体数、確認箇所の環境等を記録した。なお、確認した個体は可能な範囲で写真の撮影に努めた。 4. 無人カメラ撮影 - 代表的な水場に無人撮影カメラを設置し、水場を利用する鳥類の撮影・記録を行った。 5. 夜間調査 - 夜行性鳥類を対象に、日没頃～夜間に調査範囲内を車両や徒歩などで移動しながら観察及び鳴き声の確認を行った。 - 特にフクロウに留意し、2 月～3 月にはコールバック（鳴き返し）調査も併せて実施する。ただし、繁殖への影響を考慮し、実施は必要最小限に留める。なお、フクロウの生息が確認された場合は、春季に確認箇所を中心とした営巣・繁殖状況調査を実施した。			
調査期間・調査時期	調査年	調査時期		
		春季	夏季	秋季
	令和 5 年	5/8～11	6/27～30	9/19～22
	令和 5 年～6 年	2023/1/25～2024/1/10 ^{注)1}		
		冬季		
				1/23～26 2/8～9

注)1. 調査期間・調査時期の下段は無人カメラ撮影による調査期間を示す。無人カメラは調査期間中、継続的に設置した。調査期間の一部（1/1～10）が令和 6 年に該当する。

表 5.1.6-20 鳥類の重要な種（猛禽類）の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	猛禽類の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域 (猛禽類の広い行動圏を考慮し、出現状況等に応じて適宜拡張した)				
現地調査の内容	1. 定点観察法 ・調査員は、野帳、8～10 倍程度の双眼鏡、20 倍程度の望遠鏡、トランシーバーを装備し、猛禽類が確認された際には、個体数・飛翔経路・時間・行動等を野帳に記録した。また、複数の地点で調査を行う場合には、無線で連絡を取り合いながら、長時間観察できるよう努めた。 ・猛禽類の出現状況に応じて適宜調査地点を移動し、繁殖行動や採餌行動等の確認に努めた。 ・その他重要な種が確認された場合にも、記録を行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季	秋季	冬季
	令和元年 (平成31年)	3/11～13 4/15～17 5/20～22	6/17～19 7/16～18 8/5～7	—	2/12～14
	令和5年	3/22～24 4/10～12 5/15～17	6/7～9 7/10～12 8/2～4	—	2/20～22

表 5.1.6-21 鳥類の重要な種（ヤマセミ、カワセミ、カワガラス）
の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	ヤマセミ、カワセミ、カワガラスの重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域 (ヤマセミ、カワセミ、カワガラスの広い行動圏を考慮し、出現状況等に応じて適宜拡張した)				
現地調査の内容	調査範囲の河川沿いにゆっくりと歩行し、8～10 倍程度の双眼鏡を用いて、出現したヤマセミ・カワセミ・カワガラスを姿や鳴き声により確認し、確認位置、個体数、行動等を記録した。 また、調査範囲とその周辺の繁殖場に利用される可能性がある堰提、土質の斜面等の状況を確認し、営巣地の有無等を記録した。繁殖個体を確認された場合は、引き続き繁殖状況確認の調査を行い、生息テリトリー等の把握を行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季	秋季	冬季
	令和4年 (カワガラス)	—	—	—	12/21～22
	令和5年 (カワガラス)	3/2～3 3/16～17 3/30～31	—	—	1/19～20 2/9～10
	令和5年 (ヤマセミ・カワセミ)	3/9～10 4/6～7 4/27～28 5/10～11	—	—	—

表 5.1.6-22 爬虫類の重要な種の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	爬虫類の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 直接観察 ・調査範囲を任意に踏査し、肉眼や双眼鏡による目視観察を行うほか、ヘビ類については抜け殻等で確認された種を記録した。 ・夏季は、夜間を含むよう調査時間を設定して効率的な調査に努めた。 ・踏査は、池、水田、谷部、樹林や林縁、草地などといった環境を中心に行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季 (早春季含む)	夏季	秋季	冬季
	令和 5年	3/22～24 5/8 5/9～12	7/3～5 7/10～11	9/28～29 10/2～4	—

表 5.1.6-23 両生類の重要な種の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	両生類の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 直接観察 ・調査範囲を任意に踏査し、肉眼や双眼鏡による目視観察を行うほか、カエル等については鳴声で確認された種を記録した。 ・カエル類が盛んに鳴く夏季は、夜間を含むよう調査時間を設定して効率的な調査に努めた。 ・踏査は、両生類の生息密度が高いと考えられる池、水田、谷部といった水環境を中心に行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季 (早春季含む)	夏季	秋季	冬季
	令和 5年	3/22～24 5/8 5/9～12	7/3～5 7/10～11	9/28～29 10/2～4	—

表 5.1.6-24 魚類の重要な種の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容			
調査すべき情報	魚類の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況			
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域並びに下流の瀬田川合流点付近までの区間			
現地調査の内容	1. 直接観察及び採集 ・ 調査対象範囲において、ハビタットごとに投網、タモ網、カゴ網等により魚類を採集した。 ・ 捕獲した魚類は、原則として現地で種の同定及び魚体計測、写真撮影を行い、終了後は放流した。 ・ 現地で同定が困難なものについては 10%ホルマリンで固定して持ち帰り、同定した。 2. 潜水目視調査 ・ 調査対象範囲において潜水目視観察を行い、確認された魚類の種名及び概略個体数をハビタットごとに記録した。 3. 聞き取り調査 ・ 調査対象範囲における魚類の放流実績やアユの生息範囲、産卵状況等について、関連漁協等に聞き取り調査を行った。 4. 食み跡調査 ・ 調査対象範囲内の主な瀬において、潜水による目視観察を行い、アユの食み跡の分布状況（分布範囲等）を記録した。調査箇所については、聞き取り調査結果等をふまえて絞り込みを行った。 ・ 潜水目視により確認された食み跡の分布状況から、特に多い箇所について測線を設置して定量的な調査を行った。 ・ 側線は、流向と垂直にラインを設置し、ライン上に岸際から 1 m²毎にコドラートを連続設置し、アユの食み跡の被度を記録した。また同時にコドラート内の礫の大きさ割合と陸地の面積を記録した。 ・ コドラートは、 付近の 3 側線は左岸側から設定し、 付近の 3 測線は右岸側から設定した。			
調査期間・調査時期	調査年	調査時期		
		春季	夏季	秋季
	令和4年	—	—	—
令和5年	4/16～18 4/20 5/22～24 6/22 ^{注)1}	8/9 8/23～26 8/30～8/31 9/1	10/2～6	—

注)1. 聞き取り調査を実施。

表 5.1.6-25 昆虫類の重要な種の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	昆虫類の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 直接観察及び採取 ・調査範囲を広く踏査し、直接観察により採集に努める「見つけ採り法」、捕虫網で樹木や草の葉をすくったり、飛行中の種を採集したりする「スウィーピング法」、樹木の枝葉を叩いて落下する種を採集する「ビーティング法」などにより生息種の把握を行った。 2. ライトトラップ法 ・夜間に光源を置き、光に集まる種を採集することにより生息種の把握を行った。 ・調査はボックス法を用い、光源の下に大型ロート部と昆虫収納用ボックス部から成る捕虫器を夕方に設置し、光源に集まりロート部に落ち込んだ昆虫を翌朝に回収した。捕虫器部分には酢酸エチルを染み込ませた脱脂綿を入れ、落下個体を捕殺できるようにした。 3. ベイトトラップ法 ・誘因餌（ベイト）を入れたプラスチックカップを地面の高さに口がくるように埋め、主に地表徘徊性の昆虫類を落下させて採集することにより生息種の把握を行った。 ・誘引餌は、カルピスにビール、酢および魚肉ハムを加えたもの等を用いた。 4. ホタル類調査 ・日没後、調査地域内を任意に踏査し、目視確認を行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季 (初夏を含む)	秋季	冬季
	令和 5年	5/8～10 5/11～12 5/15～17 5/18 5/23	6/15 7/12～13 7/14 7/18～21 7/24～26	9/20～21 9/25～29 10/4～5	—

表 5.1.6-26 底生動物の重要な種の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	底生動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域並びに下流の瀬田川合流点付近までの区間				
現地調査の内容	1. 定量採集 ・サーバーネット(25cm×25cm、目合い 0.5 mm程度)を用いて定量採集を行った。採集は調査地点の瀬の2箇所において実施し、1箇所あたり8回採集を行い、総面積 0.5m ² を対象とした。 ・試料は実験室に持ち帰り、種類別個体数の計数と分類群別湿重量の測定を実施した。 2. 定性採集 ・調査対象範囲においてタモ網を用いて底生動物を採集し、試料とした。 ・採集に際しては、瀬や淵、抽水植物が生育する場所等、様々な環境を網羅するように留意した。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季	秋季	冬季
	令和5年	4/16～20 5/24	8/14 8/25 8/30～31	-	1/23～24 1/26～27 2/17

表 5.1.6-27 陸産貝類の重要な種の現地調査の手法、内容及び実施状況

項目	内容				
調査すべき情報	陸産貝類の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況				
調査地域・調査地点	事業実施区域及びその周辺の区域				
現地調査の内容	1. 直接観察および採集 ・調査範囲内の樹林、草地、耕作地周辺等の主な環境を任意に踏査し、目視により生息種、生息環境等を確認し記録した。また、地表に堆積したリター（落葉枝）層を採集し、微小な種をソーティングによって採取した。 ・重要種が確認された場合は、写真撮影を行い、確認位置、確認環境、個体数等を記録した。 ・現地で同定できないものは、持ち帰り、室内で同定を行った。				
調査期間・調査時期	調査年	調査時期			
		春季	夏季 (初夏季含む)	秋季	冬季
	令和5年	-	6/26～29	-	1/23～24 2/16～17 2/20～21



図 5.1.6-10 哺乳類調査地域、調査地点、調査経路及び調査範囲(重要な種調査)

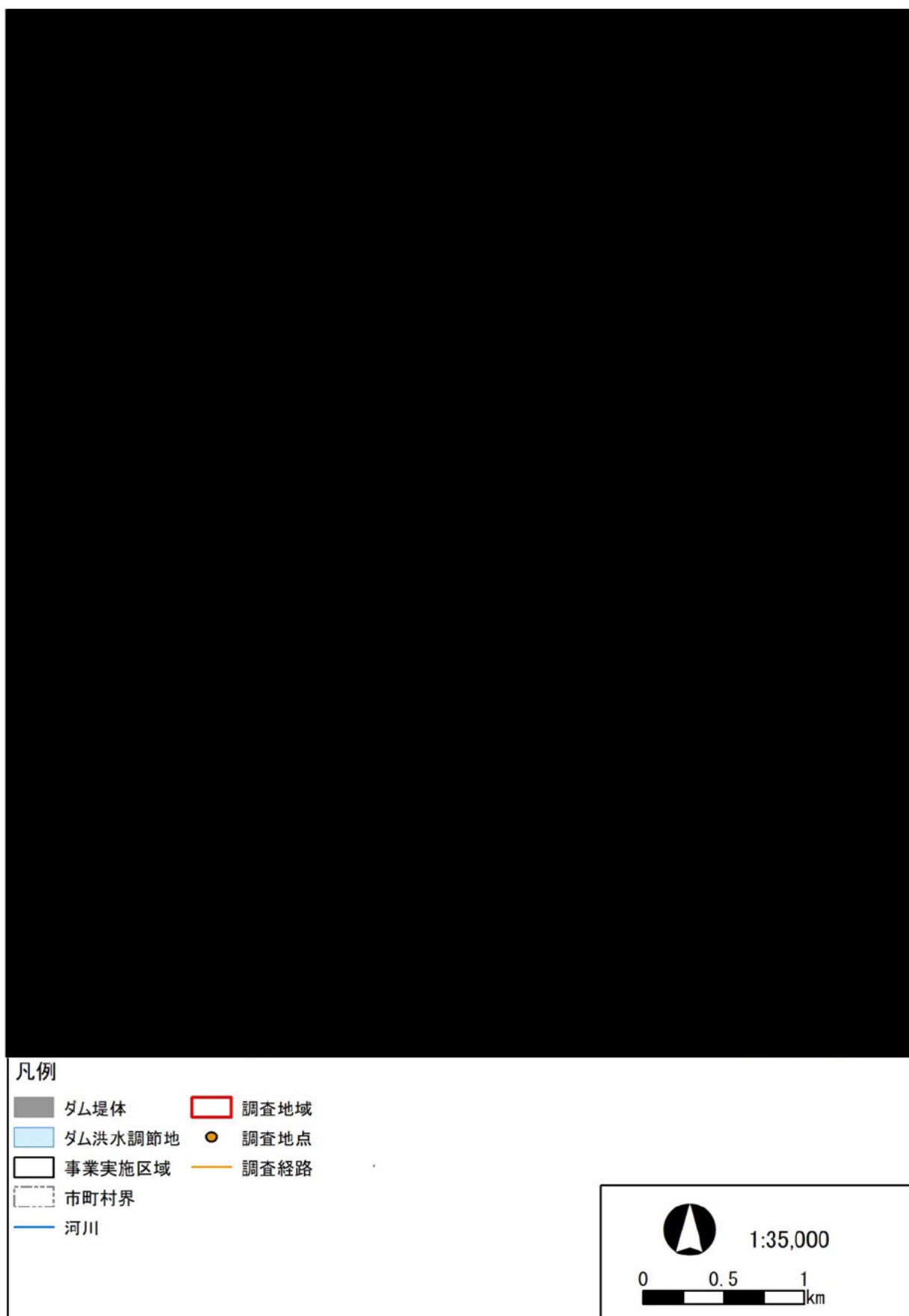
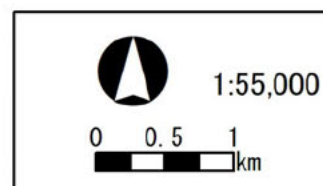


図 5.1.6-11 鳥類調査地域、調査地点及び調査経路(重要な種調査)



凡例

-  ダム堤体
-  調査地域
-  ダム洪水調節地
-  調査地点
-  事業実施区域
-  市町村界
-  河川



注/1. 種の保全の観点から富果地を特定できる可能性のある階層における調査経路は記載していない。

図 5.1.6-12 鳥類調査地域及び調査地点(猛禽類調査)

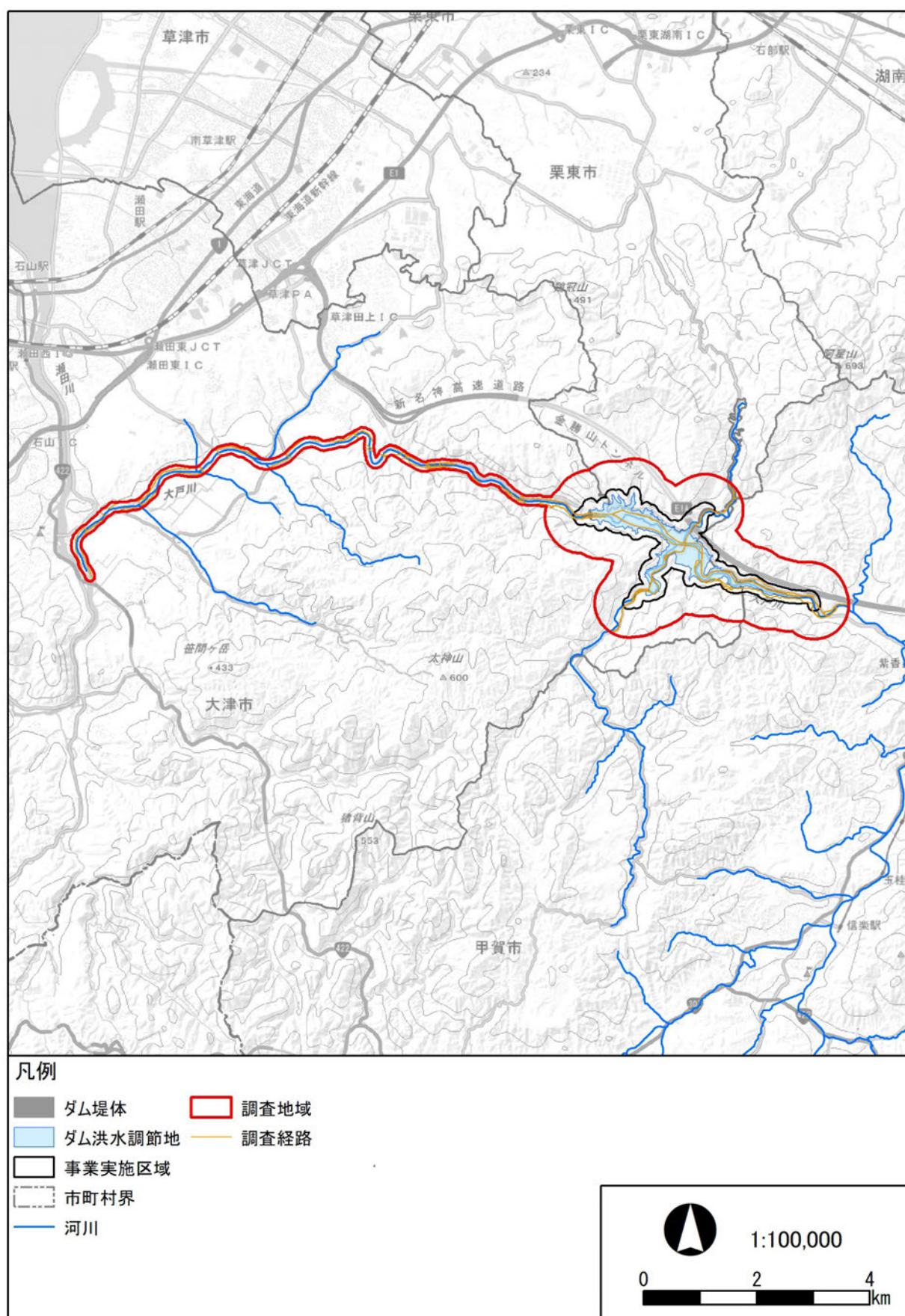


図 5.1.6-13 鳥類調査地域及び調査地点(ヤマセミ・カワセミ・カワガラス調査)

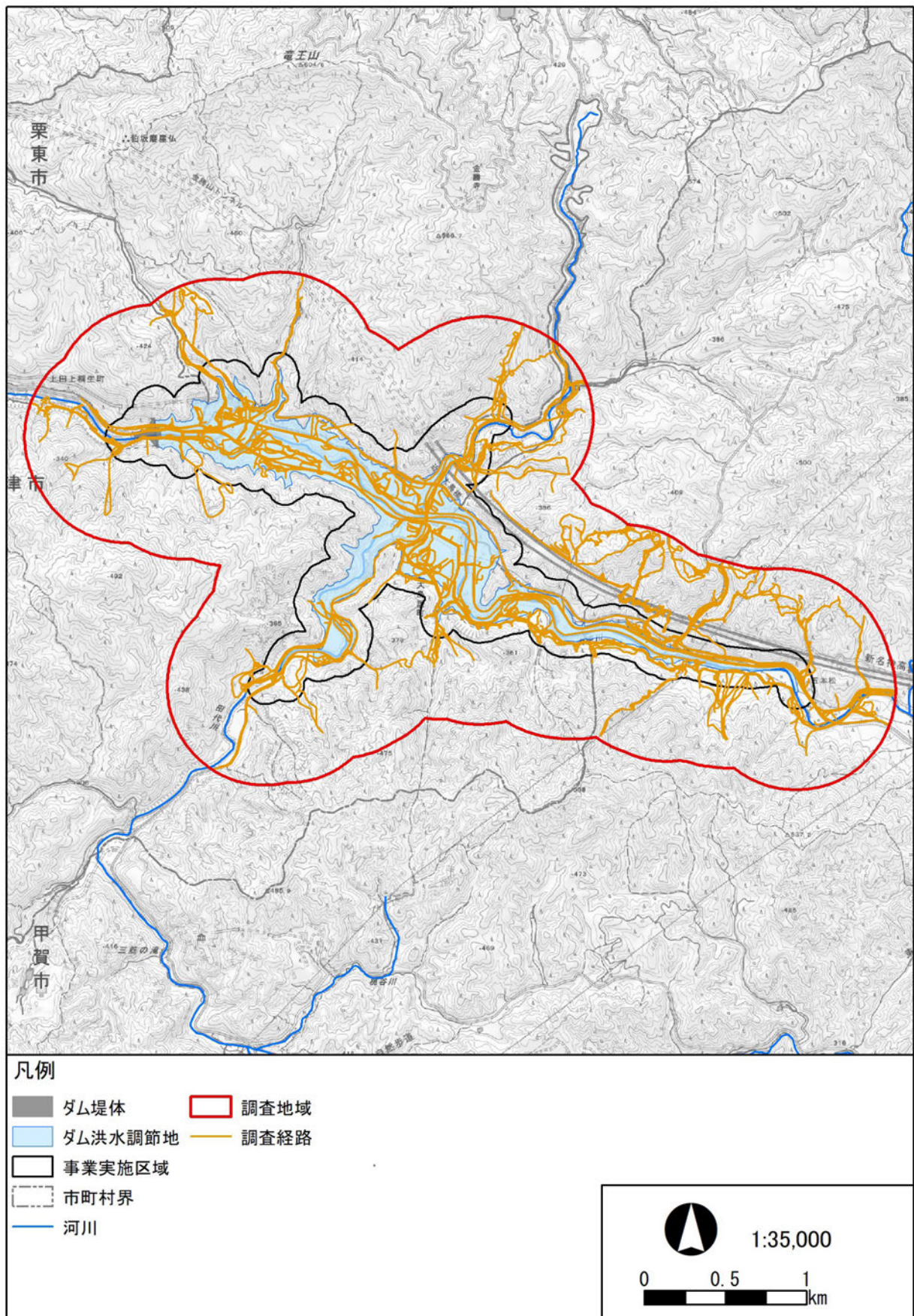


図 5.1.6-14 爬虫類調査地域及び調査経路(重要な種調査)

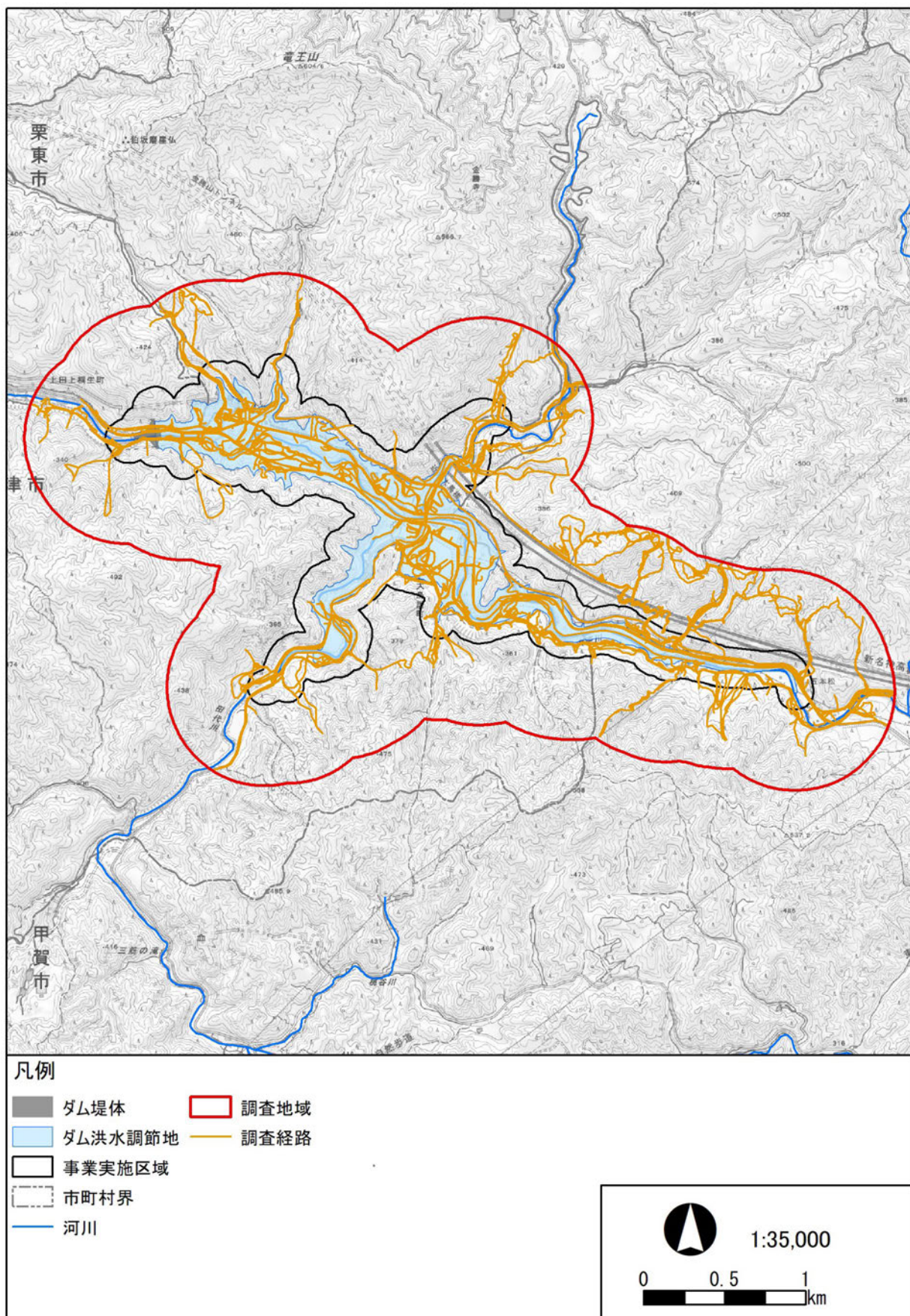


図 5.1.6-15 両生類調査地域及び調査経路(重要な種調査)

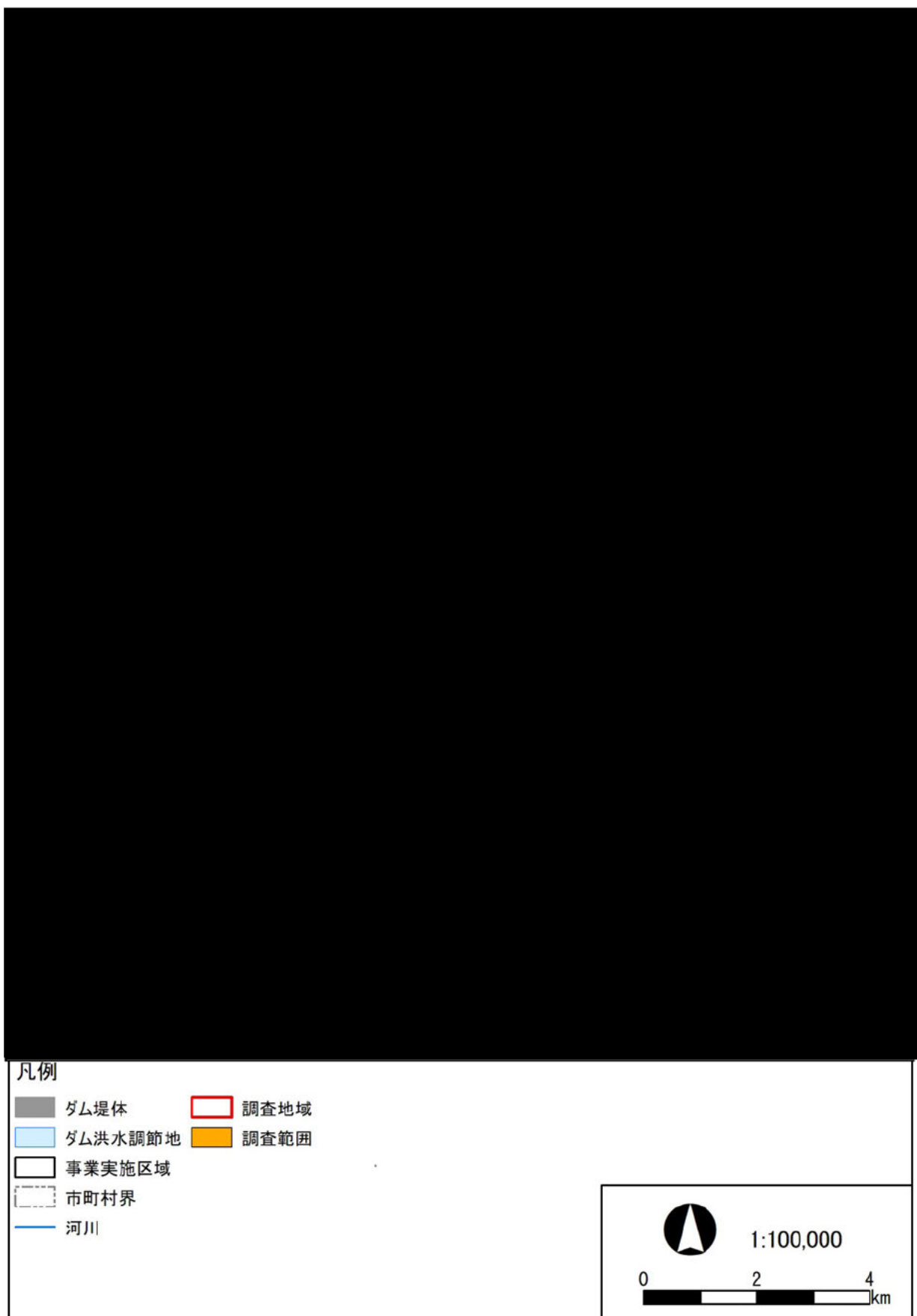


図 5.1.6-16 魚類調査地域及び調査範囲(重要な種調査)

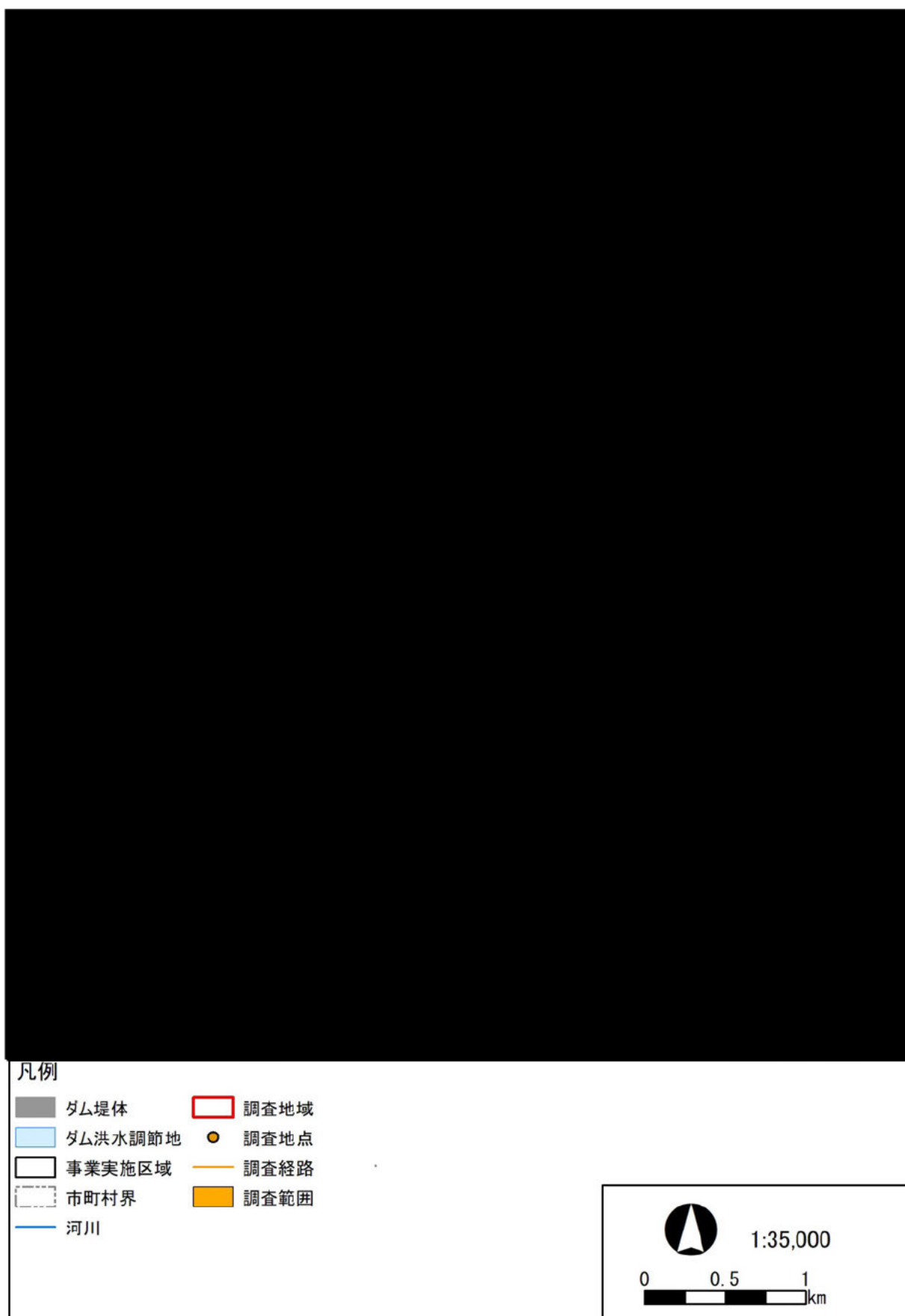


図 5.1.6-17 昆虫類調査地域、調査地点、調査経路及び調査範囲(重要な種調査)

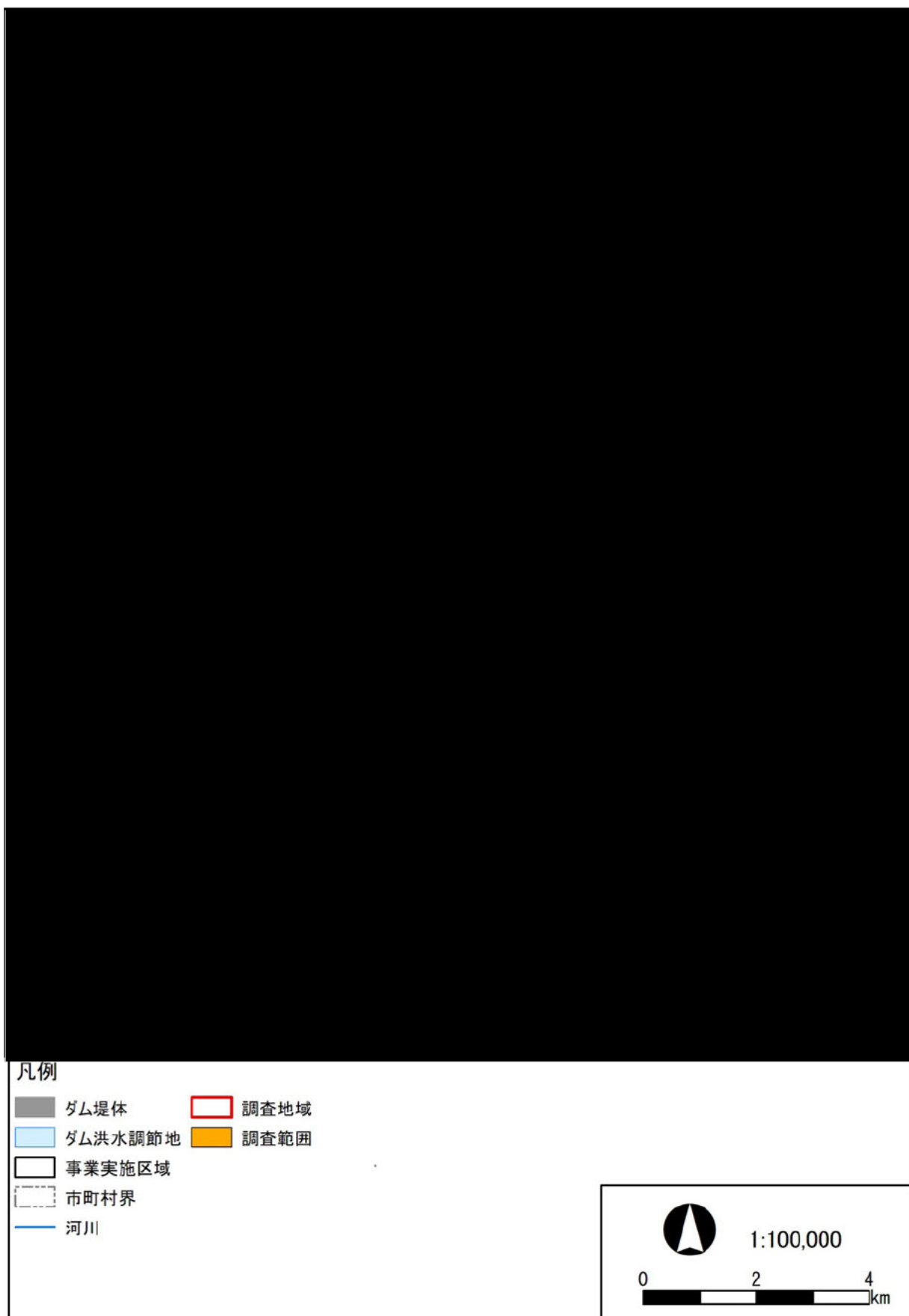


図 5.1.6-18 底生動物調査地域及び調査範囲(重要な種調査)

2) 調査結果等

(a) 哺乳類の重要な種

調査地域では、塚、坑道での確認であり、アズマモグラ、コウベモグラの可能性が考えられるモグラ属を含め、哺乳類の重要な種が 12 種確認された。また、その他エコーロケーションコールの確認であり、周波数が 40～50kHz のヒナコウモリ科（音声での捕捉が難しいとされるテングコウモリ、コテングコウモリを除く）のグループと考えられるヒナコウモリ科、橋梁下での糞の確認であり、橋梁を休息場として利用するグループと考えられるコウモリ目、マツ球果の食痕での確認であり、ニホンリス、ムササビの可能性が考えられるリス科が確認された。

表 5.1.6-28 哺乳類の重要な種の確認状況

No.	記号 ^{注)}	種名	確認した調査方法
1	a	ジネズミ	目撃法、フィールドサイン法
2	b	モグラ属	目撃法、フィールドサイン法
3	c	キクガシラコウモリ	目撃法、バットディテクター、ハーブトラップ
4	d	モモジロコウモリ	目撃法、バットディテクター、ハーブトラップ
5	e	テングコウモリ	目撃法、バットディテクター、ハーブトラップ
-	f	ヒナコウモリ科	目撃法、バットディテクター、ハーブトラップ
-	g	コウモリ目	目撃法、バットディテクター、ハーブトラップ
6	h	ニホンザル	目撃法、フィールドサイン法
7	i	ノウサギ	目撃法、フィールドサイン法
8	j	ニホンリス	目撃法、フィールドサイン法
9	k	ムササビ	目撃法、フィールドサイン法
-	l	リス科	目撃法、フィールドサイン法
10	m	ヒメネズミ	目撃法、フィールドサイン法、トラップ法
11	n	カヤネズミ	目撃法、フィールドサイン法、トラップ法
12	o	アナグマ	目撃法、フィールドサイン法、自動撮影カメラ

注) 記号欄に示す a～o は、以降に示す重要な種の種ごとの現地調査結果等の項目に対応している。

a) ジネズミ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ジネズミは、日本では、本州、四国、九州、見島、隠岐諸島、佐渡、伊豆諸島、種子島、屋久島、トカラ列島に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、大津市に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

大型で体サイズは変異に富み、大型の北海道産のほか、本州以南のものでは一般に南方のものほど大型である。^{哺 2)}背面は暗赤褐色または暗褐色、腹面は淡色または痰灰褐色。

^{哺 1)}頭同長 61～84mm、尾長 30～60mm、後足長 11.5～15mm、体重 5～12.5g である。^{哺 1)}低地の河畔、河川敷、低山林の低木林などに生息し、昆虫類、クモ類などを食べる。^{哺 1)}雌は春から秋に 1～5 頭の仔を産む。^{哺 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-29 及び図 5.1.6-20 に示す。

現地調査では、1 地点で、目撃法、フィールドサイン法により成体が確認された。

確認された地点は、舗装路上の 1 地点であった。確認時期は令和 5 年 1 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-29 ジネズミの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月に、舗装路上の 1 地点で、死体を 1 個体確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、舗装路上であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、低地の河畔、河川敷、低山林の低木林などに生息し、昆虫類、クモ類などを食べる。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、河畔の草地や川辺林、農耕地、周辺の低木林、市街地等に生息し、昆虫類等を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「川辺林」、「低木林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「農耕地（水田）」と推定される。

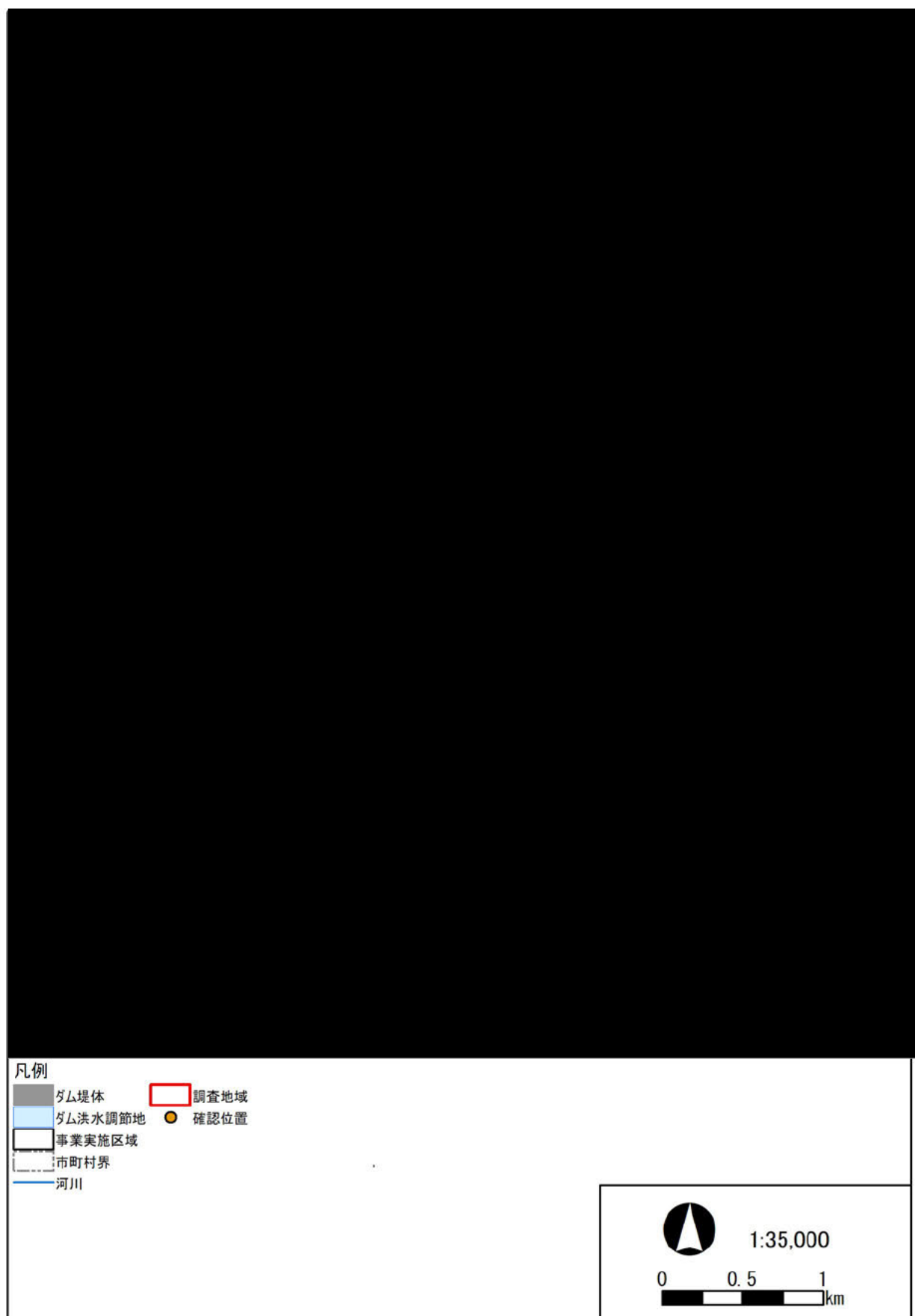


図 5.1.6-20 ジネズミ確認地点

b) モグラ属

塚、坑道での確認であり、アズマモグラ、コウベモグラの可能性が考えられるため、本書ではモグラ属とした。本書で取り扱う重要種としてはアズマモグラが該当するため、重要性及び生態については、アズマモグラの情報を記載する。

(i) 重要性

【アズマモグラ】

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

アズマモグラは、日本では、本州（中部以北、京都府、紀伊半島、広島県）、四国（剣山）に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、彦根市に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

【アズマモグラ】

中型のモグラであるが体のサイズには変異が多い。^{哺 1)}コウベモグラと異なる点は、上顎切歯の配列が浅いV字型になることである。^{哺 1)}頭胴長 121～159mm、尾長 14～22mm、後足長 16～21.5mm、体重 48～127g である。^{哺 1)}低地の草原から農耕地、森林まで分布する。^{哺 1)}昆虫類とミミズ類を主に捕食するがヒル類や植物種子なども食べる。^{哺 1)}主に春に繁殖するが秋にもする場合がある。^{哺 1)}産子数は2～6頭、寿命は約3年である。^{哺 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-30 及び図 5.1.6-21 に示す。

現地調査では、18 地点で、目撃法、フィールドサイン法により塚や坑道が確認された。確認された地点は、樹林や草地等であった。確認時期は令和5年1月～2月、4月～5月及び7月～10月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-30 モグラ属の確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年1月～2月、4月～5月及び7月～10月に、樹林や草地等の18地点で、塚や坑道を計18個体確認。	18	18

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や草地等であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、低地の草原から農耕地、森林まで分布する。昆虫類とミミズ類を主に捕食するがヒル類や植物種子なども食べる。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、河川、湖の水際部や水田周辺の草地に生息し、周辺の草本類の種子や昆虫類を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「川辺林」、「その他植林」、「低木林」、「竹林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「農耕地（水田）」と推定される。

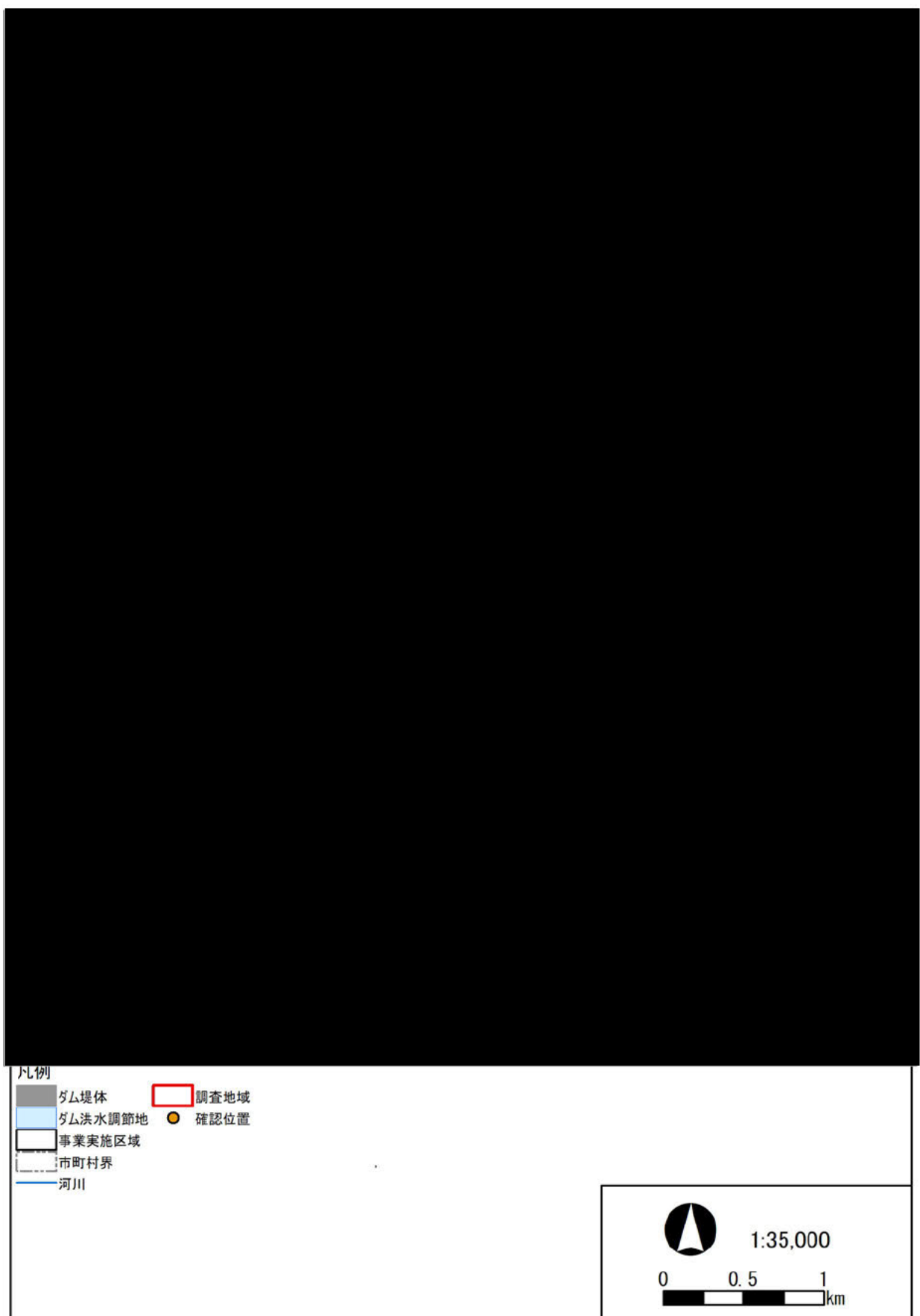


図 5.1.6-21 モグラ属確認地点

c) キクガシラコウモリ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

キクガシラコウモリは、日本では、北海道、本州、四国、九州に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、志賀町、朽木村、マキノ町、余呉町、木之本町、高月町、浅井町、多賀町、永源寺町に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

前腕長 52-65mm、頭胴長 55-82mm、尾長 28-45mm、耳介長 19-28mm、下腿長 22-27mm、体重 16-35g。^{哺 3)} 日本産キクガシラコウモリ科の中の最大種。^{哺 3)} 洞穴性で、自然洞の他、廃坑、導排水路、ダム関連坑等人工洞をねぐらとするが、しばしば、人家等、建築物もねぐらとする。^{哺 1)} 主として林内や林縁でチョウ目、コウチュウ目、ハエ目などの夜行性飛翔昆虫類を捕食するが、しばしば地上や樹幹に静止した個体も捕らえる。^{哺 3)} 秋の交尾期を除き、雌雄それぞれに分かれる傾向が強い。^{哺 1)} 夏季に限られたねぐらで数十から200 頭ほどの妊娠雌を中心に雄が集合して出産・育児集団を形成する。^{哺 1)} 冬眠期(11～4 月頃) には分散する傾向が強いが、洞内の気温が低下したり、温度変化が大きい時には数百頭におよぶ群塊を形成することもある。^{哺 3)} 冬眠中も、洞穴内でしばしば休眠中のガを捕食し、時に洞穴外での採餌も行う。^{哺 3)} 伊吹山系、水口丘陵、湖南地域等、生息未確認地域が多い。^{哺 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-31 及び図 5.1.6-22 に示す。

現地調査では、11 地点で、目撃法、バットディテクター及びハープトラップを用いたコウモリ類調査により成獣やエコロケーションコール等が確認された。確認された地点は、XXXXXXXXXXや樹林、草地上空等であった。確認時期は令和 5 年 5 月及び 8 月～9 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-31 キクガシラコウモリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月及び 8 月～9 月に、 XXXXXXXXXX や樹林、草地上空等の 11 地点で、成獣やエコロケーションコール等を計 14 個体確認。	11	14

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、 や樹林、草地上空等であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、自然洞の他、廃坑、導排水路、ダム関連坑等人工洞をねぐらとするが、しばしば、人家等、建築物もねぐらとする。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、自然洞や、廃坑、導排水路等の人工洞をねぐらとし、河川、森林の上空で昆虫類を餌として捕食していると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」と推定される。

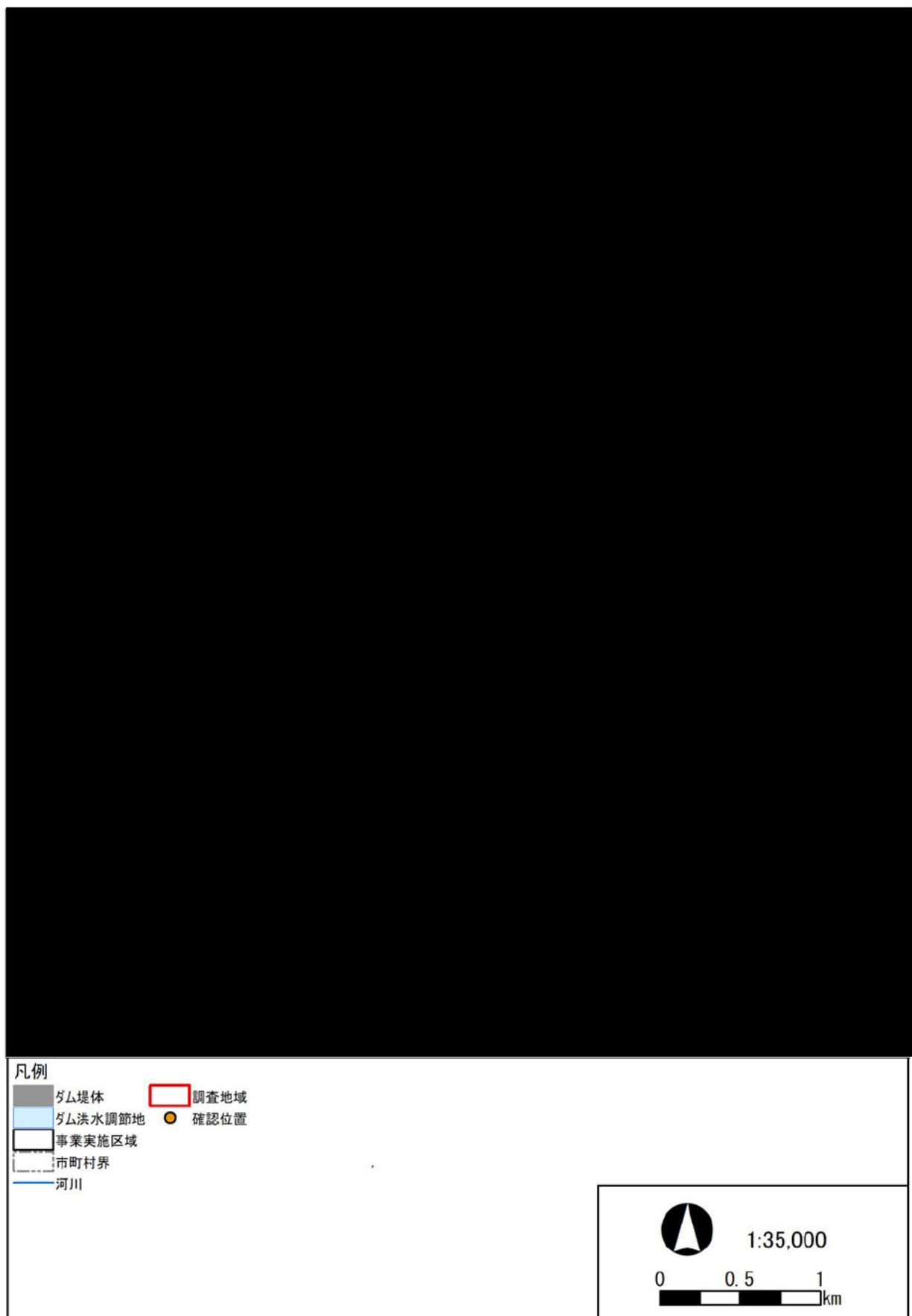


図 5.1.6-22 キクガシラコウモリ確認地点

d) モモジロコウモリ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危惧種

モモジロコウモリは、日本では、北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬、壱岐、福江島、種子島、徳之島に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、大津市、朽木村、志賀町、余呉町、木之本町、高月町、浅井町、多賀町、永源寺町に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

洞穴をねぐらにする洞穴棲コウモリで、自然洞の他、廃坑、導排水路、ダム関連坑等人工洞をねぐらとする。^{哺 1)} 森林内でも採食するが、池沼、河川の水面上をおもな採餌空間とし、主としてハエ目、チョウ目、トビケラ目を捕食する。^{哺 4)} 初夏から夏の出産期に特定のねぐらで雌雄集まって出産・育児集団を形成する。^{哺 1)} 洞内では集団を形成するが、しばしば割れ目や裂け目等に潜り込む。^{哺 1)} 河原の石の下に潜り込んで休息している例も記録されている。^{哺 1)} 伊吹山系、比良山系、水口丘陵、湖南地域等は生息未確認地域が多い。^{哺 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-32 及び図 5.1.6-23 に示す。

現地調査では、12 地点で、目撃法、バットディテクター及びハーブトラップを用いたコウモリ類調査により成獣が確認された。確認された地点は、XXXXXXXXXXであった。確認時期は令和 5 年 5 月及び 9 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-32 モモジロコウモリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月及び 9 月に、 XXXXXXXXXX の 12 地点で、成獣を計 36 個体確認。	12	36

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、XXXXXXXXXXであった。

既存の生態情報によれば、「本種は、自然洞の他、廃坑、導排水路、ダム関連坑等人工洞をねぐらとする。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、自然洞や、廃坑、導排水路等の人工洞をねぐらとし、河川、丘陵地、森林の上空で昆虫類を餌として捕食していると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」と推定される。

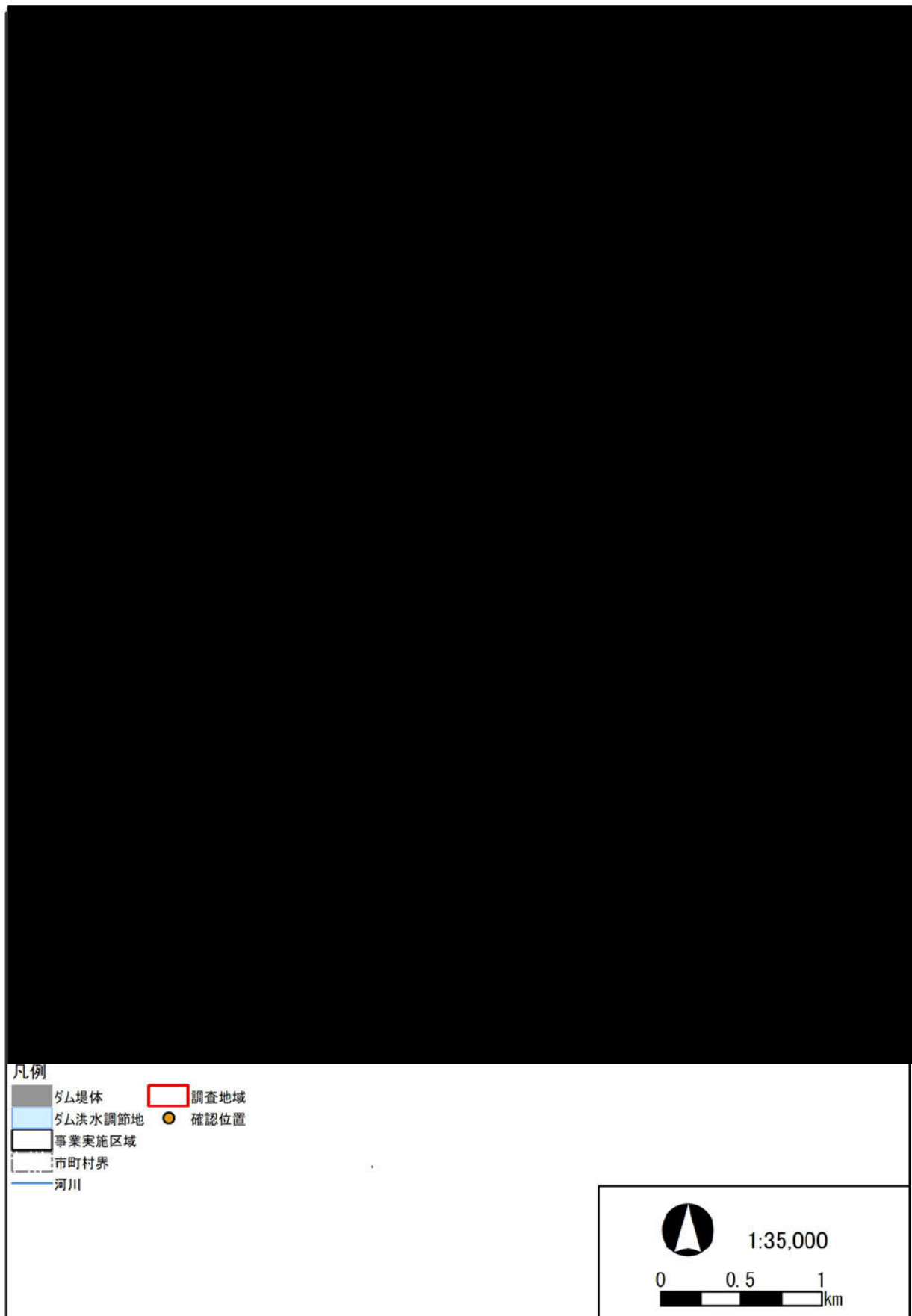


図 5.1.6-23 モモジロコウモリ確認地点

e) テングコウモリ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：指定希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危惧種

テングコウモリは、日本では、北海道、本州、四国、九州に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、志賀町、マキノ町、山東町、多賀町、日野町、長浜市、余呉町に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

冬から初夏にかけて、自然洞の他、廃坑、導排水路等人工洞をねぐらとして利用する。

^{哺 1)} 枯れ葉など不安定な環境も利用し、頻繁にねぐらを変えられ^{哺 4)} る。隧道や廃坑、自然洞窟では、秋季から春季にかけて群塊を形成し、10 個体以上の個体が集まる^{哺 4)} ことがある。^{哺 4)} 3 月から 5 月にかけてその数は最大となり、160 個体以上が観察された例もある。^{哺 4)} 7 月上旬に出産し、1 産 1～3 子。^{哺 4)} 墜落缶による捕獲記録や地表近くでの飛翔行動の観察例に加え、フンから後翅の退化したオサムシ類の残漬が確認されていることから、地表でも採食を行うと考えられる。^{哺 4)} さらにクモ類のほか、チョウ目幼虫、非飛翔性のキリギリス類、トンボ類およびハナアブ類など昼行性昆虫の捕食例も確認されており、樹上などで静止した昆虫も捕食すると考えられる。^{哺 4)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-33 及び図 5.1.6-24 に示す。

現地調査では、1 地点で、目撃法、バットディテクター及びハーブトラップを用いたコウモリ類調査により成獣が確認された。確認された地点は、XXXXXXXXXXであった。確認時期は令和 5 年 5 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-33 テングコウモリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月に、 XXXXXXXXXX の 1 地点で、成獣を 1 個体確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、XXXXXXXXXXであった。

既存の生態情報によれば、「本種は、自然洞の他、廃坑、導排水路等人工洞をねぐらとして利用する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、自然洞や、廃坑、導排水路等の人工洞をねぐらとし、主に森林内の下層で昆虫類を餌として捕食していると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「低木林」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」と推定される。

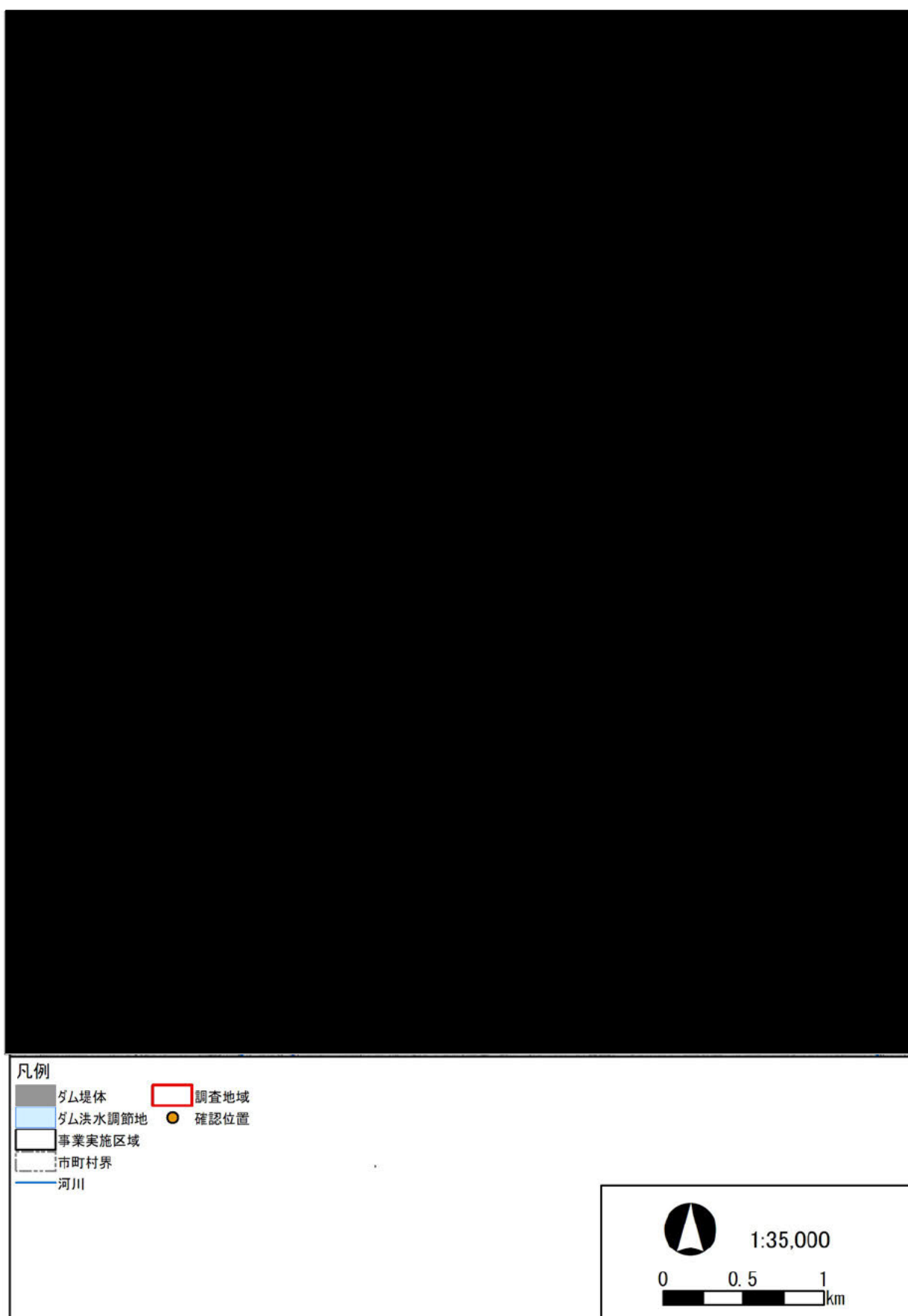


図 5.1.6-24 テングコウモリ確認地点

f) ヒナコウモリ科

エコーロケーションコールの確認であり、周波数が 40～50kHz のヒナコウモリ科（音声での捕捉が難しいとされるテングコウモリ、コテングコウモリを除く）のグループと考えられ、カグヤコウモリ、モモジロコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、ユビナガコウモリの可能性があるため、本書ではヒナコウモリ科とした。

重要性及び生態については、モモジロコウモリは「d) モモジロコウモリ」に示したとおりである。

(i) 重要性

【カグヤコウモリ】

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

カグヤコウモリは、日本では北海道、本州(岐阜県、石川県以北)に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、余呉町に分布する。^{哺 1)}

【クロホオヒゲコウモリ】

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧Ⅱ類

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

クロホオヒゲコウモリは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、朽木村に分布する。^{哺 1)}

【ノレンコウモリ】

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧Ⅱ類

ノレンコウモリは、日本では北海道、本州、四国、九州(永良部島)に分布する。^{哺 1)}

【モリアブラコウモリ】

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧Ⅱ類

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

モリアブラコウモリは、日本では本州、四国に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、余呉町に分布する。^{哺 1)}

【ユビナガコウモリ】

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危惧種

ユビナガコウモリは、日本では本州（愛知県を除く）、四国、九州、佐渡、対馬、隠岐、福江島、屋久島に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、朽木村、余呉町、木之本町、高月町、多賀町に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

【カグヤコウモリ】

日中ねぐらは、樹洞、洞穴、隧道、橋の隙間、建物、コウモリ用巣箱が知られている。

^{哺 4)} ナイトルーストは建物の壁で観察されている。^{哺 4)} 夏の間、オスとメスは別の場所で過ごす。^{哺 4)} 出産は北海道では6月中旬から7月中旬に見られ、それ以外の地域では7月中旬から8月中旬までと考えられている。^{哺 4)} 1産1子。^{哺 4)} 昼間は、大径木の樹洞を隠れ家とし、夕方に隠れ家から飛び出して、飛翔する昆虫類を採餌する。^{哺 1)} 昆虫類が飛ばない冬期には冬眠する。^{哺 1)} 家屋内での繁殖も確認されている。^{哺 1)}

【クロホオヒゲコウモリ】

小型のホオヒゲコウモリ類であり、前腕長 30～34mm、頭胴長 38～44mm、尾長 33～40mm、黒っぽい体毛を持ち、刺毛の先端は銀色の金属光沢を帯びる。^{哺 5)} 常緑広葉樹・落葉広葉樹の自然林に生息する。^{哺 5)} 低標高地の自然林に生息する。^{哺 5)} 樹洞を昼間のねぐらとすると思われるが、洞窟内でも見つかることもある。^{哺 5)} 冬には冬眠する。^{哺 5)} 出産は7月中旬頃であり、1産1子である。^{哺 4)}

【ノレンコウモリ】

洞穴性のコウモリで自然洞窟や人工洞（廃坑、横坑、防空壕）、隧道の天井の「くぼみ」を利用するが、まれに家屋内や樹洞も利用する。^{哺 1)} 日没後に出洞して採餌、日の出前に洞穴に戻る。^{哺 1)} 採餌は森林中のおもに低層で行われ、飛翔している昆虫類を捕食しているようである。^{哺 1)} 初夏に1仔を出産。^{哺 1)} 生後30日で飛翔可能になり独立する。^{哺 1)} 冬眠する。^{哺 1)}

【モリアブラコウモリ】

前腕長 32～34mm、頭胴長 43～53mm、尾長 34～34mm、体重 5～9g。^{哺 5)} 翼手（飛膜）、体ともに黒っぽいアブラコウモリ類である。^{哺 5)} 生息地は常緑広葉樹・落葉広葉樹の自然林から知られる。^{哺 5)} 樹洞を昼間のねぐらとしていていると思われるが、繁殖集団をはじめとするねぐらは一度も見つかっていない。^{哺 5)} 冬には冬眠するものと思われる。^{哺 5)} 他は不明。

^{哺 5)}

【ユビナガコウモリ】

洞穴性のコウモリで、自然洞窟のほか、廃坑、ダム工事などの横坑、防空壕などの人工洞穴、隧道、地下水路を利用する。^{哺 4)}初夏から夏の出産期に特定のねぐらで数万頭の出産・育児集団を形成する。^{哺 1)}採食場所として林冠上、河川、草原などの開けた広い空間を利用し、おもにチョウ目、ハエ目、カゲロウ目、コウチュウ目昆虫を捕食する。^{哺 4)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-34 及び図 5.1.6-25 に示す。

現地調査では、45 地点で、目撃法、バットディテクター及びハーブトラップを用いたコウモリ類調査により成獣の飛翔やエコロケーションコール等が確認された。確認された地点は、樹林内及び上空、草地や河川上空等であった。確認時期は令和 5 年 5 月及び 8 月～9 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-34 ヒナコウモリ科の確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月及び 8 月～9 月に、樹林内及び上空、草地や河川上空等の 45 地点で、成獣の飛翔やエコロケーションコール等を計 60 個体確認。	45	60

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内及び上空、草地や河川上空等であった。

既存の生態情報によれば、「樹洞性または洞穴性のコウモリで、樹洞を利用する種や、自然洞窟や人工洞（廃坑、横坑、防空壕）、隧道の天井の「くぼみ」を利用する種がある。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、大径木の樹洞、自然洞や、廃坑、導排水路等の人工洞をねぐらとし、主に森林内の下層及び上空、草地や河川の上空等で昆虫類を餌として捕食していると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」、「竹林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「自然裸地」、「人工裸地」、「市街地等」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」と推定される。

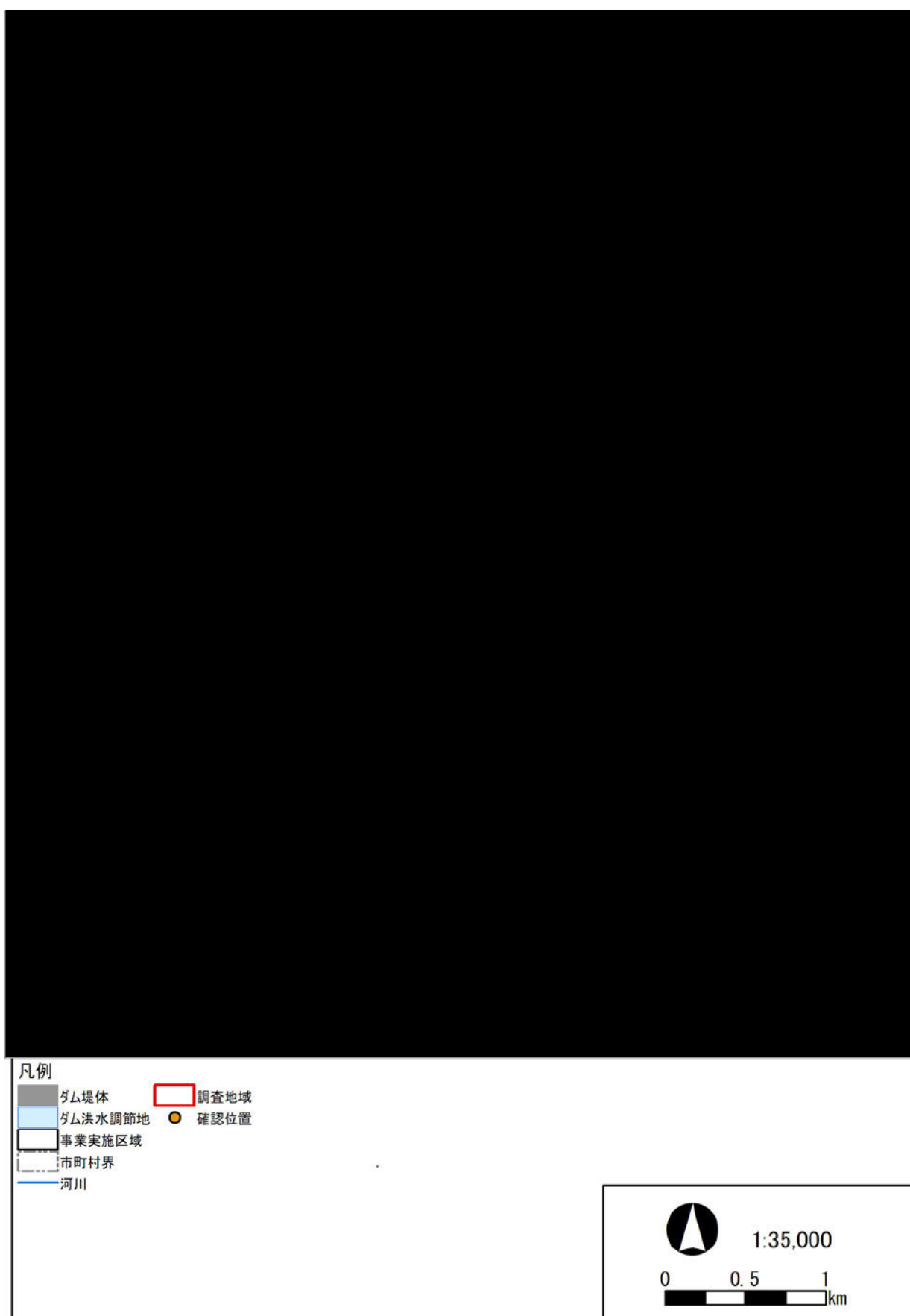


図 5.1.6-25 ヒナコウモリ科確認地点

g) コウモリ目

橋梁下での糞の確認であり、橋梁を休息場として利用するグループと考えられ、コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ、カグヤコウモリ、モモジロコウモリ、ノレンコウモリ、ヒナコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリの可能性があるため、本書ではコウモリ目とした。

重要性及び生態については、キクガシラコウモリは「c) キクガシラコウモリ」、モモジロコウモリは「d) モモジロコウモリ」、テングコウモリは「e) テングコウモリ」に示したとおりである。また、カグヤコウモリ、ノレンコウモリ及びユビナガコウモリは「f) ヒナコウモリ科」に示したとおりである。

(i) 重要性

【コキクガシラコウモリ】

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危惧種

コキクガシラコウモリは、日本では北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、佐渡、八丈島、対馬、壱岐、福江島、屋久島、種子島、口永良部諸島、奄美諸島に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、志賀町、朽木村、余呉町、木之本町、高月町、長浜市、彦根市、多賀町、米原町、永源寺町に分布する。^{哺 1)}

【ヒナコウモリ】

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：指定希少野生動植物種

ヒナコウモリは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、比叡山、余呉町、多賀町に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

【コキクガシラコウモリ】

洞穴をねぐらにする洞穴棲コウモリである。^{哺 1)}自然洞の他、廃坑、導排水路、ダム関連坑等人工洞をねぐらとする。^{哺 1)}秋の交尾期を除き、雌雄それぞれに分かれる傾向が強い。^{哺 1)}夏季に妊娠雌が限られた洞穴に集合して出産・育児集団を形成する。雄は集団を形成して冬眠するが、多くの雌は単独で冬眠する。^{哺 1)}主として森林内で体長7～23mm程度のチョウ目やハエ目などを捕食し、造網性のクモ類も餌となる。^{哺 4)}

【ヒナコウモリ】

樹洞をねぐらにする樹洞棲コウモリである。^{哺 1)}本来は樹洞を昼間の隠れ家にするコウモリであるが、大木が激減し、樹洞が消失したために、家屋を利用せざるをえなくなっていると思われる。^{哺 1)}夕方に隠れ家から飛び出して、飛翔する昆虫類を採餌する。^{哺 6)}昆虫類が飛ばない冬期には冬眠するものと思われるが、どこで冬眠するか不明である。^{哺 6)}初夏にコウモリ類では珍しく 1 回に 2 仔を出産する。^{哺 6)}本種は本来は樹洞を昼間の隠れ家に使っていたと思われるが、樹洞が消失している地域では家屋でも繁殖するのが知られる。^{哺 6)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-35 及び図 5.1.6-26 に示す。

現地調査では、1 地点で、目撃法、バットディテクター及びハーブトラップを用いたコウモリ類調査により糞が確認された。確認された地点は、人工橋梁下裸地であった。確認時期は令和 5 年 5 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-35 コウモリ目の確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月に、 XXXXXXXXXX の 1 地点で、成獣を 1 個体確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、XXXXXXXXXXであった。

既存の生態情報によれば、「樹洞性または洞穴性のコウモリで、樹洞を利用する種や、自然洞窟や人工洞（廃坑、横坑、防空壕）、隧道の天井の「くぼみ」を利用する種がある。日没後に、飛翔している昆虫類を捕食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、大径木の樹洞、自然洞や、廃坑、導排水路等の人工洞をねぐらとし、主に森林内の下層及び上空、草地や河川の上空等で昆虫類を餌として捕食していると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」、「竹林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「自然裸地」、「人工裸地」、「市街地等」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」と推定される。

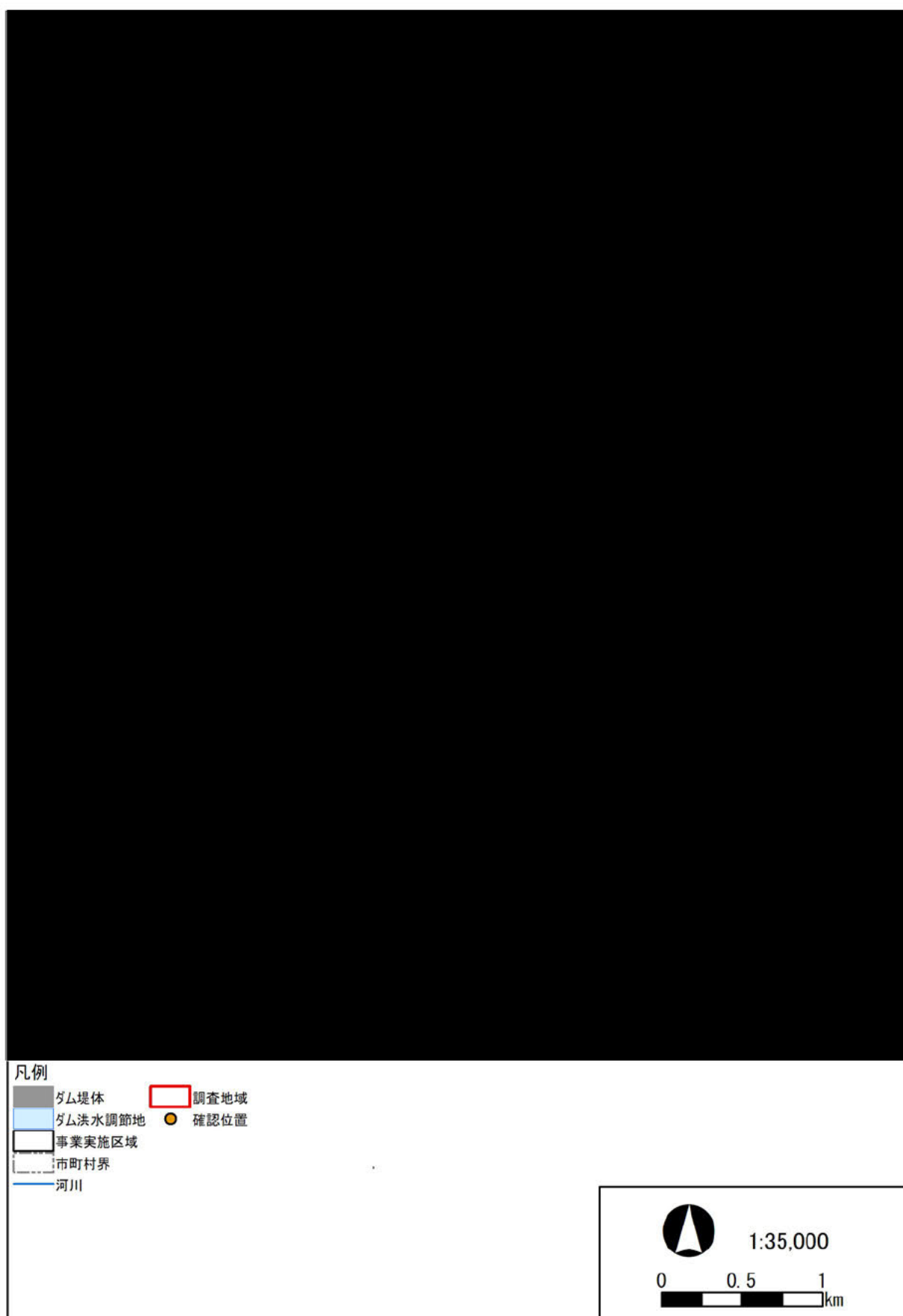


図 5.1.6-26 コウモリ目確認地点

h) ニホンザル

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

ニホンザルは、日本では、本州、四国、九州、屋久島に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、大津市、志賀町、信楽町、甲賀町、甲南町、土山町、日野町、湖南町、愛東町、永源寺町、秦荘町、甲良町、彦根市、多賀町、米原町、近江町、山東町、伊吹町、長浜市、浅井町、高月町、木之本町、余呉町、西浅井町、マキノ町、今津町、新旭町、安曇川町、高島町、朽木村に 126 群の生息が確認されており、湖南地域を除き山地帯に連続的に分布している。^{哺 1)}

(ii) 生態

頭胴長 47～60cm、尾長 7～12cm、体重 8～18g で、雌の方がやや小さい。^{哺 1)}毛は茶褐色～灰褐色で、腹と手足の内側がやや白く、尾は短い。^{哺 1)}植食性であるが、針葉樹の葉はほとんど食べず、常緑広葉樹林と落葉広葉樹林は重要な生息地であり、山地帯を中心に生息する。^{哺 1)}十数頭から百数十頭までの群で一定の遊動域内を移動する。^{哺 1)}遊動域の面積は、個体群の大きさと餌資源量により変化する。^{哺 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-36 及び図 5.1.6-27 に示す。

現地調査では、1 地点で、目撃法、フィールドサイン法により糞が確認された。確認された地点は、河川岩場や舗装路上であった。確認時期は令和 5 年 1 月及び 5 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-36 ニホンザルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月及び 5 月に、河川岩場や舗装路上の 1 地点で、糞を計 1 個体確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、河川岩場や舗装路上であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、植食性であるが、針葉樹の葉はほとんど食べず、常緑広葉樹林と落葉広葉樹林は重要な生息地であり、山地帯を中心に生息する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、落葉広葉樹林や常緑広葉樹林を中心に生息し、主に果実、種子、葉、芽等を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」と推定される。

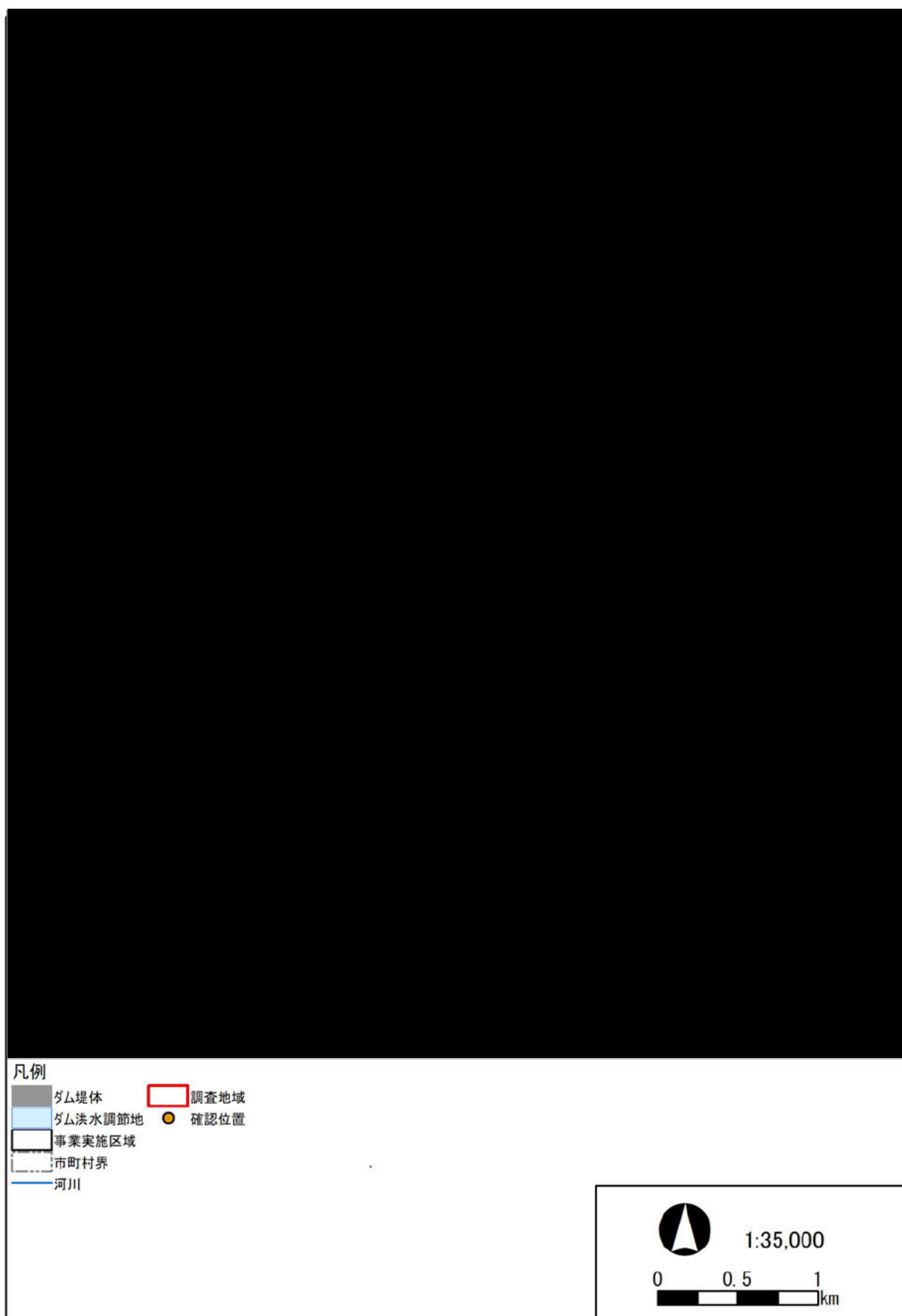


図 5.1.6-27 ニホンザル確認地点

i) ノウサギ

(i) 重要性

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ノウサギは、日本では、本州、四国、九州、佐渡、隠岐諸島（島後、西ノ島）、淡路島、小豆島、五島列島（福江島、中通島）などに分布する。^{哺 2)}

(ii) 生態

低地から高山帯までの森林や草原などの様々な環境に見られるが、低山から山地帯に多い。^{哺 2)}植物食性で、多くの植物の葉、芽、枝、樹皮を採食する。^{哺 2)}早春から秋まで連続して数回の出産を繰り返す。^{哺 2)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-37 及び図 5.1.6-28 に示す。

現地調査では、18 地点で、目撃法、フィールドサイン法により糞や足跡、幼獣等が確認された。確認された地点は、樹林内や草地等であった。確認時期は令和 5 年 1 月～2 月、4 月及び 7 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-37 ノウサギの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月～2 月、4 月及び 7 月に、樹林内や草地等の 18 地点で、糞や足跡、幼獣等を計 21 個体確認。	18	21

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や草地等であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、低地から高山帯までの森林や草原などの様々な環境に見られるが、低山から山地帯に多い。植物食性で、多くの植物の葉、芽、枝、樹皮を採食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、森林内や草地に生息し、植物の葉、芽、枝、樹皮を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」、「草地」、「草地（高茎草地）」と推定される。

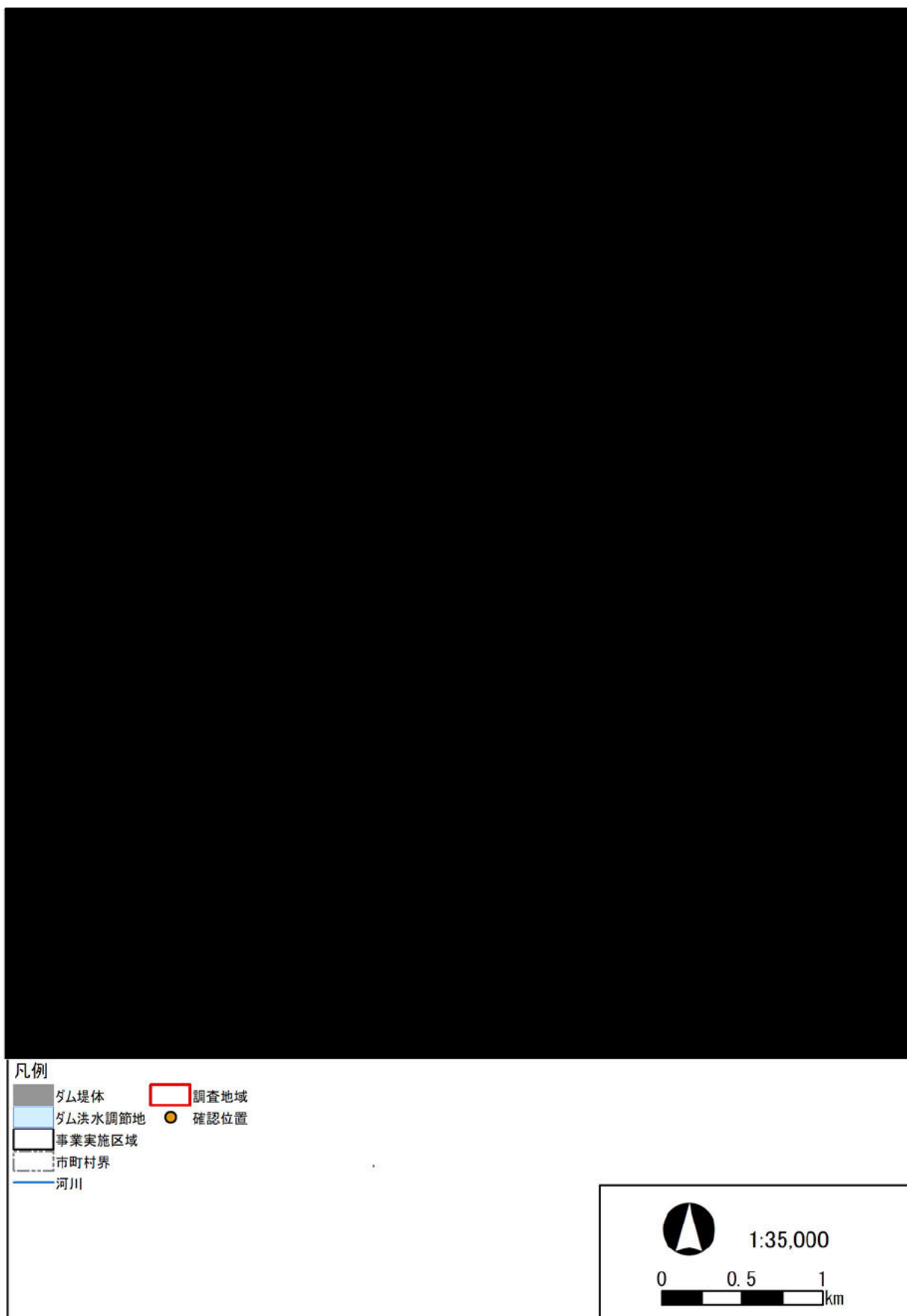


図 5.1.6-28 ノウサギ確認地点

j) ニホンリス

(i) 重要性

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ニホンリスは、日本固有種で、本州、四国、九州、淡路島に分布する。^{哺 2)} 本州の中国地方以西には少なく、九州では近年の確実な記録がない。^{哺 2)} 淡路島でも最近の生息確認がない。^{哺 2)}

(ii) 生態

平野部から亜高山帯までの森林に生息するが、低山帯のマツ林に多い。^{哺 2)} 昼行性でもに樹上で活動する。^{哺 2)} ほぼ植物食性で花、芽、種子、果実、キノコ類、昆虫その他の節足動物も少し食べる。^{哺 2)} 初春から秋まで繁殖し、出産回数は年 1～2 回、春から秋に 2～6 頭を産む。^{哺 2)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-38 及び図 5.1.6-29 に示す。

現地調査では、56 地点で、目撃法、フィールドサイン法により食痕や成獣等が確認された。確認された地点は、樹林内及び周辺の道上等であった。確認時期は令和 5 年 1 月～2 月、4 月～5 月、7 月及び 9 月～10 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-38 ニホンリスの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月～2 月、4 月～5 月、7 月及び 9 月～10 月に、樹林内及び周辺の道上等の 56 地点で、マツ球果の食痕や自動撮影による成獣等を計 62 個体確認。	56	62

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内及び周辺の道上等であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、平野部から亜高山帯までの森林に生息するが、低山帯のマツ林に多い。昼行性でもに樹上で活動する。ほぼ植物食性で花、芽、種子、果実、キノコ類、昆虫その他の節足動物も少し食べる。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、森林内に生息し、主に樹上等で花、芽、種子、果実、キノコ類、昆虫等を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」と推定される。

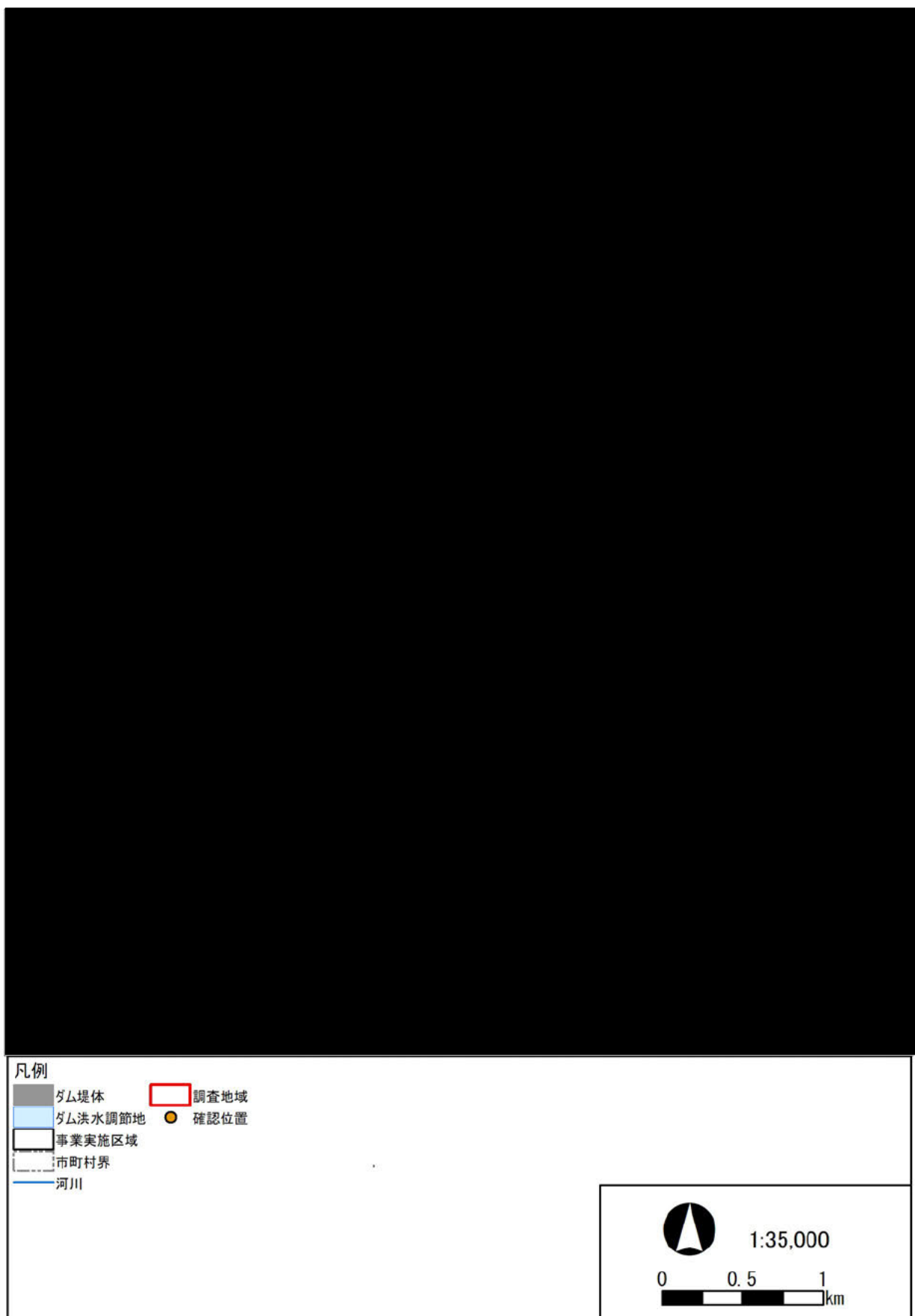


図 5.1.6-29 ニホンリス確認地点

k) ムササビ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

ムササビは、日本では、本州、四国、九州に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、朽木村、今津町、マキノ町、西浅井町、余呉町、木之本町、高月町、湖北町、浅井町、伊吹町、米原町、彦根市、多賀町、永源寺町、日野町、大津市に広く分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

わが国で飛膜を持つ哺乳類で最大型。^{哺 1)}首から前肢、後肢、尾の間に飛膜が発達し滑空する。^{哺 1)}毛は褐色だが腹面は白い。^{哺 1)}頭胴長 340～480mm、後足長 61～71mm、尾長 280～410mm、体重 700～1300g である。^{哺 1)}夜間に樹間を滑空し樹を移動しながらブナ科、マツ科など 21 科の樹の芽、葉、花、種子果実などを食べる。^{哺 1)}日中は樹洞の巣などで休息する。^{哺 1)}雌はなわばりを持ち、交尾期は冬と 5 月から 6 月の 2 回、妊娠期間 74 日。^{哺 1)}低地から亜高山帯までの常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、常緑針葉樹林などの天然林および発達した二次林に生息する。^{哺 1)}低地ではこれらの植生が発達した社寺林に多い。^{哺 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-39 及び図 5.1.6-30 に示す。

現地調査では、23 地点で、目撃法、フィールドサイン法により糞や食痕が確認された。確認された地点は、樹林内であった。確認時期は令和 5 年 1 月～2 月、4 月～5 月、7 月及び 9 月～10 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-39 ムササビの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月～2 月、4 月～5 月、7 月及び 9 月～10 月に、樹林内の 23 地点で、糞やマツ球果の食痕を計 23 個体確認。	23	23

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、低地から亜高山帯までの常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、常緑針葉樹林などの天然林および発達した二次林に生息する。低地ではこれらの植生が発達した社寺林に多い。夜間に樹間を滑空し樹を移動しながら樹の芽、葉、花、種子、果実などを食べる。日中は樹洞の巣などで休息する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、森林に生息し、林内の樹の芽、葉、花、種子、果実等を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」と推定される。

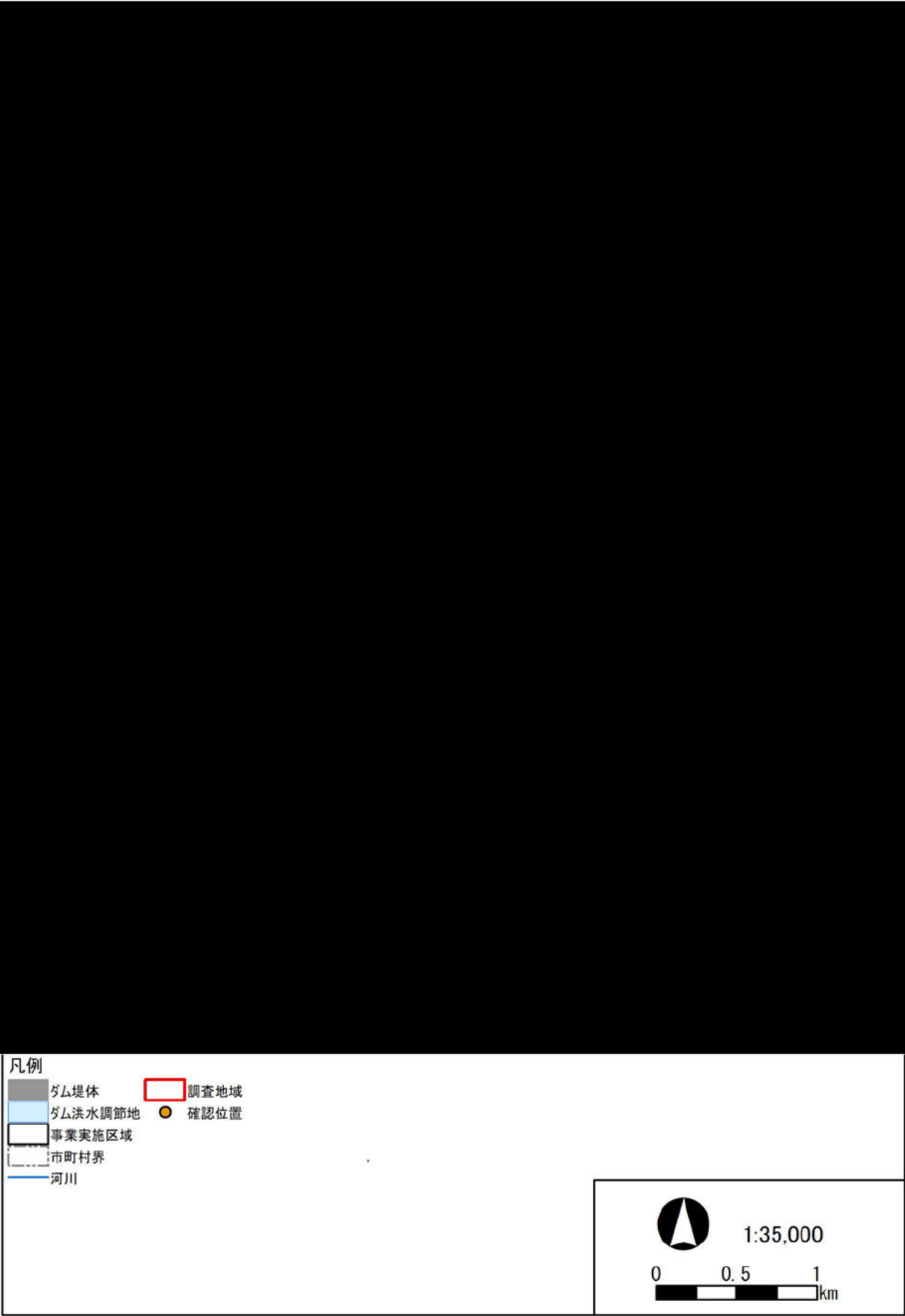


図 5.1.6-30 ムササビ確認地点

1) リス科

マツ球果の食痕での確認であり、ニホンリス、ムササビの可能性が考えられるため本書ではリス科とした。

重要性及び生態については、ニホンリスは「j) ニホンリス」に、ムササビは「k) ムササビ」に示したとおりである。

(i) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-40 及び図 5.1.6-31 に示す。

現地調査では、12 地点で、目撃法、フィールドサイン法により食痕が確認された。確認された地点は、樹林内であった。確認時期は令和 5 年 1 月、4 月～5 月、7 月及び 10 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-40 リス科の確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月、4 月～5 月、7 月及び 10 月に、樹林内の 12 地点で、マツ球果の食痕を計 17 個体確認。	12	17

(ii) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、低地から亜高山帯までの常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、常緑針葉樹林などの天然林および発達した二次林に生息する。おもに樹上で活動し、ほぼ植物食性で花、芽、種子、果実等を食べる。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、森林に生息し、林内で主に花、芽、種子、果実等を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」と推定される。

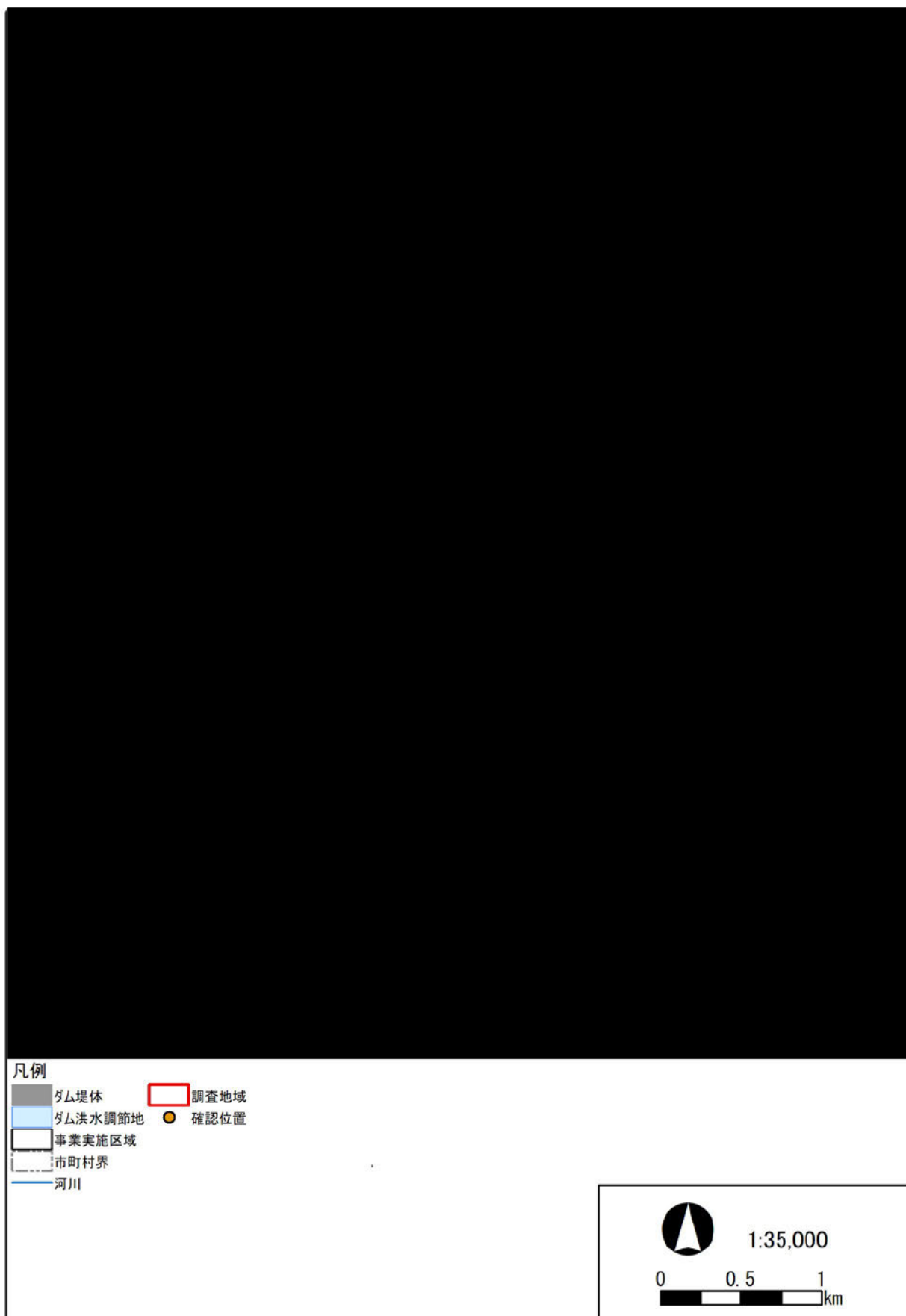


図 5.1.6-31 リス科確認地点

m) ヒメネズミ

(i) 重要性

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ヒメネズミは、日本では、北海道、本州、四国、九州、金華山、粟島、佐渡、隠岐諸島、淡路島、小豆島、対馬、五島列島、天草下島、屋久島、および種子島の、おおむね 150k m²以上の島に分布する。^{哺 2)}

(ii) 生態

低地から高山帯まで広く分布し、極相林の特徴である落葉、落枝層が厚いところを選択している。^{哺 2)}木登りがうまく、半樹上生活をする。^{哺 2)}おもに種子、果実類、節足動物を採食する。^{哺 2)}繁殖期は北海道では年一山型であるが、広島では春と秋の年二山型で、九州になると晩秋～初春までの年一山型になる。^{哺 2)}本州以南では産仔数は 2～9 頭である。^{哺 2)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-41 及び図 5.1.6-32 に示す。

現地調査では、55 地点で、目撃法、フィールドサイン法、トラップ法を用いた捕獲により成獣が確認された。確認された地点は、樹林内であった。確認時期は令和 5 年 2 月、5 月、7 月及び 9 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-41 ヒメネズミの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 2 月、5 月、7 月及び 9 月に、樹林内の 55 地点で、成獣を計 55 個体確認。	55	55

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、低地から高山帯まで広く分布し、極相林の特徴である落葉、落枝層が厚いところを選択している。木登りがうまく、半樹上生活をする。おもに種子、果実類、節足動物を採食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、河川、湖の水際部や水田周辺の草地に生息し、周辺の草本類の種子や昆虫類を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」と推定される。

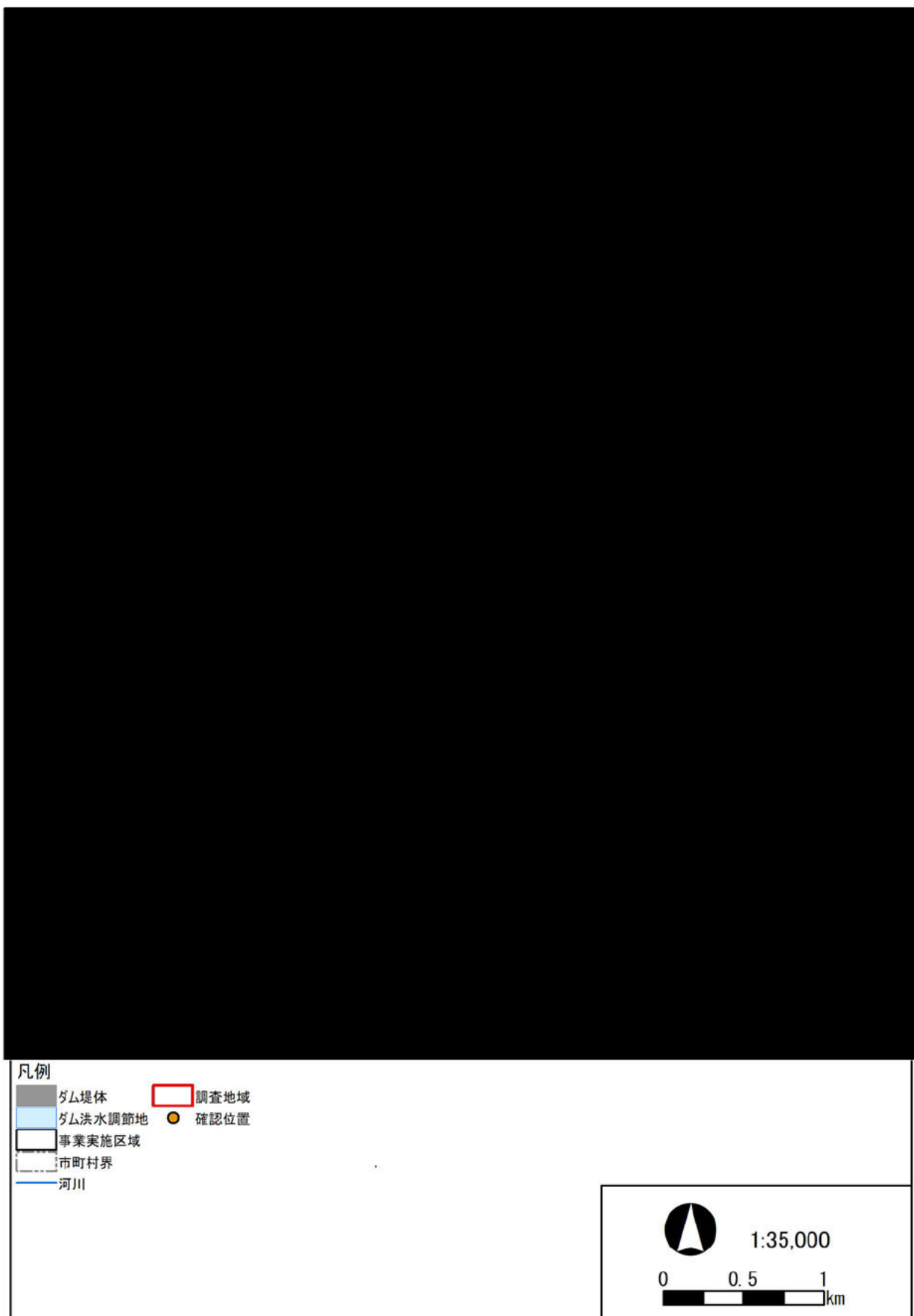


図 5.1.6-32 ヒメネズミ確認地点

n) カヤネズミ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

カヤネズミは、日本では、本州（宮城県以南の太平洋側、石川県以南の日本海側）、四国、九州に分布する。^{哺 1)}

滋賀県では、水口町、信楽町、甲南町、甲賀町、土山町、日野町、永源寺町、愛東町、湖東町、多賀町、高島市、朽木村、安曇川町、今津町に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

主に平野の河川敷、農耕地に分布するが、山でも高茎の草本があれば約 1,000mまでは生息することもある。^{哺 1)}食性は昆虫や草本の種子等雑食性。^{哺 1)}5～11 月頃、繁殖のために、オギ、チガヤ、ススキ、ヨシなどの高茎草本の葉を編んで、地上巣を作り中で繁殖するという特異な習性をもつ。^{哺 1)}冬は地上に降りて地下で巣を作り生活する。^{哺 1)}繁殖期は大部分の地域では春と秋の年二山型であるが、まれに夏も繁殖する。^{哺 1)}2～8 頭の仔を産む。^{哺 1)}親は繁殖期間中複数の巣を利用して巣間を移動する。^{哺 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-42 及び図 5.1.6-33 に示す。

現地調査では、5 地点で、目撃法、フィールドサイン法、トラップ法を用いた捕獲により巣や成獣が確認された。確認された地点は、草地であった。確認時期は令和 5 年 1 月～2 月、4 月～5 月及び 9 月～10 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-42 カヤネズミの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月～2 月、4 月～5 月及び 9 月～10 月に、草地の 5 地点で、巣や成獣を計 5 個体確認。	5	5

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、草地であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、主に平野の河川敷、農耕地に分布するが、山でも高茎の草本があれば約 1,000mまでは生息することもある。食性は昆虫や草本の種子等雑食性。5～11月頃、繁殖のために、オギ、チガヤ、ススキ、ヨシなどの高茎草本の葉を編んで、地上巣を作り中で繁殖するという特異な習性をもつ。冬は地上に降りて地下で巣を作り生活する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、河川や水田周辺の草地に生息し、周辺の草本類の種子や昆虫類を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」と推定される。

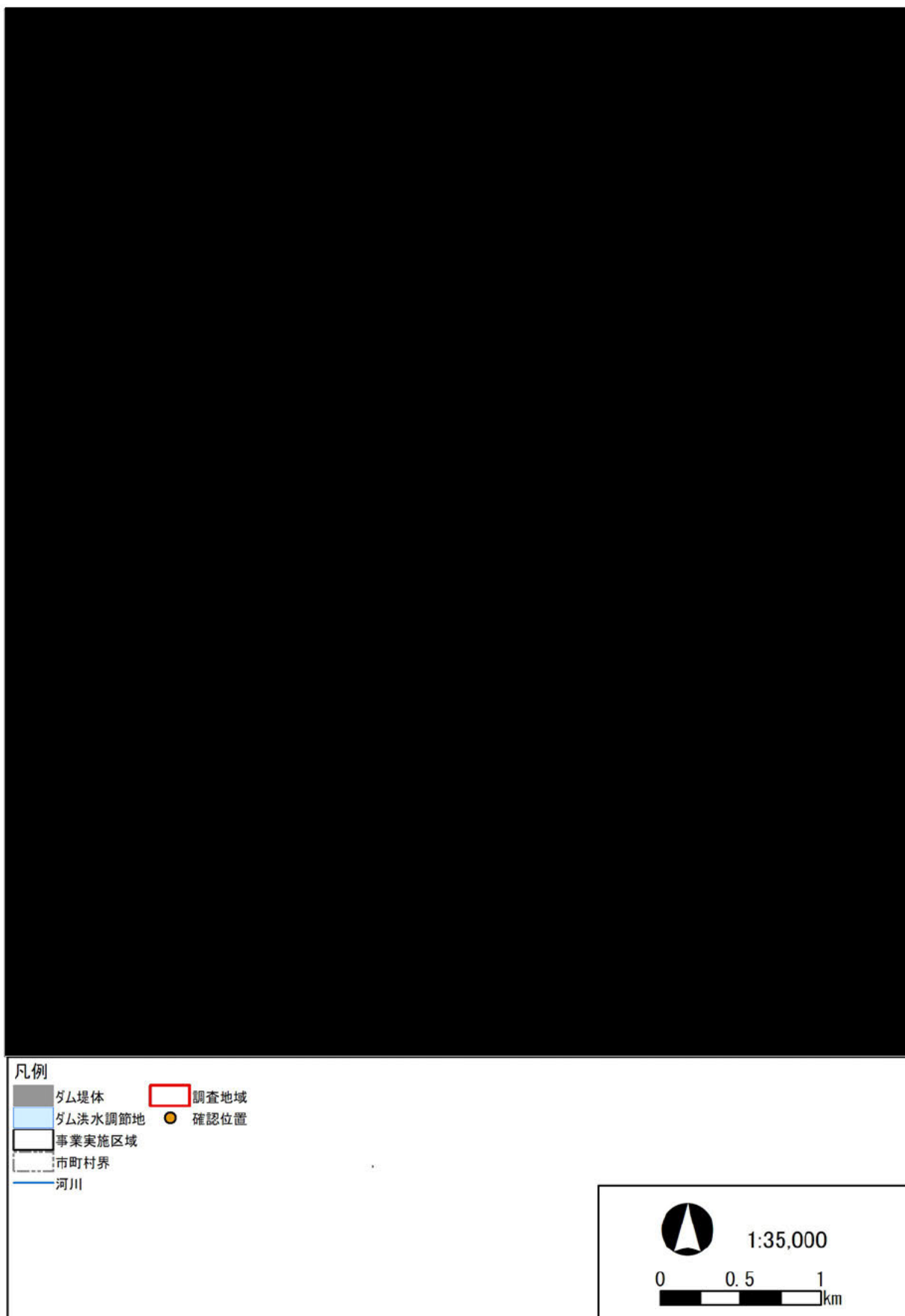


図 5.1.6-33 カヤネズミ確認地点

o) アナグマ

(i) 重要性

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

アナグマは、日本では、本州、四国、九州、小豆島に分布する。^{哺 1)}

(ii) 生態

山地帯下部から丘陵部の森林、灌木林に生息する。^{哺 2)}トンネルを掘り、集団で生活する。^{哺 2)}土壌動物や小動物を主に捕食する。^{哺 2)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-43 及び図 5.1.6-34 に示す。

現地調査では、13 地点で、目撃法、フィールドサイン法、自動撮影カメラにより糞や掘り返し、成獣が確認された。確認された地点は、樹林内や草地等であった。確認時期は令和 5 年 1 月、4 月～5 月、7 月～8 月及び 10 月であった。

現地調査では、本種の幼獣等の繁殖に関する情報は得られていないが、本種は繁殖期に個体が確認されていることから、調査地域において繁殖している可能性がある。

表 5.1.6-43 アナグマの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月、4 月～5 月、7 月～8 月及び 10 月に、樹林内や草地等の 13 地点で、糞や掘り返し、自動撮影による成獣等計 13 個体確認。	13	13

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や草地等であった。

既存の生態情報によれば、「本種は、山地帯下部から丘陵部の森林、灌木林に生息する。トンネルを掘り、集団で生活する。土壌動物や小動物を主に捕食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、森林や低木林、草地、農耕地等に生息し、周辺の土壌動物や小動物を餌としていると考えられる。

これらのことから当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」と推定される。

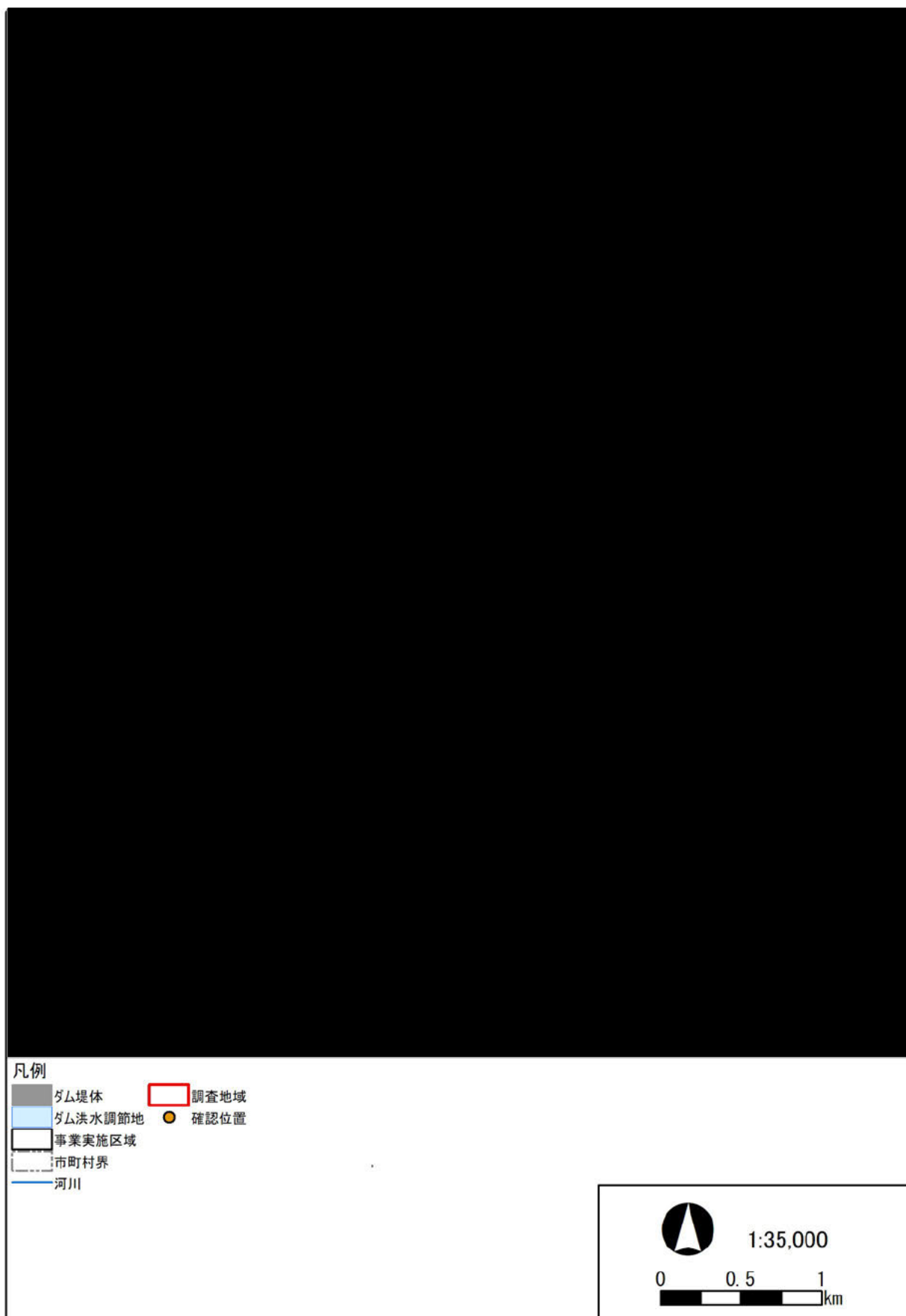


図 5.1.6-34 アナグマ確認地点

(b) 鳥類の重要な種

調査地域では、鳥類の重要な種が 47 種確認された。

表 5.1.6-44 鳥類の重要な種の確認状況 (1/2)

No.	記号 ^{注)}	種名	確認した調査方法
1	a	ヤマドリ	直接観察、ラインセンサス法、無人カメラ撮影
2	b	アオバト	直接観察、ラインセンサス法
3	c	ミゾゴイ	無人カメラ撮影
4	d	ホトトギス	直接観察、ラインセンサス法、定点観察法
5	e	ヨタカ	夜間調査
6	f	イカルチドリ	直接観察、ラインセンサス法
7	g	コチドリ	直接観察、ラインセンサス法
8	h	ヤマシギ	無人カメラ撮影
9	i	ミサゴ	定点観察（猛禽類）
10	j	ハチクマ	直接観察、定点観察（猛禽類）
11	k	ツミ	ラインセンサス法、定点観察（猛禽類）
12	l	ハイタカ	定点観察（猛禽類）
13	m	オオタカ	定点観察（猛禽類）
14	n	サシバ	直接観察、ラインセンサス法、定点観察（猛禽類）
15	o	ノスリ	直接観察、定点観察（猛禽類）
16	p	クマタカ	定点観察（猛禽類）
17	q	オオコノハズク	無人カメラ撮影
18	r	フクロウ	夜間調査
19	s	アカショウビン	直接観察
20	t	カワセミ	直接観察、ラインセンサス法
21	u	ヤマセミ	直接観察
22	v	オオアカゲラ	直接観察、定点観察法
23	w	アカゲラ	ラインセンサス法、定点観察（猛禽類）
24	x	アオゲラ	直接観察、ラインセンサス法、定点観察法
25	y	ハヤブサ	直接観察、定点観察（猛禽類）
26	z	ヤイロチョウ	無人カメラ撮影
27	aa	サンショウクイ	直接観察、ラインセンサス法、定点観察法
28	ab	サンコウチョウ	ラインセンサス法
29	ac	コシアカツバメ	直接観察、ラインセンサス法
30	ad	ヤブサメ	直接観察、ラインセンサス法、定点観察法

表 5.1.6-44 鳥類の重要な種の確認状況 (2/2)

No.	記号 ^{注)}	種名	確認した調査方法
31	ae	エゾムシクイ	直接観察
32	af	センダイムシクイ	直接観察、ラインセンサス法、定点観察法
33	ag	キバシリ	直接観察、定点観察法
34	ah	ミソサザイ	直接観察、ラインセンサス法、無人カメラ撮影
35	ai	カワガラス	直接観察、ラインセンサス法
36	aj	トラツグミ	無人カメラ撮影
37	ak	クロツグミ	直接観察、定点観察法、無人カメラ撮影
38	al	コルリ	直接観察、無人カメラ撮影
39	am	ルリビタキ	直接観察、ラインセンサス法、定点観察法、無人カメラ撮影
40	an	コサメビタキ	直接観察、定点観察法
41	ao	キビタキ	直接観察、ラインセンサス法、定点観察法、無人カメラ撮影
42	ap	オオルリ	直接観察、ラインセンサス法、定点観察法、無人カメラ撮影
43	aq	カヤクグリ	直接観察
44	ar	ビンズイ	無人カメラ撮影
45	as	ベニマシコ	直接観察
46	at	ウソ	直接観察
47	au	アオジ	直接観察、ラインセンサス法、無人カメラ撮影

注) 記号欄に示す a～au は、以降に示す重要な種の種ごとの現地調査結果等の項目に対応している。

a) ヤマドリ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：その他重要種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

ヤマドリは、日本では本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全身は雄：約 125cm、雌：約 50cm。鳥¹⁾雄は全身が美しい赤茶色をしており、頸部から下には白斑や黒斑がある。鳥¹⁾雄の尾は極めて長く目立つ。鳥¹⁾雌は地味な黒褐色で尾も短い。鳥¹⁾県内では、各地の溪谷沿いの森林に周年生息する。鳥¹⁾山地の森林で、特に沢筋などを好み、草や木の葉・種子・根、昆虫類、クモ類、ナメクジなどを主に食べる。鳥¹⁾産卵時期は 4～6 月で、産卵数は 7～13 個。鳥¹⁾雌が抱卵を行い、抱卵期間は 24 日間。鳥¹⁾秋から冬には雄雌の混じった群れになることもある。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-45 及び図 5.1.6-35 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び無人カメラ撮影により計 4 地点、延 4 個体が確認された。確認された環境は、林床等であった。確認時期は令和 5 年 1 月、2 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-45 ヤマドリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月、2 月及び 9 月に、林床等の 4 地点で、計 4 個体を確認。	4	4

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、林床等であった。

既存の生態情報によれば、「各地の溪谷沿いの森林に周年生息する。山地の森林で、特に沢筋などを好み、草や木の葉・種子・根、昆虫類、クモ類、ナメクジなどを主に食べる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」と推定される。

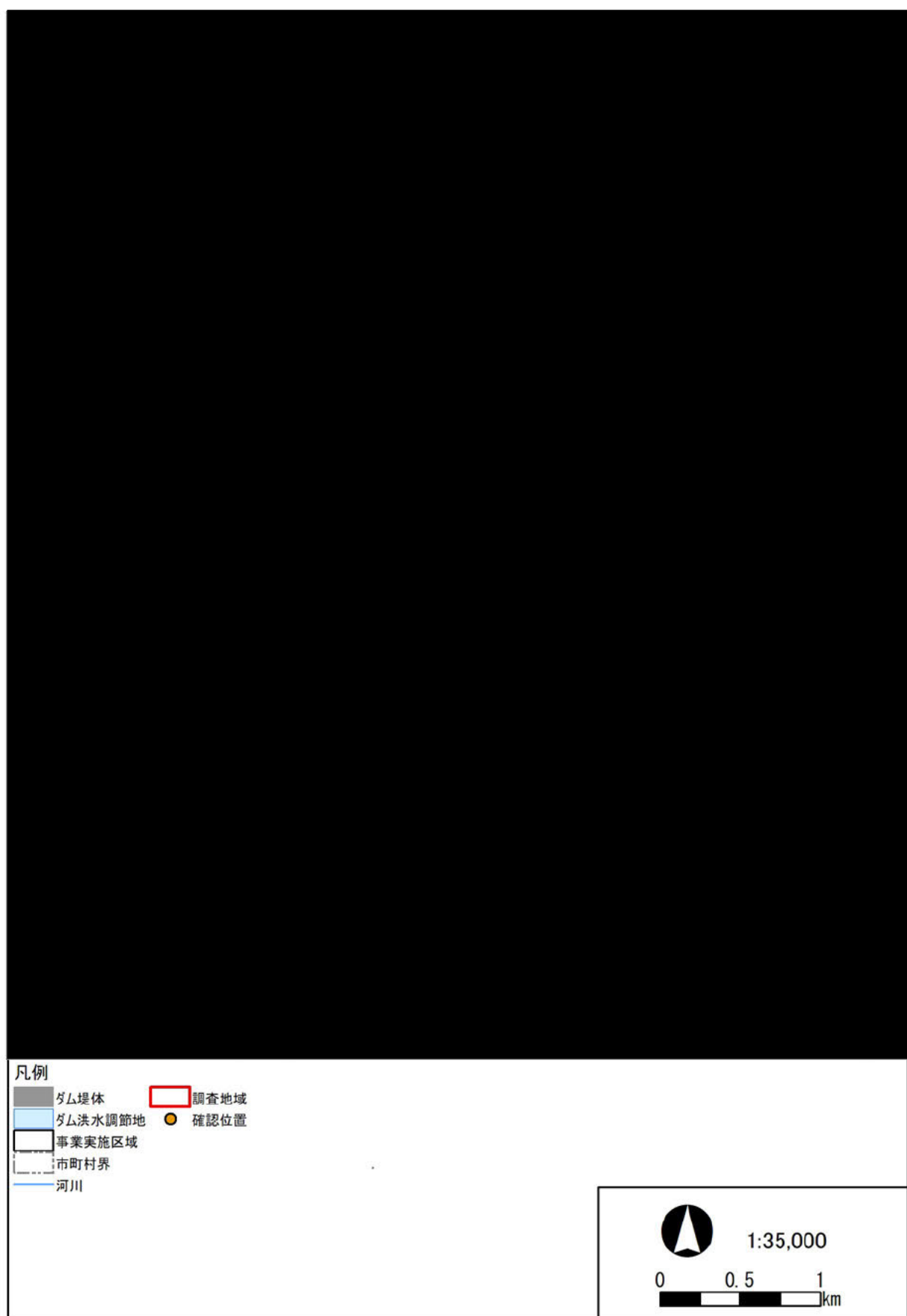


図 5.1.6-35 ヤマドリ確認地点

b) アオバト

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：越冬個体群：要注目種

アオバトは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の平地・丘陵地・山地に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 33cm、上面が暗緑色で顔から胸にかけて明るい黄緑色のハト。鳥¹⁾腹は白く、嘴は青灰色、脚は赤紫色。鳥¹⁾雄は翼の上面の雨覆が赤褐色。鳥¹⁾山地の森林、特に広葉樹林に周年生息している。鳥¹⁾冬期には平地や琵琶湖岸でもみられる。鳥¹⁾樹上で採餌し、ドングリ類や液果を好んで食べる。鳥¹⁾つがいか小群で行動することが多い。鳥¹⁾「アーアオーアオー、ウーウェアオー」などとうなるような声で鳴く。鳥¹⁾海のそばでは、海岸の岩場に出て海水を飲むことが知られている。鳥¹⁾産卵期は 6 月頃、産卵数は 2 個。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-46 及び図 5.1.6-36 に示す。

現地調査では、直接観察及びラインセンサス法により計 3 地点、延 4 個体が確認された。確認された環境は、樹林上空等であった。確認時期は令和 5 年 1 月、6 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-46 アオバトの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月、6 月及び 9 月に、樹林上空等の 3 地点で計 4 個体を確認。	3	4

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林の上空であった。

既存の生態情報によれば、「山地の森林、特に広葉樹林に周年生息している。冬期には平地や琵琶湖岸でもみられる。樹上で採餌し、ドングリ類や液果を好んで食べる。つがいか小群で行動することが多い。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」と推定される。

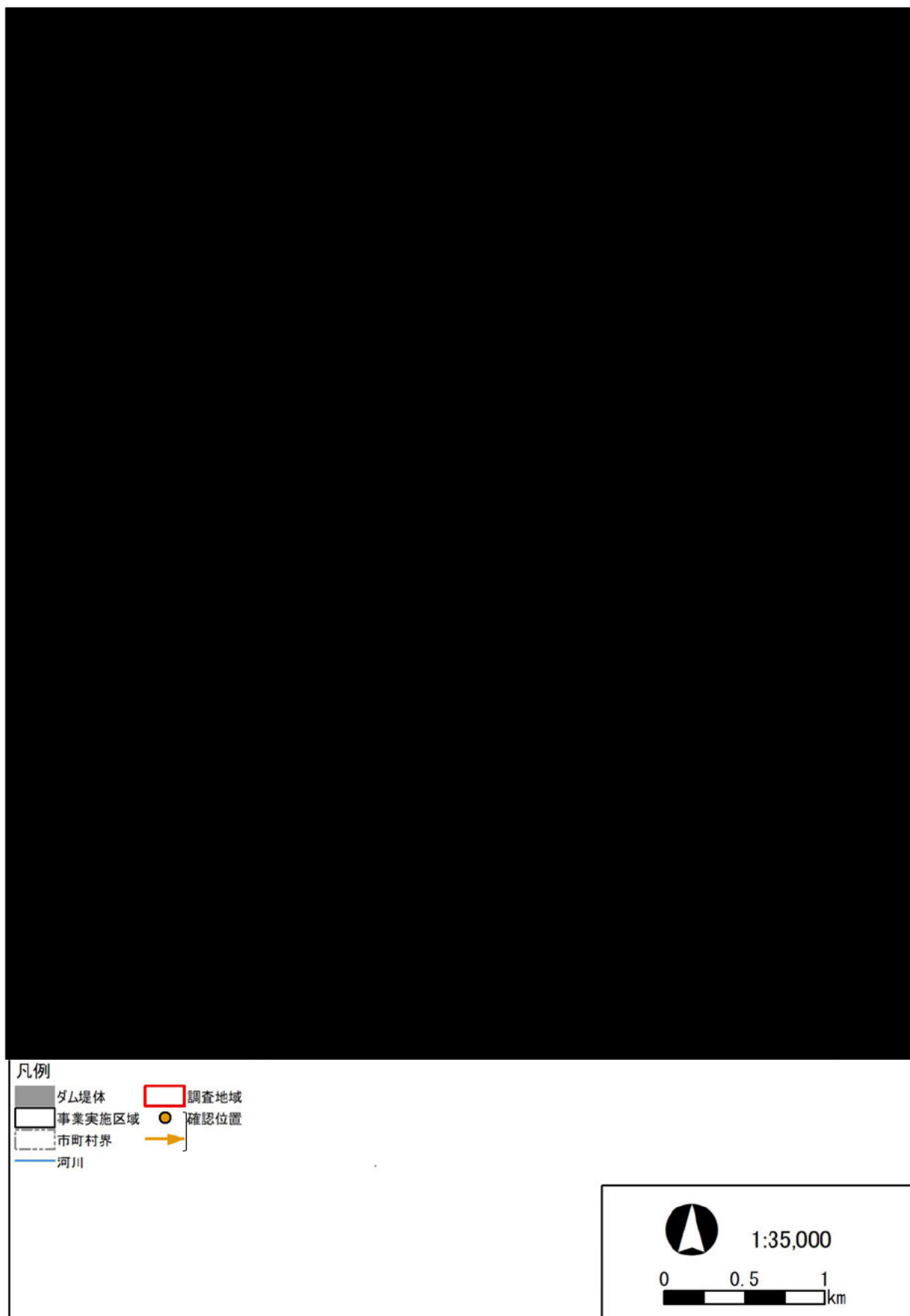


図 5.1.6-36 アオバト確認地点

c) ミゾゴイ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧Ⅱ類

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危機増大種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危惧種

ミゾゴイは、日本では本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、大津市、甲賀町、土山町、朽木村等に記録がある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 49cm。鳥¹⁾雌雄同色。鳥¹⁾全身栗毛色のサギで、頭頂は濃い茶色で、やや長い羽毛が冠羽状になっている。鳥¹⁾日本のみで繁殖する種。鳥¹⁾県内には夏鳥として渡来し、山麓から低山の薄暗い沢地の林に生息する。鳥¹⁾主に朝夕に活動し、魚類、両生類、爬虫類、昆虫などを捕食する。鳥¹⁾繁殖期には昼間も活動する。鳥¹⁾雄は夜間低音のよく通る声で「ボオー、ボオー」と繰り返し鳴く。鳥¹⁾繁殖期は 5～7 月で、よく繁った林の樹上に枯れ枝を組み合わせた皿状の巣をつくる。鳥¹⁾外敵が近づくと親鳥も雛も首を伸ばして擬態する。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-47 及び図 5.1.6-37 に示す。

現地調査では、無人カメラ撮影により計 2 地点、延 2 個体が確認された。確認された環境は、樹林沢沿いであった。確認時期は令和 5 年 9 月であった。

表 5.1.6-47 ミゾゴイの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 9 月に、樹林沢沿いの 2 地点で、計 2 個体を確認。	2	2

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林地の沢沿いであった。

既存の生態情報によれば、「山麓から低山の薄暗い沢地の林に生息する。主に朝夕に活動し、魚類、両生類、爬虫類、昆虫などを捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」と推定される。

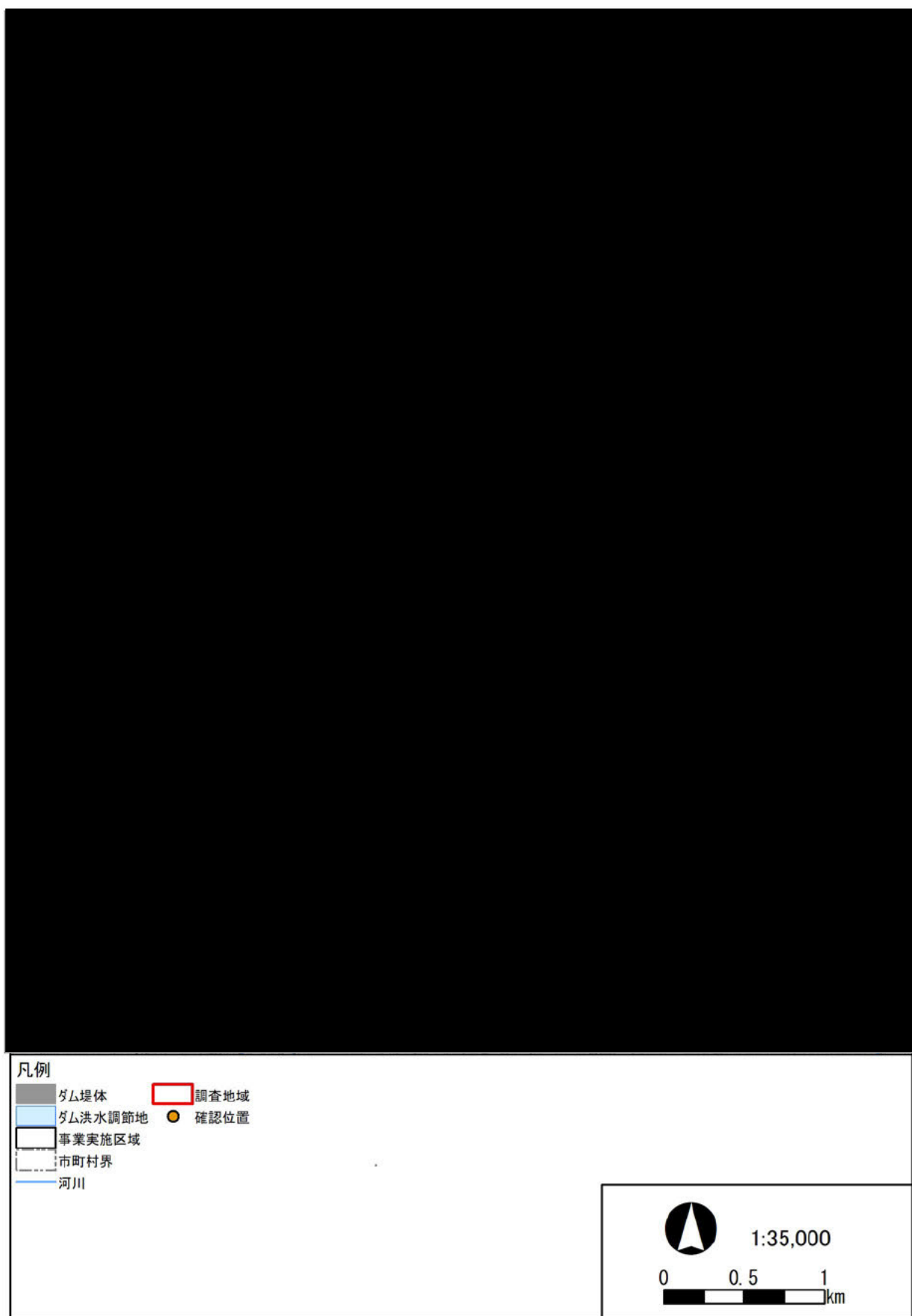


図 5.1.6-37 ミゾゴイ確認地点

d) ホトトギス

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ホトトギスは、日本では北海道（南部）、本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地・丘陵地に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 28cm。鳥¹⁾カッコウ類の中では一番小さい。鳥¹⁾全身が青灰色で腹部は白く、黒い横斑がある。鳥¹⁾雌には全身が赤褐色をした個体もみられる。鳥¹⁾日本には春に渡来し、森林に生息する。鳥¹⁾県内には 5 月中旬に渡来する。鳥¹⁾托卵修正があり、主な仮親であるウグイスの棲む低山から山地のササ藪のある自然林に生息する。鳥¹⁾「テッペンカケタカ、特許許可局」と聞こえる大きな声で鳴く。鳥¹⁾餌は昆虫を主食とし、毛虫をよく食べる。鳥¹⁾9 月には越冬地の東南アジアに向け渡去する。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-48 及び図 5.1.6-38 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び定点観察法により計 11 地点、延 11 個体が確認された。確認された環境は、樹林及び樹林上空等であった。確認時期は令和 5 年 6 月であった。

表 5.1.6-48 ホトトギスの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 6 月に、樹林及び樹林上空等の 11 地点で、11 個体を確認。	11	11

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林地及び樹林の上空であった。

既存の生態情報によれば、「春に渡来し、森林に生息する。県内には 5 月中旬に渡来する。托卵修正があり、主な仮親であるウグイスの棲む低山から山地のササ藪のある自然林に生息する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「低木林」、「竹林」、「草地（高茎草地）」と推定される。

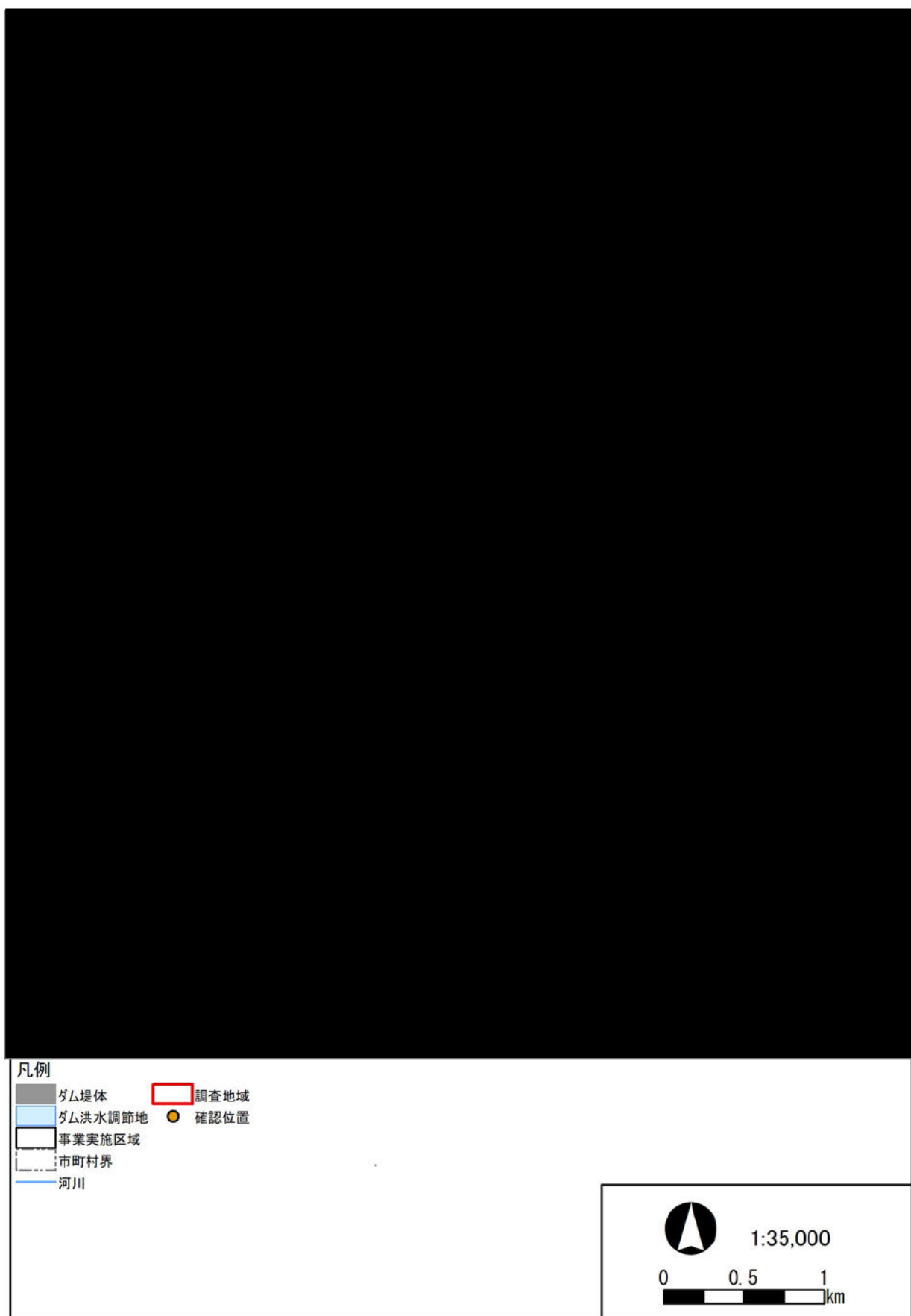


図 5.1.6-38 ホトトギス確認地点

e) ヨタカ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：準絶滅危惧

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危機増大種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

ヨタカは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、伊吹山地、鈴鹿山脈、野坂山地、三国山地、比良山地、比叡山に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 29cm。^{鳥 1)}雌雄同色。^{鳥 1)}全身は黒褐色に、灰白色や茶褐色の斑紋が混ざった枯れ葉模様が特徴で、飛翔時には翼の大きな白斑が目立つ。^{鳥 1)} 全国の、主に標高 2,000m 以下の山地帯に飛来する。^{鳥 2)} 草原や灌木の散在するような落葉広葉樹や針葉樹の森林に生息し、主にガ、コガネムシ、カ、トビケラなどの昆虫類を飛びながら捕食する。^{鳥 3)} 夜行性で夕方から休眠するため、枯れ葉模様の体が木のこぶのようにみえる。^{鳥 1)} 繁殖期の 5～6 月には夜間に「キョ、キョ、キョ、キョ」と繰り返し鳴くので生息が確認できる。^{鳥 1)} 巣をつくらず、林内の地上に直接産卵・抱卵し、雛を育てる。^{鳥 1)} 県内には 5 月に渡来する夏鳥で、10 月まで山地の森林に生息し、繁殖している。^{鳥 1)} 夜行性で人目に付きにくいことから目撃記録は少ない。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-49 及び図 5.1.6-39 に示す。

現地調査では、夜間調査により計 12 地点、延 12 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部、人工裸地等であった。確認時期は令和 5 年 6 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-49 ヨタカの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 6 月及び 9 月に、樹林や林縁部、人工裸地等の 12 地点で、計 12 個体を確認。	12	12

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部、人工裸地等であった。

既存の生態情報によれば、「全国の、主に標高 2,000m 以下の山地帯に飛来する。草原や灌木の散在するような落葉広葉樹や針葉樹の森林に生息し、主にガ、コガネムシ、カ、トビケラなどの昆虫類を飛びながら捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「低木林」、「草地（高茎草地）」と推定される。

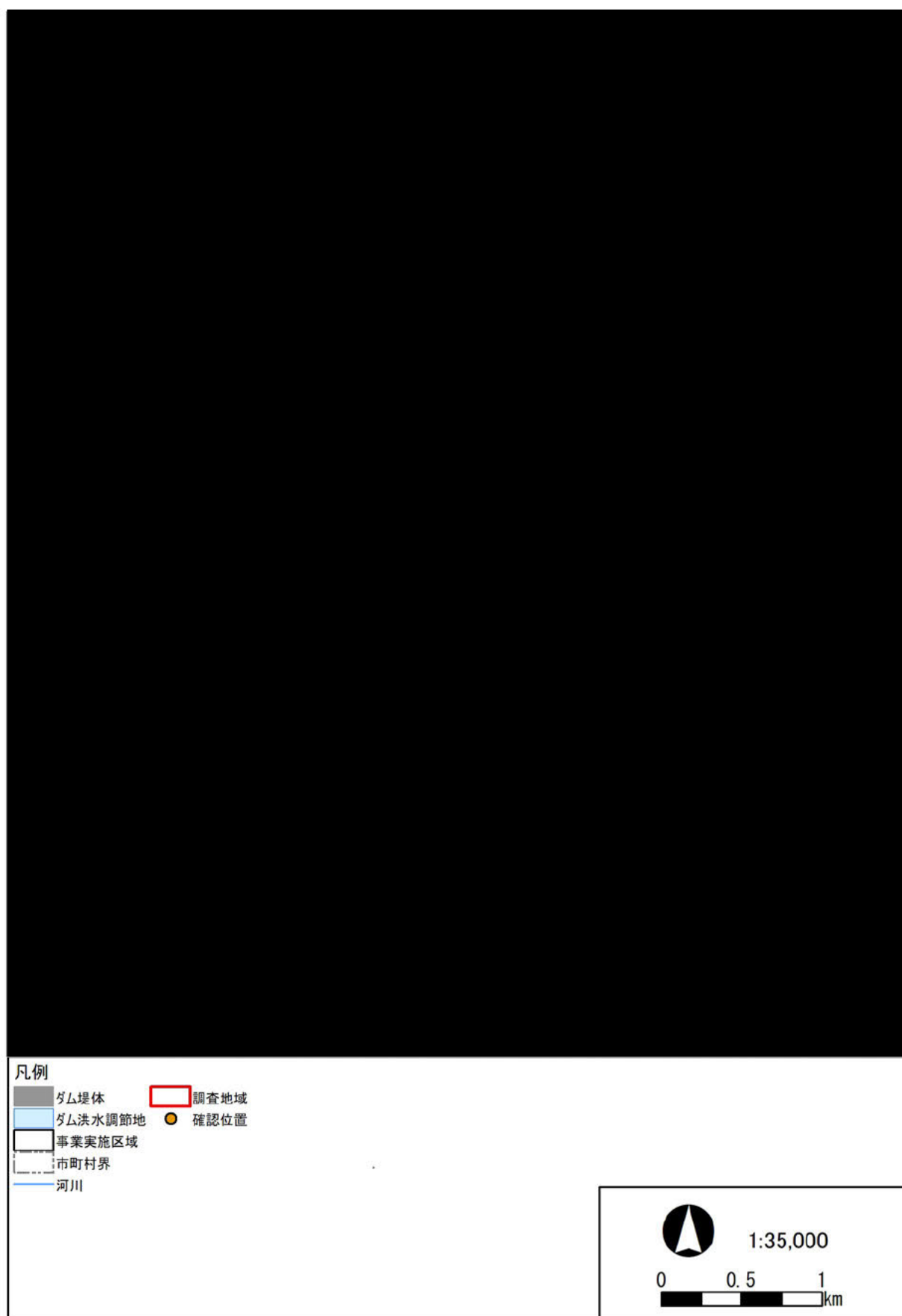


図 5.1.6-39 ヨタ力確認地点

f) イカルチドリ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

イカルチドリは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、琵琶湖岸、全域の内湖・平地・丘陵地に分布する。^{鳥 1)}姉川、高時川、安曇川、野洲川、大戸川流域に繁殖期に記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 20.5cm。^{鳥 1)}コチドリより少し大きく、嘴が長い。^{鳥 1)}顔の斑紋はやや薄く、眼の下縁の黄色のリングも淡い。^{鳥 1)}「ピオーピオー」とよく透き通った高い声で鳴き、営巣地に外敵が近づくと鳴きながら警戒する。^{鳥 1)}繁殖行動などもコチドリと似ており、「擬傷（ぎしょう）」行動もみられる。^{鳥 1)}県内では、河川の中流から上流に生息し、主に中流域の砂礫地で繁殖する。^{鳥 1)}越冬期は、琵琶湖湖岸や水田で小さな群れとなることが多い。^{鳥 1)}湖沼や河川の水辺の地上や浅い水域で採食する。^{鳥 4)}甲虫など昆虫の成虫・幼虫を食べる。^{鳥 4)}繁殖期は3～7月、一夫一妻で繁殖する。^{鳥 4)}巣は、礫の間の地上に雌雄で窪みをつくり、植物の破片を敷く。^{鳥 4)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-50 及び図 5.1.6-40 に示す。

現地調査では、直接観察及びラインセンサス法により計 4 地点、延 5 個体が確認された。確認された環境は、大戸川及び大戸川沿いの人工裸地であった。確認時期は令和 5 年 5 月及び 6 月であった。

表 5.1.6-50 イカルチドリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月及び 6 月に、4 地点で、計 5 個体を大戸川及び大戸川沿いの人工裸地で確認。	4	5

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、河川及び人工裸地であった。既存の生態情報によれば、「県内では、河川の中流から上流に生息し、主に中流域の砂礫地で繁殖する。越冬期は、琵琶湖湖岸や水田で小さな群れとなることが多い。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「自然裸地」、「人工裸地」、「開放水域（本川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

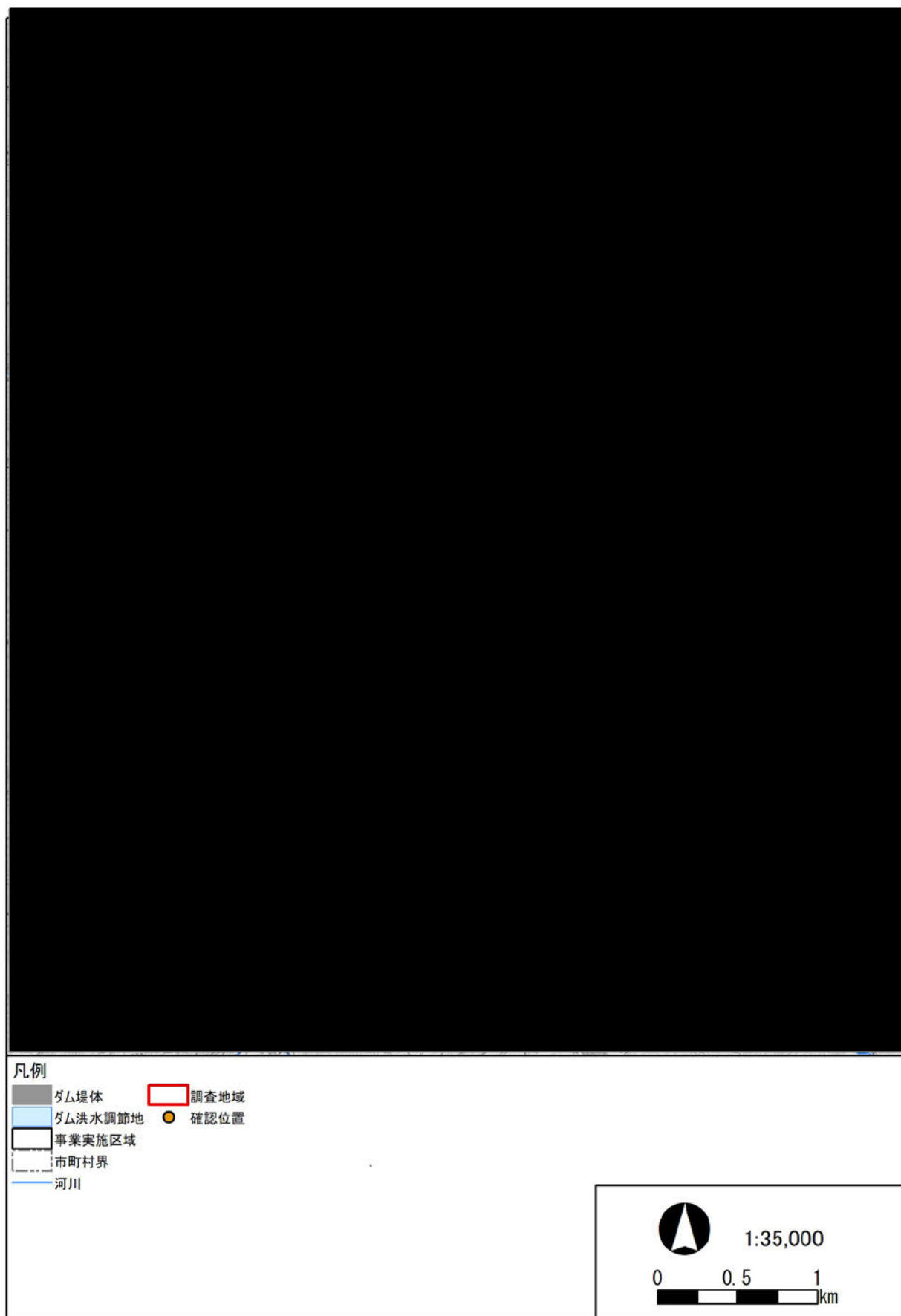


図 5.1.6-40 イカルチドリ確認地点

g) コチドリ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

コチドリは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、琵琶湖岸、全域の内湖・平地に分布する。草津市、守山市、長浜市で、稀に越冬記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 17cm。^{鳥 1)}目の周囲が黄色く、胸の黒い帯が鮮やかな小型のチドリの仲間。^{鳥 1)}河川の中下流や農耕地、干拓地などに生息し、河原や埋め立て地、造成地などの砂礫地で繁殖する。^{鳥 1)}巣は小石などを集めて地上に造り、小石そっくりな卵を 4 個産む。^{鳥 1)}営巣地に人や犬などが近づくと「ピョッ、ピョッ……」と大声で鳴きながら飛び警戒する。^{鳥 1)}また、親が傷ついたふりをして外敵の注意を引きながら巣や雛から遠ざける「擬傷」と言われる行動をする。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-51 及び図 5.1.6-41 に示す。

現地調査では、直接観察及びラインセンサス法により計 2 地点、延 3 個体が確認された。確認された環境は、大戸川及び大戸川沿いの人工裸地であった。確認時期は令和 5 年 5 月及び 6 月であった。

表 5.1.6-51 コチドリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月及び 6 月に、2 地点で、計 3 個体を大戸川及び大戸川沿いの人工裸地で確認。	2	3

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、河川及び人工裸地であった。

既存の生態情報によれば、「河川の中下流や農耕地、干拓地などに生息し、河原や埋め立て地、造成地などの砂礫地で繁殖する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「農耕地（水田）」、「自然裸地」、「人工裸地」、「開放水域（本川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。



図 5.1.6-41 コチドリ確認地点

h) ヤマシギ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：越冬個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

ヤマシギは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の平地・丘陵地・山地に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 34cm。^{鳥 1)}体は太く、頭の大きな全体赤みがかった茶褐色のシギで、落葉広葉樹林、針広混交林、常緑広葉樹林などに生息する。^{鳥 1)}地上性で、落ち葉の中にいるとほとんど見分けがつかない。^{鳥 1)}県内には冬鳥として、低い山地や農耕地、河川敷、公園、竹藪などに広い生息域を持つが、特に薄暗い湿った林に好んで生息する。^{鳥 1)}夜間には湿地や水田にも出て、長い嘴を湿った柔らかい土の中に差し込み、昆虫やミミズなどを食べる。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-52 及び図 5.1.6-42 に示す。

現地調査では、無人カメラ撮影により計 6 地点、延 6 個体が確認された。確認された環境は、林縁部及び樹林沢沿いであった。確認時期は、令和 5 年 1 月～2 月、11 月～12 月及び令和 6 年 1 月であった。

表 5.1.6-52 ヤマシギの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月～2 月、11 月～12 月及び令和 6 年 1 月に、林縁部及び樹林沢沿いの 6 地点で、計 6 個体を確認。	6	6

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、林縁部及び樹林地の沢沿いであった。

既存の生態情報によれば、「落葉広葉樹林、針広混交林、常緑広葉樹林などに生息する。地上性。県内には冬鳥として、低い山地や農耕地、河川敷、公園、竹藪などに広い生息域を持つが、特に薄暗い湿った林に好んで生息する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「竹林」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」と推定される。

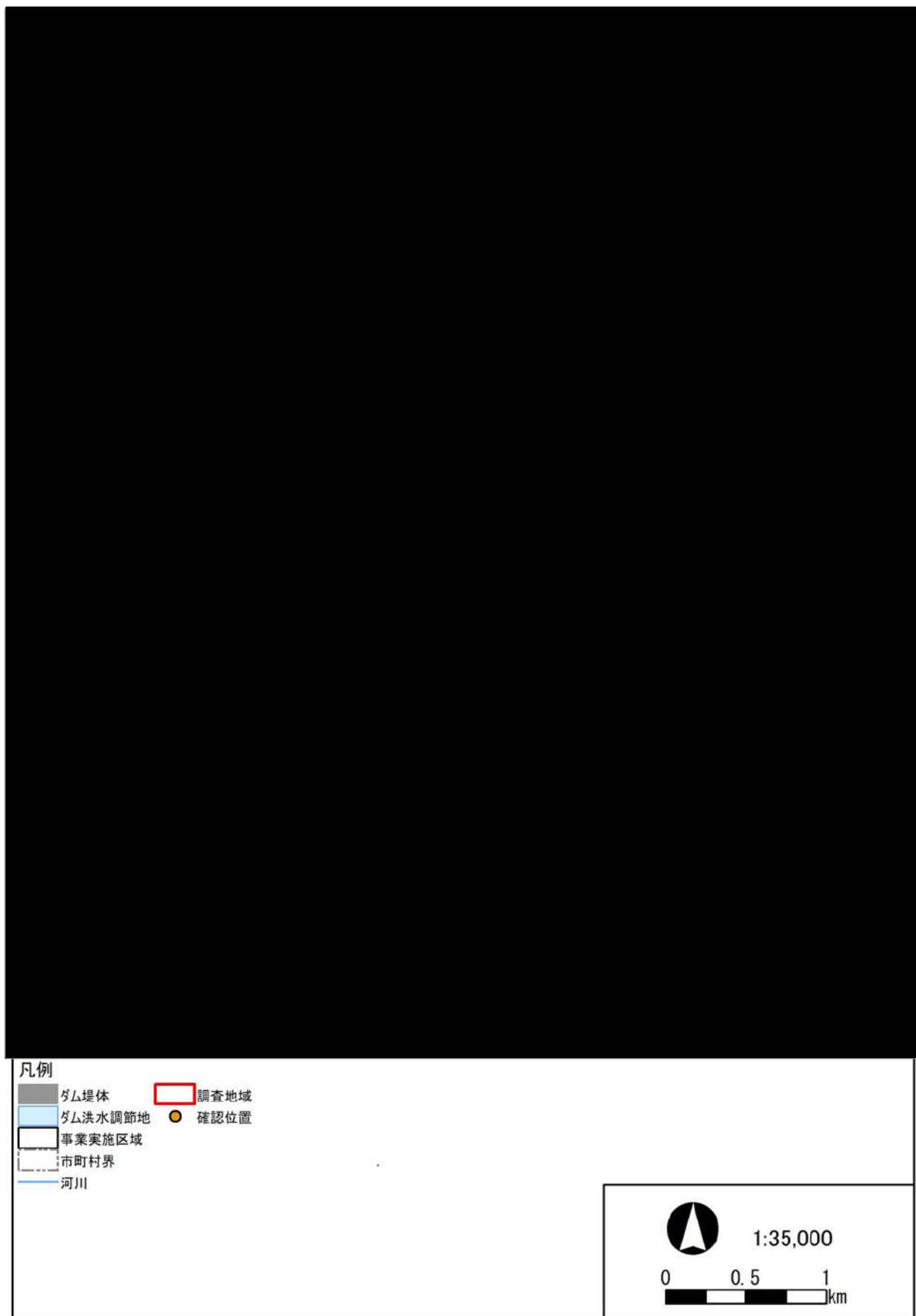


図 5.1.6-42 ヤマシギ確認地点

i) ミサゴ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：準絶滅危惧

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

ミサゴは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、琵琶湖や大きな河川・湖沼周辺に分布し、近江八幡市、彦根市等で繁殖記録がある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長が雄：約 55cm、雌：約 60cm。鳥¹⁾ トビくらいの大きさの中型猛禽。鳥¹⁾ 上面は黒褐色で後頭部に短い冠羽がある。鳥¹⁾ 腹部は白く、胸には黒褐色の帯がある。鳥¹⁾ 海岸地帯や大きな湖沼に生息し、水面上空で停空飛行を行いながら魚を探し、急降下して中型の魚を捕える。鳥¹⁾ 主食はスズキ、コイ、マス、フナ、ナマズなどの魚。鳥⁵⁾ 海岸、湖岸、湖岸の岩棚や大木に営巣することが多いが、鉄塔などの人工物を利用することもある。鳥¹⁾ 産卵は 3 月下旬～4 月で、産卵数は 1～4 個。鳥¹⁾ 抱卵期間は約 37 日間で、孵化後 50～60 日で巣立つ。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-53 に示す。

現地調査では、定点観察（猛禽類）により計 6 地点、延 6 個体が確認された。確認された環境は、樹林上空及び■■■■であった。確認時期は令和元年 5 月、7 月、令和 5 年 5 月及び 7 月であった。

表 5.1.6-53 ミサゴの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和元年 5 月、7 月、令和 5 年 5 月及び 7 月に、樹林上空及び■■■■の 6 地点で、計 6 個体を確認。	6	6

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林の上空及び■■■■であった。

既存の生態情報によれば、「海岸地帯や大きな湖沼に生息し、水面上空で停空飛行を行いながら魚を探し、急降下して中型の魚を捕える。海岸、湖岸、湖岸の岩棚や大木に営巣することが多いが、鉄塔などの人工物を利用することもある。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「開放水域（本川）」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

j) ハチクマ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：準絶滅危惧

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危機増大種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

ハチクマは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の丘陵地・山地に分布するが、大津市、信楽町等で繁殖の記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長が雄：約 57cm、雌：約 61cm の中型猛禽。^{鳥 1)} 全身は地味な褐色で、尾羽には幅広い黒色の横縞が 2～3 本ある。^{鳥 1)} 県内には 5 月中旬頃に渡来し、大半はより北方に移動するが、少数が繁殖する。^{鳥 1)} 産卵数は 2～3 個で、孵化後 35～45 日で巣立つ。^{鳥 1)} 主な獲物は地中のハチであるが、その他の昆虫、小型の両生類、爬虫類、ネズミなども捕食する。^{鳥 1)} 9 月中旬頃から 10 月初旬には、越冬地の東南アジアに渡る群が主に県北部の山間部を北東から南西に飛行しているのを観察できる。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-54 に示す。

現地調査では、直接観察及び定点観察（猛禽類）により計 171 地点、延 171 個体が確認された。確認された環境は、樹林及び樹林上空等であった。確認時期は令和元年 5 月～8 月及び令和 5 年 5 月～9 月であった。

表 5.1.6-54 ハチクマの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和元年 5 月～8 月及び令和 5 年 5 月～9 月に、樹林及び樹林上空等の 171 地点で、計 171 個体を確認。調査地区内で営巣地を 1 箇所確認。	171	171

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林及び樹林の上空等であった。

既存の生態情報によれば、「県内には5月中旬頃に渡来し、大半はより北方に移動するが、少数が繁殖する。主な獲物は地中のハチであるが、その他の昆虫、小型の両生類、爬虫類、ネズミなども捕食する。9月中旬頃から10月初旬には、越冬地の東南アジアに渡る群が主に県北部の山間部を北東から南西に飛行しているのを観察できる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

k) ツミ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

ツミは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、比良山地、比叡山地、田上山地、三国山地、伊吹山地、鈴鹿山脈に記録があり、繁殖の記録は永源寺町、多賀町にある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長が雄：約 27cm、雌：約 32cm。鳥¹⁾ 日本最小のタカで、雌が雄よりかなり大きい。

鳥¹⁾ 雄は上面が濃い青灰色で下面は汚白色、胸から脇腹は淡い赤褐色。鳥¹⁾ 雌は上面が濃いスレート色で、下面に黒褐色の横縞がある。鳥¹⁾ 獲物のほとんどは小鳥類であるが、小型哺乳類や昆虫なども捕食する。鳥¹⁾ 山間部の森林に生息し繁殖するが、冬期には平地や河畔林にも出現する。鳥¹⁾ 産卵は 4 月下旬～5 月上旬で、産卵数は 2～5 個。鳥¹⁾ 抱卵期間は 26～29 日間で、孵化後約 1 ヶ月で巣立つ。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-55 に示す。

現地調査では、ラインセンサス法及び定点観察（猛禽類）により計 21 地点、延 21 個体が確認された。確認された環境は、樹林及び樹林上空等であった。確認時期は平成 31 年 2 月～令和元年 7 月、令和 5 年 2 月～3 月、5 月～6 月及び 8 月～9 月であった。

表 5.1.6-55 ツミの確認状況

確認状況	地点数	個体数
平成 31 年 2 月～令和元年 7 月、令和 5 年 2 月～3 月、5 月～6 月及び 8 月～9 月に、樹林及び樹林上空等の 21 地点で、計 21 個体を確認。	21	21

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林及び樹林の上空等であった。

既存の生態情報によれば、「山間部の森林に生息し繁殖するが、冬期には平地や河畔林にも出現する。獲物のほとんどは小鳥類であるが、小型哺乳類や昆虫なども捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「農耕地（水田）」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

1) ハイタカ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：準絶滅危惧

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：要注目種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

ハイタカは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、余呉町で繁殖の記録があるが、冬期には大津市、草津市等で記録があり、山麓部～平野部に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長 30～40cm。^{鳥 1)} 森林性の小型猛禽類。^{鳥 1)} 雌が雄よりかなり大きい。^{鳥 1)} 雄の上面は暗青灰色で、下面は白色に赤褐色の細い横斑がある。^{鳥 1)} 尾羽には数本の黒帯がある。^{鳥 1)} 雌の上面は灰褐色で下面は白色に褐色の横斑がある。^{鳥 1)} 平地から亜高山帯の林に生息し、林内、林縁の高地や草地などで獲物を捕える。^{鳥 2)} 秋と冬には海岸近くの農耕地やヨシ原まで出てくることがある。^{鳥 2)} 産卵期は5月、一夫一妻で繁殖する。^{鳥 2)} 営巣環境は山間部の広葉樹林やアカマツ林で、非繁殖期は林地に広く出現し、主に鳥類を捕食する。^{鳥 5)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-56 に示す。

現地調査では、定点観察（猛禽類）により計 10 地点、延 10 個体が確認された。確認された環境は、樹林及び樹林上空等であった。確認時期は平成 31 年 4 月及び令和 5 年 2 月～4 月であった。

表 5.1.6-56 ハイタカの確認状況

確認状況	地点数	個体数
平成 31 年 4 月及び令和 5 年 2 月～4 月に、樹林及び樹林上空等の 10 地点で、計 10 個体を確認。	10	10

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林及び樹林の上空等であった。

既存の生態情報によれば、「丘陵地から山間部に生息し、林内や林縁部で主として飛行追跡によって小型の鳥類を捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「農耕地（水田）」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

m) オオタカ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：準絶滅危惧

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

オオタカは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、大津市、草津市、信楽町等で繁殖の記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長が雄：約 50cm、雌：約 57cm の中型猛禽類。^{鳥 1)}丘陵地から山間部に周年生息し、比較的大きな針葉樹のある混交林などで繁殖する。^{鳥 1)}近年、繁殖地を拡大しており、山地だけではなく、平野部の森林（防風林・社寺林など）で繁殖していることもある。^{鳥 1)}産卵は 4～5 月。^{鳥 1)}産卵数は 2～3 個。^{鳥 1)}抱卵期間は 35～38 日間で、孵化後 35～40 日で巣立つ。^{鳥 1)}主に林縁部などで小型～中型の鳥類を捕食する。^{鳥 1)}北方で繁殖する個体は、冬期には本州以南に移動して越冬するものが多い。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-57 に示す。

現地調査では、定点観察（猛禽類）により計 17 地点、延 17 個体が確認された。確認された環境は、樹林及び樹林上空等であった。確認時期は令和元年 5 月及び令和 5 年 2 月～5 月であった。

表 5.1.6-57 オオタカの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和元年 5 月及び令和 5 年 2 月～5 月に、樹林及び樹林上空等の 17 地点で、計 17 個体を確認。	17	17

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林及び樹林の上空等であった。

既存の生態情報によれば、「丘陵地から山間部に周年生息し、比較的大きな針葉樹のある混交林などで繁殖する。近年、繁殖地を拡大しており、山地だけではなく、平野部の森林（防風林・社寺林など）で繁殖していることもある。主に林縁部などで小型～中型の鳥類を捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「農耕地（水田）」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

n) サシバ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧 II 類

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

サシバは、日本では本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、大津市、志賀町、野洲町、土山町、甲南町、信楽町、日野町、竜王町、永源寺町、彦根市、多賀町、米原町、西浅井町、今津町、高島町で繁殖の記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長 47～51cm。^{鳥 1)}翼はやや細長く、飛行中は赤褐色で透けるように見える。^{鳥 1)}夏鳥として九州、四国、本州に渡来する。^{鳥 1)}主に林縁部や水田の畔、湿地、草地などで、小型の両生類、爬虫類、昆虫などを捕食する。^{鳥 1)}丘陵地から標高 800m 付近の山地で繁殖することが多い。^{鳥 1)}繁殖期は 4～7 月、年に 1 回、一夫一妻で繁殖するが、まれに 2 羽の雄が給餌に参加する一妻二夫もある。^{鳥 2)}森林や丘陵地の奥まった谷のマツやスギの枝上に、枯れ枝を積み重ねて皿型の巣をつくる。^{鳥 2)}県内では、丘陵地から山麓部の水田付近や山間部の水系に渡来して繁殖する。^{鳥 1)}秋には、多くの個体が群れを成して北東から南西へ渡っていくのが山間～山麓部で観察され、湖東から湖南地方を渡る個体が多い。

^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-58 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び定点観察（猛禽類）により計 137 地点、延 137 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部、樹林上空等であった。確認時期は平成 31 年 4 月～令和元年 7 月及び令和 5 年 4 月～8 月であった。

表 5.1.6-58 サシバの確認状況

確認状況	地点数	個体数
平成 31 年 4 月～令和元年 7 月及び令和 5 年 4 月～8 月に、樹林や林縁部、樹林上空等の 137 地点で、計 137 個体を確認。調査地区内の 2 箇所で営巣地を確認。	137	137

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部、樹林の上空等であった。

既存の生態情報によれば、「夏鳥として渡来する。主に林縁部や水田の畔、湿地、草地などで、小型の両生類、爬虫類、昆虫などを捕食する。県内では、丘陵地から山麓部の水田付近や山間部の水系に渡来して繁殖する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

o) ノスリ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：越冬個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ノスリは、日本では留鳥または冬鳥。^{鳥 1)}北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。

^{鳥 1)}

滋賀県では、全域に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長 51～59 cm。^{鳥 1)}中型猛禽類。^{鳥 1)}上面は暗褐色で、飛行中の翼下面は白っぽく見える。^{鳥 1)}草地、伐採地、農耕地などの開けた場所で、空中に停飛したり、電柱に止まったりして、地上のノネズミなどの小型の哺乳類や小鳥、爬虫類、昆虫を捕食する。^{鳥 1)}主として本州中部以北の山麓部から山間部の森林で一夫一妻で繁殖する。^{鳥 1)}番はなわばりをもって分散する。^{鳥 1)}林内の大木の枝の叉に枯れ枝を積み重ねて皿形の巣をつくる。^{鳥 1)}雌は 5～6 月に、4～6 日おきに 1 卵ずつ計 2～3 個産卵する。^{鳥 1)}北方で繁殖する個体は、冬期に本州以南に移動して越冬するものが多い。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-59 に示す。

現地調査では、直接観察及び定点観察（猛禽類）により計 49 地点、延 49 個体が確認された。確認された環境は、樹林や樹林上空等であった。確認時期は平成 31 年 2 月～令和元年 8 月、令和 5 年 1 月～5 月及び 8 月であった。

表 5.1.6-59 ノスリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
平成 31 年 2 月～令和元年 8 月、令和 5 年 1 月～5 月及び 8 月に、樹林や樹林上空等の 49 地点で、計 49 個体を確認。	49	49

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や樹林の上空等であった。

既存の生態情報によれば、「主として本州中部以北の山麓部から山間部の森林で繁殖する。草地、伐採地、農耕地などの開けた場所で、空中に停飛したり、電柱に止まったりして、地上のノネズミなどの小型の哺乳類や小鳥、爬虫類、昆虫を捕食する。北方で繁殖する個体は、冬期に本州以南に移動して越冬するものが多い。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「農耕地（水田）」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

p) クマタカ

(i) 重要性

「種の保存法」：国内希少野生動植物種

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧ⅠＢ類

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

クマタカは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布。^{鳥 1)}

滋賀県では、比良、比叡、三国、伊吹、田上の各山地と鈴鹿山脈に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長が雄：70～76cm、雌：75～83cm の大型猛禽類。^{鳥 1)}成鳥は全体が暗褐色で頭部は黒い。^{鳥 1)}後頭部に冠羽がある。^{鳥 1)}低山帯や亜高山帯の針葉樹林、広葉樹林にすみ、とくに高木の多い原生林を好む。^{鳥 2)}急峻な山腹のある、深い溪谷でよく見られる。^{鳥 2)}食物はノウサギ、タヌキ、アナグマ、テン、リス、アカネズミ、ヒミズモグラなどの中・小型の哺乳動物、ヤマドリ、カケスなどの中・大型の鳥類、ヘビ類など、イヌワシに比べて採食地の多様性にともなって多種であるが、主要食物はノウサギ、キジ、ヤマドリである。^{鳥 2)}繁殖期は4～7 月ごろ、一夫一妻で繁殖する。^{鳥 2)}アカマツ、モミなどの大木に畳一畳ほどの巨大な巣を作る。^{鳥 6)}巣づくりや求愛行動は1～2 月ごろ、あるいは前年の11 月ごろから始まる。^{鳥 2)}1 巣卵数は1～2 個、雌のみが抱卵し、雄はもっぱら獲物を運んでくる。^{鳥 2)}雛は1 ヶ月、あるいは1 ヶ月半ぐらいで孵化する。約2 ヶ月から2 ヶ月半を要して雛は巣立ち、その後3 カ月近くも親のなわばり内ですごす鳥。^{鳥 2)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-60 に示す。

現地調査では、定点観察（猛禽類）により計5 地点、5 個体が確認された。確認された環境は、樹林上空等であった。確認時期は平成31 年2 月～3 月、令和元年6 月及び令和5 年8 月であった。

表 5.1.6-60 クマタカの確認状況

確認状況	地点数	個体数
平成31 年2 月～3 月、令和元年6 月及び令和5 年8 月に、樹林上空等の5 地点で、5 個体を確認。	5	5

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林の上空であった。

既存の生態情報によれば、「山岳森林帯に周年生息し、小型～中型のさまざまな動物を捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

q) オオコノハズク

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：指定希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危惧種

オオコノハズクは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、伊吹山地、鈴鹿山脈に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長 23～25cm。^{鳥 1)}全身が樹皮のような茶色で目立たない。^{鳥 1)}虹彩はオレンジ色。^鳥

¹⁾ 低地や低山帯のいろいろなタイプの樹林にすみ、常緑広葉樹林、浴葉広葉樹林、針葉樹林、竹林、大きい木のある公園、社寺林などに現れる。^{鳥 2)}日中は茂った針葉樹の中で休息する。^{鳥 2)}夜行性で、主にネズミ、ヒミズ、モグラなどの小型哺乳類、トカゲ、ムカデ、セミなどの昆虫を捕食するが、時には小鳥も捕食する。^{鳥 1)}繁殖時期は 4～7 月で、大木の樹洞に営巣し、産卵数は 4～9 個。^{鳥 1)}孵化後約 1 か月で巣立つ。^{鳥 1)}北方の個体群は冬期には温暖な地方に移動する。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-61 及び図 5.1.6-43 に示す。

現地調査では、無人カメラ撮影により計 2 地点、延 2 個体が確認された。確認された環境は、樹林沢沿いであった。確認時期は令和 5 年 12 月及び令和 6 年 1 月であった。

表 5.1.6-61 オオコノハズクの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 12 月及び令和 6 年 1 月に、樹林沢沿いの 2 地点で、計 2 個体を確認。	2	2

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、沢沿いの樹林であった。

既存の生態情報によれば、「低地や低山帯のいろいろなタイプの樹林にすみ、常緑広葉樹林、浴葉広葉樹林、針葉樹林、竹林、大きい木のある公園、社寺林などに現れる。日中は茂った針葉樹の中で休息する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

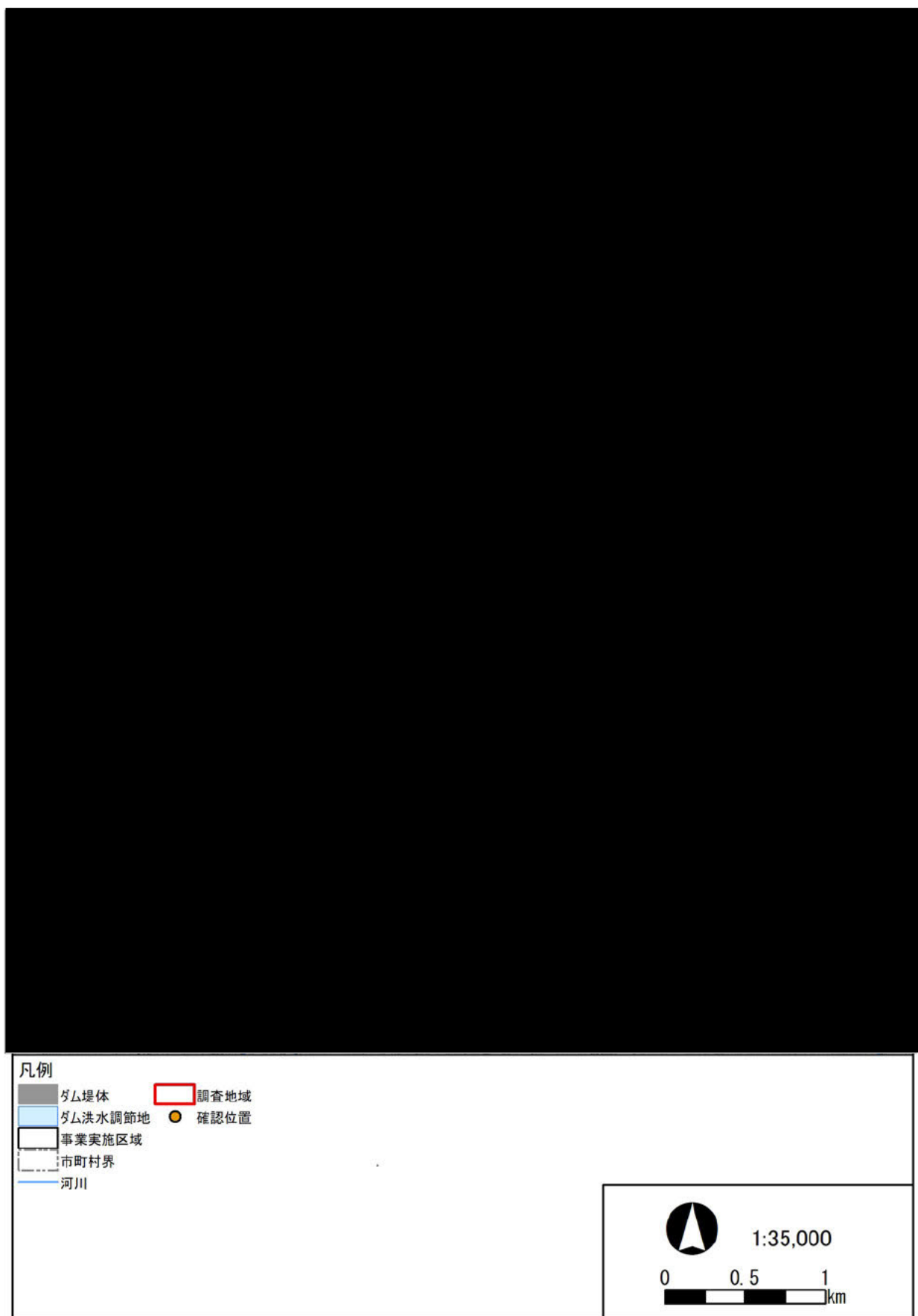


図 5.1.6-43 オオコノハズク確認地点

r) フクロウ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

フクロウは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、域の山地・丘陵地・平地に分布し、大津市、守山市、水口町、土山町、甲賀町、日野町、蒲生町、能登川町、浅井町、湖北町、高月町、木之本町、高島町で繁殖の記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長が約 50cm の中型のフクロウ。^{鳥 1)} 低地、低山帯から亜高山帯にかけて、いろいろなタイプの樹林にすみ、とくに大きい樹木のある落葉広葉樹林や針広混交林を好む。^{鳥 2)} 濃密に茂った針葉樹林でも見られる。^{鳥 2)} 待ち伏せ型のハンティングを行い、主に小型の哺乳類を捕食する。^{鳥 1)} 2～3 月に枯れ木の洞に営巣し、3～4 個産卵する。^{鳥 1)} 県内でも、平地の社寺林、丘陵地から山間部に周年生息し、主に樹洞に営巣する。^{鳥 1)} 石垣や家屋の屋根裏、巣箱などに営巣することもある。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-62 及び図 5.1.6-44 に示す。

現地調査では、夜間調査により計 2 地点、延 2 個体が確認された。確認された環境は、樹林であった。確認時期は令和 5 年 5 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-62 フクロウの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月及び 9 月に、樹林の 2 地点で、計 2 個体を確認。	2	2

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林であった。

既存の生態情報によれば、「低地、低山帯から亜高山帯にかけて、いろいろなタイプの樹林にすみ、とくに大きい樹木のある落葉広葉樹林や針広混交林を好む。県内でも、平地の社寺林、丘陵地から山間部に周年生息し、主に樹洞に営巣する。石垣や家屋の屋根裏、巣箱などに営巣することもある。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

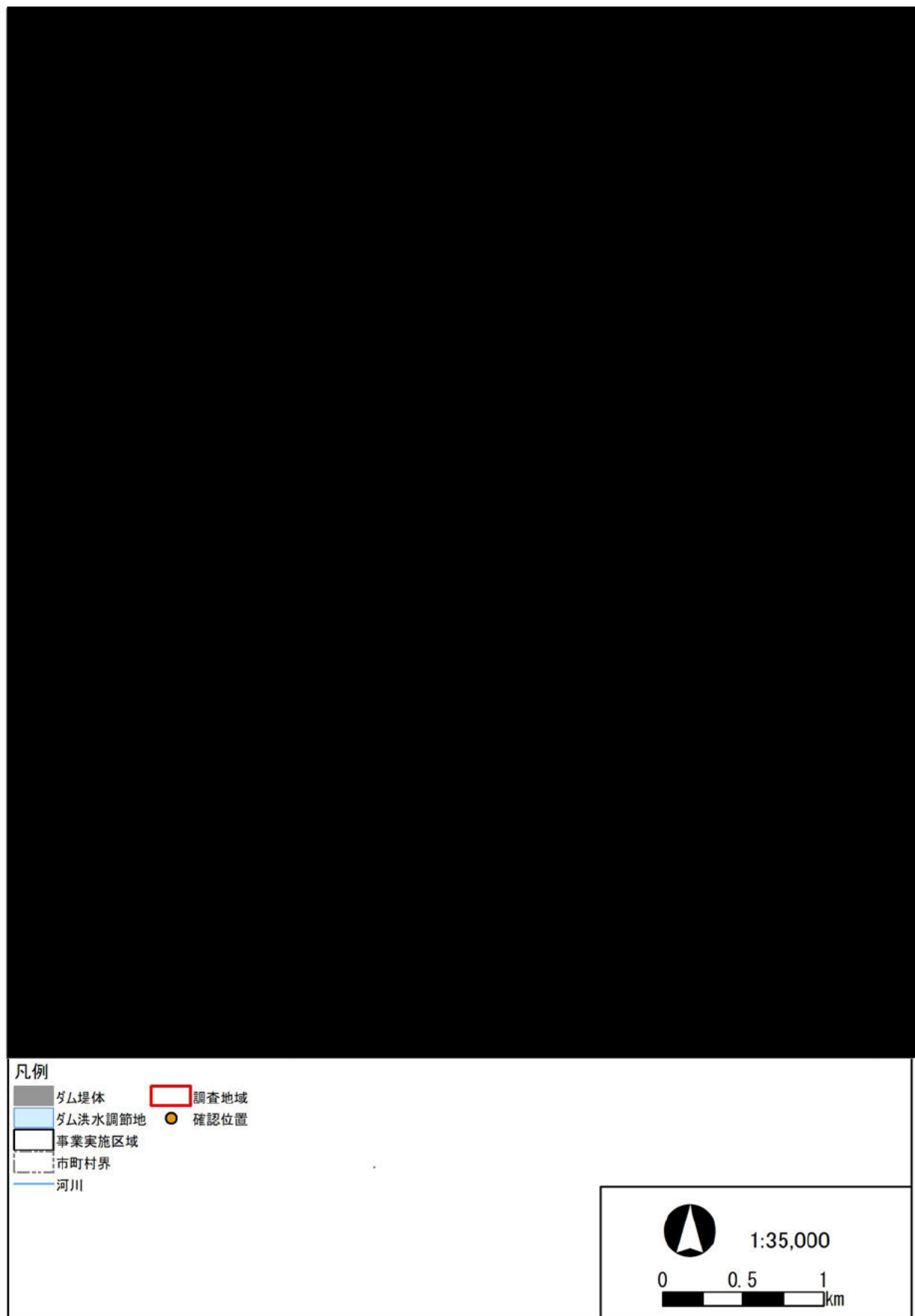


図 5.1.6-44 フクロウ確認地点

s) アカショウビン

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

アカショウビンは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、鈴鹿山脈、伊吹山地、野坂・三国山地に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 27cm。鳥¹⁾全体が鮮やかな赤褐色で、腰の中央にルリ色の羽毛がある。鳥¹⁾嘴が太く長く、脚は短い。鳥¹⁾日本には夏鳥として渡来し、山地の大木の朽木などが散在するよく茂った落葉広葉樹林で繁殖する。鳥¹⁾溪流や山地の池沼、湿地などでカエル、サワガニ、カタツムリ、昆虫などを捕食する。鳥¹⁾県内には 4 月下旬に渡来し、深山に生息する。鳥¹⁾主に溪流沿いで特徴のある声を聞くことが多い。鳥¹⁾6～8 月に朽木や大型のハチの巣等に穴を掘って巣をつくり営巣する。鳥¹⁾「キョロロロロ…」とよく目立つ声でさえずり、特に雨の前後に聞かれることから「雨乞い鳥」などの呼び名がある。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-63 及び図 5.1.6-45 に示す。

現地調査では、直接観察により計 1 地点、1 個体が確認された。確認された環境は、樹林であった。確認時期は令和 5 年 6 月であった。

表 5.1.6-63 アカショウビンの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 6 月に、樹林の 1 地点で、1 個体を確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林であった。

既存の生態情報によれば、「夏鳥として渡来し、山地の大木の朽木などが散在するよく茂った落葉広葉樹林で繁殖する。溪流や山地の池沼、湿地などでカエル、サワガニ、カタツムリ、昆虫などを捕食する。県内には 4 月下旬に渡来し、深山に生息する。主に溪流沿いで特徴のある声を聞くことが多い。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「川辺林」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

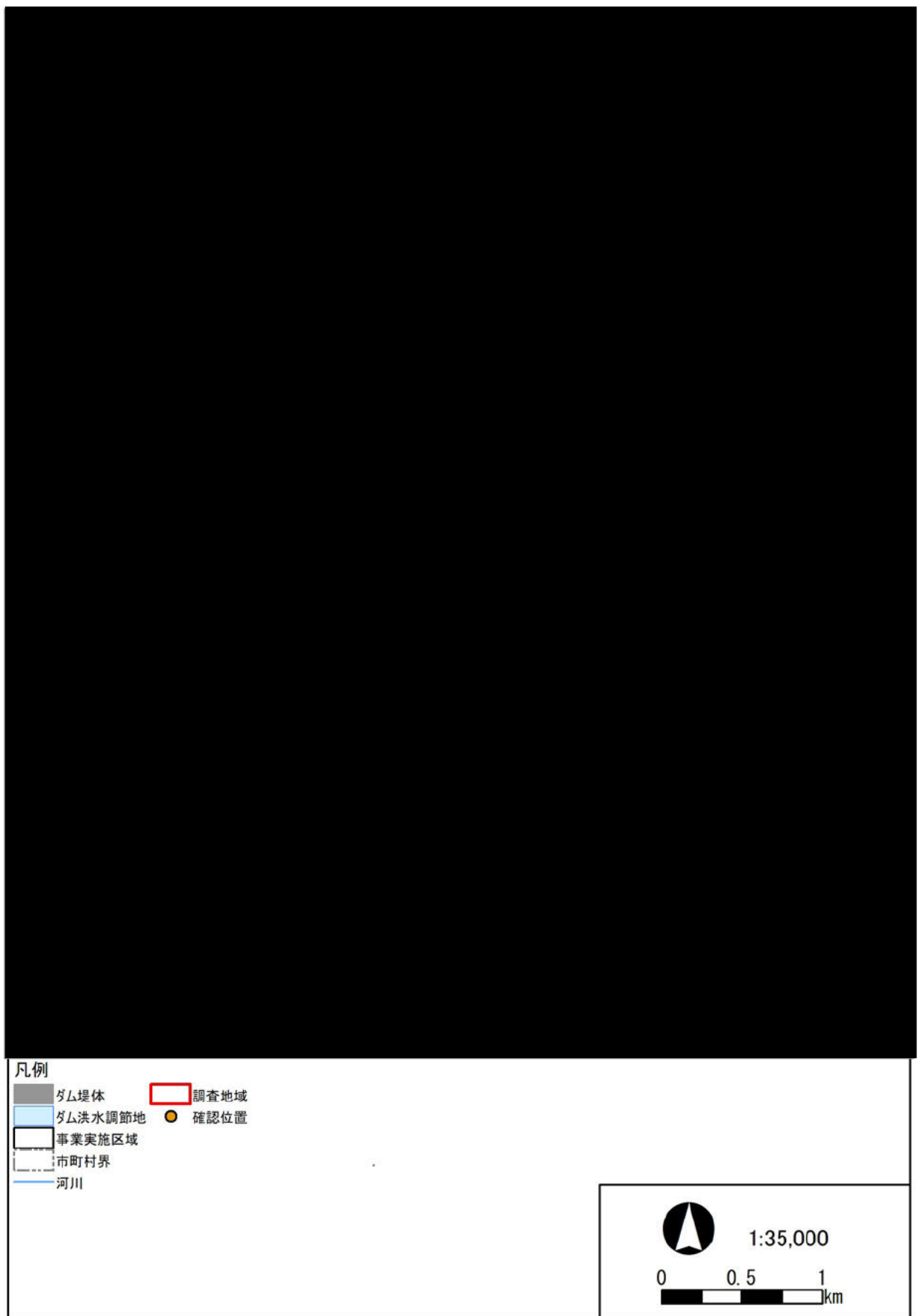


図 5.1.6-45 アカショウビン確認地点

t) カワセミ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：地域種

カワセミは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 17cm。^{鳥 1)} 上面は金属光沢のある瑠璃色で、特に背、上尾筒は金属光沢が強い。

^{鳥 1)} 下面はオレンジ色で、目の周囲に模様がある。^{鳥 1)} 全国に生息するが、北方のものは冬期南方に移動する。^{鳥 1)} 県内では周年みられ、ため池や河川、琵琶湖湖岸に生息する。

^{鳥 1)} 冬期は、街中の小さな水路などでもみられることがある。^{鳥 1)} 河川やため池、湖岸などの水辺で生活し、杭や木、岩などにとまって水中の動物を探し、ダイビングして捕らえる。^{鳥 1)} ときには空中で止まる停空飛翔を行い、そこからダイビングする。^{鳥 1)} 4～8 月にかけて崖など土が露出したところに穴を掘って巣をつくり、繁殖する。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-64 及び図 5.1.6-46 に示す。

現地調査では、直接観察及びラインセンサス法により計 70 地点、延 70 個体が確認された。確認された環境は、大戸川や田代川であった。確認時期は令和 4 年 12 月、令和 5 年 1 月～5 月、6 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-64 カワセミの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 4 年 12 月、令和 5 年 1 月～5 月、6 月及び 9 月、大戸川や田代川の 70 地点で、計 70 個体を確認。[]では営巣地を 1 箇所確認。	70	70

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、河川であった。

既存の生態情報によれば、「県内では周年みられ、ため池や河川、琵琶湖湖岸に生息する。冬期は、街中の小さな水路などでもみられることがある。河川やため池、湖岸などの水辺で生活し、杭や木、岩などにとまって水中の動物を探し、ダイビングして捕らえる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「川辺林」、「草地（河原・池沼植生）」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

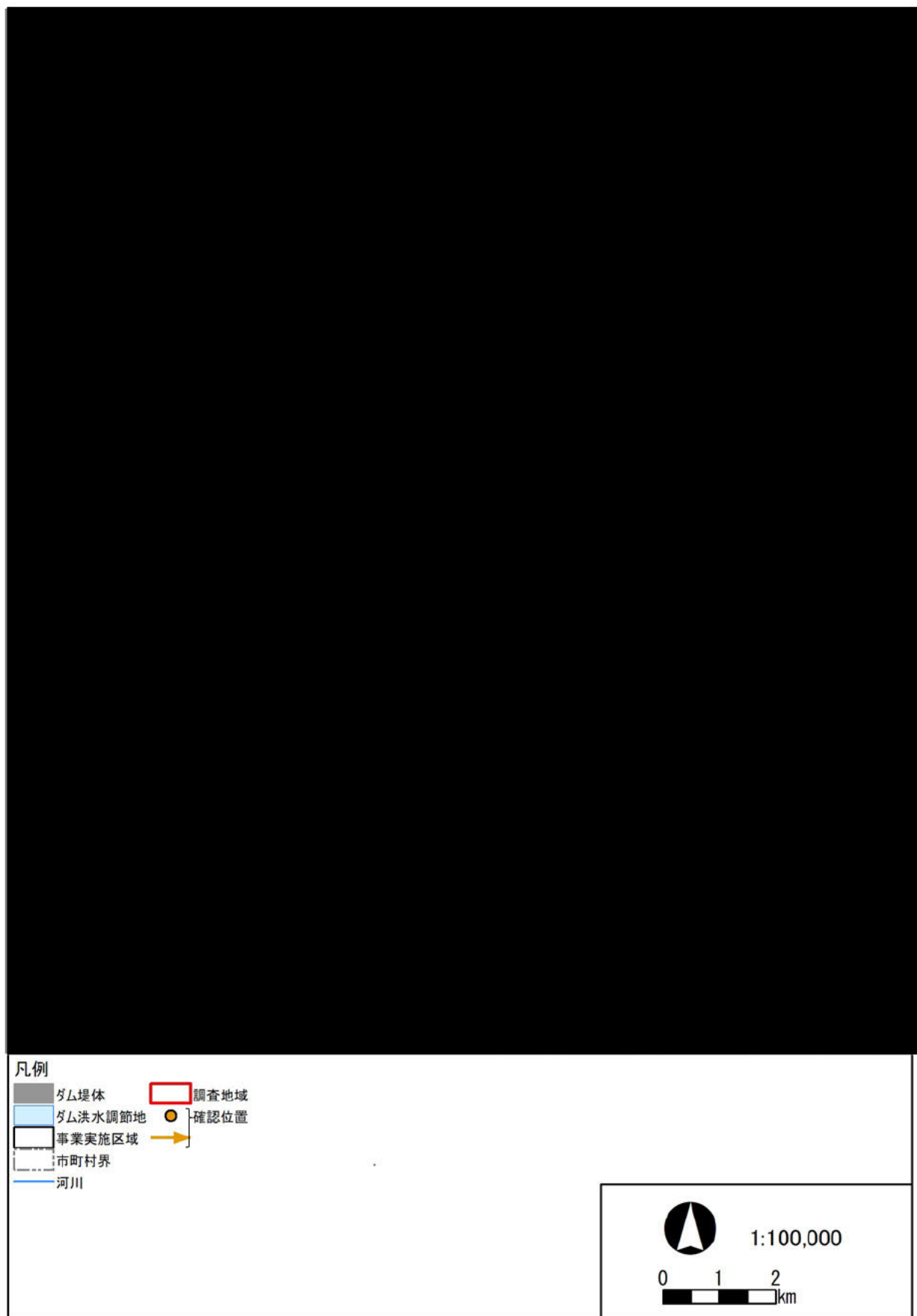


図 5.1.6-46 カワセミ確認地点

u) ヤマセミ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危惧種

「滋賀県条例」：指定希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危惧種

ヤマセミは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、大津市、土山町、甲南町、信楽町、日野町、永源寺町、多賀町、木之本町、余呉町、西浅井町、朽木村、高島町に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 38cm、全体は青灰色に黒白の斑点が入った鹿の子模様の大型のカワセミ類。^{鳥 1)}頭上には大きな冠羽がある。^{鳥 1)}山地から山麓の溪流や河川、湖沼に単独もしくはつがいいで周年生息する。^{鳥 1)}餌は主に魚類で、水面上に突き出た枝などに止まり、魚をみつけると急降下して水中に飛び込み捕らえる。^{鳥 1)}繁殖期は3～7月。^{鳥 1)}河川や湖沼に近い土の崖に横穴を掘って巣をつくり、巣穴の中で雛を育てる。^{鳥 1)}県内では主要河川の中流域から上流域や山間部のダム湖などに生息し繁殖する。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-65 及び図 5.1.6-47 に示す。

現地調査では、直接観察により計3地点、延3個体が確認された。確認された環境は、大戸川であった。確認時期は令和4年12月及び令和5年4月であった。

表 5.1.6-65 ヤマセミの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和4年12月及び令和5年4月に、大戸川の3地点で、計3個体を確認。	3	3

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、河川であった。

既存の生態情報によれば、「山地から山麓の溪流や河川、湖沼に周年生息する。餌は主に魚類で、水面上に突き出た枝などに止まり、魚をみつけると急降下して水中に飛び込み捕らえる。県内では主要河川の中流域から上流域や山間部のダム湖などに生息し繁殖する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「川辺林」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

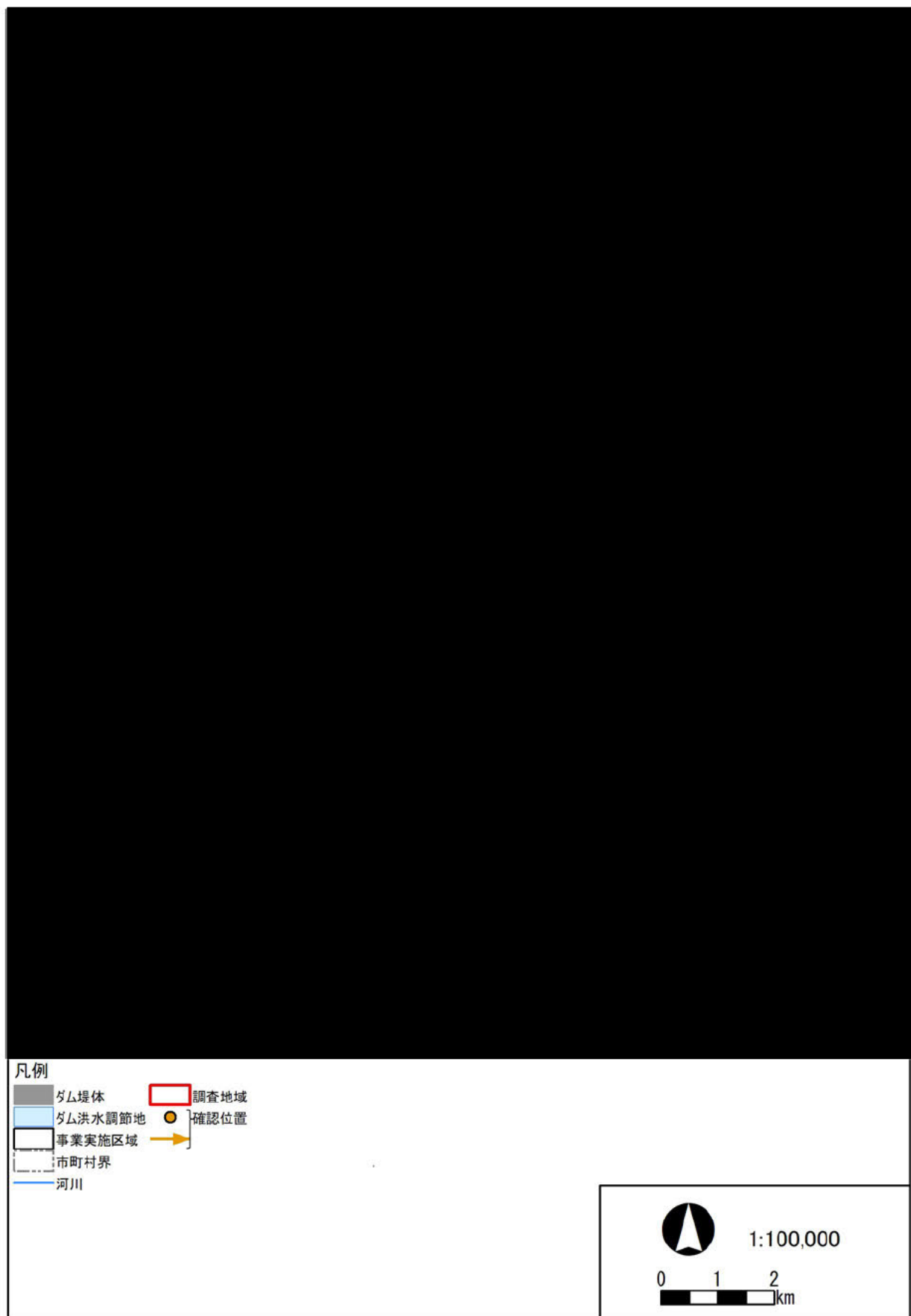


図 5.1.6-47 ヤマセミ確認地点

v) オオアカゲラ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

オオアカゲラは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の丘陵地・山地に分布し、大津市、草津市、栗東市、土山町、甲賀市、信楽町、日野町、永源寺町、多賀町、伊吹町、米原町、浅井町、湖北町、余呉町、西浅井町、朽木村に記録がある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 28cm。鳥¹⁾黒と白と赤の中型のキツツキ類で、背と尾は黒く、翼には白い横斑が入る。鳥¹⁾胸は白く腹は赤い。鳥¹⁾脇には黒い縦斑が入る。鳥¹⁾雄は頭部が赤く、雌は黒い。鳥¹⁾「キョッキョッ」とアカゲラとよく似た声で鳴く。鳥¹⁾日本には周年生息する。鳥¹⁾落葉広葉樹林や針広混交林で、大木の枯れ木がある環境を好む。鳥¹⁾枯れ木をつついてカミキリやその幼虫を捕食する。鳥¹⁾飛び方は大きい波形で力強く飛ぶ。鳥¹⁾県内では、繁殖は3～6月頃で、大きな枯れ木に深さ 40cm くらいの巣穴を掘って雛を育てる。鳥¹⁾縄張り性が強く、約 200ha もの広大な縄張りを持つ。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-66 及び図 5.1.6-48 に示す。

現地調査では、直接観察及び定点観察法により計 11 地点、延 13 個体が確認された。確認された環境は、樹林等であった。確認時期は令和 5 年 1 月、5 月～6 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-66 オオアカゲラの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月、5 月～6 月及び 9 月に、樹林等の 11 地点で、計 13 個体を確認。	11	13

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林等であった。

既存の生態情報によれば、「周年生息する。落葉広葉樹林や針広混交林で、大木の枯れ木がある環境を好む。枯れ木をつついてカミキリやその幼虫を捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」と推定される。



図 5.1.6-48 オオアカゲラ確認地点

w) アカゲラ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

アカゲラは、日本では北海道から本州まで分布する。鳥²⁾

(ii) 生態

北海道から本州の平地から山地の森林に生息し、四国でも少数が生息する。鳥⁷⁾ 北方のものは、冬季、南へ移動する。鳥⁷⁾ 渡りの時期には河畔林や市街地の公園の林などにも現れる。鳥⁷⁾ 樹木の幹から大枝にかけてよじ登りながら、樹皮の表面や割れ目、とくに枯死部で採食する。鳥²⁾ 生木の枯れた枝や、枯れ木の材、地上に落ちている枯れ枝などを好み、くちばしで叩いてほじくり、枯死材の中にいる甲虫の幼虫をとり出す。鳥²⁾ アリ類や鱗翅類の幼虫も食べる。鳥²⁾ 植物質ではヌルデやウルシの実、ノイバラやヤマブドウなどの果実、ときには人家に残ったカキの実を食べる。鳥²⁾ 繁殖期は5～7月ごろ、一夫一妻で繁殖する。鳥²⁾ 枯れ木や枯れた大枝に、雌雄共同で樹洞を掘って巣にするが、何年も同じ木に穴を掘ることが多く、雄のほうが雌より多く作業をする。鳥²⁾ 1 巣卵数は4～6 個、雌雄交替で抱卵し、14～16 日で孵化する。鳥²⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-67 及び図 5.1.6-49 に示す。

現地調査では、ラインセンサス法及び定点観察（猛禽類）により計1 地点、1 個体が確認された。確認された環境は、樹林であった。確認時期は令和5 年1 月であった。

表 5.1.6-67 アカゲラの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5 年1 月に、樹林の1 地点で、1 個体を確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林であった。

既存の生態情報によれば、「平地から山地の森林に生息し、渡りの時期には河畔林や市街地の公園の林などにも現れる。樹木の幹から大枝にかけてよじ登りながら、樹皮の表面や割れ目、とくに枯死部で採食する。枯死材の中にいる甲虫の幼虫をとり出す。アリ類や鱗翅類の幼虫も食べる。植物質ではヌルデやウルシの実、ノイバラやヤマブドウなどの果実、ときには人家に残ったカキの実を食べる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」と推定される。

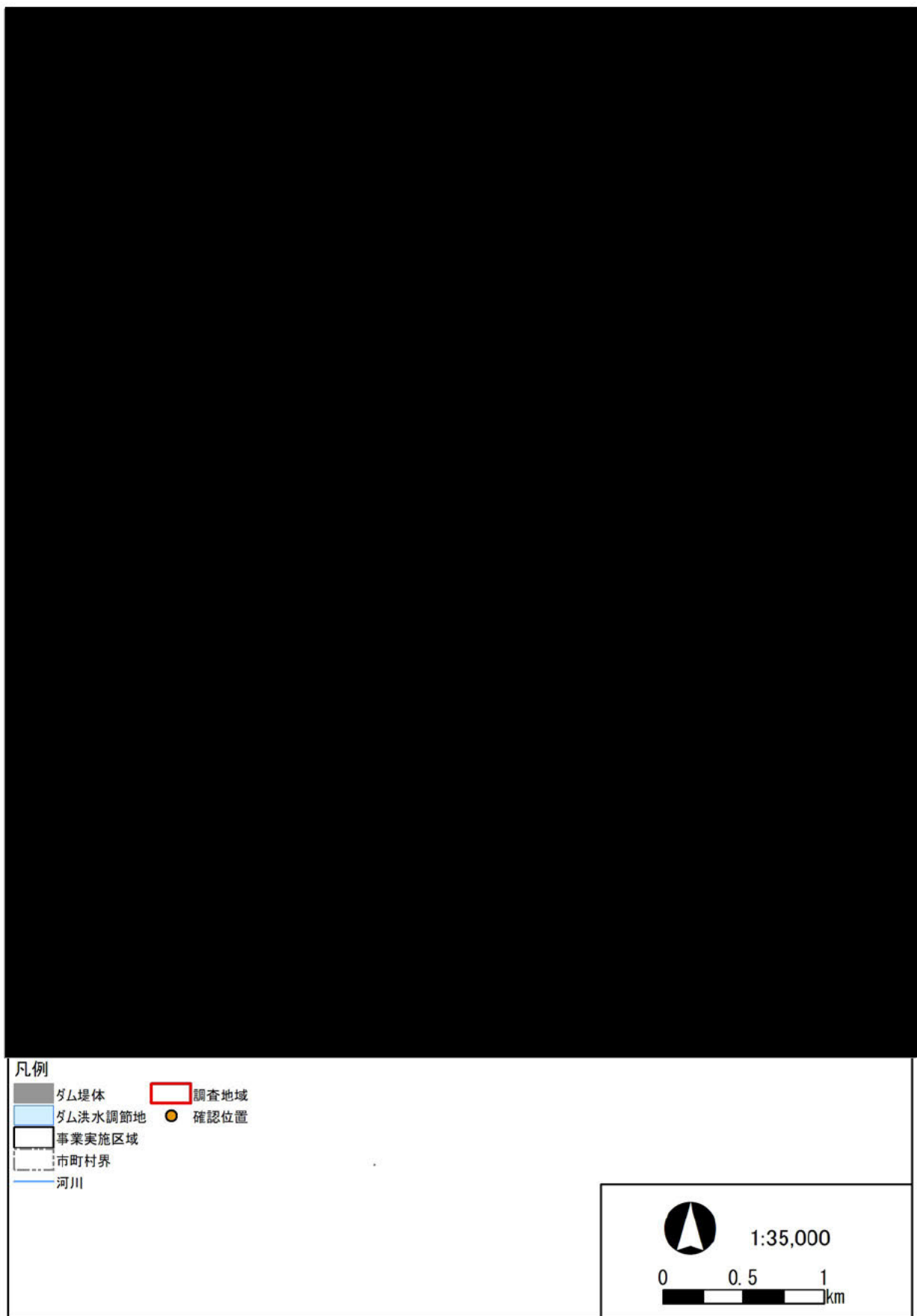


図 5.1.6-49 アカゲラ確認地点

x) アオゲラ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

アオゲラは、日本では留鳥として本州から九州、種子島、屋久島に分布する。鳥⁷⁾日本固有種。鳥⁷⁾

(ii) 生態

平地から山地の林に分布する。鳥⁷⁾樹幹を下から上へよじ登りながら採食する。鳥²⁾昆虫、甲虫の幼虫・成虫、クモ、ムカデなどを食べる。鳥²⁾地上でアリを盛んに舐めとる。鳥²⁾また小枝に止まって果実も食べる。鳥²⁾繁殖期は4～6月、一夫一妻で繁殖する。鳥²⁾巣は主に下枝のない生木の樹幹に樹洞を掘ってつくり高さは地上2～5m。鳥²⁾1巣卵数は7～8個、雌雄交代で抱卵し、育雛も雌雄共同で行う。鳥²⁾くわしい生態はまだ分かっていない。鳥²⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-68 及び図 5.1.6-50 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び定点観察法により計 36 地点、延 39 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部等であった。確認時期は令和 5 年 1 月、5 月～6 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-68 アオゲラの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月、5 月～6 月及び 9 月に、樹林や林縁部等の 36 地点で、計 39 個体を確認。	36	39

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部等であった。

既存の生態情報によれば、「平地から山地の林に分布する。樹幹を下から上へよじ登りながら採食する。昆虫、甲虫の幼虫・成虫、クモ、ムカデなどを食べる。地上でアリを盛んに舐めとる。また小枝に止まって果実も食べる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」と推定される。

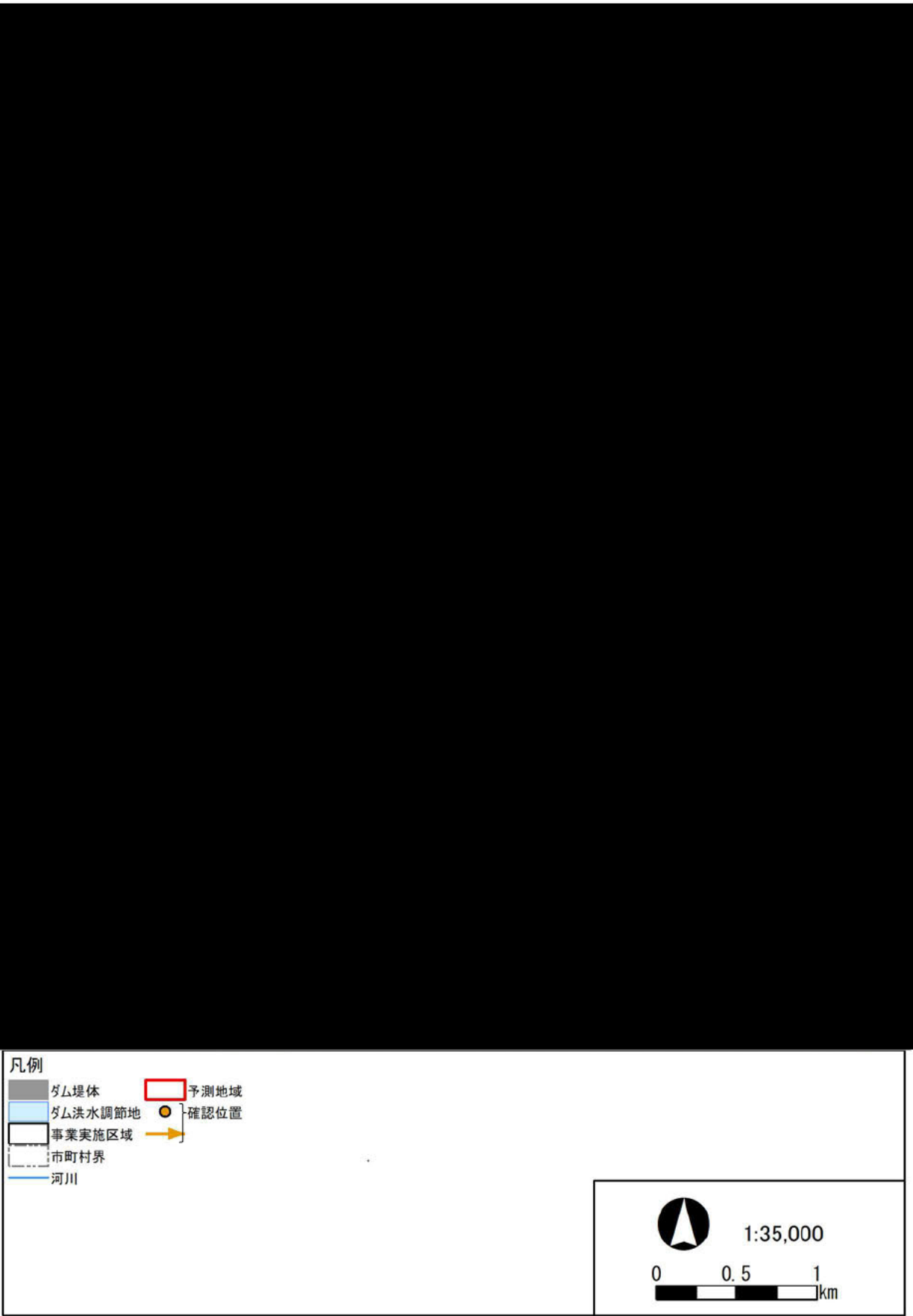


図 5.1.6-50 アオゲラ確認地点

y) ハヤブサ

(i) 重要性

「種の保存法」：国内希少野生動植物種

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧 II 類

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

ハヤブサは、日本では留鳥。鳥¹⁾北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長雄 38～45 cm、雌 46～51 cm。鳥¹⁾成鳥の上面は灰色がかった濃い青色で、頭部は黒色。鳥¹⁾頬には黒いヒゲ状の模様がある。鳥¹⁾下面は白色。鳥¹⁾翼の先端は尖る。鳥¹⁾主に断崖絶壁が連なる海岸地帯に生息し、断崖や岩場のある海岸沿いや大きな河川、湖沼周辺で繁殖する。鳥¹⁾主に小型～中型の鳥類を猛烈なスピードで急襲して捕える。鳥¹⁾産卵時期は 3～4 月で、産卵数は 3～4 個、抱卵期間は 24～34 日間。鳥¹⁾孵化後 35～42 日で巣立つ。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-69 に示す。

現地調査では、直接観察及び定点観察（猛禽類）により計 194 地点、延 194 個体が確認された。確認された環境は、樹林及び樹林上空、岩場等であった。確認時期は平成 31 年 2 月～令和元年 8 月及び令和 5 年 1 月～8 月であった。

表 5.1.6-69 ハヤブサの確認状況

確認状況	地点数	個体数
平成 31 年 2 月～令和元年 8 月及び令和 5 年 1 月～8 月に、樹林及び樹林上空、岩場等の 194 地点で、計 194 個体を確認。調査地区内で営巣地を 1 箇所確認。	194	194

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部等であった。

既存の生態情報によれば、「主に断崖絶壁が連なる海岸地帯に生息し、断崖や岩場のある海岸沿いや大きな河川、湖沼周辺で繁殖する。主に小型～中型の鳥類を猛烈なスピードで急襲して捕える。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「川辺林」、「草地（高茎草地）」、「自然裸地」と推定される。

なお、確認地点については重要な種の保全の観点から示していない。

z) ヤイロチョウ

(i) 重要性

「種の保存法」：国内希少野生動植物種

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧ⅠＢ類

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：危機的絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少種

ヤイロチョウは、日本では本州中南部、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、湖東地方、湖北地方、湖西地方に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 18cm。鳥¹⁾雌雄同色。鳥¹⁾背面は緑とコバルトブルーで、下面は淡黄色で下腹部は赤く、美しい色彩の鳥。鳥¹⁾頭部が大きく、尾は短い。鳥¹⁾黒い過眼線が目立ち、飛ぶと初列風切基部に白斑が出る。鳥¹⁾西南日本に夏鳥として渡来する。鳥¹⁾シイ、カシあるいはタブノキなどの常緑広葉樹林、人工的なスギ・ヒノキ林、また急峻な溪谷や沢筋に沿う常緑広葉樹林、マツ林、針広混交林などにすむ。鳥²⁾林床はむしろ湿っぽくて藪が茂り、落ち葉が豊富な林を好む。鳥²⁾巣を置く場所は南面した 40～45 度ぐらいの傾斜地や急斜面、あるいは崖の斜面などで樹林に覆われた薄暗い場所であるが、藪の場合はむしろ疎らで見通しのよいところである。鳥²⁾地上でミミズや昆虫などを捕食する。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-70 及び図 5.1.6-51 に示す。

現地調査では、無人カメラ撮影により計 1 地点、1 個体が確認された。確認された環境は、樹林沢沿いであった。確認時期は令和 5 年 9 月であった。

表 5.1.6-70 ヤイロチョウの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 9 月に、樹林沢沿いの 1 地点で、1 個体を確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、沢沿いの樹林であった。

既存の生態情報によれば、「夏鳥として渡来する。シイ、カシあるいはタブノキなどの常緑広葉樹林、人工的なスギ・ヒノキ林、また急峻な溪谷や沢筋に沿う常緑広葉樹林、マツ林、針広混交林などにすむ。地上でミミズや昆虫などを捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」と推定される。

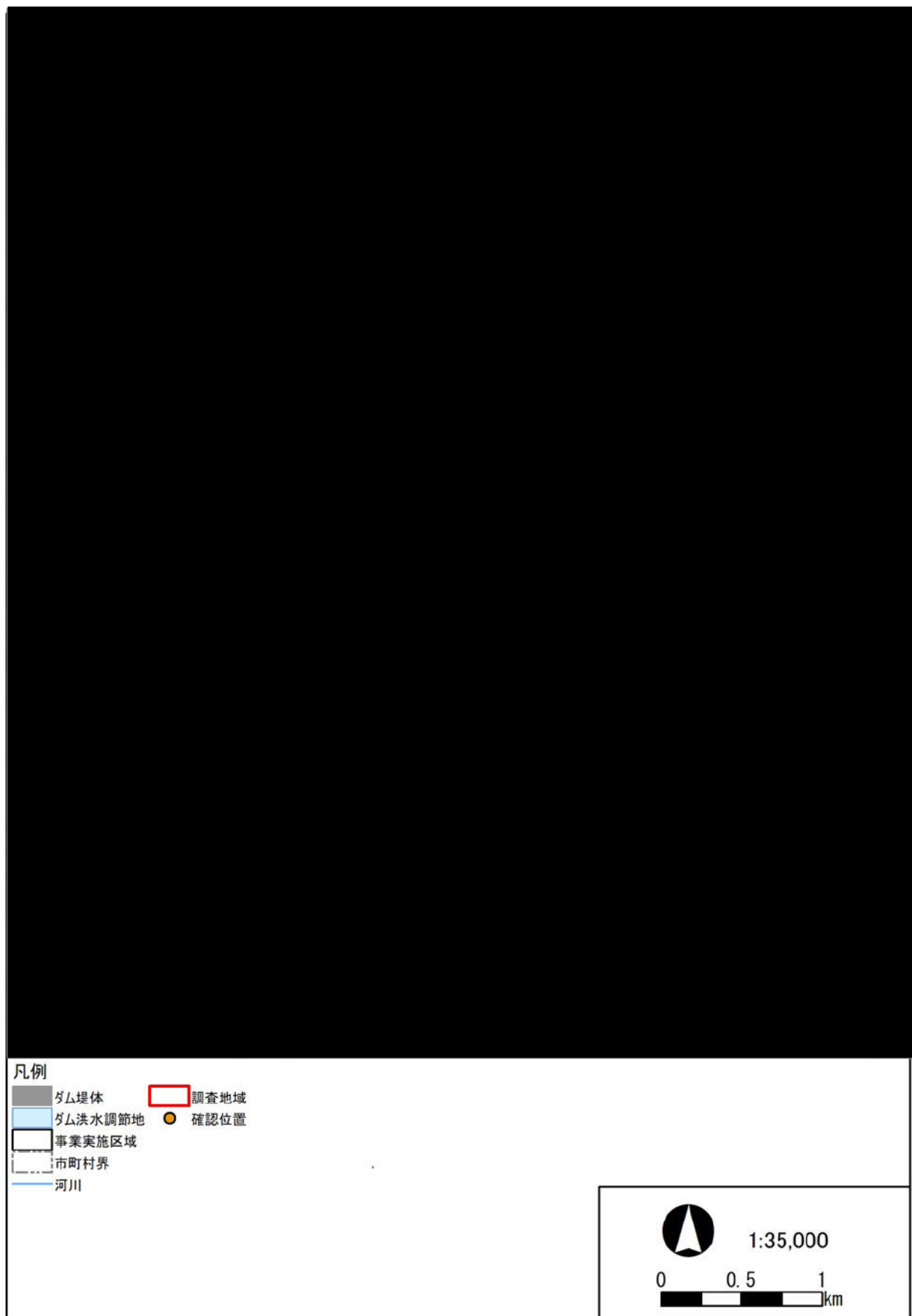


図 5.1.6-51 ヤイロチョウ確認地点

aa) サンショウクイ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：絶滅危惧 II 類

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

サンショウクイは、日本では本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地・丘陵地に分布する。鳥¹⁾大津市、志賀町、草津市、栗東市、土山町、甲賀町、甲南町、信楽町、日野町、永源寺町、愛東町、彦根市、多賀町、山東町、伊吹町、米原町、浅井町、湖北町、木之本町、余呉町、西浅井町、マキノ町、今津町、朽木村、安曇川町、高島町に記録がある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 20cm。鳥¹⁾雌雄同色。鳥¹⁾体は細く尾は長めで、頭は黒、背面は灰色、下面は白く、全身が白黒でスマートにみえる。鳥¹⁾県内には夏鳥として 4 月下旬に渡来し、山麓から山地の落葉広葉樹林に好んで生息する。鳥¹⁾樹齢が高い大径木の林を好み、山地に近い社寺林などで繁殖していることが多い。鳥¹⁾高い木の梢上を飛びながら「ヒリヒリン、ヒリヒリン」と繰り返しよくさえずる。鳥¹⁾餌は樹上で昆虫類やクモなどを採食する。鳥¹⁾繁殖期は 5～7 月、高い木の横枝に一見こぶのようにみえる碗型の巣をつくり、4～5 卵を産む。鳥¹⁾地上に降りることはほとんどなく、さえずりによって生息を確認することが多い。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-71 及び図 5.1.6-52 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び定点観察法により計 43 地点、延 46 個体が確認された。確認された環境は、樹林及び樹林上空等であった。確認時期は令和 5 年 5 月及び 6 月であった。

表 5.1.6-71 サンショウクイの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月及び 6 月に、樹林及び樹林上空等の 43 地点で、計 46 個体を確認。	43	46

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林及び樹林の上空等であった。

既存の生態情報によれば、「夏鳥として4月下旬に渡来し、山麓から山地の落葉広葉樹林に好んで生息する。樹齢が高い大径木の林を好み、山地に近い社寺林などで繁殖していることが多い。餌は樹上で昆虫類やクモなどを採食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

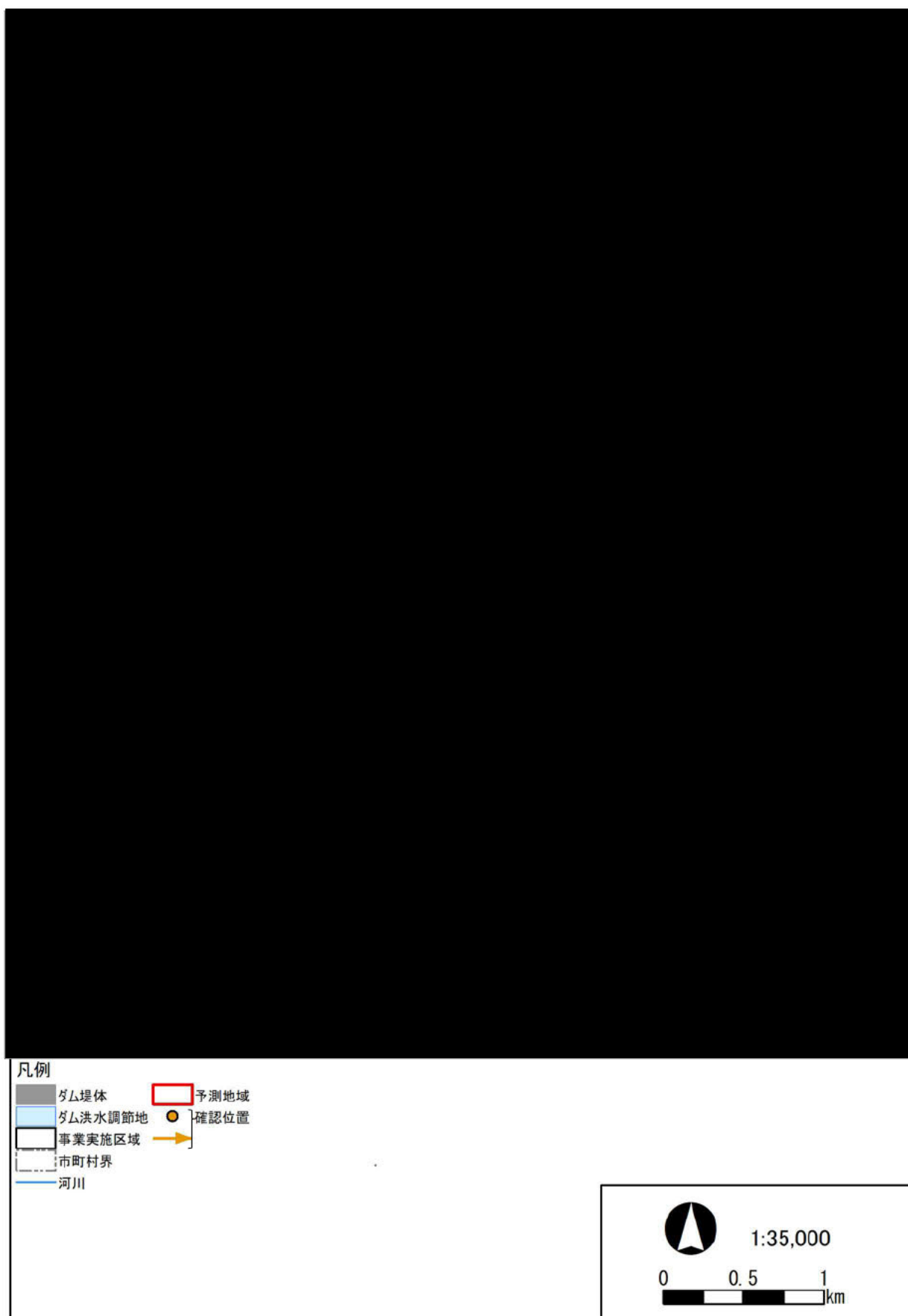


図 5.1.6-52 サンショウクイ確認地点

ab) サンコウチョウ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

サンコウチョウは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の丘陵地・山地に分布する。^{鳥 1)}大津市、栗東市、多賀町、朽木村等に記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長雄約 45cm、雌約 17.5cm。^{鳥 1)}頭部から胸が黒く、背は赤褐色で腹は白い。^{鳥 1)}目の周りと言はコバルトブルーの美しいヒタキの仲間。^{鳥 1)}雄も雌も尾羽は長く、特に雄の尾羽は 30cm を超える長さがある。^{鳥 1)}日本には夏鳥として渡来し、低山帯の落葉広葉樹林や常緑広葉樹林に生息する。^{鳥 1)}県内では、丘陵地から山地のよく茂った針広混交林で繁殖する。^{鳥 1)}雄は「ツキ、ヒ、ホシ、ホイホイホイ」と特徴的な声でさえずり、声から生息確認できることも多い。^{鳥 1)}餌は飛翔する昆虫類をフライングキャッチする。^{鳥 1)}5～7 月に高い木の横枝に円錐形の巣をつくる。^{鳥 1)}9 月には越冬地の東南アジアに向けて渡去する。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-72 及び図 5.1.6-53 に示す。

現地調査では、ラインセンサス法により計 1 地点、1 個体が確認された。確認された環境は、樹林であった。確認時期は令和 5 年 6 月であった。

表 5.1.6-72 サンコウチョウの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 6 月に、樹林の 1 地点で、1 個体を確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林であった。

既存の生態情報によれば、「夏鳥として渡来し、県内では、丘陵地から山地のよく茂った針広混交林で繁殖する。餌は飛翔する昆虫類をフライングキャッチする。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。



図 5.1.6-53 サンコウチョウ確認地点

ac) コシアカツバメ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：その他重要種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

コシアカツバメは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。鳥¹⁾比叡山、大津市、中主町、能登川町、彦根市、多賀町に集団繁殖地がある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 19cm。鳥¹⁾スズメよりやや大きいツバメの仲間。鳥¹⁾体の上面は光沢のある黒色で、尾羽の外側が長く燕尾型をしている。鳥¹⁾喉から下面全体と翼の下面は淡褐色で、細い縦斑がある。鳥¹⁾腰と顔の側面が赤褐色となるのが特徴。鳥¹⁾夏鳥で、春にツバメより遅く渡来する。鳥¹⁾昆虫食で、空中を飛びながら昆虫を捕える習性はツバメと変わらないが、2本の長い尾の先を平行に保ち、滑空を多くしてゆっくり飛ぶ。鳥²⁾ツバメと同様建造物に泥や枯れ草で巣をつくるが、巣の形はとっくり状で入口が狭い。鳥¹⁾コンクリートのビルや橋など大きな建造物に集団で営巣する。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-73 及び図 5.1.6-54 に示す。

現地調査では、直接観察及びラインセンサス法により計 2 地点、延 9 個体が確認された。確認された環境は、樹林上空や河川上空であった。確認時期は令和 5 年 9 月であった。

表 5.1.6-73 コシアカツバメの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 9 月に、樹林上空や河川上空の 2 地点で、計 9 個体を確認	2	9

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林の上空や河川の上空であった。

既存の生態情報によれば、「夏鳥で、春にツバメより遅く渡来する。ツバメと同様建造物に泥や枯れ草で巣をつくるが、巣の形はとっくり状で入口が狭い。コンクリートのビルや橋など大きな建造物に集団で営巣する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「自然裸地」、「人工裸地」、「市街地等」、「開放水域（本川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

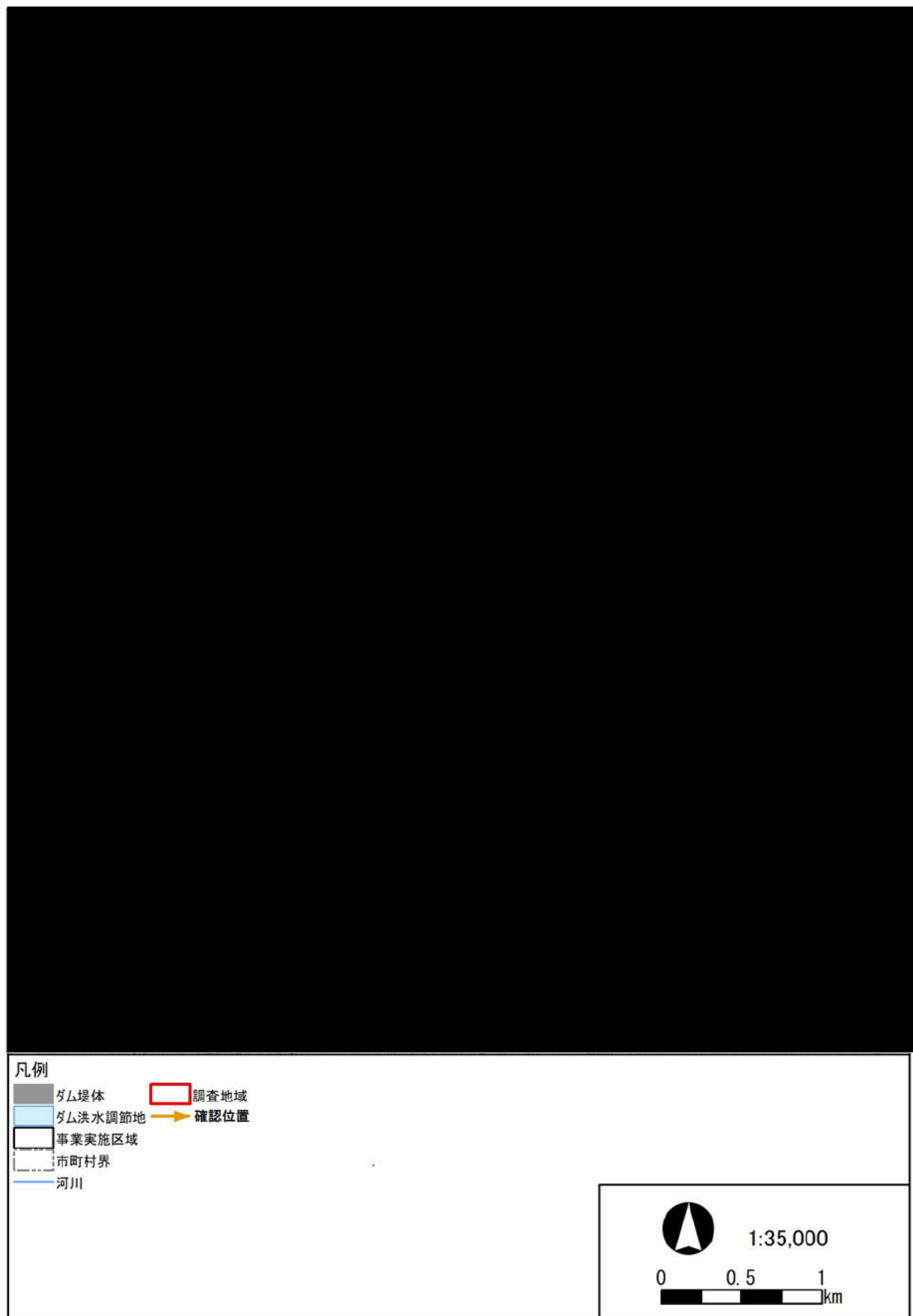


図 5.1.6-54 コシアカツバメ確認地点

ad) ヤブサメ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

ヤブサメは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。^{鳥 1)}大津市、栗東市、土山町、甲賀町、日野町、永源寺町、多賀町、米原市、長浜市、余呉町、マキノ町、今津町、朽木村で繁殖の記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 11cm。^{鳥 1)}雌雄同色。^{鳥 1)}全身が茶褐色で、淡色の眉斑が明瞭、尾が極端に短い。^{鳥 1)}薄暗い茂みを好んで生息するため、姿をみつけにくい。^{鳥 1)}ムシクイ類とよく似ているので、姿での識別は難しいが、繁殖期の「シシシシシ……」と虫のような特徴のあるさえずりで識別する。^{鳥 1)}県内には夏鳥として 4 月上旬から 5 月上旬にかけて渡来する。^{鳥 1)}低山帯の下層林がよく繁った薄暗い林に潜って生活し、繁みの中を枝移りしながら昆虫などを採食する。^{鳥 1)}繁殖期は 5～7 月で、木の根元や崖の凹みなどの地上に巣をつくり、5～7 卵を産む。^{鳥 1)}春秋の渡りの時期には、山麓の林や平地の公園などでも観測される。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-74 及び図 5.1.6-55 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び定点観察法により計 9 地点、延 9 個体が確認された。確認された環境は、樹林であった。確認時期は令和 5 年 5 月～6 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-74 ヤブサメの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月～6 月及び 9 月に、樹林の 9 地点で、計 9 個体を確認。	9	9

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林であった。

既存の生態情報によれば、「夏鳥として渡来する。低山帯の下層林がよく繁った薄暗い林に潜って生活し、繁みの中を枝移りしながら昆虫などを採食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「低木林」と推定される。

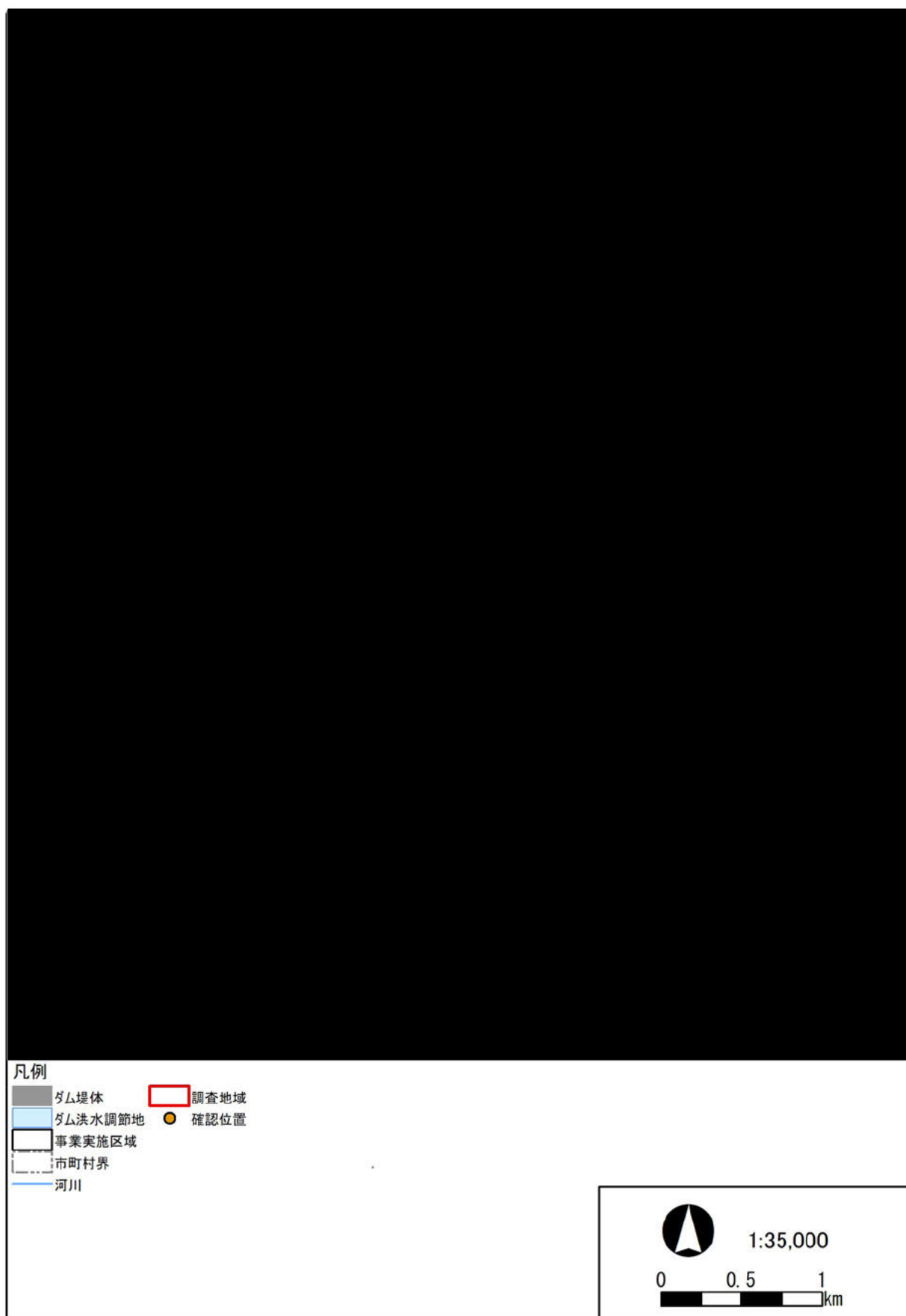


図 5.1.6-55 ヤブサメ確認地点

ae) エゾムシクイ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

エゾムシクイは、日本では夏鳥として北海道、本州中部以北、四国に分布する。鳥⁷⁾

(ii) 生態

雌雄同色。鳥⁷⁾頭頂は暗はい褐色で、背からの上面は緑褐色。鳥⁷⁾黄白色の翼帯が1～2本ある。鳥⁷⁾眉斑は白くて明瞭で、前方がバフ色みを帯びる。鳥⁷⁾過眼線は暗褐色。鳥⁷⁾体下面は汚白色で、黄色みはない。鳥⁷⁾嘴は黒褐色で、下嘴は先端を除き肉褐色。鳥⁷⁾足は明るい肉色。鳥⁷⁾亜高山帯の針葉樹林に生息する。鳥⁷⁾九州でも繁殖の可能性がある。鳥⁷⁾渡りの時期には各地の平地でもみられる。鳥⁷⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-75 及び図 5.1.6-56 に示す。

現地調査では、直接観察により計1地点、1個体が確認された。確認された環境は、樹林であった。確認時期は令和5年5月であった。

表 5.1.6-75 エゾムシクイの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年5月に、樹林の1地点で、1個体を確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林であった。

既存の生態情報によれば、「亜高山帯の針葉樹林に生息する。渡りの時期には各地の平地でもみられる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

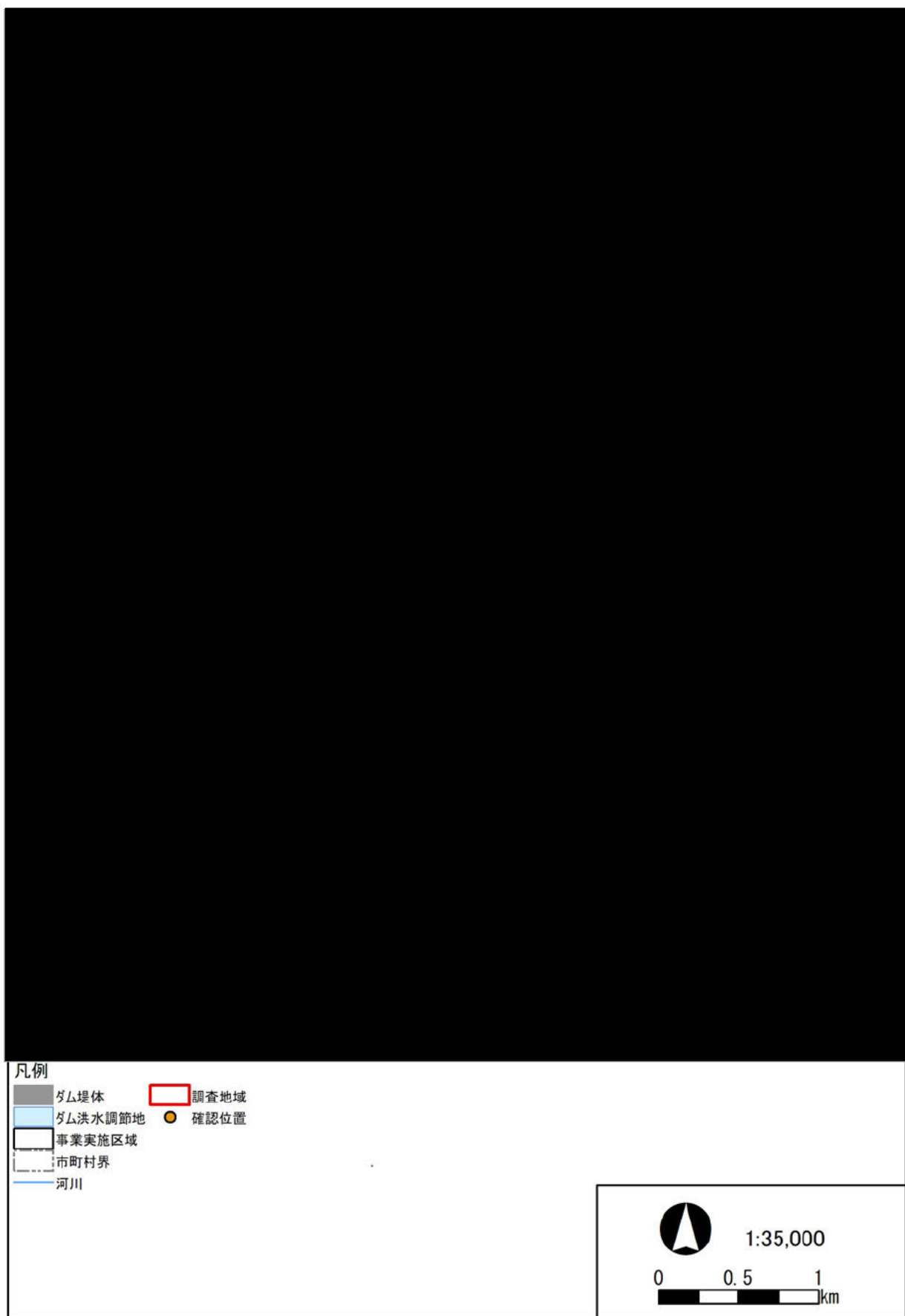


図 5.1.6-56 エゾムシクイ確認地点

af) センダイムシクイ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

センダイムシクイは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。^{鳥 1)}大津市、志賀町、栗東市、土山町、甲賀町、日野町、永源寺町、多賀町、伊吹町、米原町、浅井町、余呉町、マキノ町、今津町、朽木村で繁殖記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 13cm。^{鳥 1)}雌雄同色。^{鳥 1)}体の上面はやや緑がかったオリーブ褐色で、下面はくすんだ白地に黄白色の眉斑が目立つ。^{鳥 1)}他のムシクイ類と似ているが「チヨチヨビィー、チヨチヨビィー」と繰り返しさえすることで識別する。^{鳥 1)}県内には夏鳥として低山地の落葉広葉樹林に生息し、木の中を枝渡りしながら昆虫などを採食する。^{鳥 1)}5～7 月が繁殖期で、植物の根元や崖地の窪みなどに球状の巣をかけ 4～6 卵を産む。^{鳥 1)}春秋の渡り期には平地の林や湖畔林、公園なども通過する。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-76 及び図 5.1.6-57 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び定点観察法により計 36 地点、延 36 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部等であった。確認時期は令和 5 年 5 月～6 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-76 センダイムシクイの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月～6 月及び 9 月に、樹林や林縁部等の 36 地点で、計 36 個体を確認。	36	36

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部等であった。

既存の生態情報によれば、「夏鳥として低山地の落葉広葉樹林に生息し、木の中を枝渡りしながら昆虫などを採食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」と推定される。

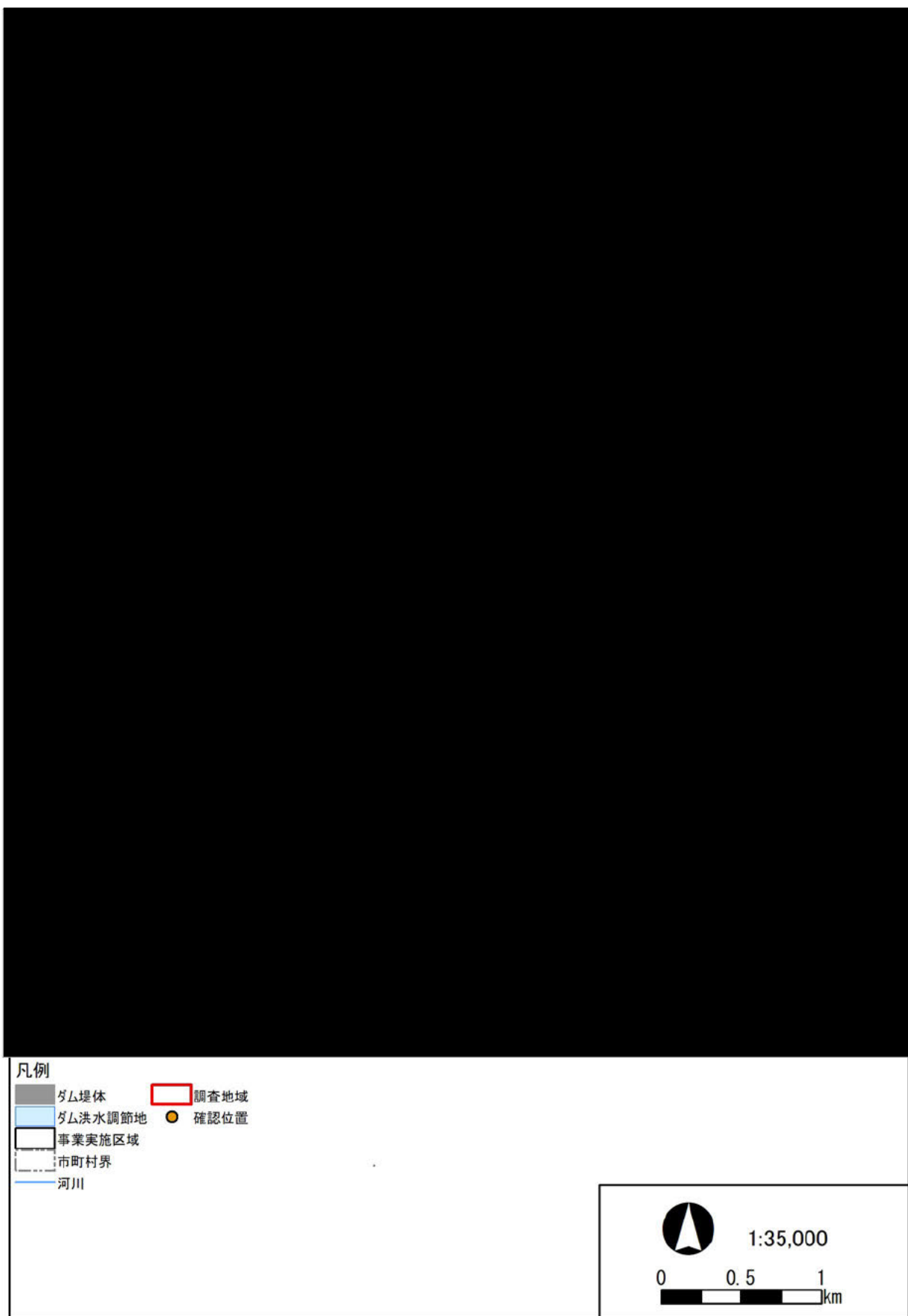


図 5.1.6-57 センダイムシクイ確認地点

ag) キバシリ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

キバシリは、日本では本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、大津市、志賀町、栗東市、余呉町、今津町、朽木村で記録がある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 14cm。鳥¹⁾雌雄同色。鳥¹⁾体の上面は褐色地に灰白色のまだら模様で、樹皮に似た保護色をしている。鳥¹⁾下面は喉から腹は白い。鳥¹⁾細長く下に湾曲した嘴を樹皮の隙間に入れて、昆虫や蜘蛛を採食する。鳥¹⁾尾羽はキツツキに似て羽軸が硬く、大木の幹に垂直に止まったり、螺旋状に移動したりする。鳥¹⁾地上に降りることはない。鳥¹⁾低山帯上部から亜高山帯にかけての樹林にすみ、ブナやハルニレのような落葉広葉樹林、モミ、シラビソ、 トウヒ、コメツガなどの針葉樹林など、比較的大きい樹木の多い林や、霧が多くて地衣類が発達した林を好む。鳥²⁾県内では、山地の針葉樹と落葉樹の混交林に周年生息し、繁殖している。鳥¹⁾木の割れ目や樹洞に椀状の巣をつくり、4～5 卵を産む。鳥¹⁾冬期もあまり長距離移動はしないが、やや標高の低い場所に移動し、カラ類の群れに混ざっていることもある。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-77 及び図 5.1.6-58 に示す。

現地調査では、直接観察及び定点観察法により計 4 地点、延 4 個体が確認された。確認された環境は、樹林であった。確認時期は令和 5 年 1 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-77 キバシリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月及び 9 月に、樹林の 4 地点で、計 4 個体を確認。	4	4

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林であった。

既存の生態情報によれば、「県内では、山地の針葉樹と落葉樹の混交林に周年生息し、繁殖している。細長く下に湾曲した嘴を樹皮の隙間に入れて、昆虫や蜘蛛を採食する。地上に降りることはない。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。



図 5.1.6-58 キバシリ確認地点

ah) ミソサザイ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ミソサザイは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の山地に分布するが、主な生息場所は溪流沿いに限られる。^{鳥 1)}大津市、日野町、永源寺町、多賀町、長浜市、木之本町、余呉町で繁殖の記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 11cm。^{鳥 1)}国内最小の鳥の一つ。^{鳥 1)}全身が焦げ茶色で目立たない。^{鳥 1)}上面には黒褐色の横斑があり、下面には黒と汚白色の細かい波状斑がある。^{鳥 1)}山間部の溪谷や沢筋の広葉樹林、針広混交林、亜高山針葉樹林に周年生息し、苔のある岩が重なる斜面、倒木の多い所で繁殖する。^{鳥 1)}甲虫などの昆虫やクモ類などを捕食する。^{鳥 1)}雄は初春に谷間に響きわたる大きな声でさえずる。^{鳥 1)}複数の巣をつくり、1羽の雄が複数の雌を獲得することもある。^{鳥 1)}繁殖期は4～7月、産卵数は3～6個、抱卵期間は14～15日間。^{鳥 1)}孵化後16～17日ほどで巣立つ。^{鳥 1)}冬期には平地の藪などにも現れる。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-78 及び図 5.1.6-59 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び無人カメラ撮影により計 5 地点、延 5 個体が確認された。確認された環境は、樹林や沢沿い等であった。確認時期は令和 5 年 1 月及び 6 月であった。

表 5.1.6-78 ミソサザイの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月及び 6 月に、樹林や沢沿い等の 5 地点で、計 5 個体を確認。	5	5

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や沢沿い等であった。

既存の生態情報によれば、「山間部の溪谷や沢筋の広葉樹林、針広混交林、亜高山針葉樹林に周年生息し、苔のある岩が重なる斜面、倒木の多い所で繁殖する。甲虫などの昆虫やクモ類などを捕食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」と推定される。

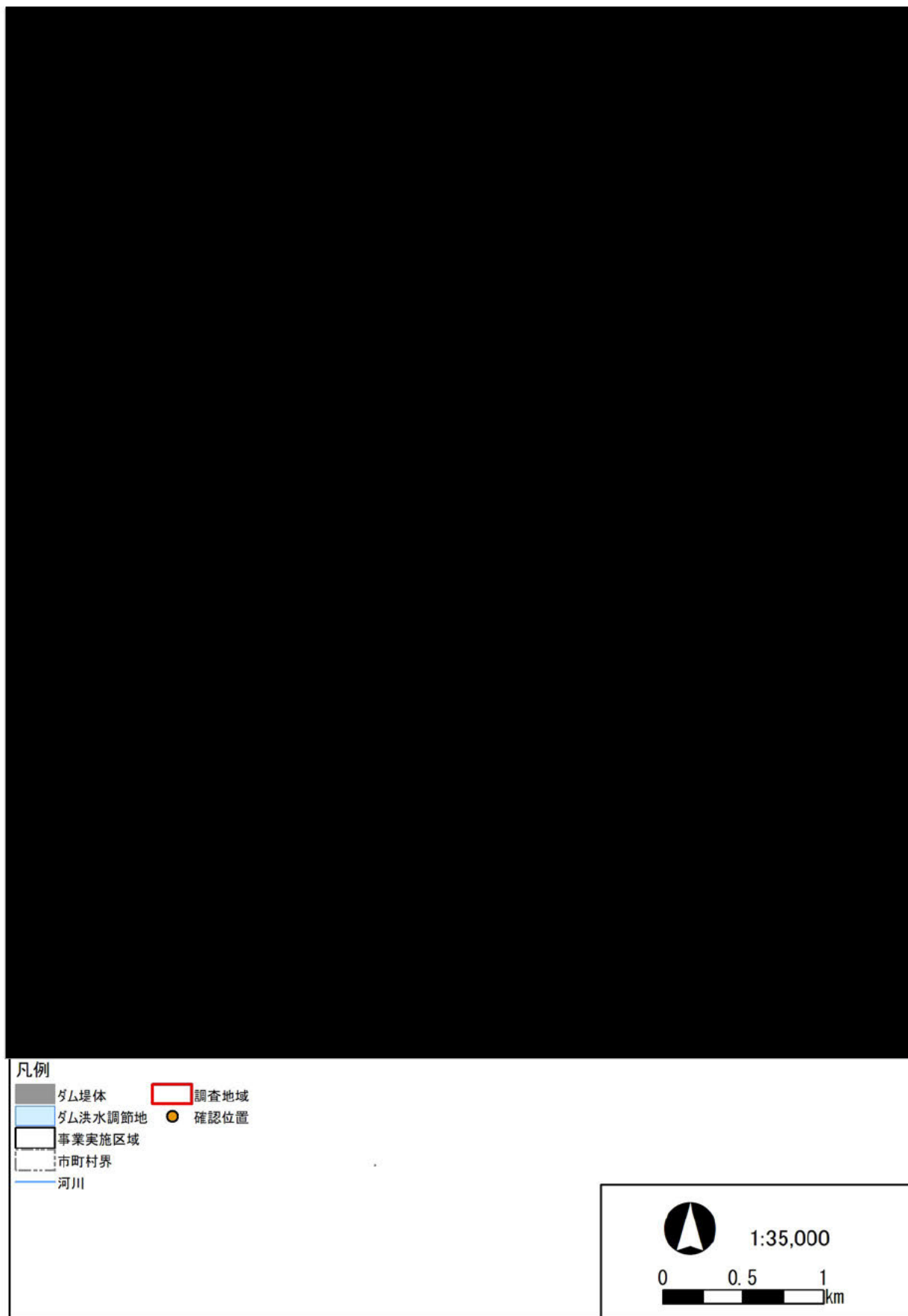


図 5.1.6-59 ミソサザイ確認地点

ai) カワガラス

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

カワガラスは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、比良山地、伊吹山地、鈴鹿山脈に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 22 cm。鳥¹⁾全体的に黒褐色で丸い体つきをしている。鳥¹⁾主に山地溪流に生息し、溪流を泳いだり潜ったりして水生昆虫などの餌をとる。鳥¹⁾日本産鳥類のスズメ目の中で、水中を泳ぐことのできる唯一の種である。鳥¹⁾滝の裏や岩の隙間、堰堤の水抜き穴などに営巣する。鳥¹⁾県内には周年生息する。鳥¹⁾季節移動はほとんどせず、厳冬期から繁殖を始める。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-79 及び図 5.1.6-60 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び任意観察により計 161 地点、延 161 個体が確認された。確認された環境は、大戸川や田代川であった。確認時期は令和 4 年 12 月、令和 5 年 1 月～6 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-79 カワガラスの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 4 年 12 月、令和 5 年 1 月～6 月及び 9 月に、大戸川や田代川の 161 地点で、計 161 個体を確認。■■■■■では営巣地を 6 箇所、■■■■■では営巣地を 2 箇所確認。	322	323

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、河川であった。

既存の生態情報によれば、「県内には周年生息する。主に山地溪流に生息し、溪流を泳いだり潜ったりして水生昆虫などの餌をとる。滝の裏や岩の隙間、堰堤の水抜き穴などに営巣する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」と推定される。



図 5.1.6-60 カワガラス確認地点

aj) トラツグミ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

トラツグミは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。^{鳥 1)}大津市、志賀町、米原市、余呉町、朽木村で繁殖の記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 30cm。^{鳥 1)}雌雄同色。^{鳥 1)}全身が黄褐色の地に黒色の横班が目立つ大型のツグミで、県内では、山地のよく繁った落葉広葉樹林や針葉樹との混交林に周年生息する。^{鳥 1)}地上付近で行動することが多く、落ち葉を跳ね除けてミミズを主に採食する。^{鳥 1)}繁殖期の 4 月から 7 月には、夜間から明け方に「ヒーヒーヒー」と口笛のような高く澄んだ音色で、不気味にさえするので鶺鴒（ヌエ）とも呼ばれる。^{鳥 1)}巣は樹上につくり、3～4 卵を産む。^{鳥 1)}冬期は雪を避けて平地から山麓部に移動し、里山林、社寺林、公園などの常緑樹が繁る林の周辺で越冬している。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-80 及び図 5.1.6-61 に示す。

現地調査では、無人カメラ撮影により計 6 地点、延 6 個体が確認された。確認された環境は、林縁部や樹林沢沿いであった。確認時期は令和 5 年 1 月～2 月、5 月及び 10 月～12 月であった。

表 5.1.6-80 トラツグミの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月～2 月、5 月及び 10 月～12 月に、林縁部や樹林沢沿いの 6 地点で、計 6 個体を確認。	6	6

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、林縁部や沢沿の樹林であった。

既存の生態情報によれば、「山地のよく繁った落葉広葉樹林や針葉樹との混交林に周年生息する。地上付近で行動することが多く、落ち葉を跳ね除けてミミズを主に採食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

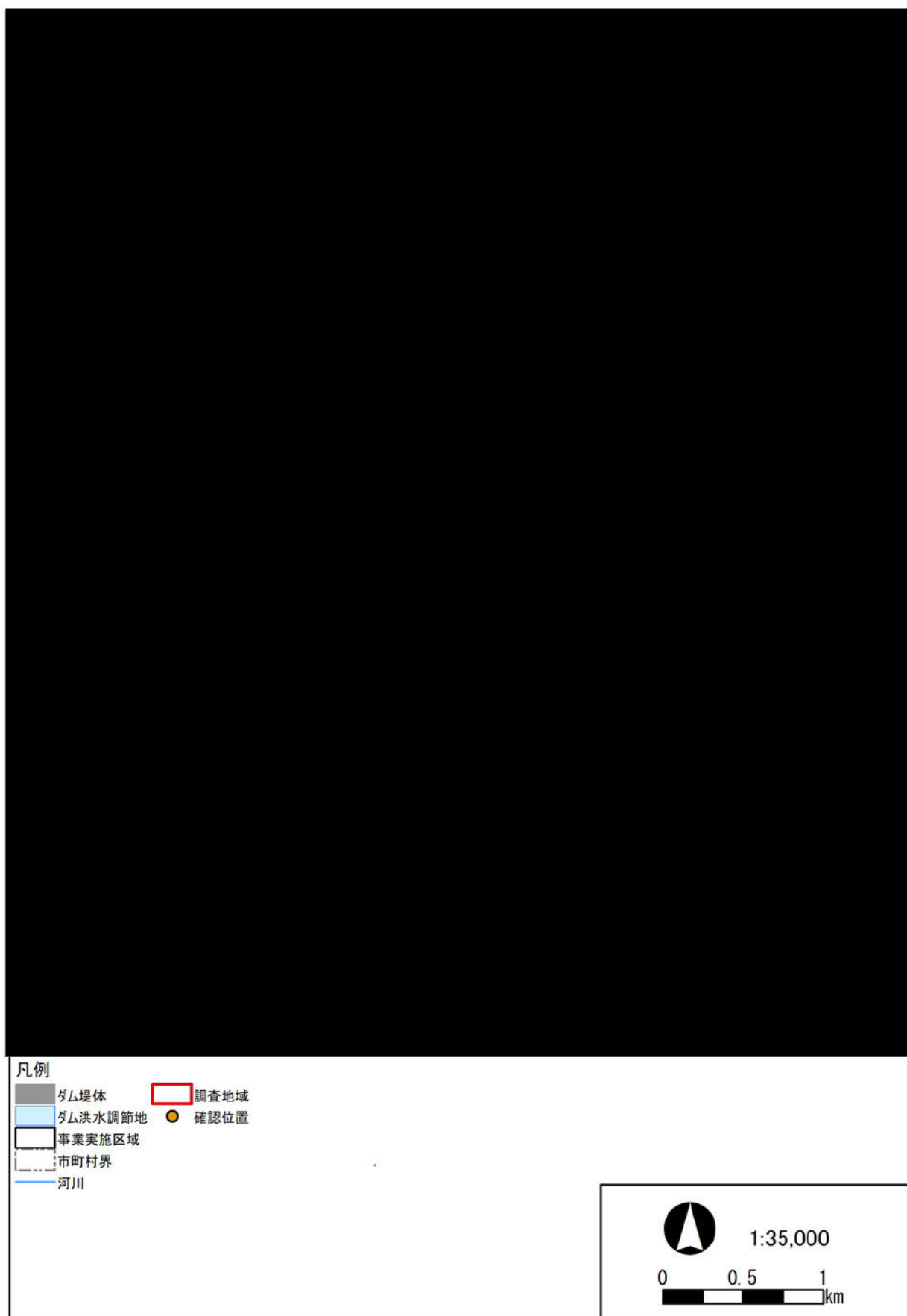


図 5.1.6-61 トラツグミ確認地点

ak) クロツグミ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

クロツグミは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 22cm。鳥¹⁾雌雄異色。鳥¹⁾雄は全身が黒く、腹部は白地に黒の斑点が目立つ。鳥¹⁾雌は全身が褐色で、胸から脇腹にかけて白地に黒の斑点がある。鳥¹⁾広葉樹林、スギなどの造林針葉樹林の地上をはね歩きながら採餌する。鳥²⁾数歩はねて立ち止まり、ミミズやゴミムシなどの昆虫を食べる。鳥²⁾植物ではヤマザクラ、ノブドウ、ヒサカキなどの果実を食べる。鳥²⁾雛に与える餌は、雄はミミズが多いのに対し、雌は昆虫を比較的多く運ぶ。鳥²⁾県内には夏鳥として 4 月下旬に渡来する。鳥¹⁾繁殖期は 5～7 月で、雄は明るい大きな声でよくさえずる。鳥¹⁾落葉広葉樹の枝上に巣をつくり、3～4 卵を産む。鳥¹⁾春と秋の渡りの時期には、平地の林や公園なども通過する。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-81 及び図 5.1.6-62 に示す。

現地調査では、直接観察、定点観察法及び無人カメラ撮影により計 4 地点、延 4 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部等であった。確認時期は令和 5 年 4 月～6 月であった。

表 5.1.6-81 クロツグミの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 4 月～6 月に、樹林や林縁部等の 4 地点で、計 4 個体を確認。	4	4

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部等であった。

既存の生態情報によれば、「広葉樹林、スギなどの造林針葉樹林の地上をはね歩きながら採餌する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

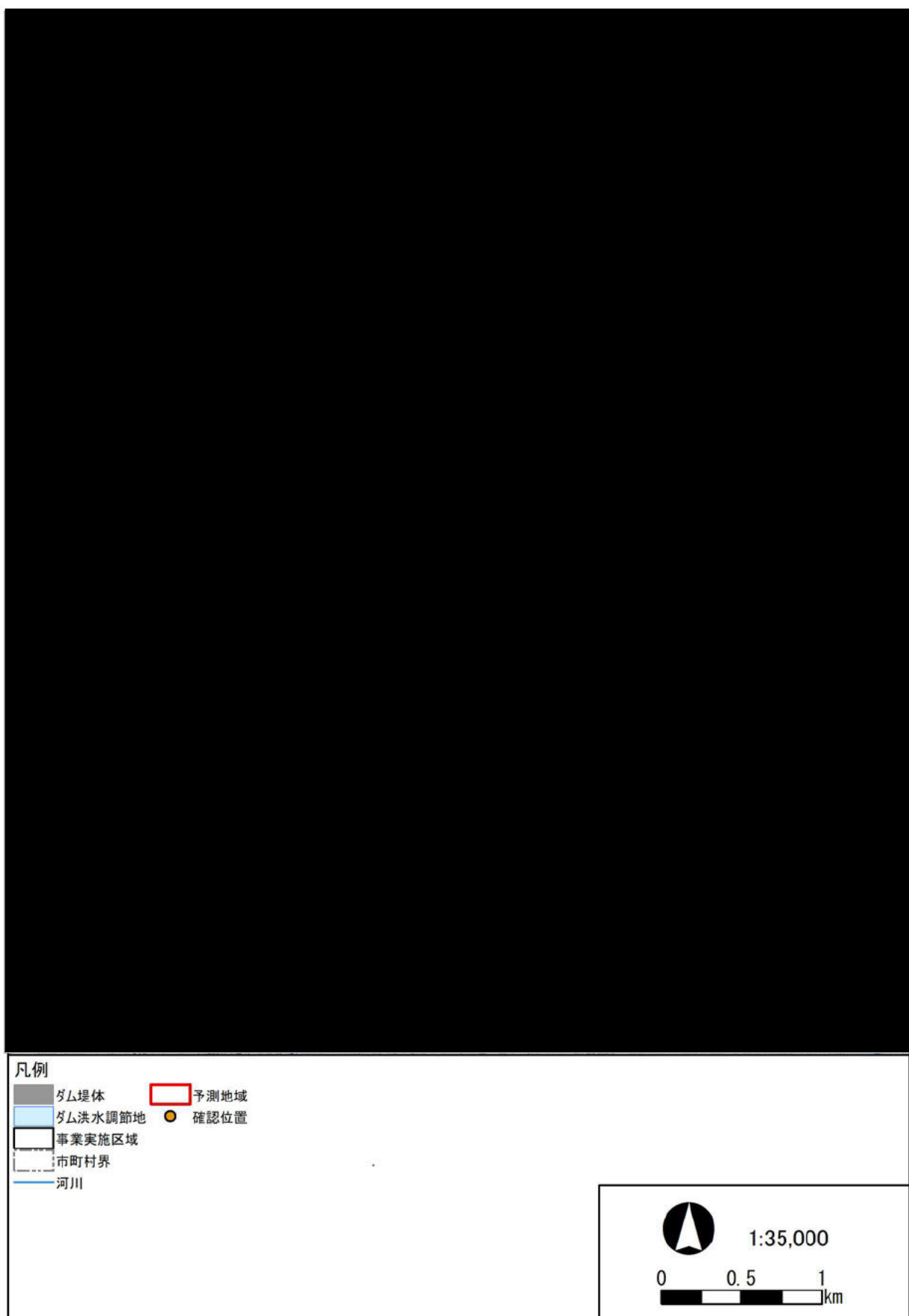


図 5.1.6-62 クロツグミ確認地点

a1) コルリ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：絶滅危機増大種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危惧種

コルリは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、大津市、志賀町、土山町、信楽町、日野町、永源寺町、多賀町、伊吹町、米原町、浅井町、余呉町、マキノ町、今津町、朽木村に分布する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 14cm。^{鳥 1)}雄の上面は頭部から尾まで青色、下面は白色。^{鳥 1)}雌は全身がオリーブ褐色、繁殖期に雄は林の中枝で「チッチッチッ ヒンカラカラ」とコマドリによく似た声でさえずる。^{鳥 1)}夏鳥として低山から亜高山帯の落葉広葉樹林、針葉樹林の混交林に生息する。^{鳥 1)}地上近くの下枝がよく繁った林を好み、昆虫、クモ、ミミズなどを採食する。^{鳥 1)}繁殖期は 5～7 月。^{鳥 1)}巣は草木の根元、倒木の下などの窪みや崖に碗状の巣をつくり、3～5 卵を産む。^{鳥 1)}県内では夏鳥として 4 月下旬に渡来し、標高 800m 以上の山地で繁殖している。^{鳥 1)}春秋の渡り期には、平地の森林や公園などでみられることがある。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-82 及び図 5.1.6-63 に示す。

現地調査では、直接観察及び無人カメラ撮影により計 2 地点、延 2 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部であった。確認時期は令和 5 年 4 月及び 5 月であった。

表 5.1.6-82 コルリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 4 月及び 5 月に、樹林や林縁部の 2 地点で、計 2 個体を確認。	2	2

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部であった。

既存の生態情報によれば、「県内では夏鳥として 4 月下旬に渡来し、標高 800m 以上の山地で繁殖している。春秋の渡り期には、平地の森林や公園などでみられることがある。夏鳥として低山から亜高山帯の落葉広葉樹林、針葉樹林の混交林に生息する。地上近くの下枝がよく繁った林を好み、昆虫、クモ、ミミズなどを採食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。



図 5.1.6-63 コルリ確認地点

am) ルリビタキ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

ルリビタキは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 14cm。鳥¹⁾成鳥雄の上面は美しいルリ色、下面は灰白色で脇はオレンジ色。鳥¹⁾雌と幼鳥は上面がオリーブ褐色で脇はオレンジ色。鳥¹⁾尾は青味がかっている。鳥¹⁾雄は成鳥羽になるまでに数年かかるとされている。鳥¹⁾亜高山帯から高山帯で繁殖し、冬期は暖地の山麓や丘陵地へ移動する。鳥¹⁾県内では、冬期に低山や平野部に生息し、都市公園などの林にも飛来する。鳥¹⁾針葉樹などの混じった暗い森を好む傾向がある。鳥¹⁾主として森林の下層で行動し、下枝にとまって昆虫やクモなどを捕らえて食べる。鳥¹⁾湖北や湖西の山地では、繁殖期に本種のさえずりが聞かれるところがある。鳥¹⁾繁殖期は5～8月。鳥²⁾巣は、岩の間や下、樹木の根の間や下などの、穴蔵のような隠れたところを選ぶ。鳥²⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-83 及び図 5.1.6-64 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法、定点観察法及び無人カメラ撮影により計 26 地点、延 26 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部、草地等であった。確認時期は令和 5 年 1 月～2 月及び 12 月であった。

表 5.1.6-83 ルリビタキの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月～2 月及び 12 月に、樹林や林縁部、草地等の 26 地点で、計 26 個体を確認。	26	26

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部、草地等であった。

既存の生態情報によれば、「県内では、冬期に低山や平野部に生息し、都市公園などの林にも飛来する。針葉樹などの混じった暗い森を好む傾向がある。主として森林の下層で行動し、下枝にとまって昆虫やクモなどを捕らえて食べる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」、「竹林」と推定される。



図 5.1.6-64 ルリビタキ確認地点

an) コサメビタキ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

コサメビタキは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。鳥¹⁾大津市、志賀町、栗東市、甲賀町、日野町、多賀町、伊吹町、米原町、木之本町、余呉町、今津町、朽木村に繁殖記録がある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 13cm。鳥¹⁾雌雄同色。鳥¹⁾頭部から尾までの上面が暗灰褐色、喉から下面は淡汚白色。鳥¹⁾嘴の基部と目の間が白い。鳥¹⁾平地から標高 1,000m ぐらいまでの落葉広葉樹林、雑木林、カラマツ林に生息し、密生した林より明るい林を好む。鳥²⁾県内には夏鳥として 4 月中旬から 5 月中旬に渡来し、低山地の落葉広葉樹林で繁殖する。鳥¹⁾山間部の社寺林など樹齢の高い大径木の林などに好んで営巣する。鳥¹⁾繁殖期の 5～7 月にはさえずるが、小声で複雑な旋律なため目立たない。鳥¹⁾木の横枝上に苔とクモの糸で碗型の巣をつくり、4～6 卵を産む。鳥¹⁾餌は飛翔昆虫が多く、フライングキャッチの行動がよくみられる。鳥¹⁾9～10 月の秋の渡り時期には山地の林を通過し、平地の河畔林や公園でトンボを捕食する姿が観察されることもある。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-84 及び図 5.1.6-65 に示す。

現地調査では、直接観察及び定点観察法により計 3 地点、延 3 個体が確認された。確認された環境は、樹林であった。確認時期は令和 5 年 5 月及び 6 月であった。

表 5.1.6-84 コサメビタキの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月及び 6 月に、樹林の 3 地点で、計 3 個体を確認。	3	3

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林であった。既存の生態情報によれば、「県内には夏鳥として渡来し、低山地の落葉広葉樹林で繁殖する。山間部の社寺林など樹齢の高い大径木の林などに好んで営巣する。餌は飛翔昆虫が多く、フライングキャッチの行動がよくみられる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「川辺林」と推定される。

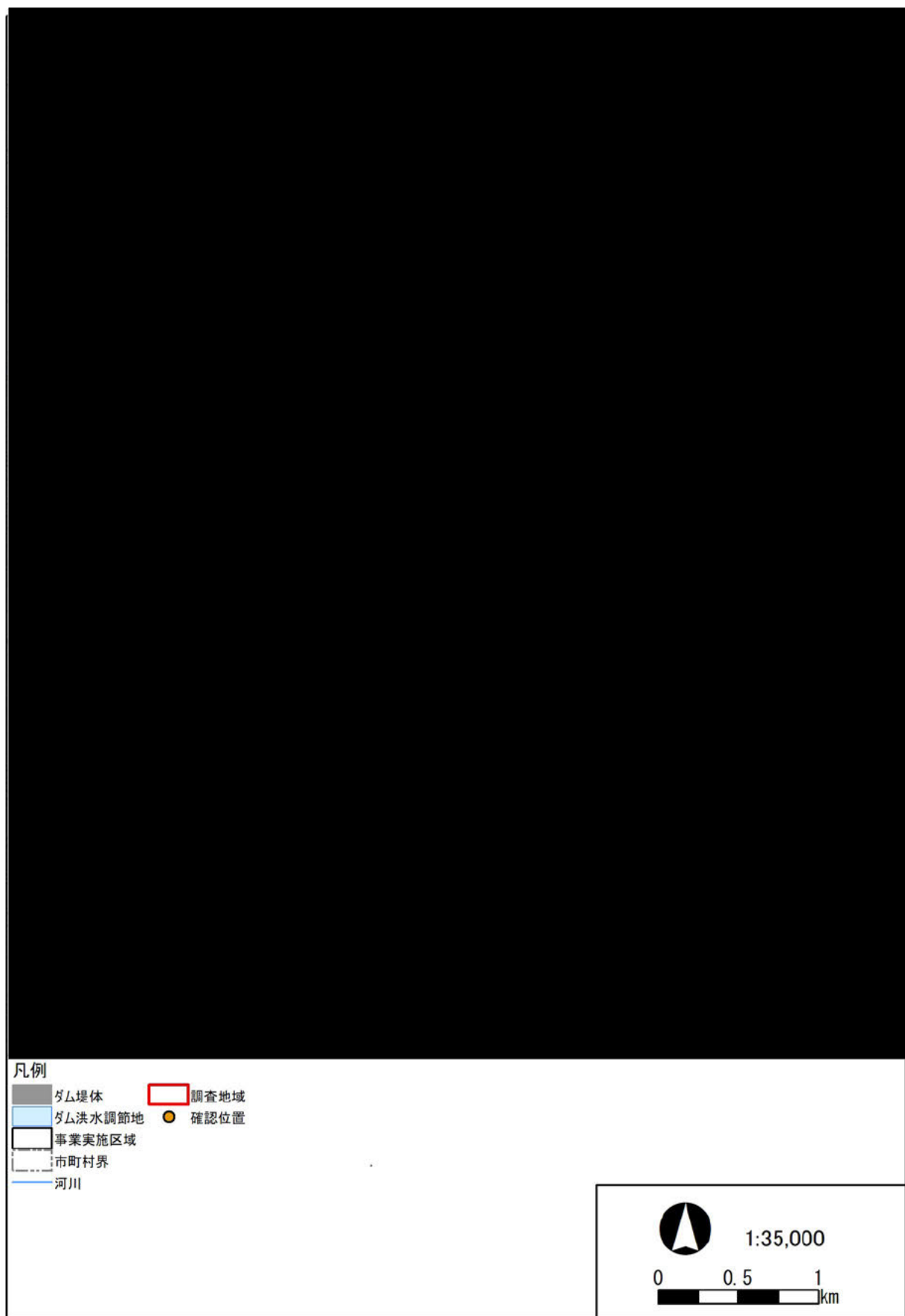


図 5.1.6-65 コサメビタキ確認地点

ao) キビタキ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

キビタキは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。^{鳥 1)}大津市、志賀町、栗東市、野洲町、土山町、甲賀町、甲南町、信楽町、日野町、永源寺町、彦根市、多賀町、伊吹町、米原町、木之本町、余呉町、今津町、朽木村、高島町に繁殖記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 14cm。^{鳥 1)}雄は上面が黒く、眉斑と腰が黄色で、喉から胸にかけての橙色が目立つ。^{鳥 1)}下面は白色で、翼に白斑がある。^{鳥 1)}雌と幼鳥は全身が暗オリーブ褐色。^{鳥 1)}県内には夏鳥として 4 月下旬に渡来し、落葉広葉樹林や針広混交林で繁殖する。^{鳥 1)}特にブナ林や山麓の社寺林など大木の林を好み、主に昆虫類をフライングキャッチで採食する。^{鳥 1)}繁殖期に雄は「ピッコロロ、ピッコロロ」などと美しい音色でさえずる。^{鳥 1)}巣は樹洞や繁った葉の間などに椀型の巣をつくり、4～5 卵を産む。^{鳥 1)}渡り時期には低山の林を通過するが、平地の公園でもみられることがある。^{鳥 1)}秋の渡り時には木の実なども食べる。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-85 及び図 5.1.6-66 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法、定点観察法及び無人カメラ撮影により計 69 地点、延 70 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部等であった。確認時期は令和 5 年 5 月～11 月であった。

表 5.1.6-85 キビタキの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月～11 月に、樹林や林縁部等の 69 地点で、計 70 個体を確認。	69	70

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部等であった。

既存の生態情報によれば、「県内には夏鳥として渡来し、落葉広葉樹林や針広混交林で繁殖する。主に昆虫類をフライングキャッチで採食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」と推定される。

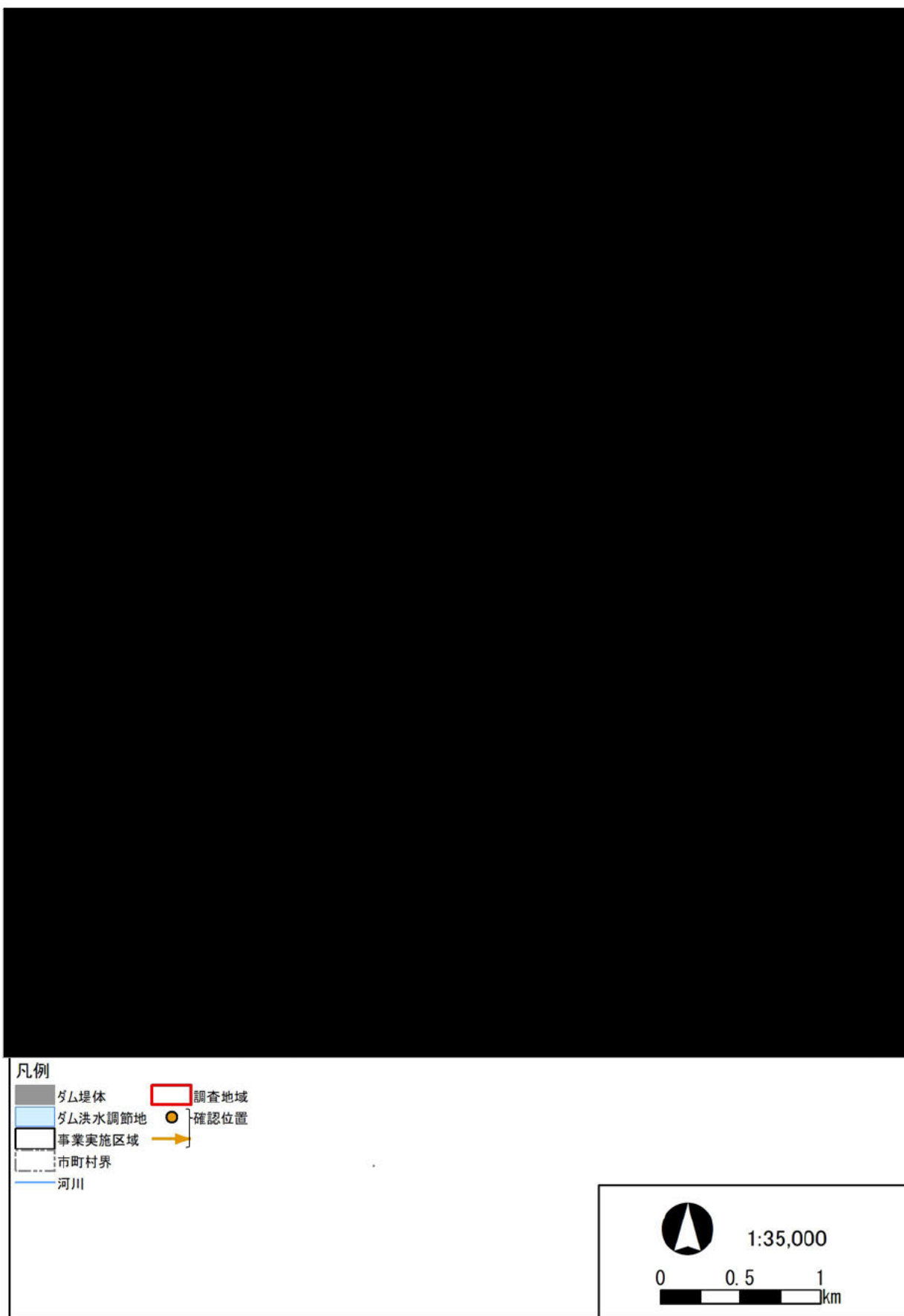


図 5.1.6-66 キビタキ確認地点

ap) オオルリ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

オオルリは、日本では北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。^{鳥 1)}

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。^{鳥 1)}大津市、志賀町、栗東市、野洲町、水口町、土山町、甲賀町、甲南町、信楽町、日野町、永源寺町、多賀町、山東町、伊吹町、米原町、浅井町、湖北町、木之本町、余呉町、西浅井町、マキノ町、今津町、朽木村、高島町に繁殖記録がある。^{鳥 1)}

(ii) 生態

全長約 16cm。^{鳥 1)}雄の上面には青色の美しい光沢がある。^{鳥 1)}雄の上面には青色の光沢がある。^{鳥 1)}下面は顔と喉、胸は黒く、腹部は白い。^{鳥 1)}雌と幼鳥は全身が地味なオリーブ褐色。^{鳥 1)}県内には夏鳥として 4 月下旬に渡来し、夏緑広葉樹林や針葉樹林に生息する。^{鳥 1)}渓谷に沿った林を好む。^{鳥 1)}餌は主に昆虫類をフライングキャッチで採食する。^{鳥 1)}繁殖期は 5～8 月、年に 1 回、一夫一妻で繁殖する。^{鳥 2)}崖地、溪流近くの落葉広葉樹林内の岩または土の崖地に営巣し、溪流に面した岩壁や土壁に作ることが多い。^{鳥 2)}巣は崖地の窪みに苔を集めて碗状の巣をつくり、4～5 卵を産む。^{鳥 1)}渡り時期には低山の林を通過する。^{鳥 1)}平地の公園などでもみられる。^{鳥 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-86 及び図 5.1.6-67 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法、定点観察法及び無人カメラ撮影により計 80 地点、延 82 個体が確認された。確認された環境は、樹林や林縁部等であった。確認時期は令和 5 年 5 月～7 月及び 9 月であった。

表 5.1.6-86 オオルリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 5 月～7 月及び 9 月に、樹林や林縁部等の 80 地点で、計 82 個体を確認。	80	82

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林や林縁部等であった。

既存の生態情報によれば、「県内には夏鳥として渡来し、夏緑広葉樹林や針葉樹林に生息する。溪谷に沿った林を好む。餌は主に昆虫類をフライングキャッチで採食する。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」と推定される。

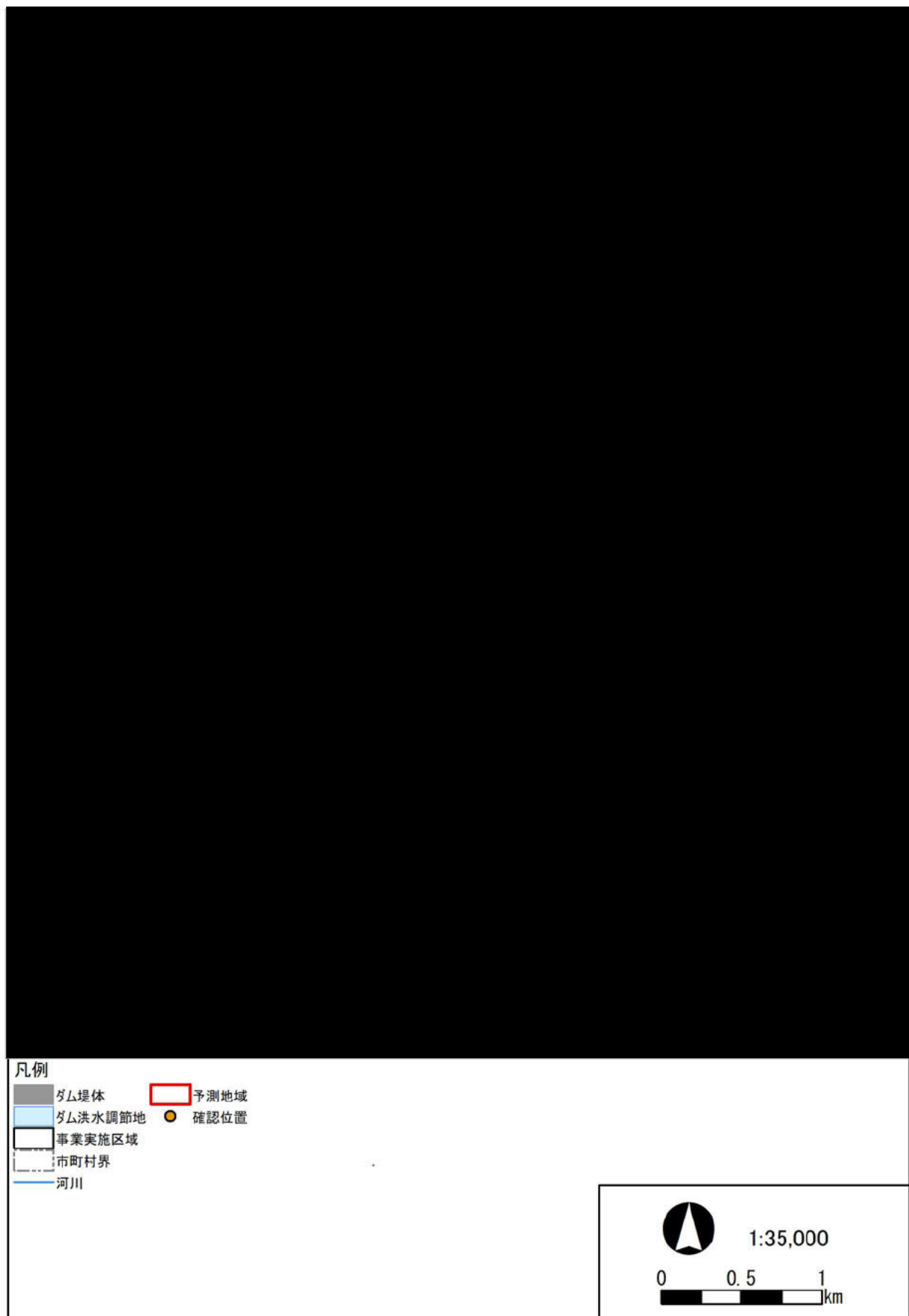


図 5.1.6-67 オオルリ確認地点

aq) カヤクグリ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

カヤクグリは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、永源寺町、多賀町、木之本町、余呉町で越冬期の記録がある。鳥¹⁾

(ii) 生態

全身約 14cm。鳥¹⁾ 全身が暗褐色で目立つ模様はない。鳥¹⁾ 近似種はいない。鳥¹⁾ 亜高山帯から高山帯で 6～9 月に繁殖する。鳥¹⁾ 雌がハイマツ、オオシラビソの低木の枝上に苔などを用いて碗型の巣をつくる。鳥¹⁾ 1 妻 2 夫制で、産卵数は 2～4 個、抱卵期間は 13～14 日間。鳥¹⁾ 繁殖期は主に昆虫類を捕食するが、冬期には種子も食べる。鳥¹⁾ 冬期には低山や丘陵地の夏緑広葉樹林や林縁の藪で、単独または小群で越冬する。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-87 及び図 5.1.6-68 に示す。

現地調査では、直接観察により計 2 地点、延 2 個体が確認された。確認された環境は、林縁部及び道路沿い草地であった。確認時期は令和 5 年 1 月であった。

表 5.1.6-87 カヤクグリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月に、林縁部及び道路沿い草地の 2 地点で、計 2 個体を確認。	2	2

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、林縁部及び草地であった。

既存の生態情報によれば、「冬期には低山や丘陵地の夏緑広葉樹林や林縁の藪で、単独または小群で越冬する。繁殖期は主に昆虫類を捕食するが、冬期には種子も食べる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」と推定される。

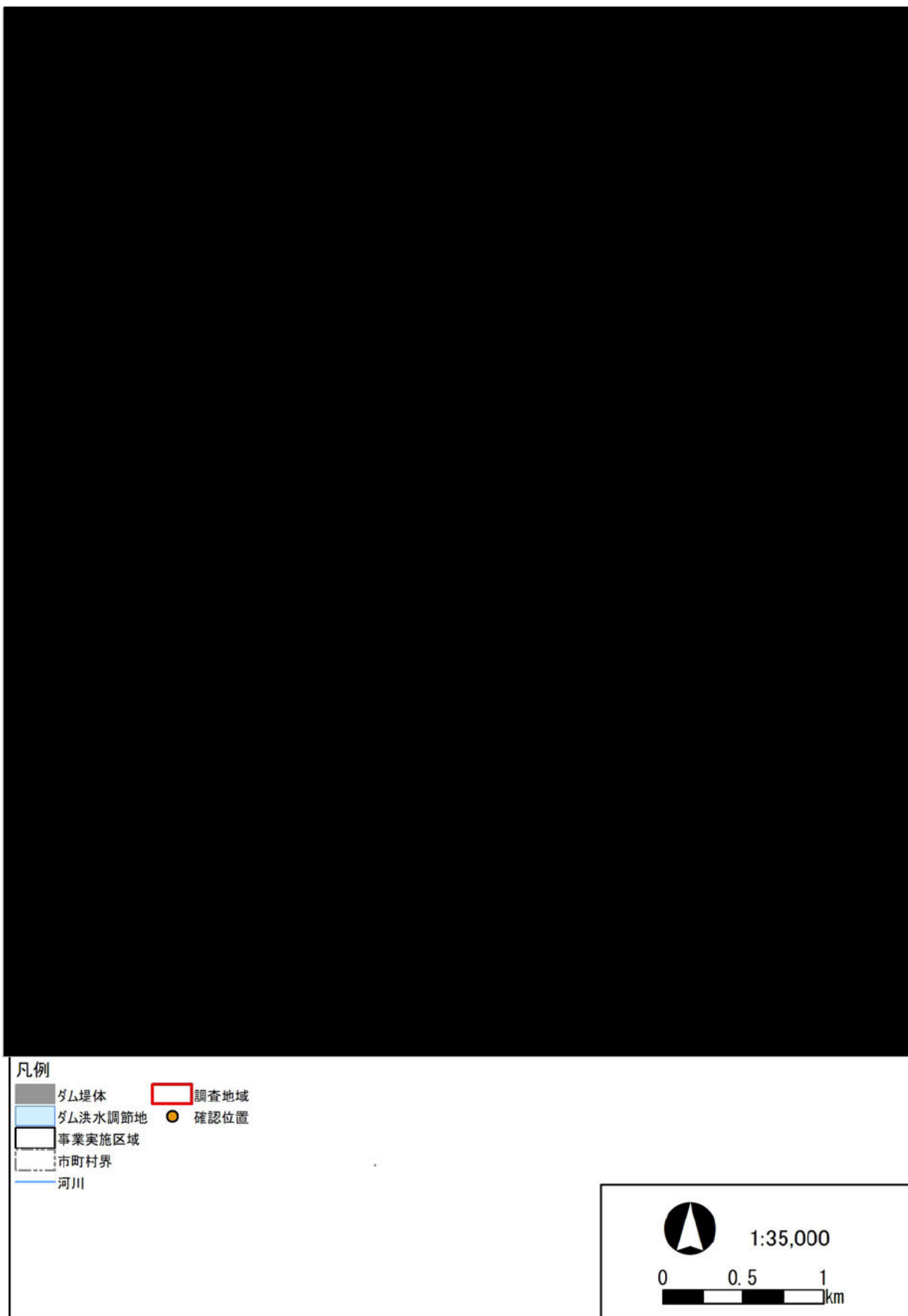


図 5.1.6-68 カヤクグリ確認地点

ar) ビンズイ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：要注目種

ビンズイは、日本では漂鳥または夏鳥として北海道から四国に分布する。^{鳥 7)} 北方のものは冬に暖地へ移動する。^{鳥 7)} 西日本では冬鳥。^{鳥 7)}

(ii) 生態

平地から高山帯の草地や明るい林、針葉樹林帯、針広混交林、落葉広葉樹林など開けた環境に生息する。^{鳥 7)} 夏は動物質の昆虫を主要食にし、冬は主に植物の種子をついばむ。^{鳥 2)} 地上で両脚を交互にして、足早に歩行しながら採食することが多く、はね歩くことはない。^{鳥 2)} 5～8月までに年に2回、一夫一妻で繁殖する。^{鳥 2)} 巣は林縁の草の根元、崖、土手の窪みなどにある例が多く、皿形か浅い碗形である。^{鳥 2)} 1 巣卵数は3～5個で、平均4.2個である。^{鳥 2)} しばしばカッコウに托卵される。^{鳥 2)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-88 及び図 5.1.6-69 に示す。

現地調査では、無人カメラ撮影により計1地点、延2個体が確認された。確認された環境は、林縁であった。確認時期は令和5年12月であった。

表 5.1.6-88 ビンズイの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年12月に、林縁の1地点で、2個体を確認。	1	2

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、林縁であった。

既存の生態情報によれば、「平地から高山帯の草地や明るい林、針葉樹林帯、針広混交林、落葉広葉樹林など開けた環境に生息する。夏は動物質の昆虫を主要食にし、冬は主に植物の種子をついばむ。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「低木林」と推定される。

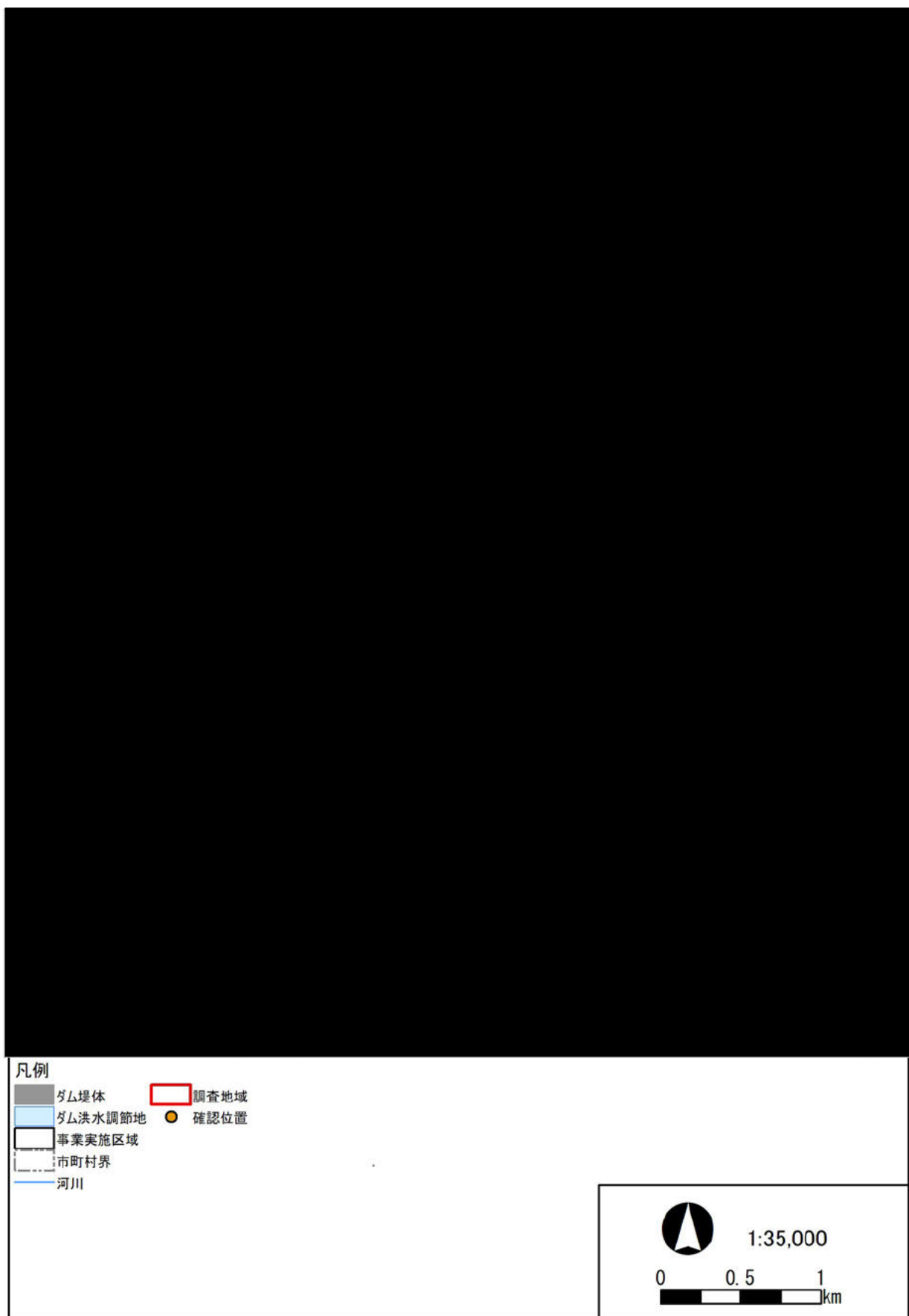


図 5.1.6-69 ビンズイ確認地点

as) ベニマシコ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

ベニマシコは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地・丘陵地・平地に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

広葉樹林や低木林、藪、草地、ヨシ原などに生息する。鳥¹⁾昆虫、果実、種子、木の芽などを食べる。鳥¹⁾小枝に止まって、体を伸ばしたり、逆さにしたりして小果実などをくわえとり、くちばしをモグモグと動かして食べる。鳥¹⁾繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。鳥¹⁾巣は地上80～170cm ぐらいの低木や藪の小枝に乗せるように、枯れ草、樹皮、細根などで碗形につくる。鳥¹⁾1 巣卵数は3～6 個。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-89 及び図 5.1.6-70 に示す。

現地調査では、直接観察により計1 地点、1 個体が確認された。確認された環境は、草地であった。確認時期は令和5 年1 月であった。

表 5.1.6-89 ベニマシコの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5 年1 月に、草地の1 地点で、1 個体を確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、草地であった。

既存の生態情報によれば、「広葉樹林や低木林、藪、草地、ヨシ原などに生息する。昆虫、果実、種子、木の芽などを食べる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「低木林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」と推定される。

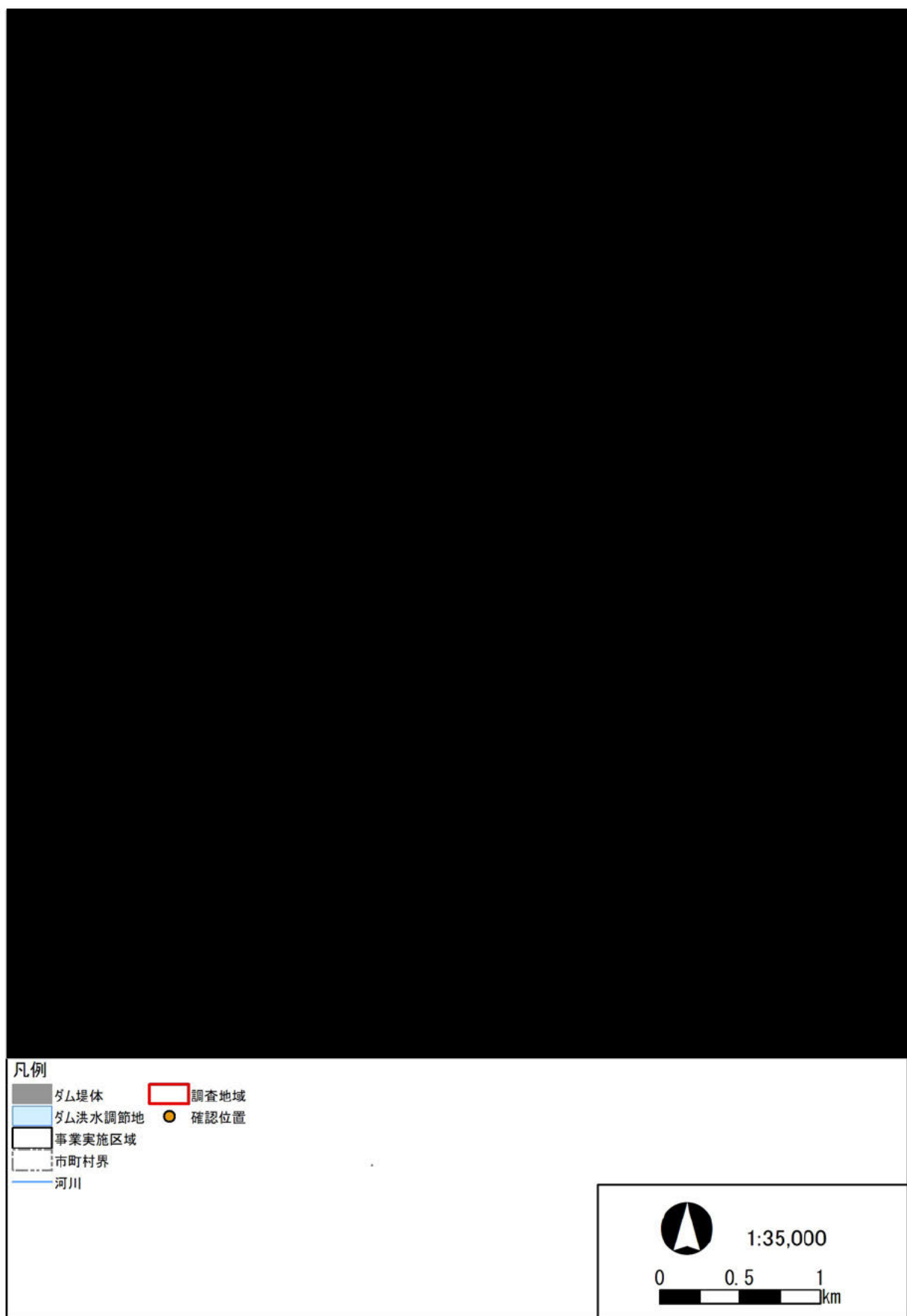


図 5.1.6-70 ペニマシコ確認地点

at) ウソ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

ウソは、日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。鳥¹⁾

滋賀県では、全域の山地・丘陵地に分布する。鳥¹⁾

(ii) 生態

全長約 16cm。鳥¹⁾スズメくらいの大きさのずんぐりしたアトリの仲間。鳥¹⁾雄は体が青灰色で、頭、翼、尾が黒い。鳥¹⁾頬と喉は赤色。鳥¹⁾雌は全体が褐色で、雄と同様、頭、翼、尾は黒いが、頬は赤くない。鳥¹⁾雌雄ともに腰は白い。鳥¹⁾近似種のシメやイカルは嘴が大きい。鳥¹⁾シメは全体に茶色いが、頭は黒くない。鳥¹⁾イカルやコイカルは嘴が黄色い。鳥¹⁾冬期に落葉広葉樹林や針広混交林などに生息する。鳥¹⁾樹上性で、小群で行動し、液果やカエデ類の乾果などの木の実、木の芽、花芽なども食べる。鳥¹⁾サクラやウメの花芽も食べるので、話題になることもある。鳥¹⁾「フィーフィー」と口笛に似た声で鳴き交わす。鳥¹⁾

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-90 及び図 5.1.6-71 に示す。

現地調査では、直接観察により計 1 地点、延 3 個体が確認された。確認された環境は、林縁部であった。確認時期は令和 5 年 1 月であった。

表 5.1.6-90 ウソの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月に、林縁部の 1 地点で、3 個体を確認。	1	3

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、林縁部であった。

既存の生態情報によれば、「冬期に落葉広葉樹林や針広混交林などに生息する。樹上性で、小群で行動し、液果やカエデ類の乾果などの木の実、木の芽、花芽なども食べる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「低木林」と推定される。

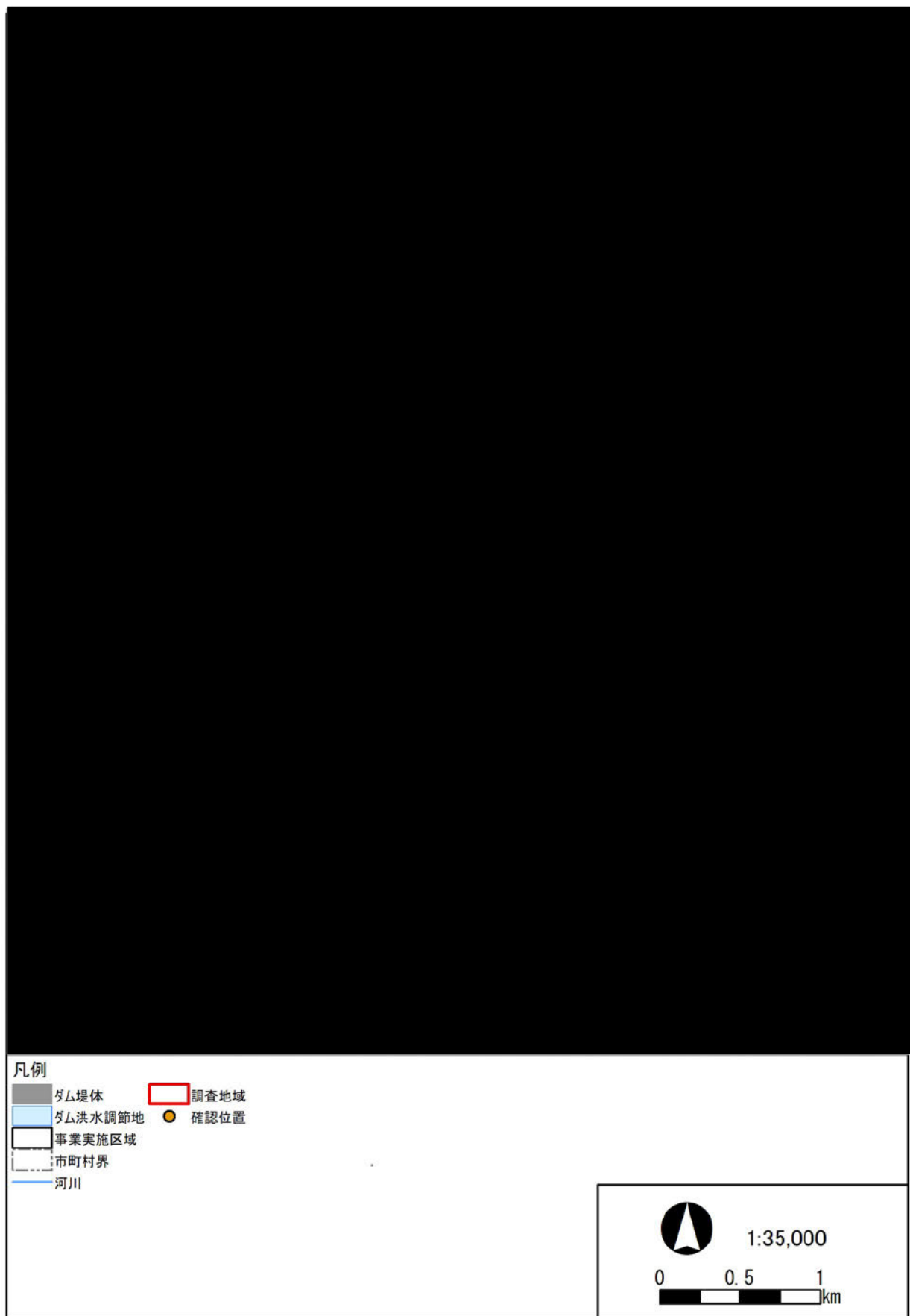


図 5.1.6-71 ウソ確認地点

au) アオジ

(i) 重要性

「近畿版レッドデータブック」：繁殖個体群：準絶滅危惧種

アオジは、日本では留鳥または漂鳥として北海道から本州中部の平地から山地の林、林縁、草地などに生息する。^{鳥 7)}

滋賀県では、冬季に平地から低山にかけての林内や林縁、草原に生息する。^{鳥 1)}

(ii) 生態

北海道から本州中部の平地から山地の林、林縁、草地などに生息する。^{鳥 7)}本州中部以南では主に冬鳥として平地から山地の林、林縁、市街地の公園、河川敷、草地、ヨシ原などに生息する。^{鳥 7)}ほとんど地上で採食する。^{鳥 2)}タデ科、イネ科などの種子、ズミ、イボタノキなどの果実、夏には昆虫の成虫・幼虫も食べる。^{鳥 2)}繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。^{鳥 2)}巣づくりは雌のみが行い、地上 1～2m ぐらいの藪の中の枝の叉上に乗せるようにつくる。^{鳥 2)}1 巣卵数は3～6 個、抱卵は雌のみが行い、雛は12 日ぐらいで孵化し、雌雄共同の給餌を受け、9～14 日ぐらいで巣立つ。^{鳥 2)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-91 及び図 5.1.6-72 に示す。

現地調査では、直接観察、ラインセンサス法及び無人カメラ撮影により計 27 地点、延 39 個体が確認された。確認された環境は、樹林、林縁部、草地等であった。確認時期は令和 5 年 1 月～3 月、11 月及び令和 6 年 1 月であった。

表 5.1.6-91 アオジの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 1 月～3 月、11 月及び令和 6 年 1 月に、樹林、林縁部、草地等の 27 地点で、計 39 個体を確認。	27	39

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林、林縁部、草地等であった。

既存の生態情報によれば、「本州中部以南では主に冬鳥として平地から山地の林、林縁、市街地の公園、河川敷、草地、ヨシ原などに生息する。ほとんど地上で採食する。タデ科、イネ科などの種子、ズミ、イボタノキなどの果実、夏には昆虫の成虫・幼虫も食べる。」とされている。

これらのことから、調査地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「その他植林」、「川辺林」、「低木林」、「竹林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「市街地等」と推定される。

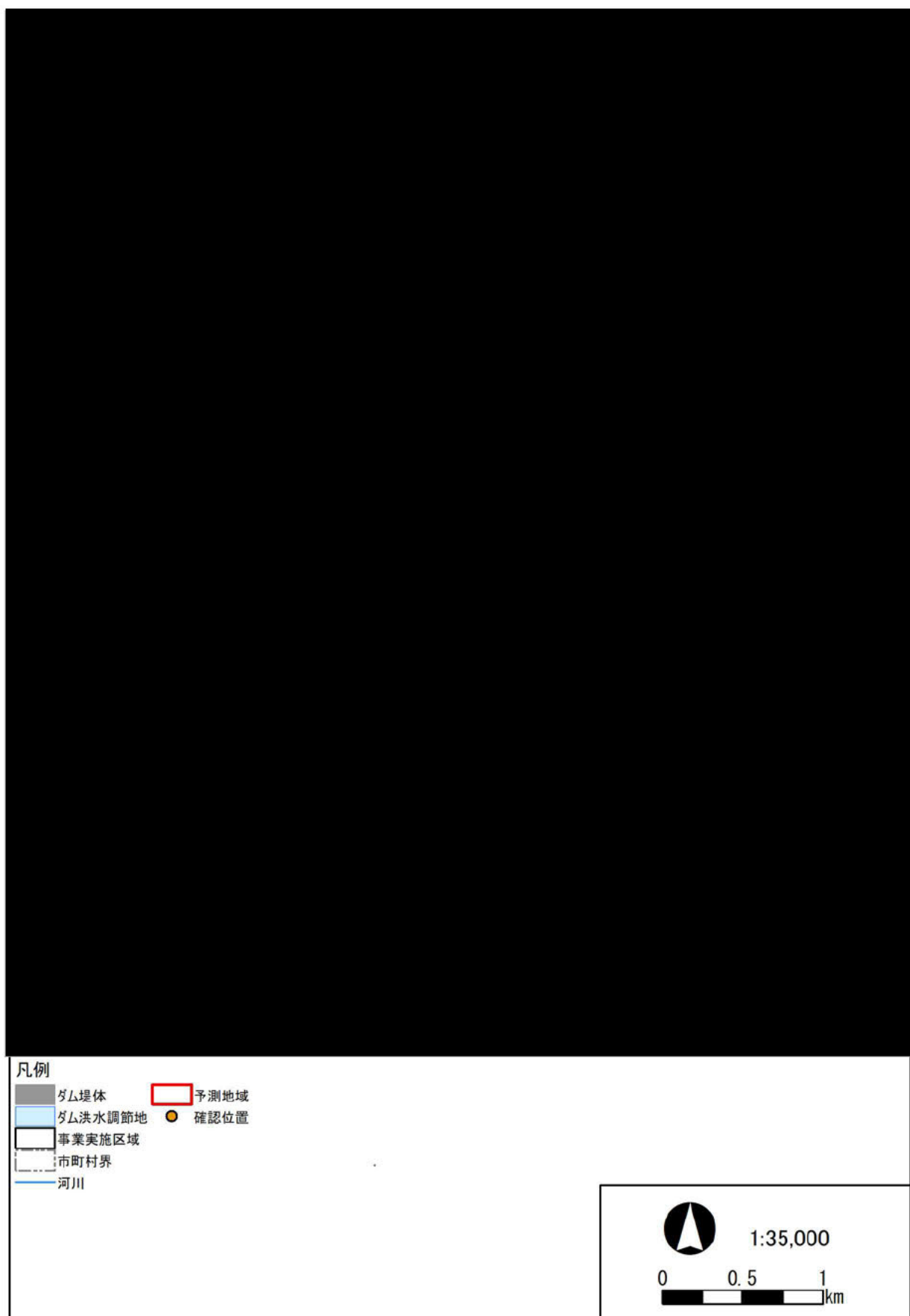


図 5.1.6-72 アオジ確認地点

(c) 爬虫類の重要な種

調査地域では、ニホントカゲ、ヒガシニホントカゲの可能性が考えられるトカゲ属を含め、爬虫類の重要な種が7種確認された。

表 5.1.6-92 爬虫類の重要な種の確認状況

No.	記号 ^{注)}	種名	確認した調査方法
1	a	ニホンイシガメ	直接観察法
2	b	ニホンスッポン	直接観察法
3	c	トカゲ属	直接観察法
4	d	ジムグリ	直接観察法
5	e	ヒバカリ	直接観察法
6	f	ヤマカガシ	直接観察法
7	g	ニホンマムシ	直接観察法

注) 記号欄に示す a～g は、以降に示す重要な種の種ごとの現地調査結果等の項目に対応している。

a) ニホンイシガメ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：準絶滅危惧

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

ニホンイシガメは、日本では本州、佐渡、四国、九州、五島、種子島に分布する。^{爬1)}

滋賀県では、大津市、近江八幡市、草津市、守山市、八日市市、余呉町、愛東町、日野町、竜王町、石部町、甲賀町、甲西町、土山町、水口町、山東町、志賀町、安曇川町、今津町、新旭町、高島町、マキノ町に分布する。^{爬1)}

(ii) 生態

河川、湖沼、水田、水路などに生息する。^{爬1)}水辺に生息していることが多いが、陸上をかなりの距離移動することがある。^{爬1)}雑食性で、魚類、甲殻類、ミミズ、水生植物などを食べる。^{爬1)}秋から春にかけて水中で交尾し、5月から8月頃、地中に1～12個の卵を産卵する。^{爬1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-93 及び図 5.1.6-73 に示す。

現地調査では、計3地点で、直接観察法により成体等が確認された。

確認された環境は、河川内や沈砂池、舗装路上等であった。確認時期は令和5年3月、5月及び7月～8月であった。

表 5.1.6-93 ニホンイシガメの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年3月、5月及び7月～8月に、河川内や沈砂池、舗装路上等の3地点で、成体や死体を計4個体確認。	3	4

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、河川内や沈砂池、舗装路上等であった。

既存の生態情報によれば、「河川、湖沼、水田、水路などに生息する。雑食性で、魚類、甲殻類、ミミズ、水生植物などを食べる。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、河川や水田、水路などに生息し、水辺や周辺の草地に存在する様々な植物質や動物質を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「農耕地（水田）」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。



図 5.1.6-73 ニホンイシガメ確認地点

b) ニホンスッポン

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：情報不足

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ニホンスッポンは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{爬 1)}

滋賀県では、大津市、草津市、志賀町、新旭町に分布する。^{爬 1)}

(ii) 生態

流れの緩やかな河川中・下流域の泥底や湖沼に生息し、魚類、甲殻類、カワニナなどを食べる。^{爬 1)}4～5月に水中で交尾し、雌は5～8月に陸上の砂地に穴を掘り、一度に10～20個の卵を産む。^{爬 1)}県内では琵琶湖を中心に、内湖、内陸部の用水路、河川中・下流域に見られる。^{爬 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-94 及び図 5.1.6-74 に示す。

現地調査では、計5地点で、直接観察法により成体等が確認された。

確認された環境は、河川内や裸地等であった。確認時期は令和5年5月及び7月～10月であった。

表 5.1.6-94 ニホンスッポンの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年5月及び7月～10月に、河川内や裸地等の5地点で、成体や死体を計5個体確認。	5	5

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、主に河川内や裸地等であった。

既存の生態情報によれば、「流れの緩やかな河川中・下流域の泥底や湖沼に生息し、魚類、甲殻類、カワニナなどを食べる。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、河川に生息し、魚類、甲殻類、カワニナなどを餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「開放水域（本川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

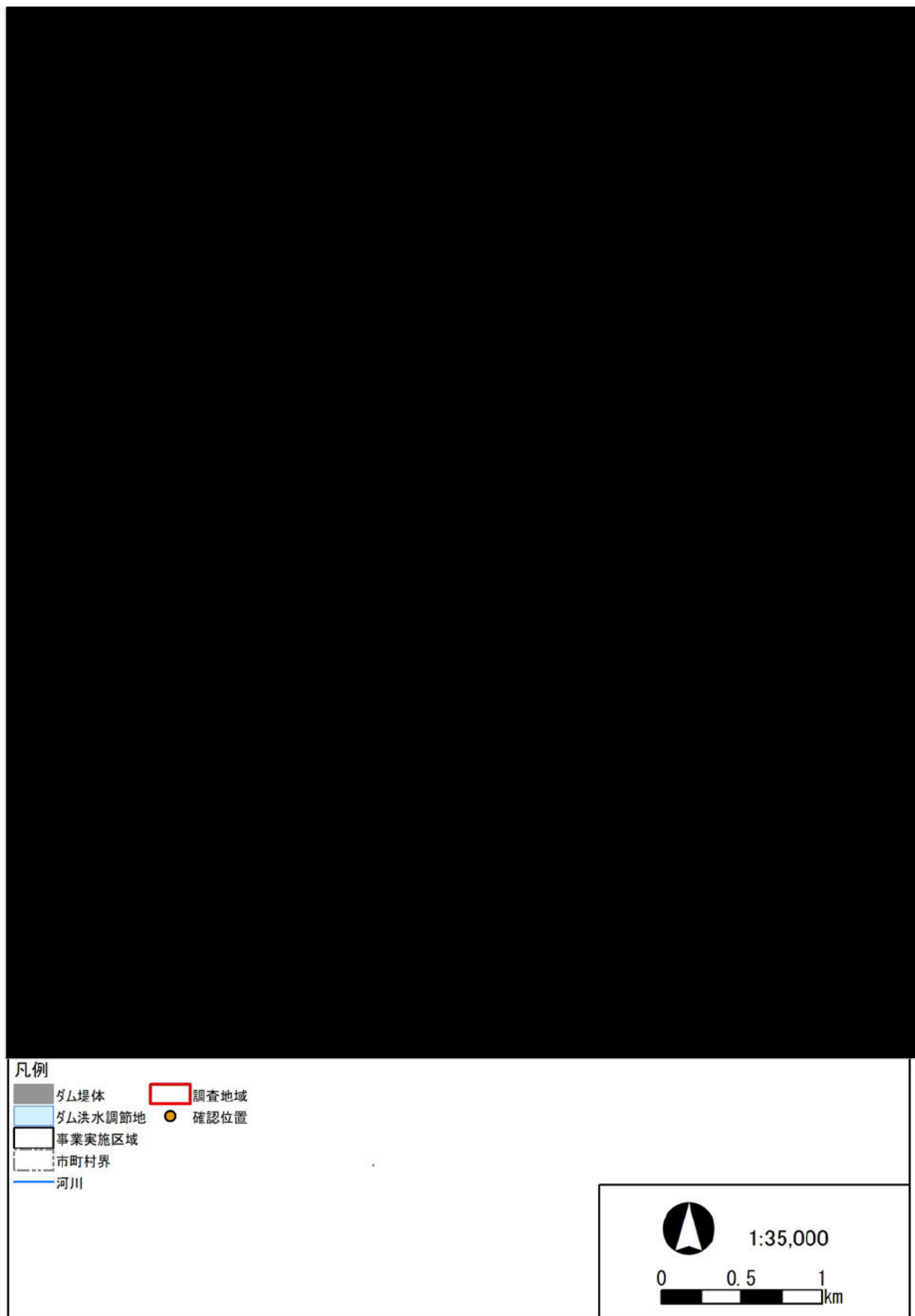


図 5.1.6-74 ニホンスッポン確認地点

c) トカゲ属

トカゲ属は、ニホントカゲ、ヒガシニホントカゲの可能性が考えられるため、本書ではトカゲ属とした。

(i) 重要性

【ニホントカゲ】

「滋賀県レッドデータブック」： 要注目種

「甲賀市レッドリスト」： 要注目種

ニホントカゲは、日本では本州西部、四国、九州、隠岐、五島、大島諸島に分布する。

^{爬 1)}

滋賀県では、野洲川および今津町以西の大津市、草津市、栗東市、甲賀市、信楽町、水口町、志賀町、今津町に分布する。^{爬 1)}

【ヒガシニホントカゲ】

「滋賀県レッドデータブック」： 要注目種

「甲賀市レッドリスト」： 要注目種

ヒガシニホントカゲは、日本では本州東部、佐渡に分布する。^{爬 1)}

滋賀県では、野洲川および西浅井町以东の八日市市、木之本町、余呉町、愛知川町、安土町、伊吹町、近江町、浅井町、竹生島に分布する。^{爬 1)}

(ii) 生態

【ニホントカゲ】

低地上性で市街地、森林、農地周辺などの日当たりのよい場所に好んですむ。^{爬 2)}4～5 月にかけて交尾し、6 月頃、地中に産卵する。^{爬 1)}産卵数は5～16 個。^{爬 1)}卵は鶏卵形で卵殻は柔らかい。^{爬 1)}雌は孵化するまでの間卵の世話をする。^{爬 1)}昆虫、クモ、ミミズなどを捕食する。^{爬 1)}

【ヒガシニホントカゲ】

低地から山地の森林、林縁、草地、荒れ地、人家の庭などさまざまな環境に生息し、繁殖生態、食性もニホントカゲと大差はないと考えられる。^{爬 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-95 及び図 5.1.6-75 に示す。

現地調査では、計 13 地点で、直接観察法により成体、幼体が確認された。

確認された環境は、草地や樹林内、舗装路上等であった。確認時期は令和 5 年 3 月、5 月、7 月及び 8 月であった。

現地調査では、本種の幼体が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。

表 5.1.6-95 トカゲ属の確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年3月、5月、7月及び8月に、草地や樹林内、舗装路上等の13地点で、成体や幼体を計13個体確認。	13	13

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、草地や樹林内、舗装路上等であった。

既存の生態情報によれば、「低地から山地の森林、林縁、草地、荒地、人家の庭などさまざまな環境に生息する。昆虫、クモ、ミミズなどを捕食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、森林や草地、市街地等に生息し、その周辺で昆虫、クモ、ミミズなどを餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「低木林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「市街地等」と推定される。

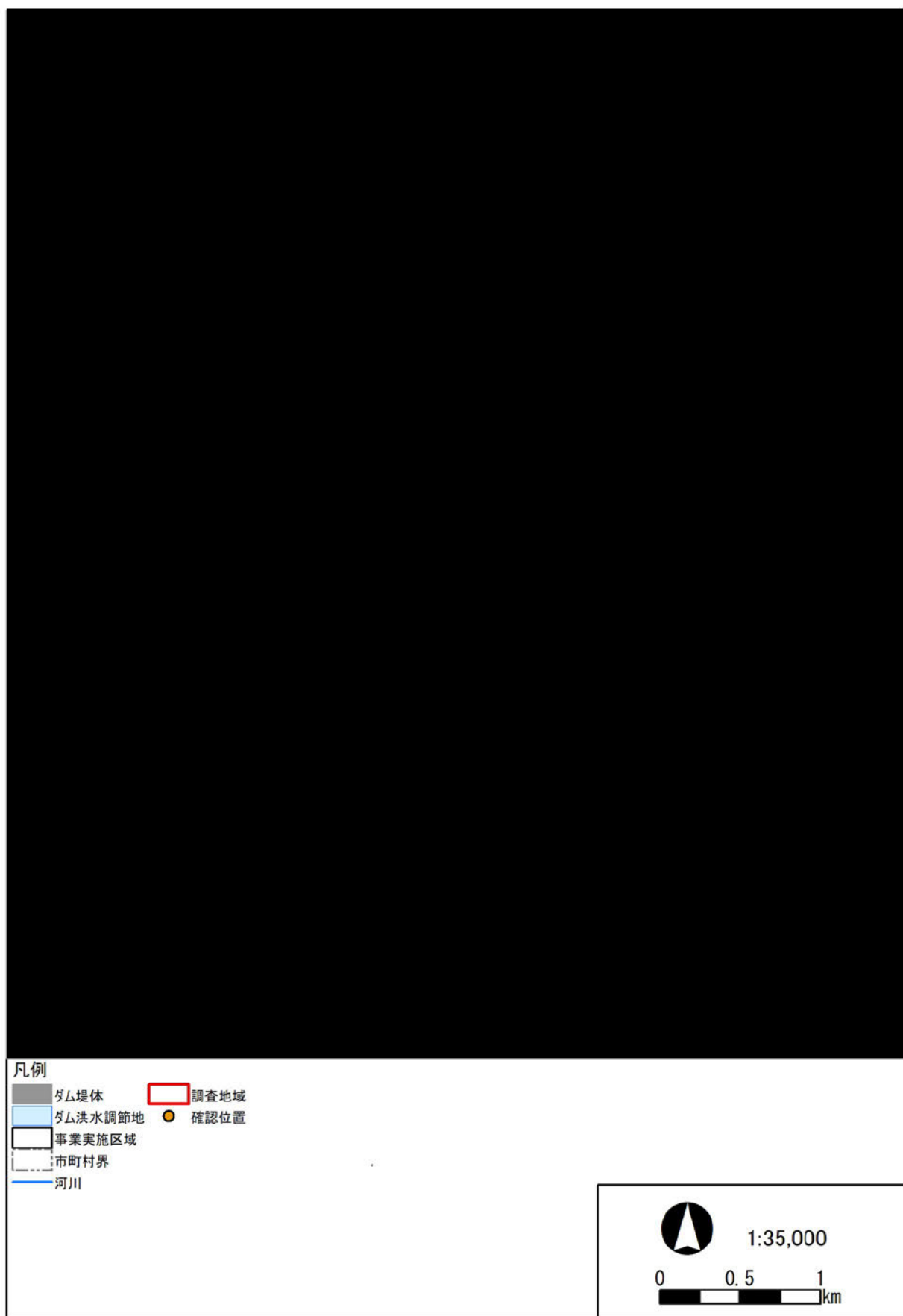


図 5.1.6-75 トカゲ属確認地点

d) ジムグリ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ジムグリは、日本では北海道、本州、四国、九州、国後、伊豆大島、陰岐、壱岐、五島、大隅諸島に分布する。^{爬 1)}

滋賀県では、大津市、八日市市、栗東市、木之本町、余呉町、日野町、甲西町、朽木村に分布する。^{爬 1)}

(ii) 生態

低地から山地の森林、草地、河川敷などに生息する。^{爬 1)}ネズミなどの小型哺乳類を好食する。^{爬 1)}穴の中などに潜んでいることが多く、人目に触れる機会は少ない。^{爬 1)}5～6月にかけて交尾し、7～8月に地中に産卵する。^{爬 1)}産卵数は1～8個で、47～55日で孵化する。^{爬 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-96 及び図 5.1.6-76 に示す。

現地調査では、計1地点で、直接観察法により幼体が確認された。

確認された環境は、樹林内であった。確認時期は令和5年10月であった。

現地調査では、本種の幼体が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。

表 5.1.6-96 ジムグリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年10月に、樹林内の1地点で、幼体を計1個体確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内であった。

既存の生態情報によれば、「低地から山地の森林、草地、河川敷などに生息する。ネズミなどの小型哺乳類を好食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、森林や草地に生息し、林内や草地でネズミなどの小型哺乳類を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「川辺林」、「低木林」、「草地（高茎草地）」と推定される。

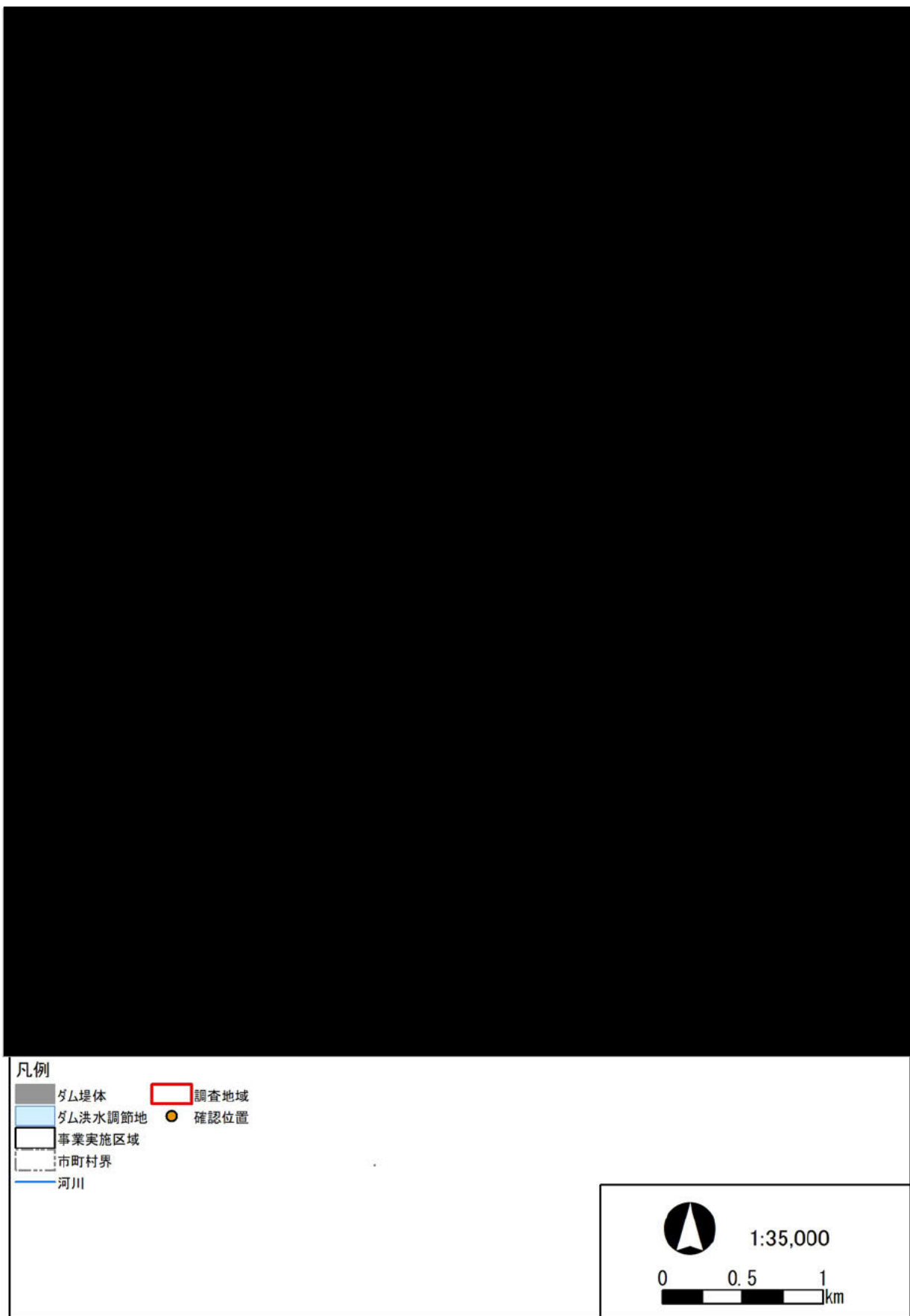


図 5.1.6-76 ジムグリ確認地点

e) ヒバカリ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ヒバカリは、日本では本州、四国、九州、佐渡、陰岐、沓岐、五島列島、大隅諸島に分布する。^{爬 1)}

滋賀県では、大津市、近江八幡市、草津市、彦根市、西浅井市、余呉町、多賀町、豊郷町、愛知川町、日野町、能登川町、信楽町、土山町、水口町、志賀町、新旭町、朽木村に分布する。^{爬 1)}

(ii) 生態

低地から山地の水辺に生息する。^{爬 1)}夕方や曇りの日に特によく活動するが、小型で物陰に潜んでいることが多いため、人目に触れる機会は少ない。^{爬 1)}5～6 月にかけて交尾し、6～8 月にコケや草の中に 2～10 卵を産卵する。^{爬 1)}水によく入ってカエルやオタマジャクシ、小魚、ミミズ等を好食する。^{爬 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-97 及び図 5.1.6-77 に示す。

現地調査では、計 1 地点で、直接観察法により成体が確認された。

確認された環境は、樹林内であった。確認時期は令和 5 年 10 月であった。

表 5.1.6-97 ヒバカリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 10 月に、樹林内の 1 地点で、成体を 1 個体確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内であった。

既存の生態情報によれば、「低地から山地の水辺に生息する。水によく入ってカエルやオタマジャクシ、小魚、ミミズ等を好食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、水辺の森林や草地に生息し、その周辺でカエルやオタマジャクシ、小魚、ミミズ等を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「川辺林」、「低木林」と推定される。



図 5.1.6-77 ヒバカリ確認地点

f) ヤマカガシ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ヤマカガシは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{爬 1)}

滋賀県では、大津市、草津市、西浅井町、多賀町、日野町、石部町、土山町、志賀町、高島町、朽木村、浅井町に分布する。^{爬 1)}

(ii) 生態

水田の周辺で見かけることが多いが、山地にも生息している。^{爬 1)}通常秋に交尾し、6～8月頃に2～30個の卵を産む。^{爬 1)}産卵後約1か月で孵化する。^{爬 1)}食べ物の大部分をカエル類が占めるが、ドジョウなどの小魚も捕食する。^{爬 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-98 及び図 5.1.6-78 に示す。

現地調査では、計5地点で、直接観察法により成体、幼体が確認された。

確認された環境は、樹林内や草地等であった。確認時期は令和5年5月、7月及び10月であった。

現地調査では、本種の幼体が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。

表 5.1.6-98 ヤマカガシの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年5月、7月及び10月に、樹林内や草地等の5地点で、成体や幼体を計5個体確認。	5	5

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や草地等であった。

既存の生態情報によれば、「水田の周辺で見かけることが多いが、山地にも生息している。食べ物の大部分をカエル類が占めるが、ドジョウなどの小魚も捕食する」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、森林、草地、農耕地等に生息し、カエルや小魚等を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「低木林」、「農耕地（水田）」と推定される。

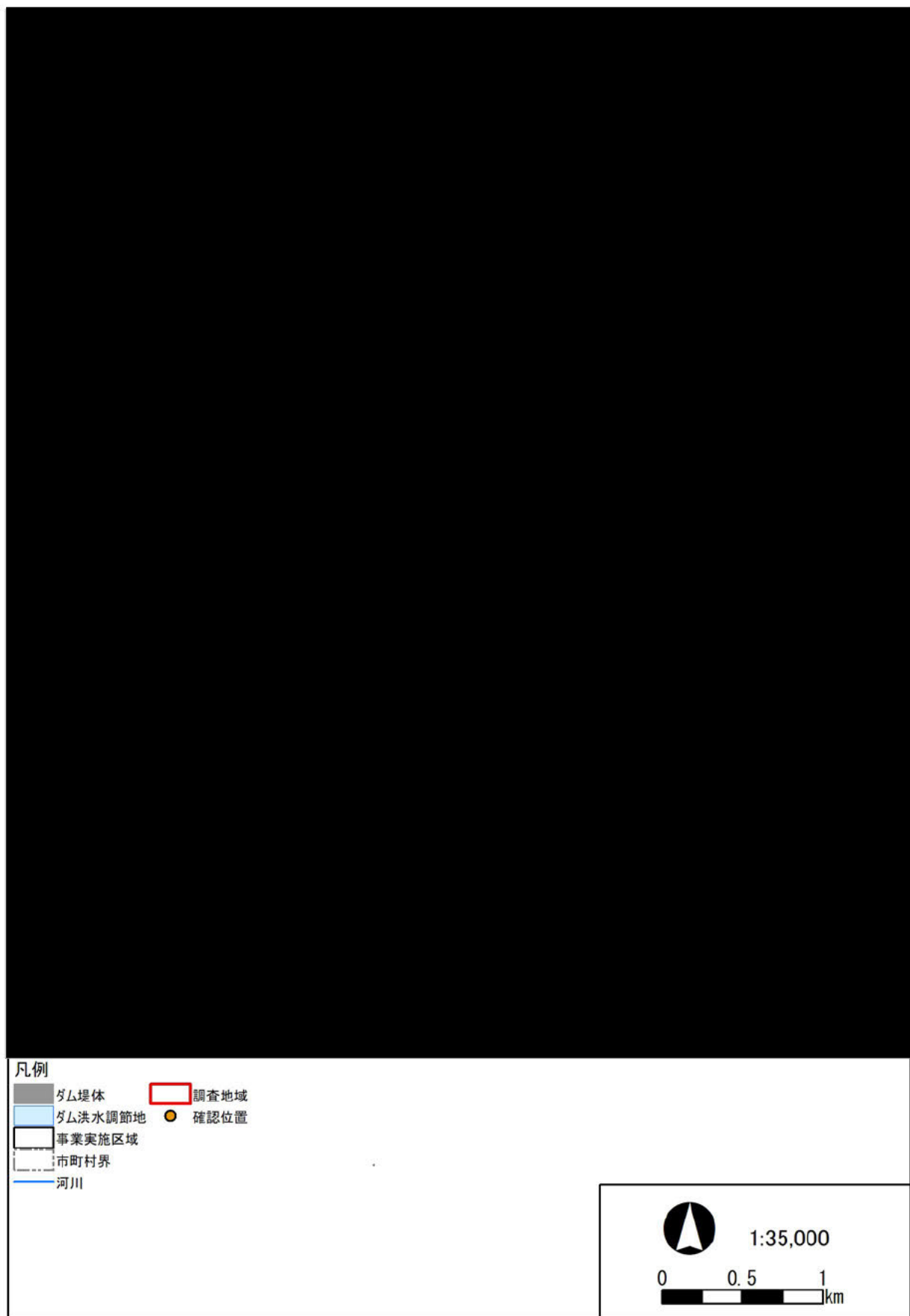


図 5.1.6-78 ヤマカガシ確認地点

g) ニホンマムシ

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ニホンマムシは、日本では北海道、本州、四国、九州と属島に分布する。^{爬 1)}

滋賀県では、大津市、彦根市、八日市市、余呉町、日野町、石部町、信楽町、志賀町、マキノ町に分布する。^{爬 1)}

(ii) 生態

山林や周辺の田畑・水辺や湿地に生息し、特に山地のガレ場、田畑の畔や草むらに多く、カエル、ネズミ、トカゲ等を捕食する。^{爬 1)} 主に夜行性だが、妊娠中の雌や冬眠の前後には日光浴する姿が見られる。^{爬 2)} 交尾期は8～9月。^{爬 1)} 卵胎生で翌年8～10月に幼体を2～13匹産む。^{爬 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-99 及び図 5.1.6-79 に示す。

現地調査では、計3地点で、直接観察法により成体を確認された。

確認された環境は、樹林内であった。確認時期は令和5年7月～8月及び10月であった。

表 5.1.6-99 ニホンマムシの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年7月～8月及び10月に、樹林内の3地点で、成体を計3個体確認。	3	3

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内であった。

既存の生態情報によれば、「山林や周辺の田畑・水辺や湿地に生息し、特に山地のガレ場、田畑の畔や草むらに多く、カエル、ネズミ、トカゲ等を捕食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、森林や水辺の草地、農耕地等に生息し、その周辺でカエル、ネズミ、トカゲ等を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「低木林」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」と推定される。

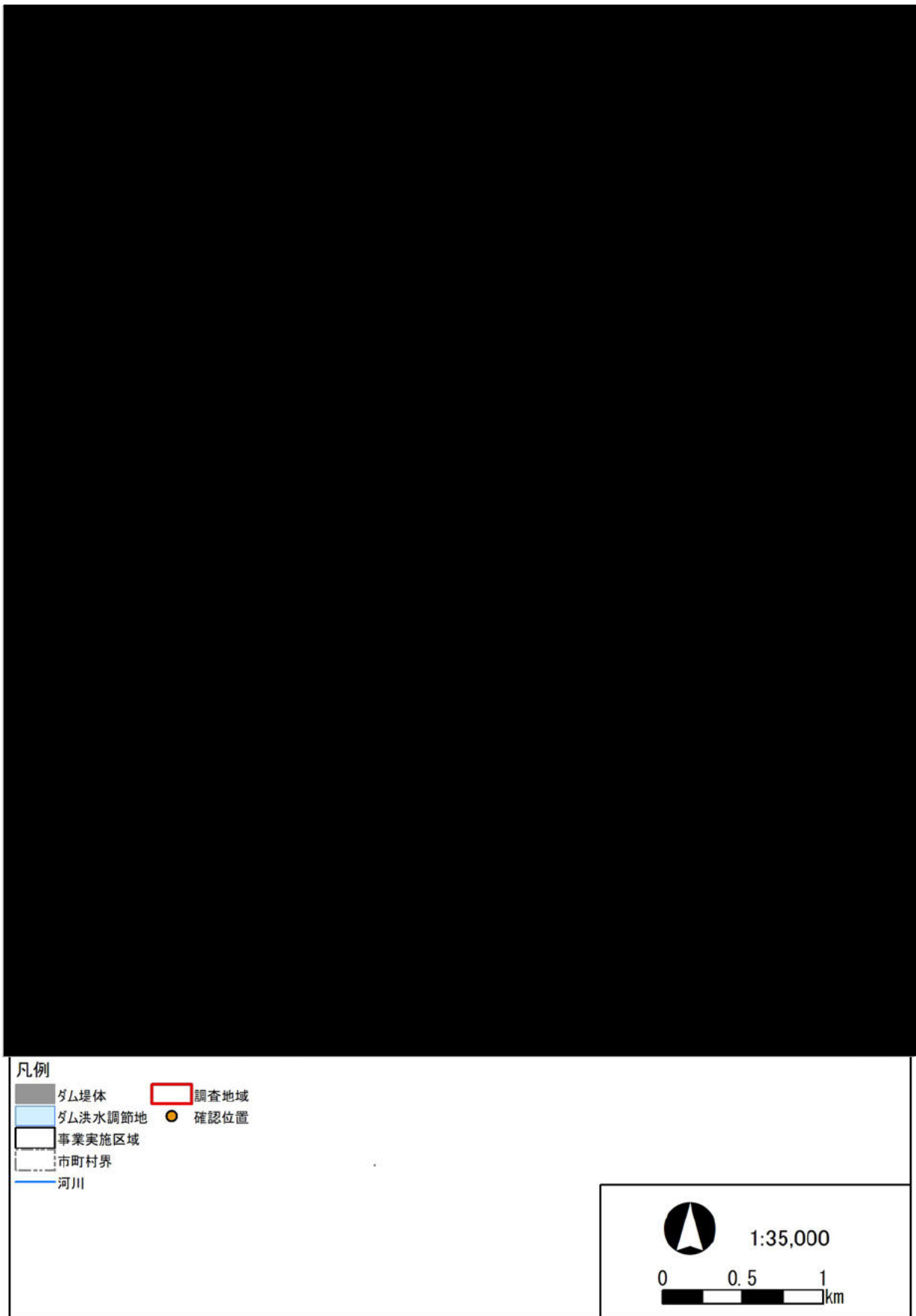


図 5.1.6-79 ニホンマムシ確認地点

(d) 両生類の重要な種

調査地域では、両生類の重要な種が 9 種確認された。また、その他ニホンヒキガエル、アズマヒキガエルの可能性が考えられるヒキガエル属、ニホンアカガエル、ヤマアカガエルの可能性が考えられるアカガエル属が確認された。

表 5.1.6-100 両生類の重要な種の確認状況

No.	記号 ^{注)}	種名	確認した調査方法
1	a	アカハライモリ	直接観察法
2	b	ニホンヒキガエル	直接観察法
-	c	ヒキガエル属	直接観察法
3	d	タゴガエル	直接観察法
4	e	ヤマアカガエル	直接観察法
-	f	アカガエル属	直接観察法
5	g	トノサマガエル	直接観察法
6	h	ツチガエル	直接観察法
7	i	シュレーゲルアオガエル	直接観察法
8	j	モリアオガエル	直接観察法
9	k	カジカガエル	直接観察法

注) 記号欄に示す a～k は、以降に示す重要な種の種ごとの現地調査結果等の項目に対応している。

a) アカハライモリ

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」：準絶滅危惧

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

アカハライモリは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、彦根市、八日市市、木之本町、西浅井町、余呉町、多賀町、愛東町、日野町、石部町、土山町、伊吹町、米原町、志賀町、今津町、朽木町、浅井町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

5～7 月上旬に水田や池、小川で繁殖する。^{両 1)} 繁殖期は 4～7 月で、求愛行動は秋にも行われる。^{両 2)} 一腹卵数は 100～400 個で、雌は産卵期間中に何回も産卵し、1 回ごとの産卵数は 40 個以下。^{両 1)} 卵は一粒ずつ水草や枯れ葉などに産みつけられる。^{両 1)} 幼生は水生の小動物を捕食し、夏から秋にかけて変態するが、一部は越冬し翌年変態する。^{両 1)} 変態後数年間は陸上で生活し、ミミズや昆虫などの小動物を捕食する。^{両 1)} 成熟後は再び水中で生活することが多い。^{両 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-101 及び図 5.1.6-80 に示す。

現地調査では、計 19 地点で、直接観察法により成体、幼体が確認された。

確認された環境は、樹林内や草地の湿地や水たまり、沈砂池等であった。確認時期は令和 5 年 3 月、5 月、7 月及び 10 月であった。

現地調査では、本種の幼生が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-101 アカハライモリの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 3 月、5 月、7 月及び 10 月に、樹林内や草地の湿地や水たまり、沈砂池等の 19 地点で、成体や幼生を計 56 個体確認。	19	56

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や草地の湿地や水たまり、沈砂池等であった。

既存の生態情報によれば、「水田や池、小川で繁殖する。幼生は水生の小動物を捕食し、変態後数年間は陸上で生活し、ミミズや昆虫などの小動物を捕食する。成熟後は再び水中で生活することが多い。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、草地や水田等に生息し、ミミズや昆虫などの小動物を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

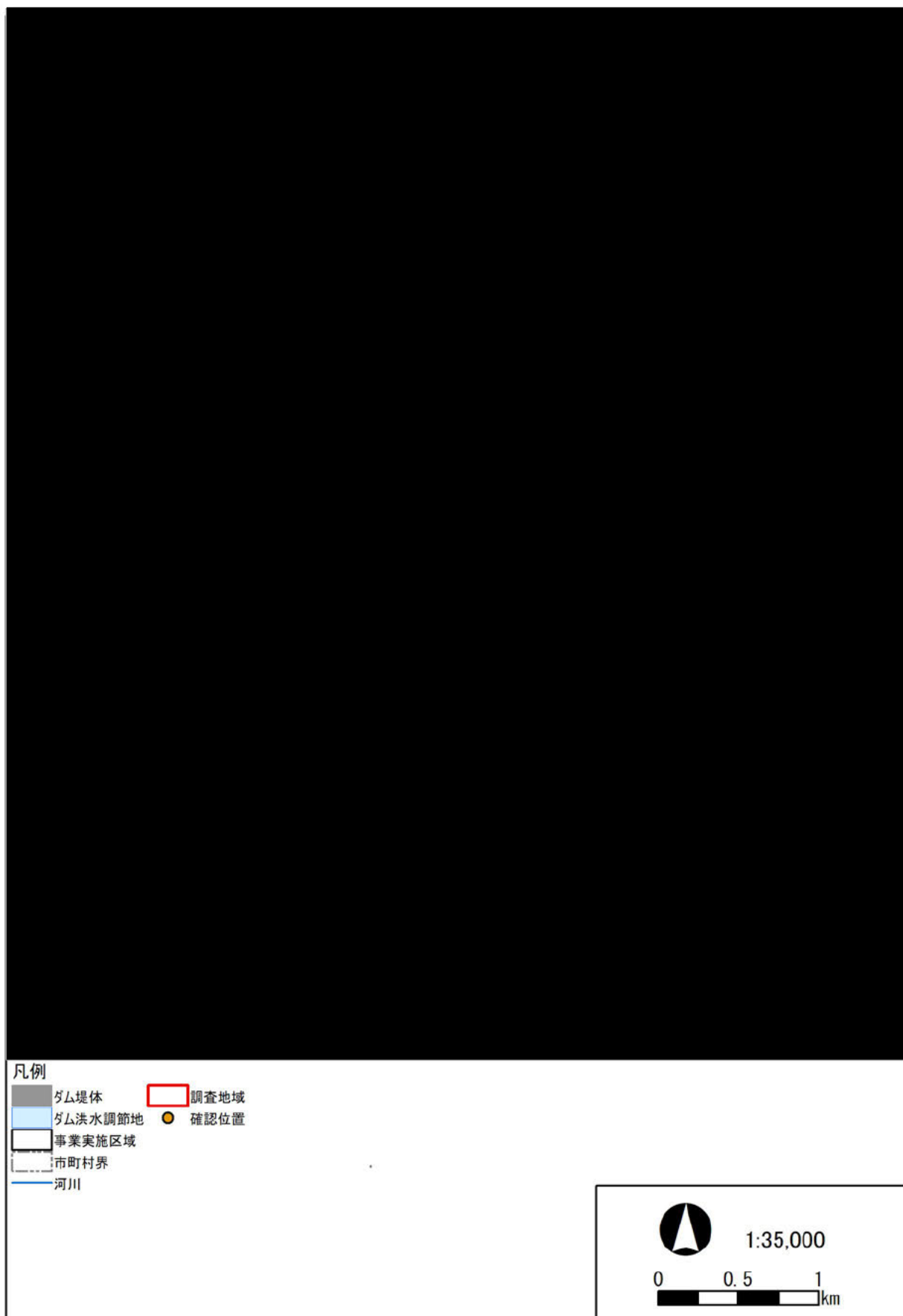


図 5.1.6-80 アカハライモリ確認地点

b) ニホンヒキガエル

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

ニホンヒキガエルは、日本では本州（西南部）、四国、九州に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、栗東市、信楽町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

アズマヒキガエルとは、鼓膜がより小さく、雄の背中のいぼが繁殖期でもそれほど不明瞭とならないことで、ナガレヒキガエルとは、四肢がより短く、耳腺がより長く、鼓膜が明瞭で、幼生が止水に生息することで区別される。^{両 1)}繁殖生態はアズマヒキガエルの場合と基本的に同じで、2～4月に山道の水溜まり、湿地、池などの止水で繁殖し、雄は激しく雌を奪い合う。^{両 1)}長いひも状の卵塊として7000個程度の卵を産む。^{両 1)}肉食性であり、変態直後には落ち葉の間にトビムシなどの微小な昆虫を食べ、次第に大きな餌もとるようになって、成体ではミミズ、鞘翅類（特にオサムシなどの地表性の甲虫）、アリ、サワガニなどをよく食す。^{両 3)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-102 及び図 5.1.6-81 に示す。

現地調査では、計4地点で、直接観察法により成体を確認された。

確認された環境は、樹林内や湿地等であった。確認時期は令和5年7月～9月であった。

表 5.1.6-102 ニホンヒキガエルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年7月～9月に、樹林内や湿地等の4地点で、成体を計4個体確認。	4	4

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や湿地等であった。

既存の生態情報によれば、「山道の水溜まり、湿地、池などの止水で繁殖する。幼生が止水に生息する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、森林、湿地、水田等に生息し、昆虫類やミミズ等を餌として生息していると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

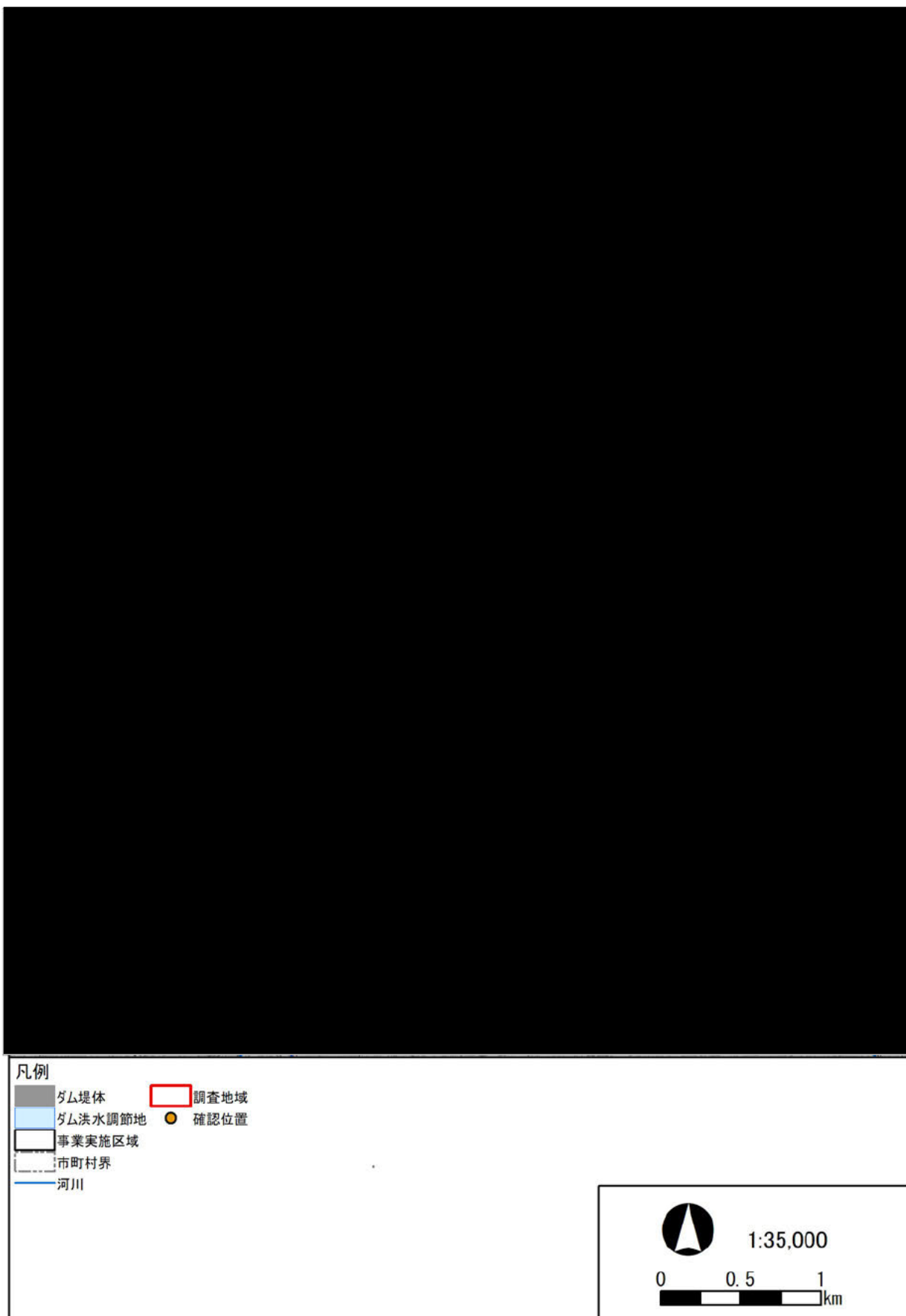


図 5.1.6-81 ニホンヒキガエル確認地点

c) ヒキガエル属

ヒキガエル属は、ニホンヒキガエル、アズマヒキガエルの可能性が考えられるため、本書ではヒキガエル属とした。

重要性及び生態については、ニホンヒキガエルは「b) ニホンヒキガエル」に示したとおりである。

(i) 重要性

【アズマヒキガエル】

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

アズマヒキガエルは、日本では本州（東北部）に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、余呉町、多賀町、日野町、土山町、志賀町、高島町、朽木町、浅井町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

【アズマヒキガエル】

鼓膜が大きいことでニホンヒキガエル、ナガレヒキガエルと区別され、幼生は止水に生息することでナガレヒキガエルと区別される。^{両 1)}3～5 月に水溜まり、溝、湿地、池などの止水に、4,500 個程度の卵を長いひも状の卵塊として産む。^{両 1)}幼生は小型、黒一色で、口器は小さい。^{両 1)}6 月頃に変態し、極めて速く成長する。^{両 1)}変態直後は微小な昆虫、成体はミミズ、地表性甲虫、アリ、サワガニなどを食べる。^{両 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-103 及び図 5.1.6-82 に示す。

現地調査では、計 11 地点で、直接観察法により卵塊及び幼生が確認された。

確認された環境は、樹林内や草地の湿地や水たまり等であった。確認時期は令和 5 年 3 月及び 5 月であった。

現地調査では、本種の卵塊及び幼生が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-103 ヒキガエル属の確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 3 月及び 5 月に、樹林内や草地の湿地や水たまり等の 11 地点で、卵塊や幼生を計 3,337 個体確認。	11	3337

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や草地の湿地や水たまり等であった。

既存の生態情報によれば、「山道の水溜まり、湿地、池などの止水で繁殖する。幼生が止水に生息する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、森林、湿地、水田に生息し、昆虫類やミミズ等を餌として生息していると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

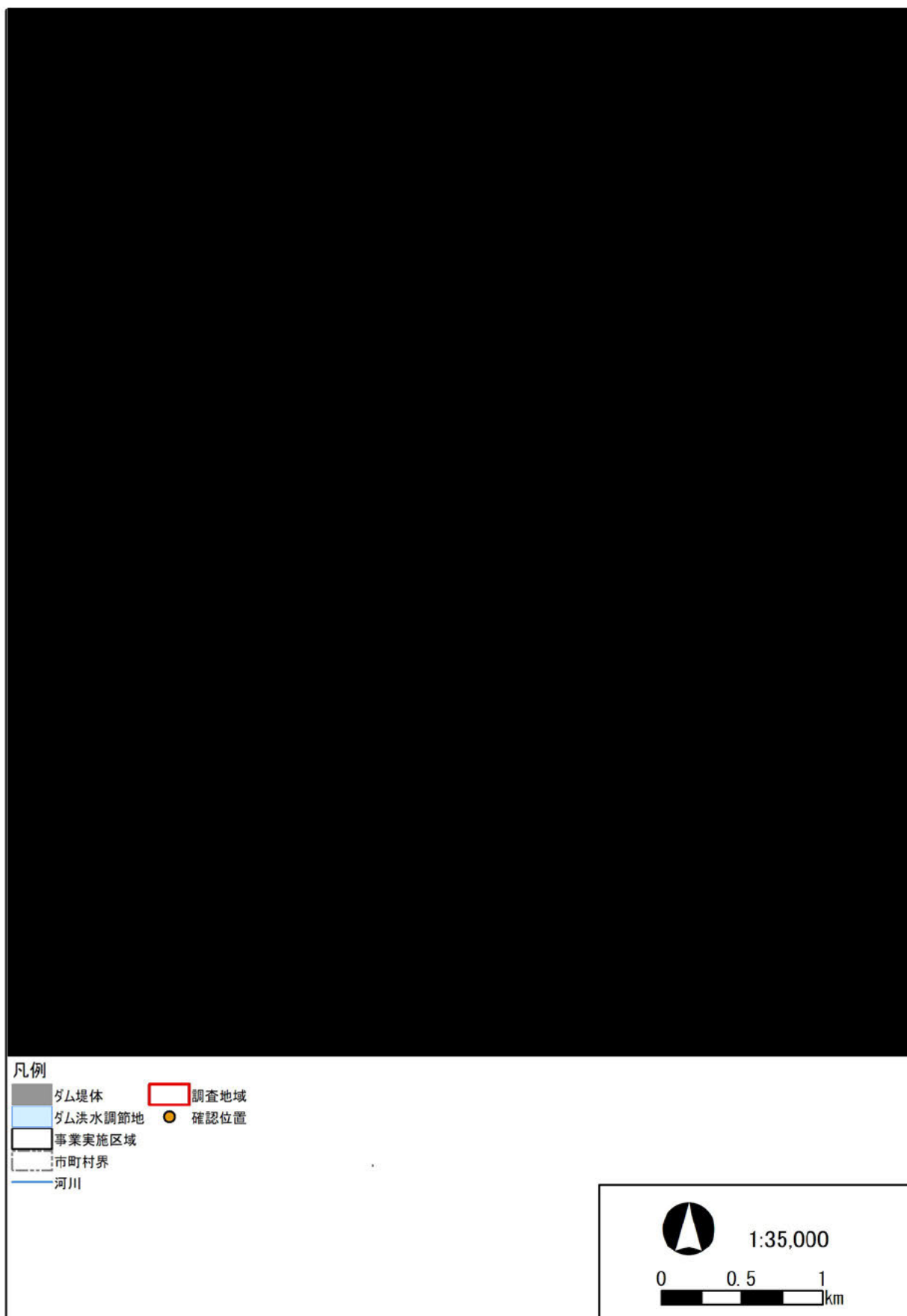


図 5.1.6-82 ヒキガエル属確認地点

d) タゴガエル

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」： 要注目種

タゴガエルは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、草津市、栗東市、木之本町、西浅井町、余呉町、多賀町、日野町、永源寺町、石部町、甲賀町、土山町、伊吹町、志賀町、安曇川町、今津町、高島町、マキノ町、朽木町、浅井町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

小型は3～4月、大型は5月に、小渓流の縁にある岩の隙間や、湿地帯の地下にある伏流水中で繁殖し、雄は巣穴の中で「ググッ……」と鳴き、姿を見つけるのは難しい。^両

¹⁾それぞれ約53個、約140個を含む球形の卵塊を産む。^{両 1)}卵は大きく卵黄に富む。^{両 1)}

幼生は卵黄を消費するだけで変態できる。^{両 1)}7月頃変態して林床で生活し、水中で冬眠する。^{両 1)}本種は、肉食性であり、カマドウマなどの地上性直翅類をはじめとする昆虫、クモ、陸貝などを食す。^{両 3)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-104 及び図 5.1.6-83 に示す。

現地調査では、計 192 地点で、直接観察法により成体及び鳴き声、幼体、卵塊が確認された。

確認された環境は、樹林内や草地、湿地等であった。確認時期は令和5年3月、5月及び7月～10月であった。

現地調査では、本種の幼体及び卵塊が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-104 タゴガエルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年3月、5月及び7月～10月に、樹林内や草地、湿地等の192地点で、成体及び鳴き声、幼体、卵塊を計304個体確認。	192	304

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や草地、湿地等であった。

既存の生態情報によれば、「小溪流の縁にある岩の隙間や、湿地帯の地下にある伏流水中で繁殖する。成体は林床で生活し、水中で冬眠する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、森林や森林に連続した草地、湿地等に生息し、林床や草むら等で小昆虫類等を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「低木林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

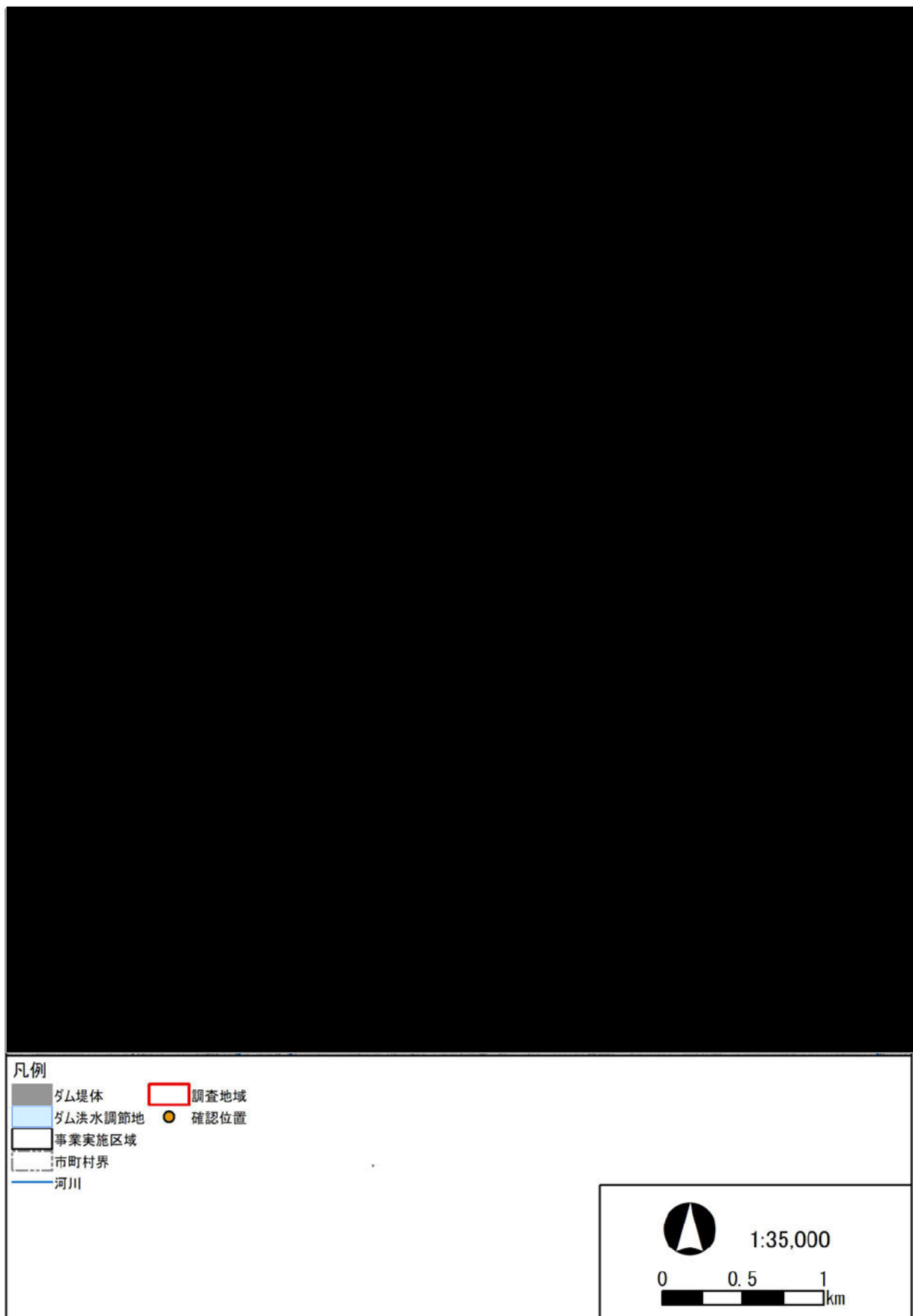


図 5.1.6-83 タゴガエル確認地点

e) ヤマアカガエル

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：希少種

「滋賀県条例」：希少野生動植物種

「甲賀市レッドリスト」：絶滅危機増大種

ヤマアカガエルは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、木之本町、余呉町、多賀町、日野町、甲賀町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

主に丘陵地から山地に生息し、3～4月に水の残った水田、湿原、湿地、道路の水溜まりなど、浅い止水で繁殖する。^{両 1)}雄は「キャララ……」と鳴く。^{両 1)}卵塊は球を押しつぶしたような形で、卵数は1,300個程度である。^{両 1)}幼生は6～7月に変態する。^{両 1)}水中で越冬することが多い。^{両 1)}本種は、肉食性であり、半翅目、直翅目などの昆虫、ミミズ、ナメクジなどを食す。^{両 3)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-105 及び図 5.1.6-84 に示す。

現地調査では、計6地点で、直接観察法により成体及び鳴き声、幼体、幼生が確認された。

確認された環境は、樹林内や草地の湿地や水たまり等であった。確認時期は令和5年3月、7月及び10月であった。

現地調査では、本種の幼体及び幼生が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-105 ヤマアカガエルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年3月、7月及び10月に、樹林内や草地の湿地や水たまり等の6地点で、成体及び鳴き声、幼体、幼生を計1,508個体確認。	6	1508

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や草地の湿地や水たまり等であった。

既存の生態情報によれば、「主に丘陵地から山地に生息し、水の残った水田、湿原、湿地、道路の水溜まりなど、浅い止水で繁殖する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、森林、湿地、水田等に生息し、林床や草むら等で小昆虫類等を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

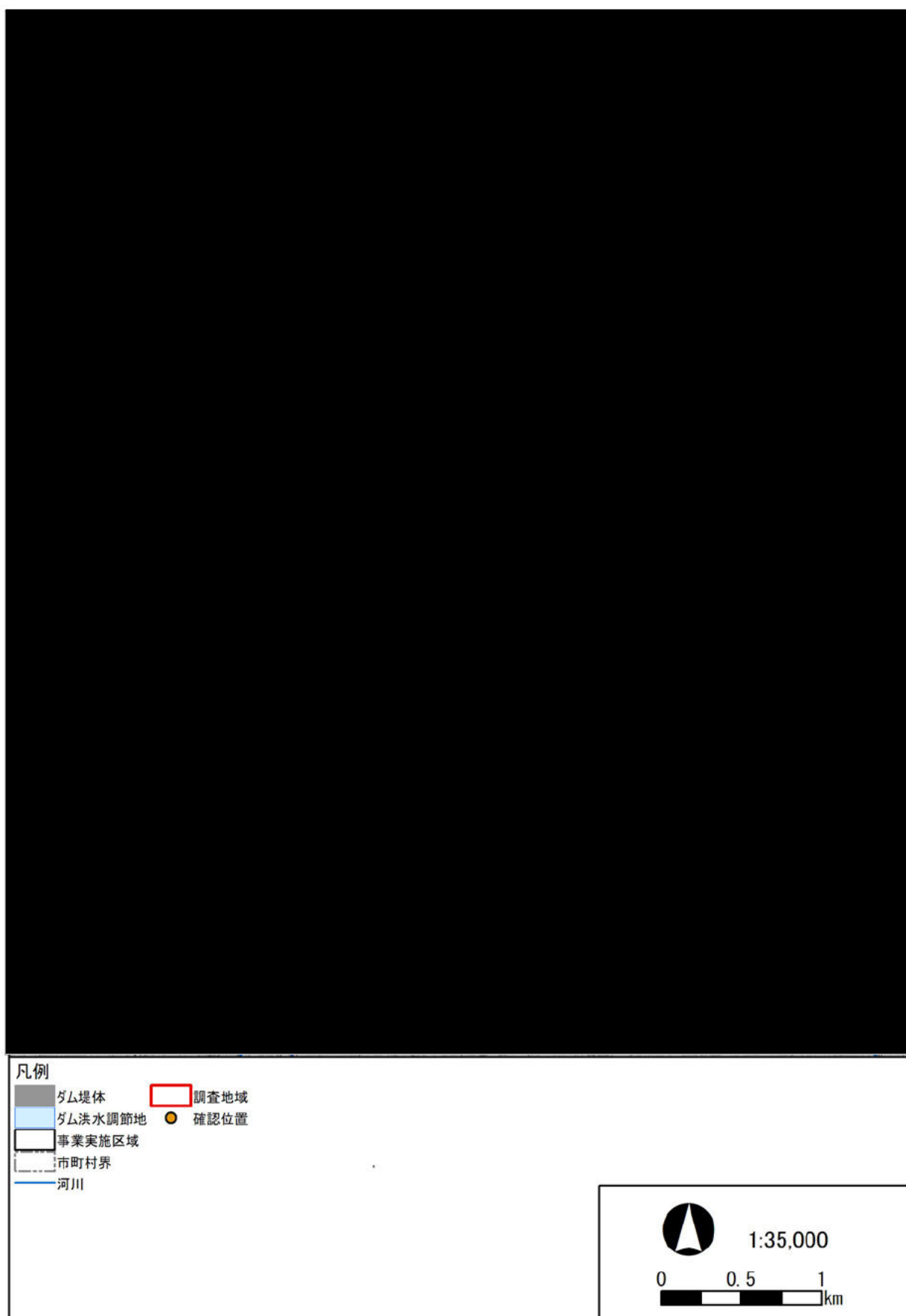


図 5.1.6-84 ヤマアカガエル確認地点

f) アカガエル属

アカガエル属は、ニホンアカガエル、ヤマアカガエルの可能性が考えられるため、本書ではアカガエル属とした。

重要性及び生態については、ヤマアカガエルは「e) ヤマアカガエル」に示したとおりである。

(i) 重要性

【ニホンアカガエル】

「滋賀県レッドデータブック」： 要注目種

「甲賀市レッドリスト」： 地域種

ニホンアカガエルは、日本では本州、四国、九州、隠岐、大隅諸島に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、近江八幡市、草津市、彦根市、守山市、八日市市、余呉町、日野町、石部町、甲賀町、甲西町、信楽町、水口町、山東町、安曇川町、新旭町、マキノ町、浅井町、湖北町、野洲町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

【ニホンアカガエル】

平地ないし丘陵地性で、山地には少ない種。^{両 1)}産卵は1～3月に水の残った水田、湿原、湿地の水溜まりなど、浅い止水で行われる。^{両 1)}雄は鳴嚢を持たないが、「キョッキョッキョッキョ…」と鳴く。^{両 1)}卵塊は球形で、卵数は1,000個程度。^{両 1)}幼生は藻類や動物の死体などを食べ、5～6月に変態する。^{両 1)}成体や幼体は水辺から離れた林床や草地で生活し、比較的小さな昆虫やクモなどを捕食する。^{両 1)}成体は水底で越冬することが多い。^{両 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-106 及び図 5.1.6-85 に示す。

現地調査では、計1地点で、直接観察法により卵塊が確認された。

確認された環境は、草地の湿地であった。確認時期は令和5年3月であった。

現地調査では、本種の卵塊が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-106 アカガエル属の確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年3月に、草地の湿地の1地点で、卵塊を1個確認。	1	1

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、草地の湿地であった。

既存の生態情報によれば、「産卵は水の残った水田、湿原、湿地の水溜まりなど、浅い止水で行われる。幼生は藻類や動物の死体などを食べる。成体や幼体は水辺から離れた林床や草地で生活し、比較的小さな昆虫やクモなどを捕食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、草地、湿地、水田等に生息し、小昆虫類等を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

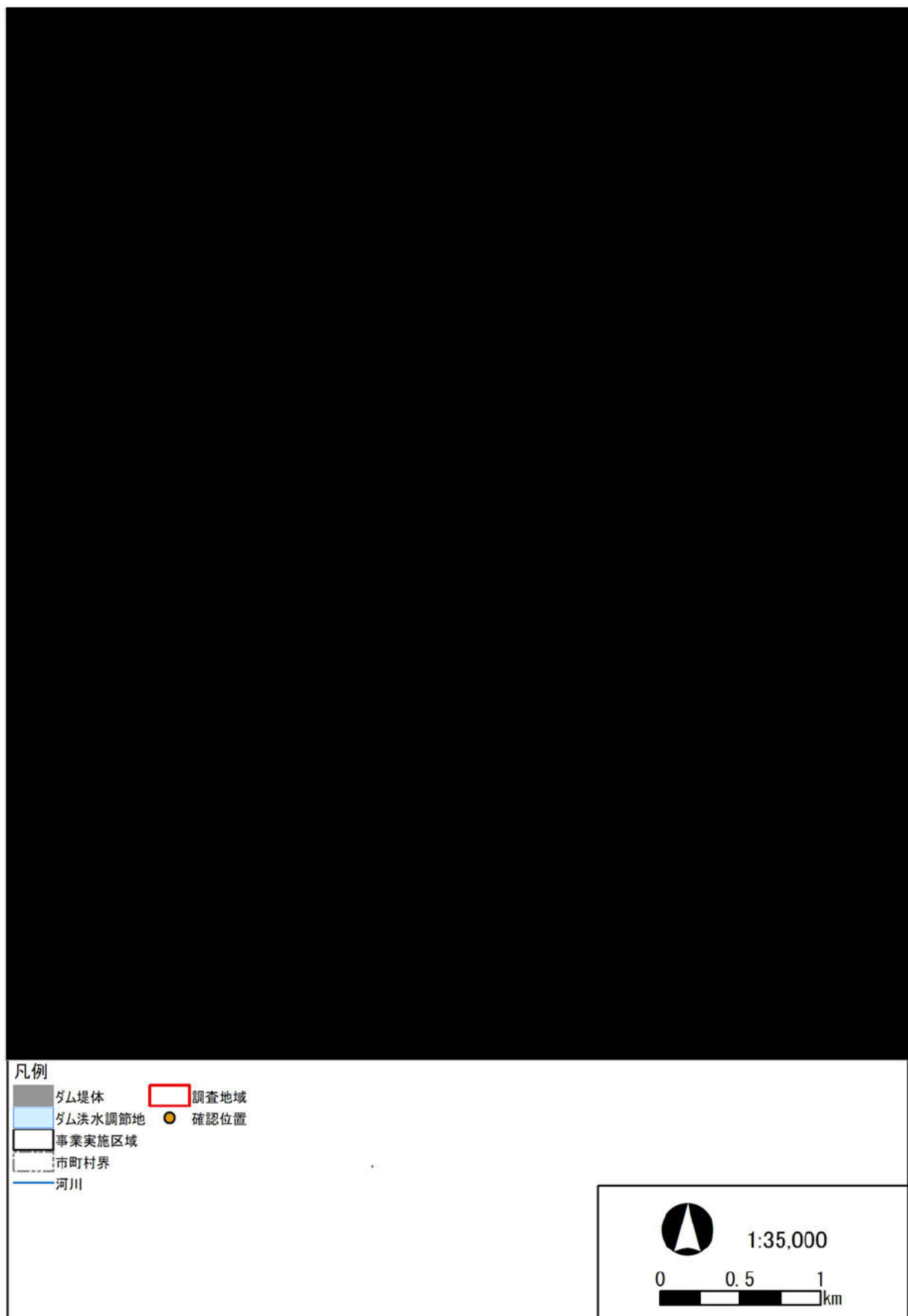


図 5.1.6-85 アカガエル属確認地点

g) トノサマガエル

(i) 重要性

「環境省レッドリスト」： 準絶滅危惧

「滋賀県レッドデータブック」： 要注目種

「甲賀市レッドリスト」： 要注目種

トノサマガエルは、日本では本州（仙台平野、福島県、関東地方を除く）、四国、九州に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、近江八幡市、草津市、彦根市、守山市、八日市市、栗東市、木之本町、高月町、西浅井町、余呉町、愛知川町、秦荘町、安土町、蒲生町、日野町、能登川町、伊吹町、石部町、甲賀町、甲西町、甲南町、信楽町、水口町、近江町、山東町、米原町、志賀町、安曇川町、今津町、新旭町、高島町、マキノ町、朽木村、浅井町、湖北町、野洲町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

低地から丘陵地にかけて広く見られる。^{両 1)}4～6月に1回、水田、溝、池などの浅い止水で繁殖し、1,800～3,000個の卵塊を水底に産む。^{両 1)}幼生は6月下旬～9月に変態、上陸し、クモ、昆虫、ムカデなどの他に、カエルをも捕食する。^{両 1)}非繁殖期は水田などの周辺の森林や草地で生活し、土中で冬眠する。^{両 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-107 及び図 5.1.6-86 に示す。

現地調査では、計 33 地点で、直接観察法により成体及び鳴き声、幼体等が確認された。

確認された環境は、樹林内や草地、湿地等であった。確認時期は令和 5 年 3 月、5 月及び 7 月～10 月であった。

現地調査では、本種の幼体を確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-107 トノサマガエルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 3 月、5 月及び 7 月～10 月に、樹林内や草地、湿地等の 33 地点で、成体及び鳴き声、幼体等を計 67 個体確認。	33	67

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や草地、湿地等であった。

既存の生態情報によれば、「水田、溝、池などの浅い止水で繁殖し、幼生・成体は上陸し、クモ、昆虫、ムカデなどの他に、カエルをも捕食する。非繁殖期は水田などの周辺の森林や草地で生活し、土中で冬眠する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、湿地、水田や、水辺に連続した森林、草地等に生息し、昆虫類等の小動物を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「アカマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

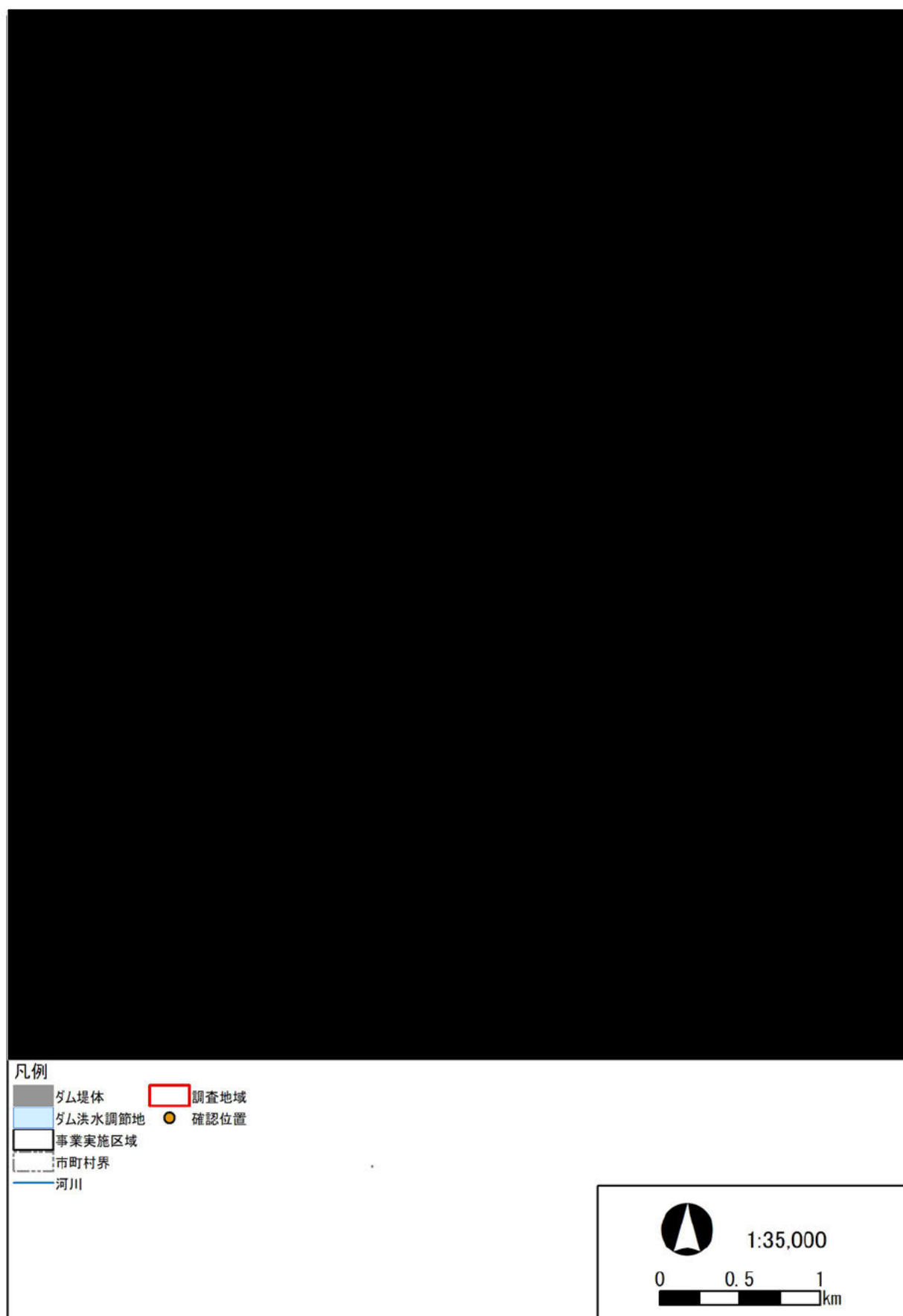


図 5.1.6-86 トノサマガエル確認地点

h) ツチガエル

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

ツチガエルは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、近江八幡市、彦根市、八日市市、栗東市、木之本町、西浅井町、余呉町、愛東町、湖東町、秦荘町、安土町、蒲生町、日野町、能登川町、甲賀町、甲西町、信楽町、土山町、水口町、志賀町、安曇川町、マキノ町、野洲町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

5～7月に水田、池、沼、用水路、沢、河川のゆるやかな流れで繁殖し、雌の一部は複数回産卵する。^{両 1)}卵は10～70個の小さな卵塊として、水草の茎などに産みつけられる。

^{両 1)}越冬して翌年5～8月に変態する幼生もいる。^{両 1)}変態後はアリ、クモ、昆虫などの小動物を捕食する。^{両 1)}繁殖期、非繁殖期ともに産卵場所付近で生活する。^{両 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-108 及び図 5.1.6-87 に示す。

現地調査では、計14地点で、直接観察法により成体、幼体、幼生が確認された。

確認された環境は、樹林内や湿地等であった。確認時期は令和5年3月、7月及び9月～10月であった。

現地調査では、本種の幼体及び幼生が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-108 ツチガエルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和5年3月、7月及び9月～10月に、樹林内や湿地等の14地点で、成体や幼体、幼生を計294個体確認。	14	294

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内や湿地等であった。

既存の生態情報によれば、「水田、池、沼、用水路、沢、河川のゆるやかな流れで繁殖し、成体はアリ、クモ、昆虫などの小動物を捕食する。繁殖期、非繁殖期ともに産卵場所付近で生活する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、河川、沢あかはら水田に生息し、昆虫類等を餌にしていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「農耕地（水田）」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

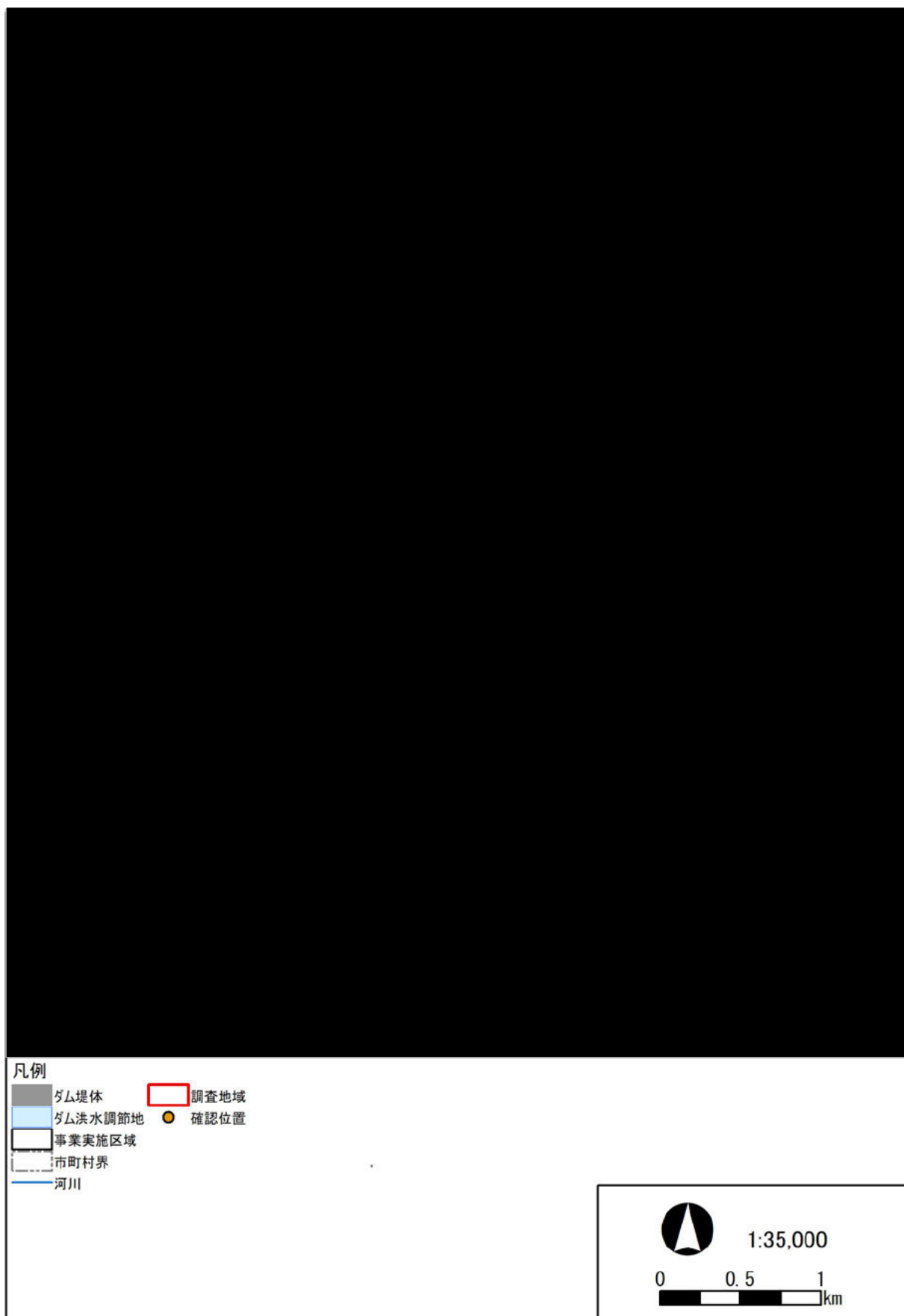


図 5.1.6-87 ツチガエル確認地点

i) シュレーゲルアオガエル

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

シュレーゲルアオガエルは、日本では本州、四国、九州に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、草津市、彦根市、守山市、八日市市、栗東市、西浅井町、余呉町、多賀町、愛東町、湖東町、安土町、蒲生町、日野町、石部町、甲賀町、甲西町、信楽町、土山町、水口町、伊吹町、安曇川町、今津町、マキノ町、野洲町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

主として平地や丘陵地にすんでいる。^{両 2)}草の上などで生活していることが多いが、とくに雌などは樹上に登ることもある。^{両 2)}3～5 月に水田の畦や湿地の地面で繁殖し、雄は浅く掘った穴や草の根ぎわで、「リリリ…」と美しい声で鳴く。^{両 1)}雌は穴や窪みの中に 300 個程の卵をクリーム色の泡状卵塊として産み出す。^{両 1)}幼生はくずれた卵塊とともに近くの水中に流れ出てそこで生活し、6 月～7 月に変態する。^{両 1)}変態後は草や低木の上で生活し、昆虫やクモなどを捕食する。^{両 1)}冬眠は浅い土中でなされる。^{両 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-109 及び図 5.1.6-88 に示す。

現地調査では、計 28 地点で、直接観察法により成体及び鳴き声、幼生、卵塊等が確認された。

確認された環境は、草地や裸地、樹林内の湿地等であった。確認時期は令和 5 年 3 月、5 月、7 月及び 9 月～10 月であった。

現地調査では、本種の幼生及び卵塊が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-109 シュレーゲルアオガエルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 3 月、5 月、7 月及び 9 月～10 月に、草地や裸地、樹林内の湿地等の 28 地点で、成体及び鳴き声、幼生、卵塊等を計 109 個体確認。	28	109

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、草地や裸地、樹林内の湿地等であった。

既存の生態情報によれば、「水田の畦や湿地の地面で繁殖し、穴や窪みの中に産卵する。幼生はくずれた卵塊とともに近くの水中に流れ出てそこで生活する。成体は草や低木の上で生活し、昆虫やクモなどを捕食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、湿地や水田、水辺に連続した草地や森林等に生息し、昆虫類等を餌にしていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「川辺林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

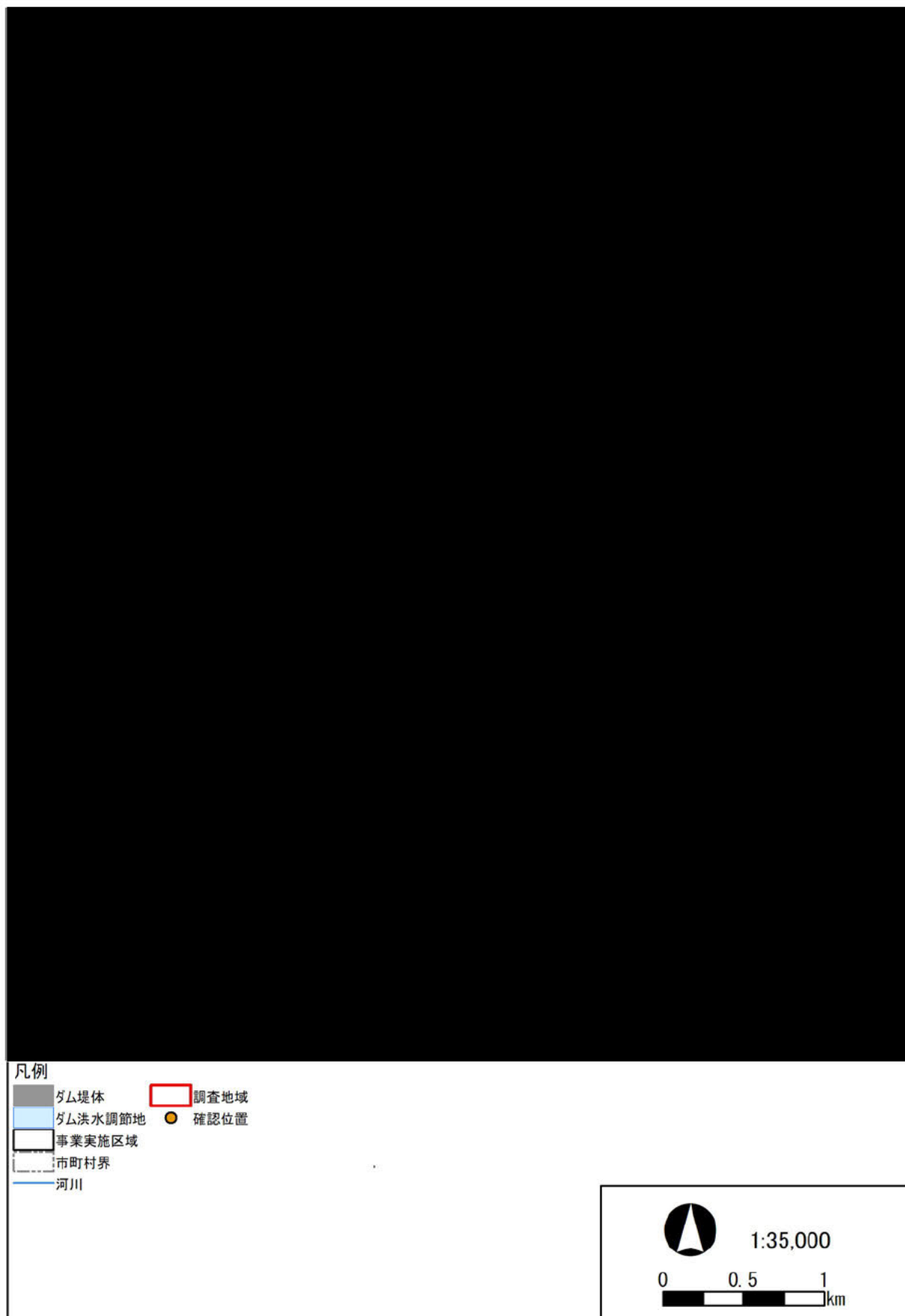


図 5.1.6-88 シュレーゲルアオガエル確認地点

j) モリアオガエル

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

モリアオガエルは、日本では本州(茨城県を除く)に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、草津市、余呉町、日野町、永源寺町、石部町、土山町、水口町、伊吹町、山東町、志賀町、新旭町、マキノ町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

シュレーゲルアオガエルよりも体が大きく、虹彩が赤みをおび、鳴き声が低く、後鳴きが続くことで区別される。^{両 1)}

樹上で生活するのが普通であるが、産卵期には低い草の上や地上にも下りる。^{両 2)}4～7月に池、沼、水田などの周辺で繁殖し、300～800個の卵を含む泡状の塊を木の枝や草の根ぎわに産卵する。^{両 1)}幼生は7～9月に変態、上陸するが、晩秋にも未変態の個体が見られることがある。^{両 1)}変態後はもっぱら樹上で生活し、クモ、双翅類昆虫などを捕食する。^{両 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-110 及び図 5.1.6-89 に示す。

現地調査では、計 22 地点で、直接観察法により成体及び鳴き声、幼生、卵塊が確認された。

確認された環境は、樹林内の湿地や沈砂池等であった。確認時期は令和 5 年 7 月であった。

現地調査では、本種の幼生及び卵塊が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-110 モリアオガエルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 7 月に、樹林内の湿地や沈砂池等の 22 地点で、成体及び鳴き声、幼生、卵塊を計 807 個体確認。	22	807

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、樹林内の湿地や沈砂池等であった。

既存の生態情報によれば、「池、沼、水田などの周辺で繁殖し、木の枝や草の根ざわに産卵する。成体はもっぱら樹上で生活し、クモ、双翅類昆虫などを捕食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、湿地や水たまり、水田等の水辺、水辺に隣接した森林、草地、竹林等に生息し、昆虫類等を餌としていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「低木林」、「竹林」、「草地（高茎草地）」、「草地（湿原）」、「農耕地（水田）」、「開放水域（止水域）」と推定される。

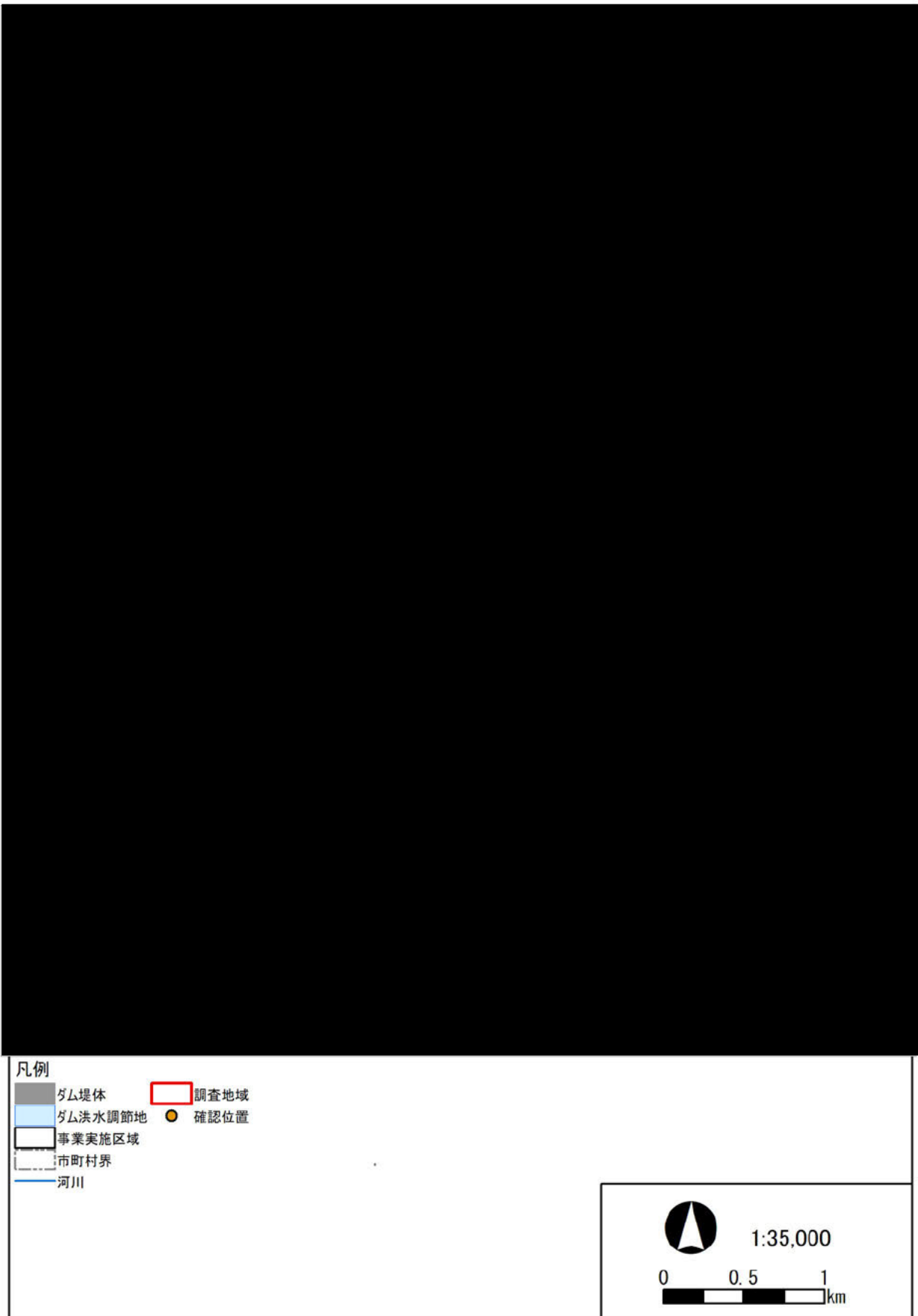


図 5.1.6-89 モリアオガエル確認地点

k) カジカガエル

(i) 重要性

「滋賀県レッドデータブック」：要注目種

「甲賀市レッドリスト」：要注目種

カジカガエルは、日本では本州、四国、九州、五島に分布する。^{両 1)}

滋賀県では、大津市、栗東市、余呉町、多賀町、甲賀町、土山町、志賀町、今津町、朽木村、浅井町に分布する。^{両 1)}

(ii) 生態

主に山地の川沿いに生息する。^{両 1)}雄はのどにある鳴嚢を膨らませて「ヒュルルル・・・」と鳴く。^{両 1)}4～7月に、流れが比較的緩やかな平瀬の多い場所で繁殖し、50～80個の丈夫な寒天質に包まれた卵を、球形の卵塊として川の石の下に産みつける。^{両 1)}孵化した幼生は灰褐色で、大きく発達し吸盤状になった口器で川の石などに付着する。^{両 1)}幼生は数か月間水中生活を送った後、夏頃に変態して上陸する。^{両 1)}成体や幼体は河原や川沿いの森林の岩や樹木の上で生活していることが多く、水辺からかなり遠く離れることもある。^{両 1)}幼生の間は主に藻類を食べるが、変態後は昆虫、クモなどを捕食する。^{両 1)}

(iii) 現地調査結果

現地調査結果を表 5.1.6-111 及び図 5.1.6-90 に示す。

現地調査では、計 29 地点で、直接観察法により成体及び鳴き声、幼体、幼生が確認された。

確認された環境は、河川や沢及び周辺の樹林、裸地等であった。確認時期は令和 5 年 4 月～5 月及び 7 月～9 月であった。

現地調査では、本種の幼体及び幼生が確認されたことから、調査地域で繁殖していると考えられる。なお、本種の繁殖場は確認されなかった。

表 5.1.6-111 カジカガエルの確認状況

確認状況	地点数	個体数
令和 5 年 4 月～5 月及び 7 月～9 月に、河川や沢及び周辺の樹林、裸地等の 29 地点で、成体及び鳴き声、幼体、幼生を計 159 個体確認。	29	159

(iv) 生息環境の推定

現地調査において、本種が確認された環境は、河川や沢及び周辺の樹林、裸地等であった。

既存の生態情報によれば、「主に山地の川沿いに生息する。流れが比較的緩やかな平瀬の多い場所で繁殖する。成体や幼体は河原や川沿いの森林の岩や樹木の上で生活していることが多く、水辺からかなり遠く離れることもある。幼生の間は主に藻類を食べるが、成体は昆虫、クモなどを捕食する。」とある。

現地調査の結果及び既存の知見から、本種は調査地域において、河川、河原、川辺の森林に生息し、昆虫類等を餌とされていると考えられる。

これらのことから、当該地域における本種の主要な生息環境は、「落葉広葉樹林」、「常緑針葉樹林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「草地」、「草地（高茎草地）」、「自然裸地」、「開放水域（本川）」、「開放水域（支川）」と推定される。

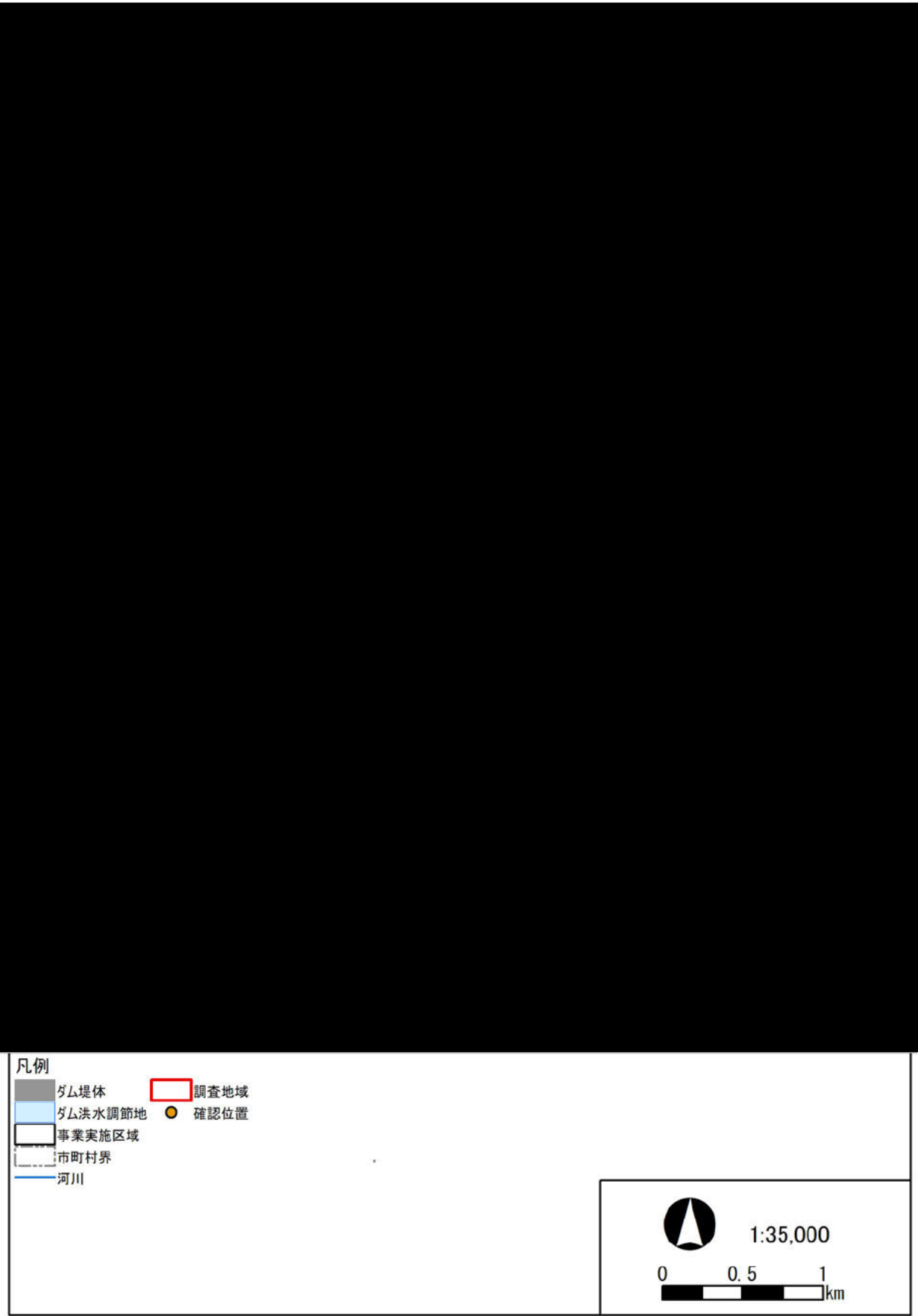


図 5.1.6-90 カジカガエル確認地点